愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第200集

八畝畑遺跡（やせばたいせき）

２０１５

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県岡崎市は、県東部にあたる三河地域の中央やや西側に位置し、市の中心部は三河湾から20km ほど内陸に入ります。岡崎藩五万石の城下町時代から、西三河地域の中心的都市として、現在までその役割を担ってきました。

八畝畑遺跡が位置する岡崎市周辺では、原始の時代より、我々の祖先による生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

岡崎市正名町吹野、八畝畑地内では、このたび愛知県建設部道路建設課によって、県道岡崎碧南線が建設されることとなりました。（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて、愛知県建設部からの依託を受け、建設工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、古墳時代・古代を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供することができました。

調査にあたりまして、愛知県建設部、愛知県教育委員会、岡崎市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域の皆様から多大な御協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成27年３月31日

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　伊　藤　克　博

例　言

1　本書は愛知県岡崎市正名町吹野、八畝畑地内に所在する、八畝畑遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、愛知県建設部道路建設課による県道岡崎碧南線建設工事に伴う事前調査として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査総面積は3500m^{2}である。

3　発掘調査は、平成25年５月～10月に実施した。さらに平成26年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。

4　現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課調査研究専門員・松田 訓が担当し、株式会社シン技術コンサルに調査事業の支援を依頼した。

5　調査にあたっては、愛知県建設部西三河建設事務所、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、岡崎市教育委員会をはじめとして多くの関係諸機関の御協力を得た。

6　本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下の通りである。
第I～III・VI章＝松田 訓、第IV章＝宮腰健司、第V章＝パレオラボ株式会社（小林克也・伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani）

7　報告書の作成については松田と愛知県埋蔵文化財センター調査課統括専門員・宮腰健司が担当し、遺構図のトレース、図版の編集等は、株式会社シン技術コンサル、国際文化財株式会社に委託し、松田の指示にてこの作業を行った。遺物の実測、トレース、図版の編集等は、ナカシャ クリエイティブ株式会社に委託し、宮腰の指示にてこの作業を行った。

8　本書掲載写真の中で、遺構写真は株式会社シン技術コンサル、遺物写真は写真工房 遊に撮影を委託し、状況写真は松田が撮影した。

9　本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠し、「世界測地系」で表記した。また、海抜表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。

10　本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。

11　本書中の各遺構名については、以下のアルファベットによる分類記号を調査時のまま使用した。SI：竪穴建物、SL：炉・カマド、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SP：ピット、SD：溝、SE：井戸、SA：坑列、SU：遺物集中、SX：その他の遺構

12　遺物の整理番号と登録番号の対照表は、添付のCDに収録した。

13　遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。

14　出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。

15　本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏には遺物の解釈において、多くのご指導を得た。さらに本遺跡の調査、報告にあたって、次の諸氏にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。
（五十音順、敬称略）
青木 修　赤羽一郎　鈴木とよ江　中野晴久　野本欽也　藤澤良祐　森 泰通

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　第３節　調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

第Ⅲ章　遺構
　第１節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
　第２節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

第Ⅳ章　遺物
　第１節　遺物の記述・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　第２節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

第Ⅴ章　自然科学的分析
　第１節　炭化材の樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
　第２節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

第Ⅵ章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116

図　表　目　次

挿　図　目　次

第１図　岡崎市位置図 2
第２図　遺跡周辺地形図 3
第３図　周辺遺跡分布図 5
第４図　調査区配置図 6
第５図　基本層序模式図 8
第６図　A 区第１面全体図 23
第７図　290SB 平面・断面図 24
第８図　291SB 平面・断面図 25
第９図　382SB 平面・断面図 26
第10図　383SB 平面・断面図 27
第11図　285SD 平面・断面図 28
第12図　001SX 平面・断面図 28
第13図　002SX 平面・断面図 29
第14図　284SX 平面・断面・遺物出土状態図 30
第15図　040SE 平面・断面図 30
第16図　A 区第２面全体図 31
第17図　1002SX 平面・断面図 32
第18図　1004SX 平面・断面図 32
第19図　1035SX 平面・断面図 32
第20図　1009SU 平面図 32
第21図　1006SU 平面・断面図 33
第22図　1007SU 平面・断面図 34
第23図　1016SU 平面・断面図 35
第24図　1058SU 平面図 36
第25図　1059SU 平面図 36
第26図　B 区第１面全体図 37
第27図　2060SI・2061SL 平面・断面図 38
第28図　2070SI・2071SL 平面・断面図 39
第29図　2080SI・2081SL 平面・断面図 40
第30図　2260SI 平面・断面図 41
第31図　2270SI・2271SL 平面・断面図 42
第32図　2400SI・2401SL 平面・断面図 43
第33図　2220SB 平面・断面図 44
第34図　2025SA 平面・断面図 45
第35図　2087SA 平面・断面図 45
第36図　2089SA 平面・断面図 45
第37図　2587SA 平面・断面図 46
第38図　2588SA 平面・断面図 46
第39図　2029SK 平面・断面図 46
第40図　2030SK 平面・断面図 47
第41図　2604SK 平面・断面図 47
第42図　2367SD 平面・断面図 47
第43図　2045SE 平面・断面図 48
第44図　2161SE 平面・断面図 48
第45図　2100SE 平面・断面図 48
第46図　2171SE 平面・断面図 49
第47図　2246SE 平面・断面図 49
第48図　2001SX 平面・断面図 50
第49図　2006SX 平面・断面図 51
第50図　2125SX 平面・断面図 51
第51図　2431SX 平面・断面図 51
第52図　2478SX 平面・断面図 51
第53図　2479SX 平面・断面図 52
第54図　2493SX 平面・断面図 52
第55図　2503SX 平面・断面図 53
第56図　B 区第２面全体図 54
第57図　3120SI 平面・断面図 55
第58図　3121SI 平面・断面図 56
第59図　4035SI 平面・断面図 57
第60図　3139SK 平面・断面図 57
第61図　3346SK 平面・断面図 57
第62図　3309SK 平面・断面図 58
第63図　4009SU 平面図 58
第64図　3070SU 平面図 59
第65図　出土遺物実測図（１） 65
第66図　出土遺物実測図（２） 66
第67図　出土遺物実測図（３） 67
第68図　出土遺物実測図（４） 68
第69図　出土遺物実測図（５） 69
第70図　出土遺物実測図（６） 70
第71図　出土遺物実測図（７） 71
第72図　出土遺物実測図（８） 72
第73図　出土遺物実測図（９） 73
第74図　出土遺物実測図（10） 74
第75図　出土遺物実測図（11） 75
第76図　出土遺物実測図（12） 81
第77図　出土遺物実測図（13） 82
第78図　出土遺物実測図（14） 83
第79図　出土遺物実測図（15） 84
第80図　出土遺物実測図（16） 85
第81図　出土遺物実測図（17） 86
第82図　出土遺物実測図（18） 87
第83図　出土遺物実測図（19） 88
第84図　出土遺物実測図（20） 89
第85図　出土遺物実測図（21） 90
第86図　出土遺物実測図（22） 91
第87図　出土遺物実測図（23） 92
第88図　出土遺物実測図（24） 93
第89図　出土遺物実測図（25） 94
第90図　出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真（１） 99
第91図　出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真（２） 100
第92図　出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真（３） 101
第93図　マルチプロット図 104
第94図　暦年較正結果（１） 111
第95図　暦年較正結果（２） 112
第96図　暦年較正結果（３） 113
第97図　暦年較正結果（４） 114
第98図　暦年較正結果（５） 115
第99図　周辺河川等位置図 117
第100図　主要遺構変遷図 119
第101図　八畝畑遺跡畿内系土師器出土分布図 122
第102図　畿内系土師器出土遺跡分布図 123
第103図　調査区分割図―１ 125
第104図　調査区分割図―２ 126
第105図　調査区分割図―３ 127
第106図　調査区分割図―４ 128
第107図　調査区分割図―５ 129
第108図　調査区分割図―６ 130
第109図　調査区分割図―７ 131
第110図　調査区分割図―８ 132
第111図　調査区分割図―９ 133
第112図　調査区分割図―10 134
第113図　調査区分割図―11 135
第114図　調査区分割図―12 136
第115図　調査区分割図―13 137
第116図　調査区分割図―14 138
第117図　調査区分割図―15 139
第118図　調査区分割図―16 140

表　目　次

表１　出土木材の樹種同定結果 96
表２　出土木材の樹種同定結果一覧 96
表３-１　測定資料および処理 106
表３-２　測定資料および処理 107
表３-３　測定資料および処理 108
表４-１　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 109
表４-２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 110
表４-３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 111
表５　畿内系土師器出土一覧 122

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

調査地点は、愛知県岡崎市正名町吹野、八畝畑に位置する。愛知県によって公開されている電子地図、愛知県統合型地理情報システム「マップあいち」の中で、愛知県文化財マップ（埋蔵文化財・記念物）http：//maps.pref.aichi.jp（平成26年度時点）を閲覧すると、遺跡番号：510326、包蔵地名：八畝畑遺跡、現況：水田、といった情報とともに範囲が記されている。この記載範囲の中に、愛知県建設部道路建設課によって県道岡崎碧南線建設工事が行われることとなった。工事に先立ち、愛知県教育委員会と岡崎市教育委員会により遺跡の確認調査が行われ、あらためて遺構、遺物が確認された。

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて工事に先立つ発掘調査の委託を受け、平成25年５月よりこれを実施した。総調査面積は3500m^{2}である。

第２節　調査の経過

調査区は県道岡崎碧南線建設予定地内にて、排出土の処理、工事の進捗等を考慮し、細長い調査範囲をＡ・Ｂ二区に分割設定した。

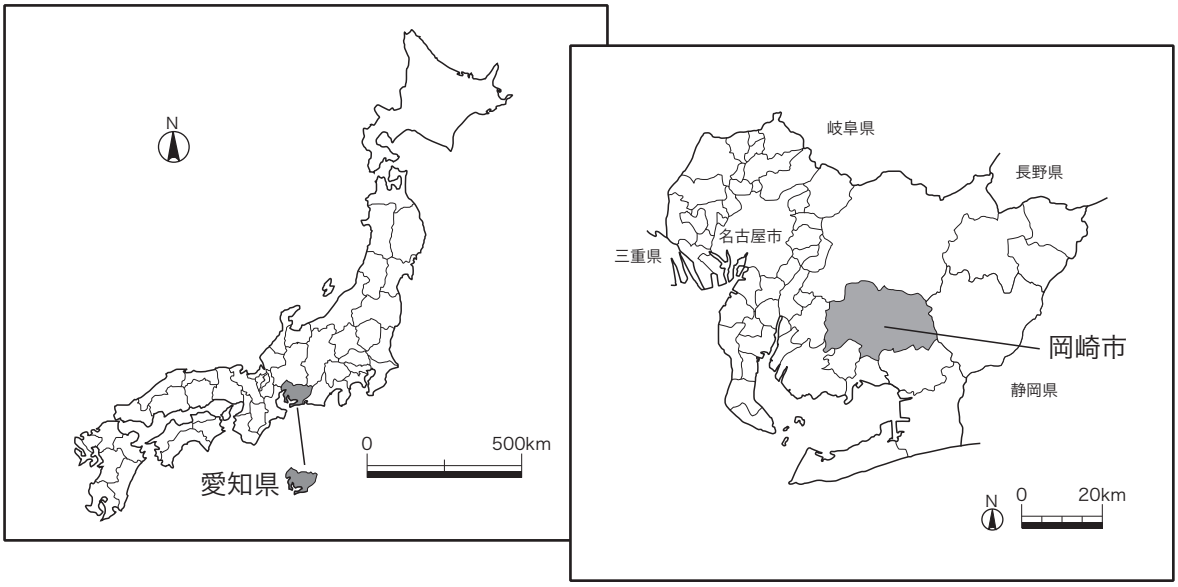
平成25年５月８日に重機の搬入を行い、同日よりＡ区の表土掘削を開始した。５月17日には重機による表土掘削を終了し、遺構検出と掘削を開始した。７月２日には第１面の全景撮影を行い、翌日よりＡ区第２面の確認と掘り下げに着手する。７月31日には、Ａ区第２面の全景撮影を行い、補測、確認作業を終えた後、８月２日よりＡ区の埋め戻しと並行してＢ区の表土掘削を開始する。８月19日にはＡ区の埋め戻し作業とＢ区の表土掘削を完了し、並行して進めていた遺構検出と掘削作業を本格化する。９月11日にはＢ区第１面の全景撮影を行い、引き続きＢ区第２面の確認と掘り下げに着手する。10月２日にはＢ区第２面の全景撮影を行い、10月11日に補測、確認調査を終了した。10月19日にはＢ区の埋め戻し作業を終了し、10月28日に資材等の撤去を完了し、10月29日に終了確認を行って、道路建設工事担当側に調査地の引き渡しを行った。

調査中には、当財団の家族の絆づくり事業として８月31日に発掘体験バスツアーを受け入れた。９月５日には、六ツ美地区総代会の見学があり、９月11日には、岡崎市立六ツ美南部小学校６年生の遺跡見学を受け入れ、地域に対する調査活動への理解を促した。10月５日には地元説明会を実施し、Ｂ区に見学通路を設け、発掘作業、遺物洗浄作業の見学会を実施した。会場では、調査写真のパネルや出土遺物を展示することにより、作業中に公開出来なかった部分を補った。

出土遺物の整理作業は、調査中、調査後に洗浄作業を行い、引き続き平成26年度に報告書作成までの作業を行った。

第 II 章　遺跡の位置と環境

第 1 節　遺跡の位置



第 1 図　岡崎市位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では西側が尾張国、東側が三河国にあたる。八畝畑遺跡の位置する岡崎市は、愛知県東部にあたる三河地域の中央やや西側に位置し、三河湾に注ぐ矢作川の中流域まで遡った左岸を中心として市域を展開する。

現在の岡崎市域は、先年まで旧岡崎市、旧額田郡額田町に分かれていた。平成18年 1 月、額田町は岡崎市に編入となった。西三河地域では、中核市として豊田市とともに中心的存在の自治体である。市域は北側で豊田市と接し、西側で安城市、南側で西尾市、額田郡幸田町、蒲郡市、東側では新城市、豊川市と接する。

一級河川矢作川は、三河山地の西側に流れ出て岡崎平野を形成し、三河湾の西側に注ぐ。この矢作川によって三河山地から流出した土砂は、流域に沖積平野を形成した。八畝畑遺跡の所在する岡崎市南西部の矢作川左岸は、矢作川とその支流の氾濫原であり、洪水性の堆積によって形成された沖積地である。さらに、温暖な後氷期には海面上昇によって海域が広がり、海成の堆積が加わった。そして、自然堤防は集落、畑地、道として、その後背湿地は主に水田として利用されてきた。

遺跡周辺の気候は、緯度、標高が低いこともあり比較的温暖だが、日較差、年格差は比較的大きいため、各種栽培に適する。



第２図　遺跡周辺地形図（国土地理院１/20万地勢図「豊橋」）

第２節　歴史的環境

八畝畑遺跡は、岡崎市の六ツ美地区に所在する。現在の行政区画である岡崎市は、古代における律令制の行政区画としては三河国額田郡および碧海郡の一部に該当する。六ツ美地区は岡崎市域では南西端に位置し、幸田町、西尾市、安城市と近接している。したがって、調査地点周辺の遺跡を紹介、説明するにあたっては、「岡崎市の八畝畑遺跡」とした視点よりも、「六ツ美地区の八畝畑遺跡」とした視点から、六ツ美地区周辺に所在する近隣市町の遺跡も含めて、説明を記す。

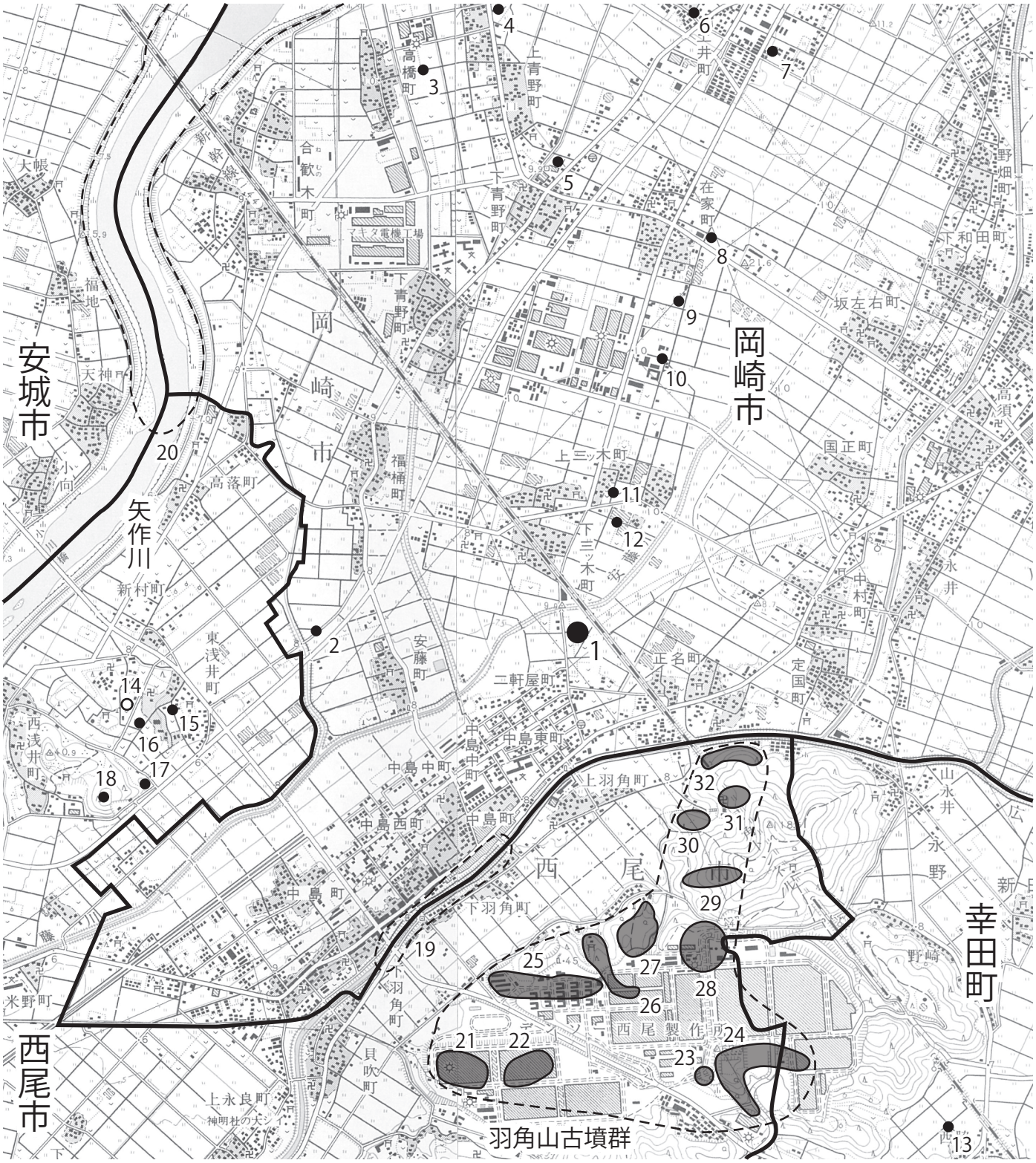
八畝畑遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期と思われる竪穴建物跡、土坑、遺物集積、自然流路および古代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、さらに中世の井戸も確認された複合遺跡であるが、出土遺物の主体は古墳時代前期の土師器であった。

『愛知県遺跡分布地図（II）知多・西三河地区』（1995）の記載によれば、埋蔵文化財包蔵地として旧岡崎市内に分布する地点は、324ヶ所が確認（滅失地点含む）されている。『岡崎市遺跡地図』（1996）の記載も含めて、この時点では八畝畑遺跡は未掲載である。ここでは、調査地周辺に分布する遺跡のうち、八畝畑遺跡が位置する岡崎市南西部とその周辺に視点を据え、その歴史的環境を時代ごとに概観する。

八畝畑遺跡周辺で確認できる遺跡は、古いものでは縄文時代の遺物が確認された五砂山遺跡がある。西尾市東部に位置し、調査地点からは西約２km の分離丘陵麓に所在する。縄文時代中期、晩期にあたる土器片が採集されている。

弥生時代では、上述した五砂山遺跡より約300m 北側で、同様に分離丘陵麓に位置する不毛第１・第２遺跡がある。弥生時代の土器片が確認されているが、第２遺跡では土器棺も確認されている。八畝畑遺跡と同様に、沖積地側に所在する遺跡としては、調査地点の西約１km に位置する高畑遺跡、北約2.8km に位置する稲前西遺跡、北約２km に位置する本郷遺跡、北東約1.2km に位置する社口遺跡、北東約0.6km に位置する三ツ木遺跡があげられる。これらはいずれも遺物散布地として登録されているものであり、調査による確認ではないため遺跡の性格は推察できない。この中で沖積地側の遺跡は、河川の氾濫によって形成された微高地上に展開する立地環境と思われる。

古墳時代の遺跡では、調査地点から北約2.5km に上青野遺跡、北北東約1.8km に向イ遺跡、北北東約1.5km には米野遺跡、北北東約1.2km には社口遺跡、北北東約0.6km には三ツ木遺跡が散布地としてあげられる。この中では、米野遺跡が昭和58年に岡崎市教育委員会によって調査されており、溝や古式土師器の集中部が確認されている。社口、三ツ木遺跡は、弥生時代の遺物も確認されている。また、調査地点の南東約1.3km には、広田川の河川改修時に古墳時代の遺物が採集された広田川河床遺跡が登録され、上下流域に確認地点が展開している。古墳は、調査地点より西約２km の分離丘陵麓付近に、中期の西山古墳・五砂山古墳が所在する。西山古墳は昭和58年に西尾市教育委員会による調査が行われているが、この後滅失している。調査地点より南東約0.8km から南約1.5km の位置に、羽角山古墳群が所在する。西尾市東部の羽角山から万燈山間の丘陵尾根上に各小支群が展開し、確認されているものだけでも90余基を数え、市指定の史跡となっている。これらの古墳は、後期の横穴式石室を伴う円墳で、昭和43～48年に一部の12基が委託調査されているが、多くは土地改良、



1.八畝畑遺跡　2.高畑遺跡　3.上青野遺跡　4.稲前西遺跡　5.本郷遺跡　6.土井城跡　7.土井下屋敷跡　8.向井遺跡　9.米野遺跡
10.社口遺跡　11.三ツ木遺跡　12.三ツ木城跡　13.野場城跡　14.西山古墳　15.不毛第一遺跡　16.不毛第二遺跡　17.五砂山遺跡
18.五砂山古墳　19.広田川河床遺跡　20矢作川河床遺跡
羽角山古墳群(21.三本木山小群　22.五釜小群　23.岩谷小群　24.徳利小群　25.前山小群　26.住崎小群　27.向山小群
28.高根小群　29.白石小群　30.薬師山小群　31.弘法山小群　32.羽根山小群)

第３図　周辺遺跡分布図（国土地理院 1:25000「西尾」「幸田」）

造成工事によって滅失している。

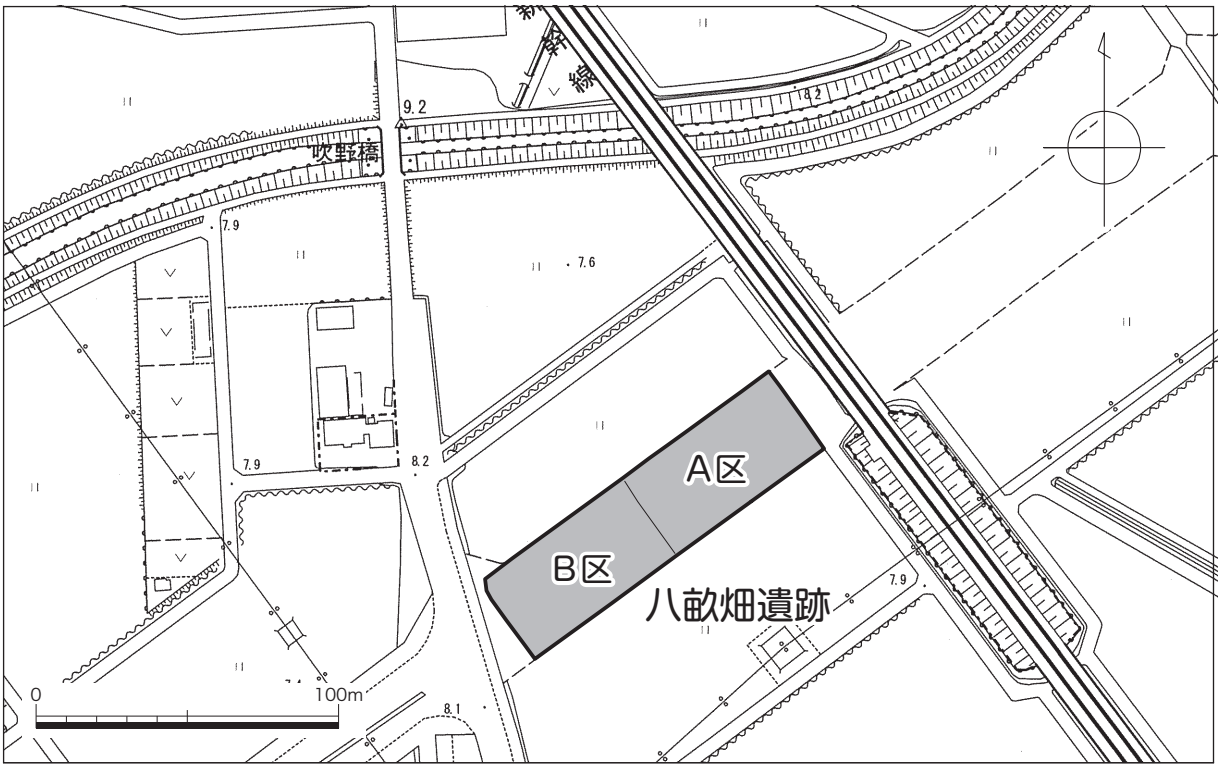
古代の遺跡としては、先述した散布地の中で上青野、三ツ木、高畑、広田川河床遺跡などでの遺物採集に留まる。

中世以降の遺跡としては、散布地として先述の上青野、三ツ木、高畑、広田川河床遺跡などで中世の遺物が採集されている。また戦国時代の城館跡として、調査地点の北北東約2.8km 付近には、土井城、土井城下屋敷跡が所在し、北東方向約0.5km には三ツ木城跡、南東方向約2.7km には土塁の一部が残る野場城跡が所在する。

第３節　調査区

八畝畑遺跡の調査区は、県道建設の事前調査として工事予定地内に設定された。主要地方道岡崎碧南線の建設は、新幹線の高架と交差する周辺が最終工事となった。工事予定地点では、遺跡確認のための試掘調査が行われた。この結果が協議され、八畝畑遺跡の発掘調査が実施されることとなった。

調査地は矢作川とその支流によって形成された沖積平野で、調査地点を含む周辺の旧態は水田である。遺構検出面や遺構基底部からの湧水は、雨天直後を除けば認められなかった。調査地点の排水処理は雨水のみで、調査区端でのトレンチを利用した。表土の除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。排土の処理にはベルトコンベヤーを配し、調査予定地をＡ・Ｂ区として二分割し、片側における調査中の排土を反対側に送り、埋め戻しまで仮置きした。



第４図　調査区配置図（岡崎市都市計画基本図 1:2500）

第 III 章　遺構

第 1 節　基本層序

調査地点は、幡豆山塊の東部丘陵縁辺部と、矢作川左岸の間に展開する沖積平野に位置する。現況の水田は平成期の造成事業によって整備されたもので、旧地形はこの造成によって全面的に削平されており、旧態をとどめていない。造成事業では、調査地点付近はまず標高約 7 m の高さに全体的な削平が行われ、その後、厚さ0.1～0.2m の客土にて整地が行われ、さらに水田耕作土が0.2～0.5m の厚さで搬入されたものと思われる。水田耕作土の標高は、A 区北端にて7.4m を測り、B 区南端は7.6m を測る。

八畝畑遺跡における基本層序を北壁にて概観すると、第 5 図のような状況がみてとれる。調査区が設定された沖積平野部は、地点によって微高地や後背湿地、自然流路が複雑に展開し、一様ではない。したがって調査区の層序は、沖積地のどの部分にかかっているかによって、近接する地点でも異なる様相が見られた。ここでは A・B 両区に共通した堆積状況を中心に、地層のまとまりごとに説明する。この他に特徴的な堆積状況が観察された地点については、個別の地点、遺構ごとに層序を図示する。

以下で説明する第 1 、 2 層は人為的な堆積で、第 3 層以下は自然堆積土層である。

第 1 層　現代の水田耕作土で暗灰黄色（2.5Y 5 / 2 ）粘質土を基調とする。調査区の北壁では、全域で確認できる。これとは別に調査区の東壁では、この第 1 層とは区別できる水田耕作土が認められるため、そちらは近年の造成事業以前の水田耕作土である可能性が考えられる。

第 2 層　黄褐色（2.5Y 5 / 3 ）粘質土を基調とする撹拌された斑土で、調査区の大半で確認できる。現代の廃棄物と思われるものも混入しており、造成時の整地層と思われる。

第 3 層　第 1 面遺構の確認面で、面的な広がりがある程度確認できた。黄灰色（2.5Y 6 / 1 ）極細粒砂を基調とし、造成事業によって削平されているため、層の厚さは一定ではない。古墳時代後期以降の遺構が確認できるが、削平により基底部のみが確認できる場合が多かった。

第 4 層　シルト層と砂層とが互層をなし、交互にくり返されるシルトと砂はさらに 8 層ほどに細分できる。旧河川の堆積物と考えられ、主に調査地点の東側にあたる A 区東部で見られる。

第 5 層　一部が第 2 面遺構の確認面で、面的な広がりが確認できた。灰黄色（2.5Y 6 / 2 ）シルト層を基調とし、第 2 ～ 4 層によって部分的に削平、浸食されている。古墳時代前期の遺物が確認できるが、遺構は本層から掘り込まれているものと、本層に覆われているものが確認できた。したがって、本層は古墳時代前期の堆積と考えられる。

第 6 層　シルト層と砂層の互層からなり、交互にくり返されるシルトと砂は、さらに 6 層ほどに細分できる。第 7 ・ 8 層と同様に、地層が一方向に傾いたかつての河川縁辺部の堆積物である。主として調査地点東側にあたる A 区に堆積し、第 2 面遺構確認面に含まれ、古墳時代前期の遺物を伴う

遺構は本層上面から掘り込まれているものが多い。これらの遺構とは別に、明確に遺構としての掘り込みが確認できない遺物集中箇所（SU）が多く分布した。これらの遺物は、古墳時代前期のものである。

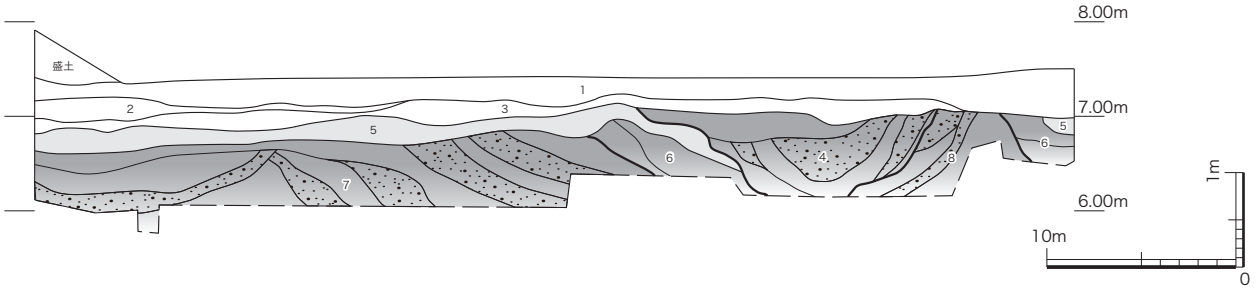
第７層　シルト層と砂層の互層からなり、交互にくり返されるシルトと砂は、さらに８層ほどに細分できる。第６・８層と同様に、地層が一方向に傾いたかつての河川縁辺部の堆積物である。主に調査地点西側にあたるＢ区で見られ、第２面遺構確認面に含まれる。本層と第６層との地層境界には、遺物集中箇所が多く認められた。またＢ区では、古墳時代前期の遺構は本層の上面から掘り込まれているものが多い。

第８層　シルト層と砂層が互層をなし、交互にくり返されるシルトと砂はさらに７層ほどに細分できる。第６・７層と同様に、地層が一方向に傾いたかつての河川縁辺部の堆積物である。主にＡ区東部で見られる。本層と第７層との間には直接地層同士が切り合う所が見られなかったため、堆積時期に関わる新旧関係は不明である。

古墳時代前期以前の層は、古墳時代後期以降の堆積と思われる第３層とは異なり、傾斜面に繰り返し重なって堆積していた。旧地形は傾斜、高低が複雑に入り交じっていて、こうした堆積環境が造成事業によって水平に削平されているため、人為的な盛土をとりはらった面においては、時期の異なる遺物、遺構が確認される、という例がいくつかみられた。

第６層以下は側方付加堆積物で、調査区北壁の断面で観察した場合、地層が東方向にゆるい傾斜で重なるものと、西方向にゆるく傾斜して重なるものがみられた。この重層は旧河川縁辺部の堆積で、蛇行河川の痕跡と考えられる。これらの層序は、基本的に第５層の下位に位置し、傾斜面にて度重なる堆積が観察できている。それにもかかわらず、第７層の重なりの古い段階から出土する遺物と、重なりがじゅうぶん繰り返された後の層及び第６層から出土する遺物とに、時期的な差がみられなかった。したがってこの堆積状況は、調査を進めてゆく上で時期的な捉え方を難航させた。

調査地点では、古墳時代前期までは河川の流路にほど近い河川縁辺部にあたり、下位層で見られるような傾斜した地層がくり返された。古墳時代後期以降には、調査地点をほぼ水平に地層が覆うような堆積環境へと移り変わったものと考えられる。



第1層　現代の耕作土　　第2層　現代の整地層　　第3層　第1面遺構確認面　　第4層　旧河川堆積土
第5層　第2面遺構確認層　　第6層　河川縁辺部の堆積　　第7層　河川縁辺部の堆積　　第8層　河川縁辺部の堆積

第５図　基本層序模式図

第２節　遺構

第１項　概要

今回の調査地点で検出された遺構は、総数1471となった。これらの遺構は、土坑（SK）1182、溝（SD）28、竪穴建物跡（SI）９、掘立柱建物跡（SB）５、柵列（SA）５、円形小穴（SP）106、井戸（SE）６、炉跡（SL）５、遺物集中箇所（SU）10、不明または不定形遺構（SX）59などであった。この中で最も多いのは土坑で、検出総数の８割を占める。この土坑に円形小穴および不明または不定形遺構を合わせると、検出総数の９割を超える。これらの遺構は、その検出総数、検出密度に対して、遺物を伴うものが限定的であった。また、調査地点自体が、基本層序の説明でも述べたように、古墳時代の自然堆積土層まで全面的に削平を受けていた。遺物包含層と判断できるものは、旧地形における微凹地や旧河川縁辺部など、削平面より低い部分のみであった。今回の調査地点全体で確認できた時期を概観すると、古墳時代初頭～前期、古墳時代後期～奈良時代、中世に大別できる。

遺構の時代別比較では古墳時代が主体ではあるが、ほとんどの遺構は残存する基底部の検出である。特に古墳時代後期以降のものは、掘削深度の大きなもの以外、削平により滅失したものと思われる。調査区内では、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸などが検出されているため、生活空間であった時期が想定できるが、集落の規模、変遷を検討できるほどの成果は得られていない。以下では、時期の判断できる遺物を伴った遺構を中心として、調査区、検出面ごとに説明を述べる。

第２項　主要遺構

・A 区第１面

A 区は調査地点を二分割した北東側にあたり、調査区の東側は正名町八畝畑、西側は正名町吹野に位置する。調査区は、道路建設事業の予定地点に一辺約60m×31m の長方形で設定し、水田耕作土、整備事業時の整地層を取り除いた面を第１面として扱った。したがって、以下の第１面は遺構が検出できる最上位ではあるが、共通する時期を示す面ではない。整備事業時のものと思われるカクランが調査区全体にて確認され、この埋土除去に時間が割かれ、調査進行に影響が出た。古墳時代後期以降では、それ以前の旧河川などが埋没し、覆土の上から掘削された各遺構が検出された。

290SB　A 区北端に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する小規模な掘り込みは、「ロ」の字状に並ぶ配置を掘立柱建物と捉えた。各柱穴の検出高は7.01～7.07m を測る。直径は0.3～0.7m で、検出高からの深さは、0.1～0.5m を測る。埋土は黄灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況では361～368SP に柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、N ―35° ― E を示す。規模は梁行3.5m、桁行4.3m で、柱穴と思われる掘り込みの柱間寸法は1.5～2.3m を測る。２間 × ２間ではあるが、東西方向に比較して南北方向の柱間寸法が長い側柱建物を想定した。推定面積は15.05m^{2}である。362、365、367、368SP には遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。時期想定材料としては、柱穴と思われる掘り込みは第３層より上位からの掘削、という点があげられる。第３層は、古墳時代前期以前と判断できる

河川を全面的に覆っている。この第３層は、古墳時代後期以降の遺物を包含し、遺構に伴う遺物もこの時期である。したがって290SB は、この古墳時代後期以前にさかのぼる可能性は低いものと思われる。東辺から約７m 東側には、同様に８本柱で近似した主軸方向の383SB が位置する。

291SB　A 区北東端に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する小規模な掘り込みは、「ロ」の字状に並ぶ配置を掘立柱建物と捉えた。各柱穴の検出高は7.06～7.09m を測る。直径は0.2～0.5m で、検出高からの深さは、0.1～0.6m を測る。埋土は灰白色、灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況では371～375、377、378SP に柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、N ―46° ― E を示す。規模はどちらの行長も2.7m で、柱穴と思われる掘り込みの柱間寸法は1.2～1.5m を測り、方形の側柱建物を想定した。推定面積は7.29m^{2}である。377SP には遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各柱穴は、290SB と同様に第３層以上から掘削されているため、古墳時代後期以降のものと思われる。西辺から約７m 東側には、同様に８本柱で近似した主軸方向の383SB が位置する。

382SB　A 区北東端に位置する。平面形態が円・不整円形を呈する小規模な掘り込みは、「ロ」の字状に並ぶ配置を掘立柱建物と捉えた。各柱穴の検出高は7.06～7.08m を測る。直径は0.3～0.6m で、検出高からの深さは、0.3～0.4m を測る。埋土は灰色粘質土を基調とするものが多く、断面の状況では157、238、392SP に柱痕が認められた。列の配置から想定した東西主軸の方向は、W ― 7 ° ― N を示す。規模は東西方向の行長2.7m、南北方向1.7m で、柱穴と思われる掘り込みの柱間寸法は1.6～2.1m を測り、東西方向がやや長い方形の掘立柱建物を想定した。推定面積は4.59m^{2}である。236SP には遺物が含まれているが、土器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各柱穴は、290SB などと同様に第３層以上から掘削されているため、古墳時代後期以降のものと思われる。東辺から約２m 東側には、同様に４本柱で近似した規模、主軸方向の383SB が位置する。

383SB　A 区北東端に位置する。平面形態が円・不整円形を呈する小規模な掘り込みは、「ロ」の字状に並ぶ配置を掘立柱建物と捉えた。各柱穴の検出高は7.11m を測る。直径は0.4～0.6m で、検出高からの深さは、0.2～0.3m を測る。埋土は灰色、黄灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況では239～242SP に柱痕が認められた。列の配置から想定した東西主軸の方向は、W ―15° ― N を示す。規模は東西方向の行長2.1m、南北方向1.5m で、柱穴と思われる掘り込みの柱間寸法は1.4～2.1m を測り、東西方向がやや長い方形の掘立柱建物を想定した。推定面積は3.15m^{2}である。各掘り込みには遺物がわずかに含まれていたが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各柱穴は、290SB などと同様に第３層以上から掘削されているため、古墳時代後期以降のものと思われる。西辺から約２m 西側には、同様に４本柱で近似した規模、主軸方向の382SB が位置する。

285SD　A 区北端に位置し、北西から南東方向に伸びる溝状遺構である。断面形態は船底形を呈しているが、検出長の中央部分では、約８m にわたり下端が２条並行して窪む。検出高は7.06～7.08m を測る。残存幅は最大2.2m、検出長15.2m、残存する深さは0.4m を測り、現代のカクランにより端部は確認できず、上部は削平されたものと思われる。平面形態における主軸の方向は、N ―53° ― W を示す。埋土は黄灰色シルトを基調とし、遺物は土器の鉢、畿内系土師器片、８世紀前葉と考え

られる須恵器の坏身、蓋などが比較的まとまって出土している。

001SX　A区東端に位置し、南方向に伸びる遺構で、明瞭に平面形態が捉えられなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈しているものと思われるが、下端は調査区外に向かって段状に下る。検出高は北端で7.00mを測る。検出幅は1.4m、検出長は2.9mで、検出高からの最深部は0.88mを測り、上部は削平されたものと思われる。残存する平面形態から想定される主軸の方向は、N―12°―Eを示す。遺物は土器把手、7世紀後葉から8世紀初頭と考えられる須恵器の長頸壺、横瓶、有台坏身、蓋などがまとまって出土している。

002SX　A区南端に位置し、東西方向に伸びる遺構で東側の端部は調査区外に続き、明瞭に平面形態が捉えられなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈しているものと思われるが、西側の最大幅部分では､逆台形状を呈する。検出高は6.97～7.16mを測る。検出中の最大幅は1.3m、検出長は4.2mで、検出高からの最深部は0.43mを測り、上部は削平されたものと思われる。残存する平面形態から想定される主軸の方向は、E―5°―Sを示す。断面からは、掘方に対する内面で、内部構造をつくり出すように灰色シルトが全体に観察され、その内側では焼土、炭化物を含む層が薄く重なる状況が観察された。火力を利用した遺構の可能性が考えられたが、この焼土、炭化物層を層ごとに掘り下げる過程で、焼成坑壁、火床に相当するほどの被熱、硬化面は観察できなかった。埋土中に鉄滓、骨片などが含まれることも想定し、排出前に細かい観察、確認を重ねたが、検出されなかった。焼土、炭化物層の上位に遺物が集中したが、材質が片寄ることなく、畿内系を含む土器甕、鉢、8世紀前葉と考えられる須恵器の有台坏身などがまとまって出土している。焼土、炭化物層の検出、断面観察によって生産関連遺構などを想定したが、確証となる材料は得られなかった。埋土中に含まれる炭化材の分析では、樹種はマツ属と同定され、暦年代は7世紀中葉～8世紀後葉という測定結果であった。

284SX　A区北東に位置する南北方向に伸びる遺構で、291SBの約2m南側に位置する。南側はカクランによって削平され明瞭に平面形態が捉えられなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈しており、検出高は7.01～7.05mを測る。検出幅は1.4m、検出長は2.9mで、残存する深さは0.27mを測り、上部は削平されたものと思われる。残存する平面形態から想定される主軸の方向は、N―35°―Eを示す。遺物は土器甕、7世紀後葉と考えられる須恵器の壺、高杯、坏身などがまとまって出土している。

040SE　A区西側に位置する井戸で、北西側は調査区外に位置する。この井戸は調査開始直後、壁際に設けたトレンチを掘り下げる際に検出されたため、調査区外からトレンチ部分の平面形態は確認できていない。残存する掘り方の平面形態は不整形で、円形または楕円形を呈するものと思われ、検出面での直径は約1.5mを測る。断面形態は階段状を呈しており、調査区壁面にて確認できる断面ではさらに緩やかな段状に径が広がる。検出高は6.97～6.99mを測り、検出面からの深さは1.27mを測る。直径約0.45mの円形曲物が最下部から3段ほど遺存しており、これより上部では井戸側にあたる箇所が観察できない。井戸側部を周囲の土壌ごと抜き取り、井筒（水溜）部の曲物のみが残されて廃絶した可能性が考えられる。したがって、残存する円形曲物より上部の掘り方平面、断面は、井戸構築時のものではなく、廃絶状況とそれ以降の堆積を示すものと思われる。040SEの内部構造は、

円形曲物が井筒部のみ使用されたものなのか、そのまま積上げて井戸側を構築したものなのかは、判断できなかった。遺物は土器、須恵器小片がわずかに出土している。円形曲物の生材分析では、樹種はヒノキと同定され、暦年代は11世紀前葉～12世紀中葉という測定結果であった。

・A区第２面

A区第２面は、調査区の北西から南西にかけて蛇行する自然流路が検出され、その南側の縁辺部ではゆるい傾斜面に度重なる堆積が観察され、その側方付加堆積物中において遺物の集積する地点が複数確認された。出土遺物の時期から、これらは古墳時代前期を主体としており、この時期のA区における古環境が河川とその縁辺部であったことが観察できた。このような環境から、遺構は第１面に比べて少なく、B区側に片寄って検出された。

1002SX　A区西端に位置し、平面、断面形は痕跡的で、明瞭に形態が捉えにくかったため、その他の類とした。東端は006SXに切られている。断面形態は船底形を呈しているものと思われるが、分層も含めて明瞭な判断がつきにくく、遺物集中箇所の可能性も捨てきれなかった。検出高は7.06～7.13mを測る。検出幅は1.6m、検出長は2.3mで、深さは0.22mを測る。遺物は古墳時代前期の土器甕、器台、高杯などが出土している。

1004SX　A区中央やや北側に位置し、平面、断面形は痕跡的で、明瞭に形態が捉えにくかったため、その他の類とした。自然流路の覆土中の検出で、遺物は上位に集中しており、断面形の明瞭な判断がつきにくく、遺物集中箇所の可能性も捨てきれなかった。検出高は7.03～7.06mを測る。東西幅は0.96mで、深さは0.2mを測る。遺物は古墳時代初頭から前期の土器甕、小型鉢などが出土している。

1035SX　A区北東に位置する南北方向に伸びる遺構で、南側はカクランによって削平され明瞭に平面形態が捉えられなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈しており、検出高は6.83～6.91mを測る。最大幅は1.42m、検出長は2.8mで、深さは0.2mを測る。残存する平面形態から想定される主軸の方向は、N―18°―Wを示す。遺物は古墳時代初頭から前期の土器壺、鉢などがまとまって出土している。

1006SU　A区西側に位置し、南北約6.3m、東西約4.6mの範囲に遺物が集中して検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。北西側約１mには1007SUが広がる。中央部の西側には、下位にて1058SUが位置する。灰色極細粒砂、灰黄色極細粒砂層に遺物が大量に含まれ、出土遺物の検出高はおおよそ6.5～7.0mを測る。検出地点は、A区北東側の自然流路に向かってゆるやかに下がっており、西側の微高地から自然流路の際に、廃棄された遺物が集積しているものと考えられる。古墳時代初頭から前期の土器壺、甕、鉢、器台、高杯などがまとまって出土している。共伴した炭化材の分析では、樹種はコナラ属クヌギ節と同定され、暦年代は２世紀中葉～３世紀中葉という測定結果であった。

1007SU　A区西の調査区壁際に位置し、南北約1.7m、東西約3.9mの範囲に遺物が集中して検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。南東側約１mには1006SUが広がる。灰色極細粒砂層に遺物が大量に含まれ、遺物の検出高はおおよそ6.5～6.7mを測る。1006SUが東側に向かう緩斜面に、南北に長い範囲で広がっ

ているのに対して、1007SU は自然流路に向かって下がる基盤層の上位にて、東西に長い範囲で広がって検出された。1006SU と同様に、西側の微高地から自然流路の落ち際に向けて、廃棄された遺物が集積しているものと考えられる。古墳時代初頭から前期の土器壺、小型壺、甕、鉢、器台、高杯などがまとまって出土している。

1009SU　A 区西側に位置し、南北約1.6m、東西約0.8m の範囲で遺物が検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。遺物の検出高は、おおよそ6.8～7.0m を測る。古墳時代初頭から前期の土器甕などが出土している。

1016SU　A 区西の調査区壁際に位置し、南北約2.7m、東西約3.9m の範囲に遺物が集中して検出された地点で、遺物の検出される範囲内には、深さ0.15m ほどの浅い凹みも見られるが、遺物が集積する範囲全体を明瞭に掘り込む平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。南西側約 3 m の位置には1006SU が、同約 2 m の位置には1007SU が広がる。灰色極細粒砂層に遺物が大量に含まれ、遺物の検出高はおおよそ6.6～6.8m を測る。1006SU が東側に向かう緩斜面に、南北に長い範囲で広がっているのに対して、この下位に位置する1016SU は、自然流路に向かって下がる基盤層の上位にて、東西に長い範囲で広がって検出された。1006SU と同様に、西側の微高地から自然流路の落ち際に向けて、廃棄された遺物が集積しているものと考えられる。古墳時代初頭から前期の土器壺、小型壺、甕、鉢、器台、高杯などがまとまって出土している。

1058SU　A 区西側に位置し、南北約1.6m、東西約1.9m の範囲で遺物が検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。遺物の検出高は、おおよそ6.6～6.8m を測る。この遺物集積の東側上位には1003SX が乗るが、下端はこの遺物集積まで達していない。また、この西側を除いた大半は1006SU が覆うが、この下位に位置する。古墳時代初頭から前期の土器甕、器台、高杯などがまとまって出土している。

1059SU　A 区西側に位置し、南北約0.8m、東西約0.8m の範囲で遺物が検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。遺物の検出高は、おおよそ6.4～6.5m を測る。1006SU と1007SU の間に位置し、これらの下位に位置する。古墳時代初頭から前期の土器壺が出土している。

・B 区第 1 面

B 区は調査地点を二分割した南西側にあたり、正名町字吹野に位置する。調査区は、A 区から続く道路建設予定地点に一辺約58m×31m の長方形で設定し、A 区同様にこの延長にて、水田耕作土、整備事業時の整地層を取り除いた面を第 1 面として扱った。したがって、以下の第 1 面は A 区同様に、遺構が検出できる最上位ではあるが、共通する時期を示す面ではない。整備事業時のものと思われるカクランは A 区同様に調査区全体にて確認されたが、B 区の方がやや少なかった。A 区との違いは、B 区内では古墳時代前期以前においても旧河川の流路が及んでいないことで、耕作地の整備事業にて削平された位置より下位に残存する遺構は、検出することができた。しかし、自然流路の際からやや離れた B 区西側では、整備事業時の削平、整地は A 区とほぼ同程度の標高で行われていても、この高さにて A 区では第 2 面で確認された時期の遺構が検出され、旧地形の起伏をうかがわせた。

2060SI　B区西端に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈するものと思われ、検出高は7.0mを測る。下端における南北径は5.0m、東西径3.3m、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されて基底部のみが検出された竪穴建物と思われる。重複関係では、2061SL、2122SKに切られている。平面形における主軸の方向は、N－7°－Wを示す。主柱穴は明確に検出されず、壁溝は残存幅が1m前後、深さ約0.1mを測る広く浅いものが全周する。溝の掘削後に、灰白色極細粒砂の混じる黄灰色シルトで全体が覆われていた。カマドと考えられる2061SLの焼土、炭化物は、この2060SIの北東角にて検出されたが、このカマドは2060SIを切っており一連のものではなく、上位に竪穴建物が存在し、カマド焚口から燃焼部に相当する部分と袖の基底部のみが残存し、上部は削平されたものと思われる。埋土は黄灰色シルトを基調とし、遺物は土器高杯などの小片が出土しており、第1面における検出ではあるが、古墳時代初頭から前期における遺構と考えられ、B区西側は旧地形が高かった可能性が考えられる。別体としてのカマド内からは、須恵器、土器の小片が出土している。2061SLは本2060SIを切っているが、含まれる炭化材の分析では、暦年代は紀元前8世紀中葉～同6世紀中葉という測定結果であった。

2070SI　B区東端に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われ、南東角に相当する部分は調査区外に位置する。検出高は6.9～7.1mを測る。下端における南北径は6.0m、東西径6.0m、残存する深さは0.05mを測り、上部は削平されて基底部のみが検出された竪穴建物と思われる。重複関係では、2080SIを切っており、2006SX、2029SK、2030SKに切られている。平面形における主軸の方向は、N－14°－Eを示す。主柱穴は明確に検出されず、北東角の位置にて柱穴の可能性を有する2078SPを検出する。壁溝は西から南辺での残存幅が0.4m前後、東辺では0.6m前後の浅いものが検出された。カマドと考えられる2071SLの炭化物は、北辺中央よりわずかに東の外側にて検出されたが、焚口側は2006SXによって切られており、煙道の基底部に相当する部分のみが残存し、上部は削平されたものと思われる。煙道部は、北東に向かって突出していたものと思われる。埋土は灰黄色シルトを基調とし、遺物は7世紀後葉と考えられる須恵器高杯とともに、畿内系土師器を含む土器の小片が出土しているが、2071SLに含まれる炭化材の分析では、暦年代は5世紀前葉～6世紀中葉という測定結果であった。北東隅には残存幅約1.6m、深さ0.3mの2079SKが検出された。東側を2006SXに切られているが、この2070SIに伴う土坑の可能性を有する。埋土には酸化鉄が含まれていた。

2080SI　B区東端に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われる。検出高は7.0～7.15mを測る。下端における南北径は6.6m、東西径6.0m、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されて基底部のみが検出された竪穴建物と思われる。重複関係では、2070SI、2006SX、2017SKに切られている。平面形における主軸の方向は、N－33°－Eを示す。主柱穴は明確に検出されず、壁溝は北西角、南西角辺りで残存幅0.4m前後の浅いものが検出された。カマドと考えられる2081SLの炭化物は、北辺のほぼ中央にて検出されたが、基底部に相当する部分のみが残存し、上部は削平されたものと思われる。埋土は灰黄色シルトを基調とし、遺物は6世紀後葉～7世紀前葉と考えられる須恵器杯身とともに土器の甕片が出土しているが、2081SLに含まれる炭化材の分析では、暦年代は紀元前4世紀中葉～同2世紀前葉という測定結果であった。

2260SI　B区西側に位置する。平面形態は不整方形を呈し、検出高は6.9～7.0mを測る。下端における南北径は6.3m、東西径5.5m、残存する深さは0.05mを測り、上部は削平されて基底部のみが検出された竪穴建物と思われる。重複関係では、2324SK、2340SDに切られている。平面形における主軸の方向は、N―13°―Wを示す。主柱穴は明確に検出されず、壁溝は検出状況からは認められなかった。北辺ほぼ中央の壁際にて炭化物が検出されたが、構造物などの痕跡は認められず、上部は削平されたものと思われる。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は土器壺、甕、鉢、高杯の小片が出土している。第1面における検出ではあるが、古墳時代初頭から前期における遺構と考えられ、B区西側は旧地形が高かった可能性が考えられる。

2270SI　B区南西側に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、検出高は6.9～7.0mを測る。下端における南北径は2.9m、東西径5.2m、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されて基底部のみが検出された竪穴建物と思われる。長軸は東西方向で、平面形における主軸の方向は、E―1°―Sを示す。主柱穴は明確に検出されず、南東角の位置にて柱穴の可能性を有する2279SPを検出する。壁溝は残存幅が0.3m前後、深さ約0.05mを測る浅いものが西辺にて検出される。カマドの可能性を有する2271SLの焼土、炭化物は、北辺の中央やや西側にて検出されたが、基底部のみが残存し、上部は削平されたものと思われる。残存する基底部の検出状況から、煙道部は北に向かって突出していたものと思われる。埋土は灰黄色シルトを基調とし、遺物は土器、須恵器の小片がわずかに出土している。2271SL出土の炭化材分析では、樹種はコナラ属クヌギ節と同定され、暦年代は7世紀後葉～8世紀後葉という測定結果であった。

2400SI　B区中央やや北側に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われる。検出高は7.0～7.1mを測る。下端における南北径は7.1m、東西径7.6mを測り、上部は削平されて壁溝のみが検出された竪穴建物と思われる。重複関係では、2409SK、2424SK、2432SK、2440SK、2441SK、2447SK、2448SKに切られている。平面形における主軸の方向は、N―24°―Eを示す。主柱穴は明確に検出されず、壁溝は北辺のカマド両脇と東辺中央を除いて全周する。壁溝の残存する幅0.3～0.7m、深さ0.1mを測る。カマドと考えられる2401SLの炭化物は、北辺のほぼ中央にて検出されたが、基底部に相当する部分のみが残存し、上部は削平されたものと思われる。遺物は6世紀後葉～7世紀前葉と思われる須恵器とともに土器の小片が出土しているが、2401SLに含まれる炭化材の分析では、樹種はコナラ属クヌギ節と同定され、暦年代は6世紀中葉～7世紀中葉という測定結果であった。

2220SB　B区東側に位置する。平面形態が円・楕円・不整円形を呈する小規模な掘り込みは、「ロ」の字状に並ぶものと思われるが、南東角に相当する部分は調査区外に位置する。調査区内で「コ」の字状に小穴が並ぶ配置を、掘立柱建物と捉えた。各柱穴の検出高は7.1m前後を測る。直径は0.4～0.9mで、検出高からの深さは、0.1～0.4mを測る。埋土は灰黄色、灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況では2240SPに柱痕が認められた。重複関係では、北東角に位置する2239SPが2106SKに切られている。列の配置から想定した東西主軸の方向は、W―9°―Sを示す。規模は東西の行長が5.5mで、柱間寸法は1.2～2.1mを測り、方形の側柱建物を想定した。2239、2241、2242、2243、2244SPには遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまで

にはいたらなかった。各柱穴は、検出高からの深さが浅く、さらに上位から掘削されているものと思われる。柱穴からは須恵器片の出土も確認できるため、古墳時代の掘立柱建物の可能性が考えられる。北東角にほぼ接する位置には、2070SI 及び、これに切られる2080SI が位置するが、どちらとも主軸は整合しない。

2025SA　B 区東側に位置する。5 基の小穴が南北方向で直線状に並ぶ配置を、柵列と捉えた。2020～2024SP はいずれも不整円形を呈し、各柱穴の検出高は7.1m 前後を測る。直径は0.5～0.7m で、検出高からの深さは、0.2m 前後を測る。埋土は灰黄色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも柱痕が認められた。重複関係では、列の南端が2220SB と重なっているが、新旧関係は不明である。列の主軸は、N ― 1 ° ― E を示す。規模は2020SP から2024SP の長さが5.5m で、柱穴と思われる掘り込みの柱間寸法は概ね1.8m を測る。2020、2021、2022、2023SP には遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各柱穴は、検出高からの深さが浅く、さらに上位から掘削されているものと思われる。柱穴からは須恵器片の出土も確認できるため、古墳時代の柵列の可能性が考えられる。列はほぼ南北の正方位を示すが、南端で重なる2220SB とは、主軸が整合しない。

2087SA　B 区中央やや東側に位置する。6 基の小穴が東西方向で直線状に並ぶ配置を、柵列と捉えた。いずれも不整円形を呈し、各小穴の検出高は7.0m 前後を測る。直径は0.5～0.7m で、検出高からの深さは、0.2～0.6m を測る。埋土は灰色、黄灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも柱痕は不明であった。重複関係では、2194SP が2177SK に、2207SP が2120SK に、2209SP が2107SK に切られている。列の主軸は、W ―13° ― S を示す。規模は2087SP から2194SP の長さが10.8m で、各小穴の間隔は1.8～2.7m を測る。2211SP 以外には遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。柵列を構成すると捉えた各小穴の中には、類似する規模の小穴と切り合い関係が見られるため、捉えた配置とは違った構成も考えられる。列の西端から約 1 m 南西には、2089SA の北端にあたる2229SP が位置し、両柵列の主軸を延伸すれば概ね直角に交差するが、交差位置には適合する小穴が検出されていない。

2089SA　B 区西側に位置する。7 基の小穴が南北方向で直線状に並ぶ配置を、柵列と捉えた。各小穴は不整円形を呈し、各小穴の検出高は7.0m 前後を測る。直径は0.5～0.7m で、検出高からの深さは、0.1～0.6m を測る。埋土は黄灰色、灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも柱痕は不明であった。列の主軸は、N ― 9 ° ― W を示す。規模は2181SP から2229SP の長さが8.6m で、各小穴の間隔は1.2～1.9m を測る。2203、2229SP を除いて遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。列の北端から約 1 m 北東には、2087SA の西端にあたる2194SP が位置し、両柵列の主軸を延伸すれば概ね直角に交差するが、交差位置には適合する小穴が検出されていない。

2587SA　B 区西側に位置する。6 基の小穴が東西方向で直線状に並ぶ配置を、柵列と捉えた。各小穴は楕円形、不整円形を呈し、各小穴の検出高は6.7～6.9m を測る。直径は0.4～0.8m で、検出高からの深さは、0.2～0.6m を測る。埋土は灰色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも柱痕は不明であった。重複関係では、2373SP が2368SD を、2429SP が2468SD を、

2495SP が2493SX を切っている。列の主軸は、W ―19° ― S を示す。規模は2362SP から2495SP の長さが9.0m で、各小穴の間隔は1.5～1.9m を測る。2495、2546SP には遺物が含まれているが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。

2588SA　B 区中央やや側に位置する。７基の小穴が東西方向で直線状に並ぶ配置を、柵列と捉えた。各小穴は不整円形を呈し、各小穴の検出高は6.8～7.0m を測る。直径は0.4～0.5m で、検出高からの深さは、0.1～0.3m を測る。埋土は灰白色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも柱痕は不明であった。重複関係では、西端の2398SP が2516SK を切っている。列の主軸は、W ―12° ― S を示す。規模は2398SP から2583SP の長さが11.0m で、各小穴の間隔は1.7～2.1m を測る。列を構成する全ての小穴には遺物が含まれているが、土器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。

2029SK　B 区東側に位置し、南側に相当する部分は調査区外に位置する土坑である。平面形態は不定形を呈するものと思われ、断面形態は船底形を呈していると思われるが、下端は調査区外に向かって段状に下る。遺構の重複関係では、2070SI を切っている。検出高は7.1m を測り、残存する長径2.3m、幅1.4m、検出高からの深さは0.24m を測る。埋土は黄灰色シルトを基調とする。遺物は８世紀前葉と考えられる須恵器有台坏身、蓋、畿内系土師器片、土器甕、製塩土器などが出土している。

2030SK　B 区東側に位置し、南側に相当する部分は調査区外に位置する土坑である。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、断面形態は船底形を呈しているものと思われる。遺構の重複関係では、2070SI を切っている。検出高は7.1m を測り、残存する長径2.2m、幅1.5m、検出高からの深さは0.35m を測る。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。遺物は７世紀後葉から８世紀前葉と考えられる須恵器蓋、高杯とともに、土器甕などが出土している。

2604SK　B 区中央やや東側に位置する土坑である。平面形態は東西方向に長い楕円形を呈し、断面形態は船底形を呈している。遺構の重複関係では、2605SI を切っている。検出高は6.95m を測り、長径0.8m、幅0.4m、検出高からの深さは0.3m を測る。埋土は黄灰色シルトを基調とする。遺物は８世紀前葉と考えられる須恵器有台坏身、蓋、畿内系土師器片、土器甕などが出土している。

2367SD　B 区西側に位置し、南北方向に伸びる溝状遺構である。断面形態は船底形を呈している。遺構の重複関係では、2556SK を切り、2350SK に切られている。検出高は7.0m を測る。幅は最大1.4m、検出長7.2m、検出高からの深さは0.4m を測る。平面形態における主軸の方向は、N ― 1 ° ― E を示すが、南側端部約２m はこの主軸から東側に向きを変えている。埋土は黄灰色粘質シルトを基調とし、遺物は土師器の鉢、７世紀後葉～８世紀初頭と考えられる須恵器有台坏身、蓋とともに、土器把手、製塩土器などが出土している。出土した炭化材の分析では、暦年代は７世紀中葉～８世紀中葉という測定結果であった。

2045SE　B 区中央やや東側に位置する井戸である。掘り方の平面形態は不整円形を呈し、検出面での直径は約1.9m を測る。断面形態は階段状を呈しており、最上部では緩やかに径が広がる。検出高は7.0m を測り、検出面からの深さは1.4m を測る。直径約0.5m の円形曲物が最下部から６段ほど遺存しており、これより上部では、最上層を除いて井戸側にあたる箇所が断面にて観察できる。すな

わち、下位の円形曲物が残存する部分から延長する上位で、井戸側にあたる箇所内側と裏込め部の堆積状況が、同様に異なっている。しかし、円形曲物は残存しない。この円形曲物が残存しない上部の断面は、最上層を除いて、円形曲物の井戸側が積上げられていた痕跡を示すものと思われる。したがって2045SE の内部は、円形曲物が井筒部のみ使用されたものではなく、そのまま積上げて井戸側を構築した構造であった可能性があり、廃絶時に再上層部までは周囲の土層ごと掘り下げ、円形曲物が中途まで抜き取られ、最上層はそれ以降の堆積を示すものと思われる。遺物は、12世紀後葉～14世紀前葉の山茶碗椀、同皿、土器皿、常滑産の陶器甕などが出土している。円形曲物の生材分析では、樹種はヒノキと同定され、暦年代は12世紀中葉～13世紀中葉という測定結果であった。

2100SE　B 区東側に位置する井戸である。掘り方の平面形態は楕円形を呈し、検出面での長径は2.9m、幅2.0m を測る。断面形態は不明瞭な階段状を呈している。検出高は7.1m を測り、検出面からの深さは1.4m を測る。直径約0.3m の円形曲物が最下部から 3 段遺存しており、これに続いてその上位で直径約0.45m の円形曲物が 3 段残存していた。さらにこの上部では、最上層を除いて井戸側にあたる箇所が断面にて観察できる。しかし、円形曲物は残存しない。2045SE と同じく、最上層を除いて、円形曲物の井戸側が積上げられていた痕跡を示すものと思われる。最下部では、径の小さい円形曲物をそれより上位のものとは区別して用いていることは、この部分を井筒として構築した可能性が考えられる。したがって内部は、直径約0.3m の円形曲物が井筒部として使用され、さらにその上位に直径約0.45m の円形曲物を積上げて井戸側を構築した構造であった可能性があり、廃絶時に周囲の土壌ごと再上層部まで掘り下げ、井戸側にしていた円形曲物が中途まで抜き取られ、最上層はそれ以降の堆積を示すものと思われる。遺物は、13世紀後葉～14世紀中葉の山茶碗椀、同皿、土器皿、陶丸、常滑産の陶器壺、甕などが出土している。円形曲物の生材分析では、樹種はヒノキと同定され、暦年代は11世紀中葉～13世紀前葉という測定結果であった。

2161SE　B 区西側に位置する井戸である。掘り方の平面形態は円形を呈し、検出面での直径は約1.9m を測る。断面形態は階段状を呈しており、最上部では緩やかに径が広がる。検出高は6.9～7.0m を測り、検出面からの深さは1.5m を測る。直径約0.3m の円形曲物が最下部から 3 段ほど遺存しており、これに続いてその上位で直径約0.45m の円形曲物が 3 段残存していた。これより上部では、井戸側にあたる箇所が断面にて観察できない。廃絶時に周囲の土壌ごと掘り下げ、井戸側にしていた円形曲物が中途まで取り除かれ、第 1 ～ 3 層はそれ以降の堆積を示すものと思われる。最下部では、2100SE と同様に、径の小さい円形曲物を用いているため、この部分を井筒として構築した可能性が考えられる。したがって2161SE の内部は、直径約0.3m の円形曲物が井筒部として使用され、さらにその上位に直径約0.45m の円形曲物を積上げて井戸側を構築した構造であった可能性が考えられる。遺物は、13世紀中葉～14世紀前葉と考えられる山茶碗椀、陶器壺、青磁椀、常滑産の甕などが出土している。円形曲物の生材分析では、樹種はヒノキと同定され、暦年代は11世紀中葉～13世紀前葉という測定結果であった。

2171SE　B 区中央やや南側に位置する井戸である。掘り方の平面形態は不整円形を呈し、検出面での直径は約2.5m を測る。断面形態は階段状を呈しており、最上部では緩やかに径が広がる。検出高は6.9～7.0m を測り、検出面からの深さは1.3m を測る。直径約0.45m の円形曲物が 7 段以上残存

しているが、最下部の３段より上位のものは下部のものから南側に大きく位置が移動していた。検出後の掘削にて、A 断面を設定してその北側を半裁したが、井戸側部に相当する位置ではなかった。その後、残部の掘削作業中途にて円形曲物を検出したため、その時点で B 断面を設定した。しかし、観察可能な南側の断面では、井戸側が本来の位置から移動していたため、井戸側にあたる箇所が断面にて観察できていない。2171SE の内部構造は、最下部から直径約0.45m の円形曲物を積上げたものではあるが、廃絶時の様相については不明である。遺物は、14世紀中葉と考えられる山茶碗椀とともに土器、須恵器の小片などが出土している。円形曲物の生材分析では、樹種はヒノキと同定され、暦年代は11世紀中葉～13世紀前葉という測定結果であった。

2246SE　B 区西側に位置する井戸である。掘り方の平面形態は円形を呈し、検出面での直径は約2.2m を測る。断面形態は鉢状を呈しており、下端から上端にかけて緩やかに径が広がる。検出高は7.0m を測り、検出面からの深さは1.0m を測る。断面観察、遺構掘削作業において、内部構造を示す様相は検出し得なかったが、平面形態、掘削深度、規模などから井戸として捉えた。2246SE は、B 区にて円形曲物を伴って検出された井戸とは断面形態が異なり、階段状を呈していない。この違いが、井戸側を用いないものなのか、廃絶時に全面的に掘り返して内部構造を取り除いたものなのかは、判断できなかった。断面から観察できる土層では、下位の土層まで斑土が観察されていないため、廃絶時に最下部まで掘削されていたとしても、早々に埋め戻された可能性は少ないものと思われる。遺物は、13世紀中葉と考えられる山茶碗椀とともに土器の小片などが出土している。

2001SX　B 区中央やや西側に位置し、東西方向に伸びる遺構で平面形態を溝とも土坑とも類別しきれなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈しているが、西側の幅を狭める部分では、逆台形状を呈する。検出高は6.8～6.9m を測る。長径は4.0m、幅は最大径となる中央付近で1.5m、検出高からの最深部は0.5m を測り、上部は削平されたものと思われる。平面形態から想定される主軸の方向は、E ― 9 ° ― S を示す。埋土は、炭化物混じりの薄い黄灰色シルト層が細かく堆積し、中位から下位ではこれらシルトと粘質土が互層状に堆積していた。最下層では炭化物が広がり、その上位にて木片の集中する層界が観察された。火力を利用した遺構と考えられるが、この炭化物層では、層ごとに掘り下げる過程で、焼成坑壁、火床に相当するほどの被熱、硬化面は観察できず、断面からも内部構造をつくり出すような様相は見られなかった。焼土、炭化物を含む層が薄く重なる状況は、燃焼行為をくり返した結果だと思われる。埋土中に含まれるものも想定し、排出前に細かい観察、確認を重ねたが、検出されなかった。遺物は、6 世紀中葉、7 世紀後葉と考えられる須恵器の坏身、蓋、壺とともに、畿内系土師器片、製塩土器を含む土器片などが出土している。出土した炭化材の分析では、暦年代は 7 世紀中葉～ 8 世紀中葉という測定結果であった。

2006SX　B 区東側に位置し、南北方向に長い遺構で、2070SI との関連が判別しきれなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈しており、検出高は6.9～7.1m を測る。長径は2.7m、幅は最大径となる南側付近で1.3m、検出高からの最深部は0.2m を測る。埋土は、炭化物混じりの暗灰黄色シルトを基調とし、最下層では炭化物に加えて焼土、灰が含まれていた。埋土各層に含まれる炭化物などから、2070SI の内部施設の可能性も想定したが、火力を利用するような構造までは観察できなかった。重複関係では、2070SI、2079SX を切っている。遺物は、7 世紀中葉と考えられる

須恵器の坏蓋とともに、土器甕などが出土している。出土した炭化材の分析では、暦年代は６世紀中葉～７世紀前葉という測定結果であった。

2125SX　Ｂ区中央やや東側に位置し、東西方向に長い遺構で、埋土には焼土、炭化物が観察されたが、遺構の性格が判別しきれなかったため、その他の類とした。断面形態は長軸側では船底形を呈しているが、短軸側では逆台形を呈する。検出高は7.0～7.1m を測る。長径は1.6m、幅は中央付近で0.8m、検出高からの最深部は0.5m を測る。埋土は、焼土、炭化物混じりの褐灰色粘質土を基調とするが、焼土、炭化物を同様に含んだ2001SX とは違い、薄く互層状には堆積していない。重複関係では、2152SP に切られている。遺物は、８世紀前葉と考えられる須恵器の有台坏身、蓋とともに、畿内系土師器片、土器甕などが出土している。出土した炭化材の分析では、暦年代は６世紀後葉～７世紀中葉という測定結果であった。

2431SX　Ｂ区中央やや西側に位置し、東西方向に伸びる遺構で、西側は調査区外に続く。平面形態を溝とも土坑とも類別しきれなかったため、その他の類とした。断面形態は不整形で、底部は安定していない。検出高は7.0m を測る。検出長は3.8m、幅は最大径となる中央付近で1.1m、検出高からの最深部は0.2m を測る。平面形態から想定される主軸の方向は、Ｅ―13°―Ｓを示す。埋土は、黄灰色粘質土を基調とする。重複関係では、2441SK に切られている。遺物は、８世紀中葉と考えられる須恵器片とともに、畿内系土師器片、土器小片が出土している。出土した炭化材の分析では、樹種はコナラ属クヌギ節と同定され、暦年代は７世紀後葉～８世紀後葉という測定結果であった。

2478SX　Ｂ区中央やや北側に位置し、東西方向に伸びる遺構で、平面形態を溝とも土坑とも類別しきれなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を呈する。検出高は6.9～7.0m を測る。長径は3.1m、幅は最大径となる西側付近で0.8m、検出高からの最深部は0.4m を測る。平面形態から想定される主軸の方向は、Ｅ―13°―Ｎを示す。埋土は、褐灰色粘質土を基調とする。重複関係では、壁溝のみ検出された2400SI を切っているものと思われ、同様に上部は削平されたものと思われる。すぐ北側では、2479SX と0.3m ほどの間隔で並列する。遺物は、７世紀末～８世紀中葉と考えられる須恵器有台坏身、坏身、蓋、鉢とともに、畿内系土師器片が多数出土している。

2479SX　Ｂ区中央やや北側に位置し、東西方向に長い遺構で、埋土には炭化物が観察されたが、遺構の性格が判別しきれなかったため、その他の類とした。長軸の断面形態は船底形を呈するが、短軸は逆台形に近い。検出高は6.9～7.0m を測る。長径は4.5m、幅は最大径となる西側付近で1.0m、検出高からの最深部は0.4m を測る。平面形態から想定される主軸の方向は、Ｅ―５°―Ｎを示す。埋土は褐灰色シルトを基調とし、各層とも炭化物が含まれ、中位やや底側には炭化物の単純層も観察された。この炭化物層は厚さが0.02～0.07m で、両端部約0.5m を除いて全面に広がる。重複関係では、壁溝のみ検出された2400SI を切っているものと思われ、同様に上部は削平されたものと思われる。すぐ南側では、2478SX と0.3m ほどの間隔で並列する。遺物は、土器小片、須恵器片などが出土しているが、時期を判断できるものは含まれていなかった。出土した炭化材の分析では、樹種はコウヤマキと同定され、暦年代は６世紀中葉～７世紀中葉という測定結果であった。

2493SX　Ｂ区中央やや北西側に位置し、平面形態は四隅の丸い不整方形を呈する。埋土には炭化物が観察されたが、遺構の性格が判別しきれなかったため、その他の類とした。断面形態は船底形を

呈し、検出高は6.9～7.0m を測る。長径は3.3m、幅は2.4m、検出高からの最深部は0.2m を測る。平面形態から想定される主軸の方向は、E ― 5 ° ― S を示す。埋土は灰色粘質シルトを基調とし、最下層以外は各層とも炭化物が含まれた。特に第 3 層は炭化物主体層で、遺構の内縁部近くまで全体的に広がる。重複関係では、2503SX、2552SX を切っており、2396SK、2495SP に切られている。遺物は、7 世紀後葉～ 8 世紀初頭と考えられる須恵器有台坏身、坏身、蓋、壺、高杯とともに、畿内系土師器片などが出土している。出土した炭化材の分析では、暦年代は 7 世紀中葉～ 8 世紀後葉という測定結果であった。

2503SX　B 区中央やや北西側に位置し、平面形態が不整形で類別しきれなかったため、その他の類とした。検出高は7.0～7.1m を測る。南西隅がやや突出しており、この部分からの長径は4.2m、幅は中央付近で2.9m、検出高からの最深部は0.15m を測る。埋土は、暗灰黄色粘質土を基調とする。重複関係では、2552SX を切っており、2392SK、2493SX に切られている。床面では、2523SK、2527SK、2528SK が検出されたが、上部構造を想定できるような配置ではなかった。遺物は、7 世紀後葉～ 8 世紀初頭と考えられる須恵器小片、畿内系土師器片、土器小片などが出土している。出土した炭化材の分析では、樹種はツバキ属と同定され、暦年代は 7 世紀中葉～ 8 世紀中葉という測定結果であった。

・B 区第 2 面

B 区第 2 面は、A 区において検出された自然流路の南西側縁辺部である。A 区北端において蛇行する部分からはやや離れ、南西端に向かっては逆にゆるやかに下がっている。遺物集積は、A 区と同様に B 区側でも検出され、遺構は第 1 面に比べてやや希薄であった。

3120SI　B 区東端に位置する。不整形に検出された平面形態は掘削時の様相ではなく、上部が削平されて基底部のみが検出された結果だと思われる。埋土は灰色シルトを基調とし、斑土状に灰白色シルトが多量に混じり、最下層の上から柱穴状の掘り込みが検出されたため、竪穴建物の可能性を想定した。検出高は、6.8～6.9m を測る。下端における長径は4.5m、残存する深さは0.2m を測り、重複関係では、3121SI を切り、3019SK、3020SK、3023SK に切られている。平面形における主軸の方向は、北西辺を本来の様相と仮定するならばN ―39° ― E を示す。主柱穴は、3171SP、3174SP などにその可能性を検討した程度で、明確な配置が捉えられなかった。遺物は古墳時代初頭～前期と思われる土器壺を含む土器片が出土している。本遺構は3121SI と重複関係にあるが、それぞれからの出土遺物が 1 点接合されているため、本来は一体、または付帯関係の可能性が考えられる。

3121SI　B 区東端に位置し、平面形態は長方形を呈するものと思われる。重複関係では、不整形に検出された3120SI に切られている。しかし、3120SI、3121SI からの出土遺物のうちで、1 点が接合されているため、本来は一体、または付帯関係の可能性が考えられ、上部が削平されて基底部のみが検出された結果だと思われる。埋土は黄灰色シルトを基調とし、斑土状に灰白色シルトなどが多量に混じるため、竪穴建物の可能性を想定した。検出高は6.9m を測り、下端における長径は4.7m、残存する深さは0.2m を測る。重複関係では、3010SK、3120SI に切られている。平面形における主軸の方向は、北西辺を本来の様相と仮定するならばN ―27° ― E を示し、3120SI とはやや異なる。

遺物は古墳時代初頭～前期と思われる土器壺、甕、高杯などが出土している。

4035SI　B区中央やや西側に位置し、平面形態は不整方形を呈するが、上部が削平されて基底部のみが検出された結果だと思われ、本来は隅丸方形を呈するものと思われ、竪穴建物の可能性を想定した。検出高は6.6～6.7mを測り、下端における東西径は3.6m、南北径3.1m、残存する深さは0.1mを測る。平面形における主軸の方向は、南西辺を本来の様相と仮定するならばE―21°―Sを示す。埋土は、炭化物を含む灰色シルトを基調とする。底部は平坦に広がり、南辺のやや西側では長径0.5m、幅0.4m、厚さ0.2mの扁平な亜角礫（凝灰質砂岩）が検出された。重複関係では、3217SK、4014SKに切られている。遺物は弥生時代末～古墳時代初頭と思われる土器甕、S字状口縁台付甕、高杯などが出土している。

3139SK　B区中央やや南側に位置する土坑である。平面形態は東西方向に長い楕円形を呈し、断面形態は船底形を呈している。検出高は6.8mを測り、長径1.5m、幅1.2m、検出高からの深さは0.3mを測る。埋土は灰色シルトを基調とする。遺構の重複関係では、4009SUを切っている。遺物は古墳時代初頭～前期と考えられる土器甕、S字状口縁台付甕、鉢、高杯などが出土している。

3309SK　B区中央やや南側に位置する土坑である。平面形態は東西方向に長い楕円形を呈し、断面形態は船底形を呈している。検出高は6.7～6.8mを測り、長径4.1m、幅3.0m、検出高からの深さは0.4mを測る。埋土は炭化物混じりの灰色シルトを基調とする。遺構の重複関係では、3137SK、3319SKに切られている。遺物は古墳時代初頭～前期と考えられる土器壺、小型壺、S字状口縁台付甕などが出土している。

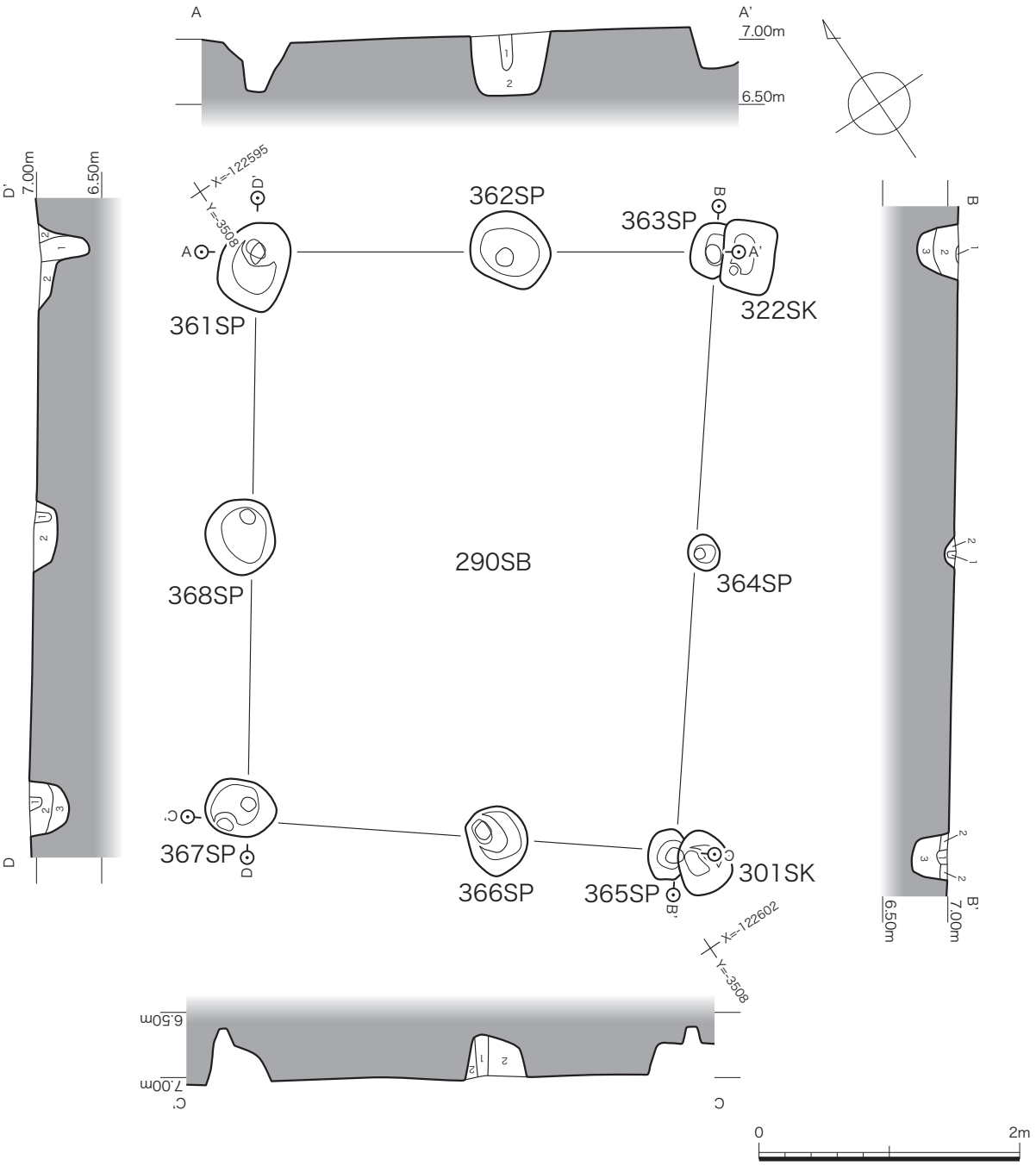
3346SK　B区中央やや南側に位置し、3309SKの底部にて検出された土坑である。平面形態は円形を呈し、断面形態は船底形を呈している。検出高は6.3mを測り、直径0.5m、検出高からの深さは0.2mを測る。埋土は灰色極細粒砂を基調とする。残存する深さの中位から、長さ20cm前後の柱状の礫（アプライト、片麻岩、泥岩）が7点出土している。

4009SU　B区中央やや南側に位置し、南北約1.8m、東西約2.0mの範囲で遺物が検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。遺物の検出高は、おおよそ6.5～6.8mを測る。遺構の重複関係では、3139SKに切られている。遺物は、古墳時代初頭～前期の土器壺、鉢、甕、S字状口縁台付甕、器台などが出土している。

3070SU　B区中央やや北側に位置し、南北約4.8m、東西約5.6mの範囲で遺物が検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。遺物の検出高は、おおよそ6.8～7.0mを測る。遺構の重複関係では、3063SK、3066SKに切られている。遺物は、古墳時代初頭～前期の土器壺、鉢、甕、S字状口縁台付甕、高杯、器台などが出土している。

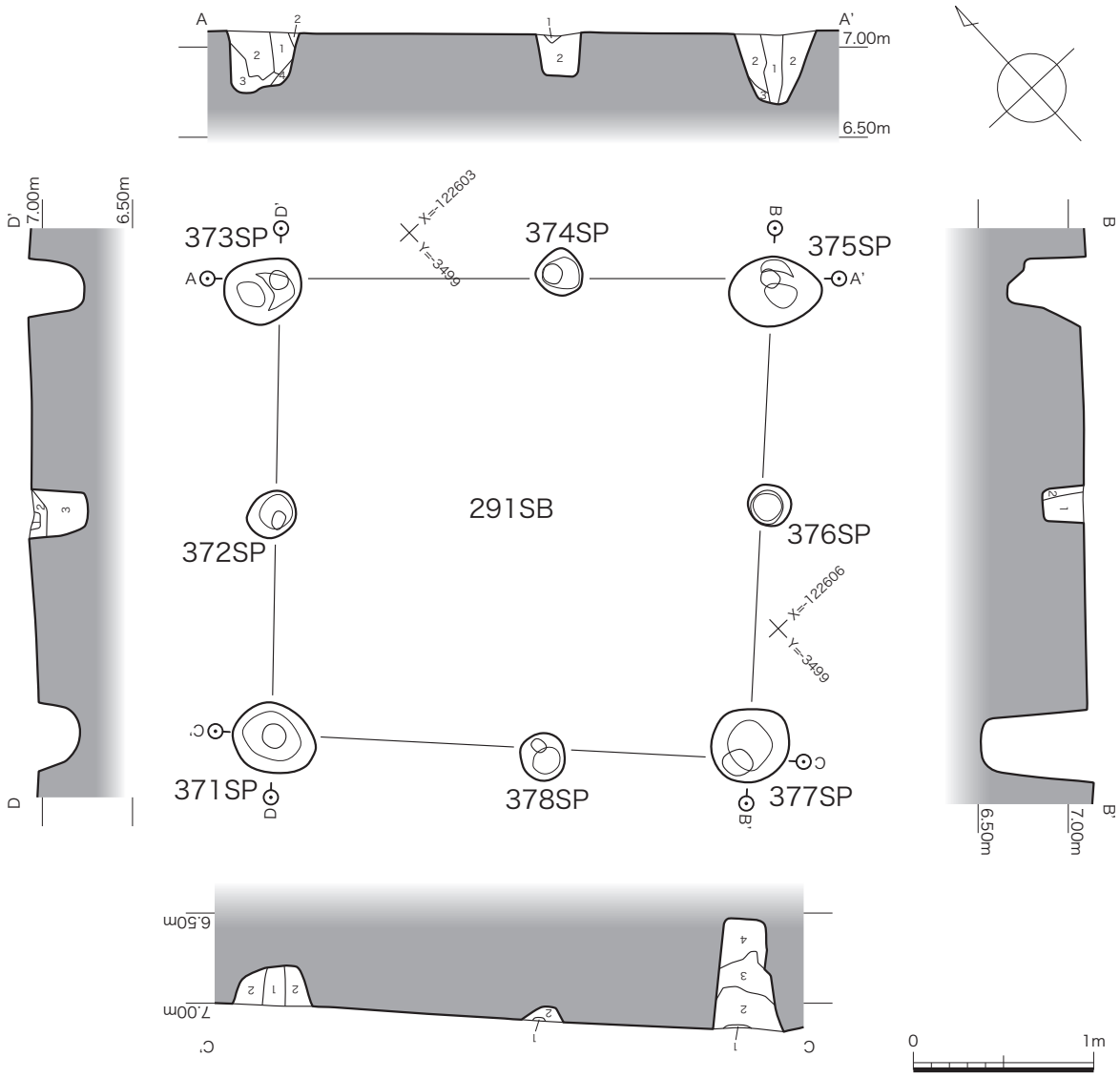


第６図　A 区第１面全体図（1:300）



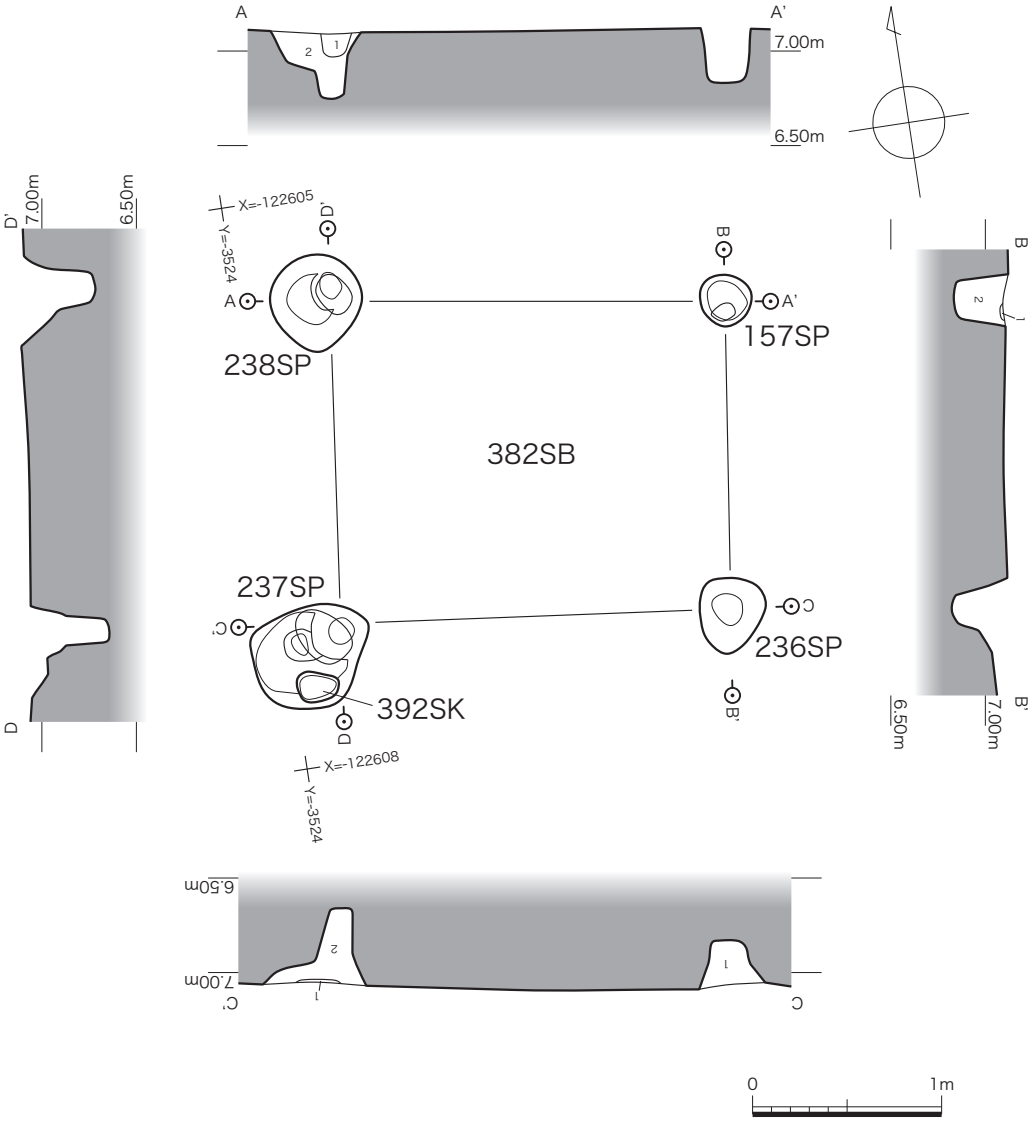
361SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色細粒砂を含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色細粒砂を多量含む。
362SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを含む。
363SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。炭化物を微量含む。酸化鉄を含む。
3　灰色(5Y4/1)極細粒砂。灰白色シルトを少量含む。
364SP
1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。炭化物を微量含む。
2　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。灰白色シルトを含む。
365SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色細粒砂を含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色細粒砂を多量含む。
3　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を多量含む。炭化物を微量含む。
366SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を微量含む。
2　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を多量含む。
367SP
1　灰白色(2.5Y7/1)極細粒砂。黄灰色シルトを少量含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を多量含む。
3　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を少量含む。
368SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色細粒砂を含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色細粒砂を多量含む。

第 7 図　290SB 平面・断面図（1:50）



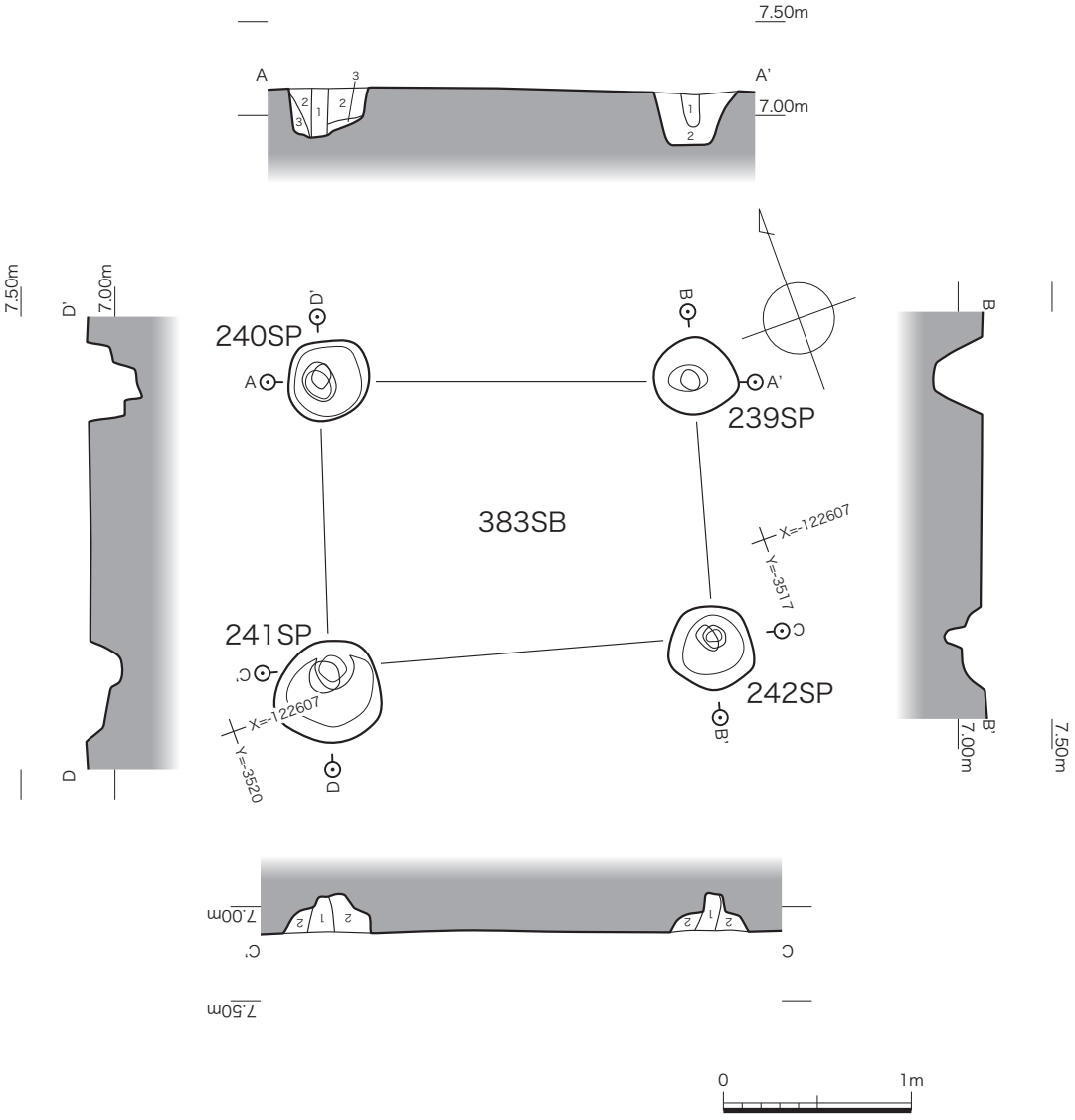
371SP
1　灰色(5Y5/1)粘質土。
2　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
372SP
1　灰白色(5Y7/2)シルト。
2　灰白色(5Y7/2)極細粒砂。炭化物を微量含む。
3　灰色(5Y5/1)シルト。
373SP
1　灰色(5Y5/1)粘質土。炭化物・マンガンを微量含む。
2　灰色(5Y4/1)粘質土。炭化物・マンガンを少量含む。
3　灰白色(5Y7/2)細粒砂。灰色粘質土を少量含む。
4　灰色(5Y4/1)粘質土。炭化物を微量含む。
374SP
1　灰色(5Y6/1)極細粒砂。
2　灰色(5Y5/1)極細粒砂。灰白色シルトを多量含む。
375SP
1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを含む。
3　灰色(5Y5/1)極細粒砂。
376SP
1　灰白色(5Y7/2)シルト。
2　灰色(5Y4/1)粘質土。
377SP
1　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。炭化物を微量含む。
2　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰白色細粒砂を多量含む。
3　灰白色(2.5Y7/1)細粒砂。灰黄色粘質土を含む。
4　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。灰白色細粒砂を少量含む。
378SP
1　灰白色(5Y7/2)極細粒砂。
2　灰白色(5Y7/2)極細粒砂。灰色粘質土を少量含む。

第 8 図　291SB 平面・断面図（1:40）



157SK
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰黄色シルトを少量含む。
236SP
1　灰色(5Y5/1)粘質土。炭化物を微量含む。
237SP
1　灰色(5Y5/1)粘質土。
2　灰色(5Y5/1)粘質土。炭化物を微量含む。
※392SKより新しい。
238SP
1　灰色(5Y5/1)粘質土。灰白色シルト・炭化物を微量含む。
2　灰色(5Y5/1)粘質土。灰白色シルトを多量含む。炭化物を微量含む。

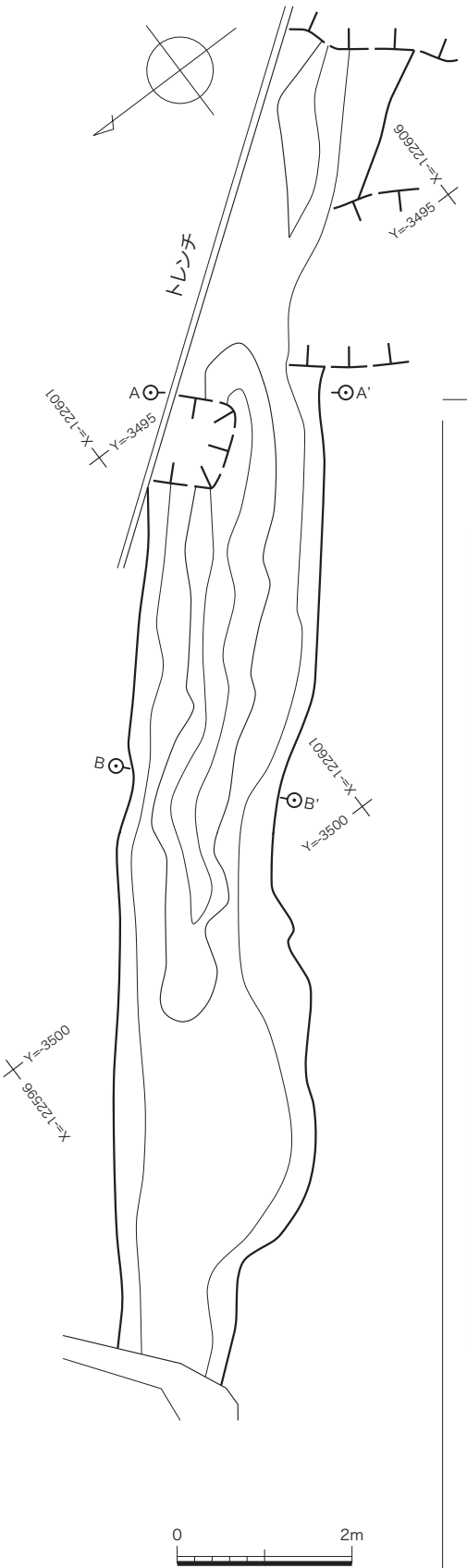
第９図　382SB 平面・断面図（１:40）

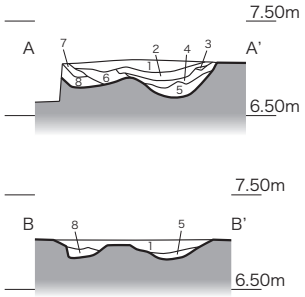


239SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。
2　灰白色(2.5Y8/2)極細粒砂。黄灰色シルトを多量含む。
240SP
1　灰色(5Y5/1)粘質土。炭化物を微量含む。
2　灰色(5Y5/1)粘質土。灰白色シルトを少量含む。炭化物を微量含む。
3　灰白色(5Y7/2)細粒砂。灰色粘質土を少量含む。
241SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。
2　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を多量含む。
242SP
1　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。
2　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。

第10図　383SB 平面・断面図（1:40）

285SD

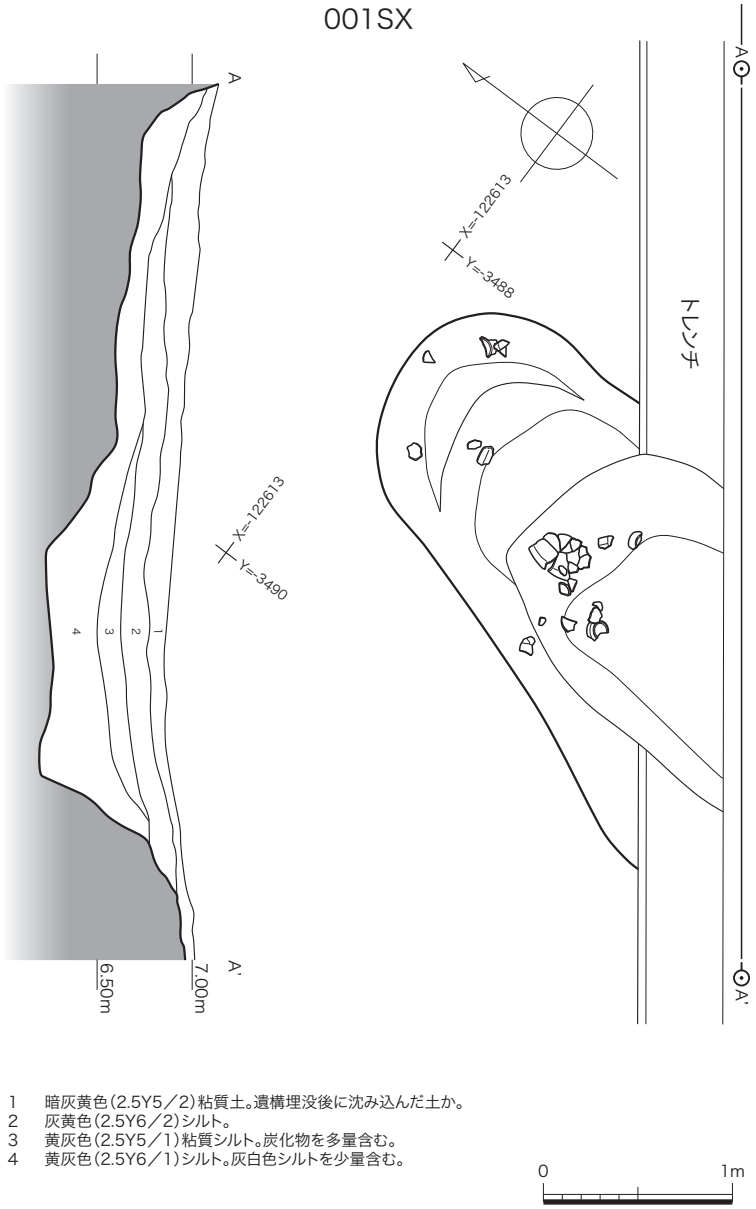




1 灰黄色(2.5Y6/2)粘質土。炭化物を微量含む。マンガンを少量含む。
2 黄灰色(2.5Y6/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。
3 灰白色(2.5Y8/1)細粒砂。
4 黄灰色(2.5Y6/1)シルト。炭化物・灰白色シルトを微量含む。
5 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。
6 灰黄色(2.5Y6/2)粘質土。マンガンを含む。
7 灰白色(2.5Y7/1)細粒砂。黄灰色シルトを含む。
8 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。

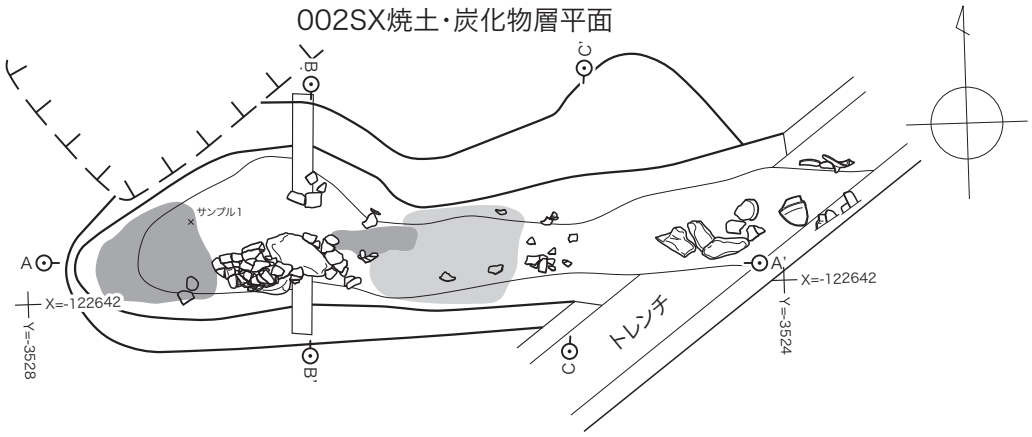
第11図　285SD 平面・断面図（1:80）

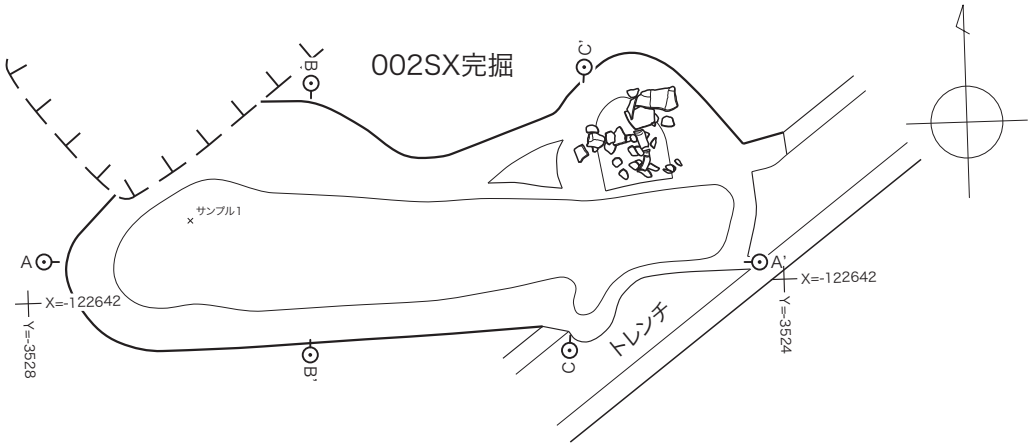
001SX

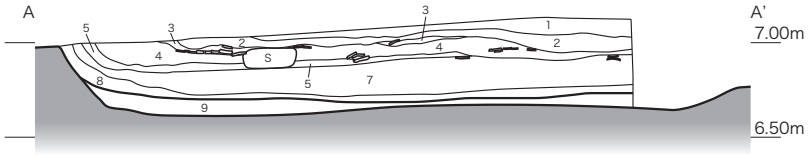


1 暗灰黄色(2.5Y5／2)粘質土。遺構埋没後に沈み込んだ土か。
2 灰黄色(2.5Y6／2)シルト。
3 黄灰色(2.5Y5／1)粘質シルト。炭化物を多量含む。
4 黄灰色(2.5Y6／1)シルト。灰白色シルトを少量含む。

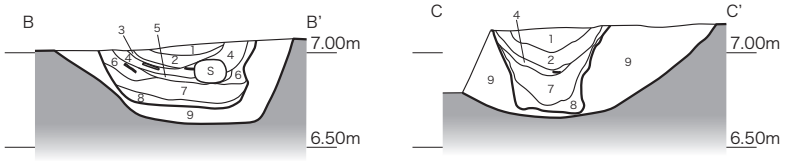
第12図　001SX 平面・断面図（1:40）







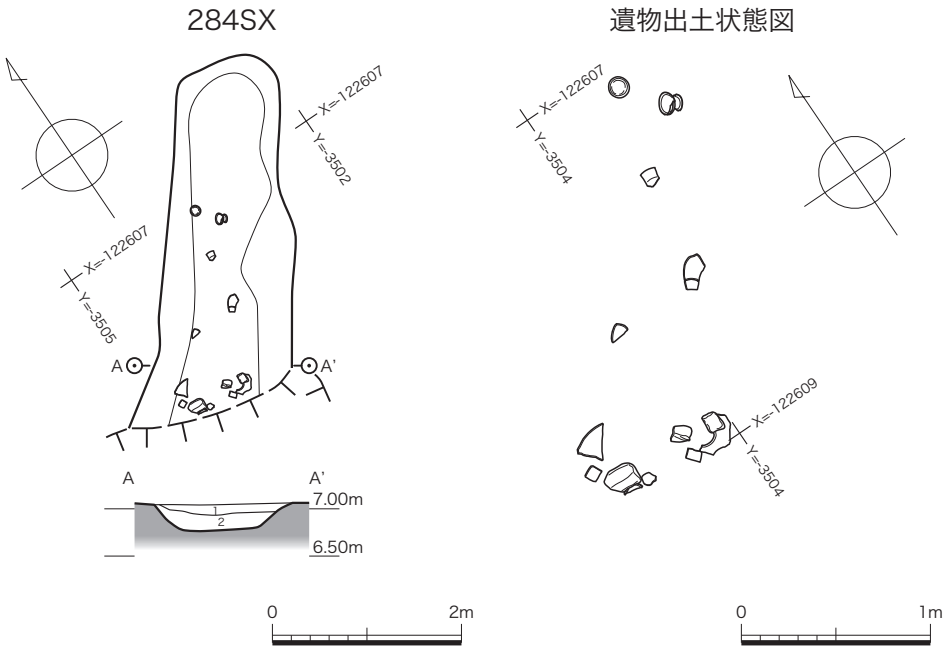




1　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。炭化物・焼土を含む。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を含む。焼土を少量含む。
3　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。締まり強。炭化物・焼土を少量含む。
4　灰黄色(2.5Y4/2)シルト。炭化物を含む。
5　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。炭化物を含む。焼土を多量含む。
6　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。炭化物を少量含む。
7　黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂。締まり強。炭化物・灰白色細粒砂を少量含む。
8　灰白色(5Y7/2)細粒砂。締まり強。黒褐色極細粒砂をブロック状に含む。炭化物を微量含む。
9　灰色(5Y6/1)シルト。

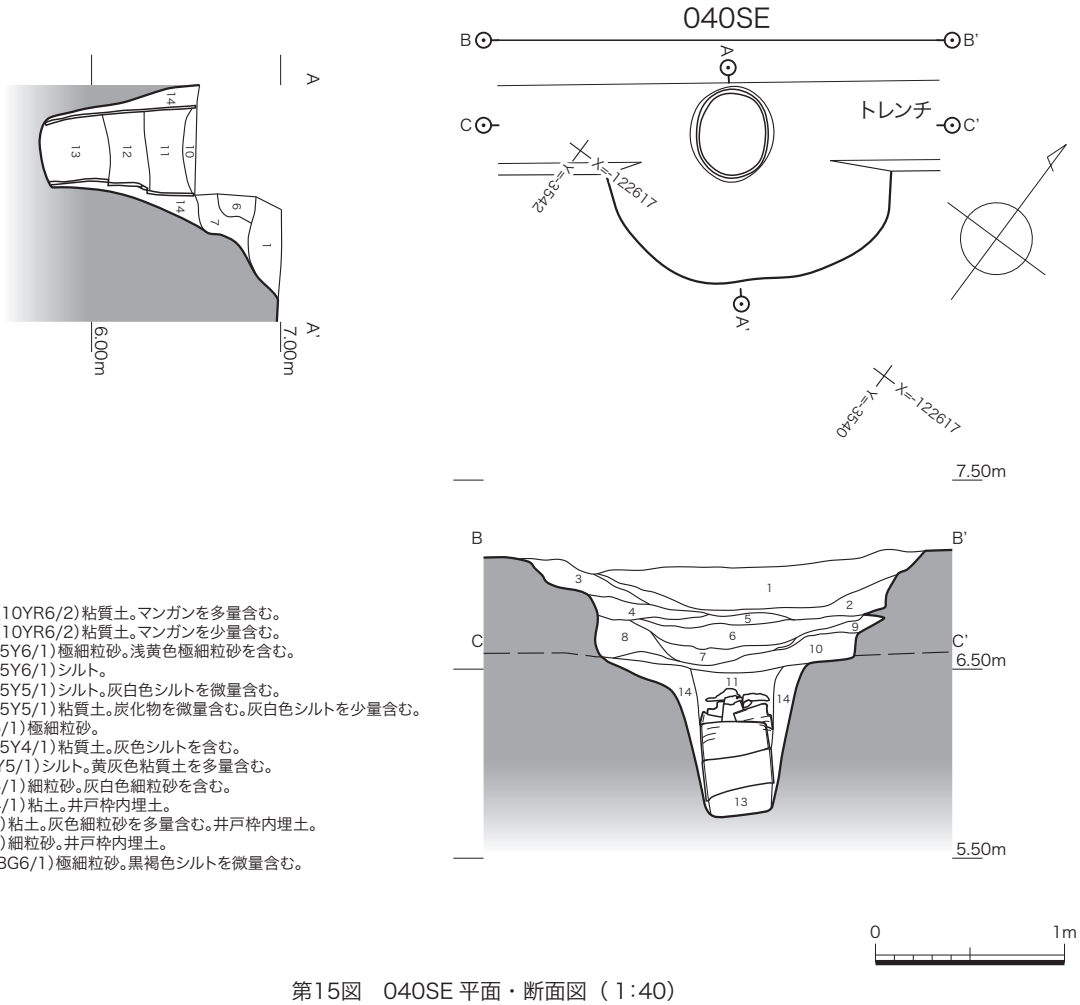


第13図　002SX 平面・断面図（1:40）



1　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
2　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。灰黄色シルトを多量含む。炭化物を微量含む。

第14図　284SX 平面・断面・遺物出土状態図（1:80・1:40）

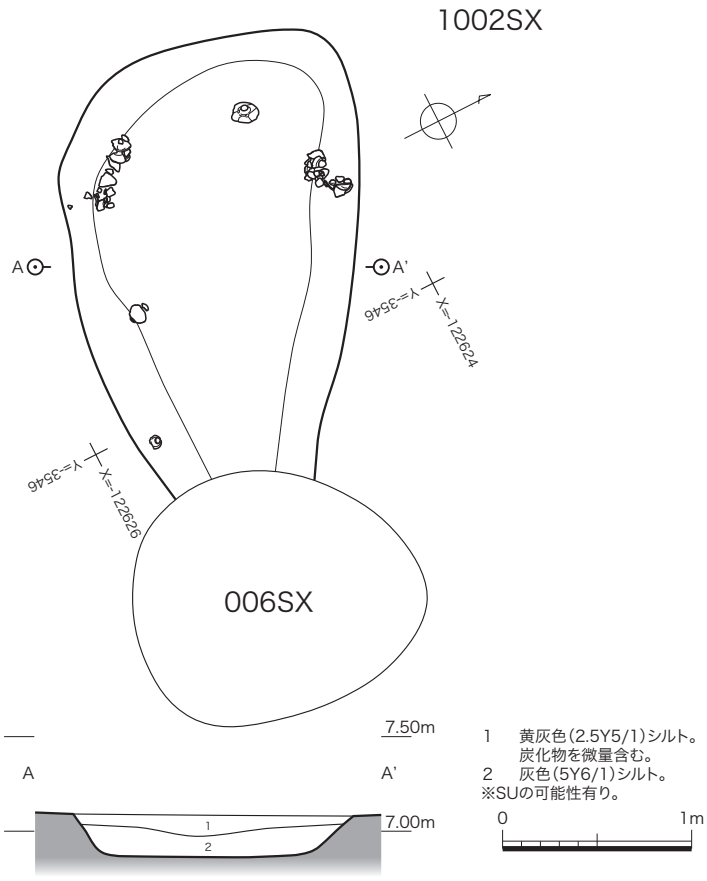


1　灰黄褐色(10YR6/2)粘質土。マンガンを多量含む。
2　灰黄褐色(10YR6/2)粘質土。マンガンを少量含む。
3　黄灰色(2.5Y6/1)極細粒砂。浅黄色極細粒砂を含む。
4　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。
5　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを微量含む。
6　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。炭化物を微量含む。灰白色シルトを少量含む。
7　灰色(5Y5/1)極細粒砂。
8　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰色シルトを含む。
9　灰色(2.5Y5/1)シルト。黄灰色粘質土を多量含む。
10　灰色(5Y5/1)細粒砂。灰白色細粒砂を含む。
11　灰色(5Y4/1)粘土。井戸枠内埋土。
12　灰色(N4/)粘土。灰色細粒砂を多量含む。井戸枠内埋土。
13　灰色(N5/)細粒砂。井戸枠内埋土。
14　青灰色(5BG6/1)極細粒砂。黒褐色シルトを微量含む。

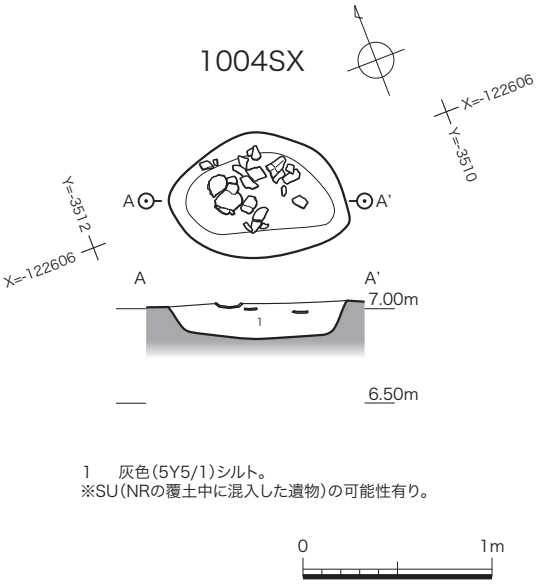
第15図　040SE 平面・断面図（1:40）



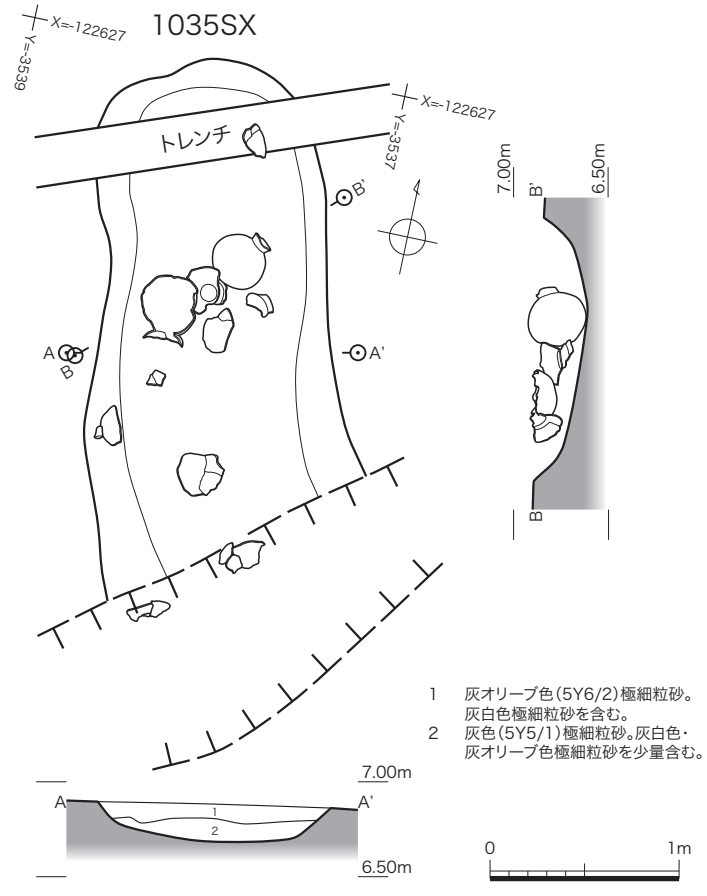
第16図　A 区第 2 面全体図（1:300）



第17図　1002SX 平面・断面図（1:40）



第18図　1004SX 平面・断面図（1:40）



第19図　1035SX 平面・断面図（1:40）



第20図　1009SU 平面図（1:20）



1　黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂。炭化物を微量含む。灰色極細粒砂を多量含む。
2　灰色（N4/）極細粒砂。炭化物を少量含む。灰白色極細粒砂を含む。
3　灰黄色（2.5Y7/2）極細粒砂。灰色極細粒砂を微量含む。
4　灰色（5Y4/1）シルト。
※黒色の遺物は1006SUとして捉えて掘削した土層から出土した遺物であり、
灰色の遺物は1006SU調査後、検出3として掘削した土層から出土した遺物の内、
1006SUの範囲内に位置して出土した遺物である。両者ともに、1006SUの遺物として取り上げてある。

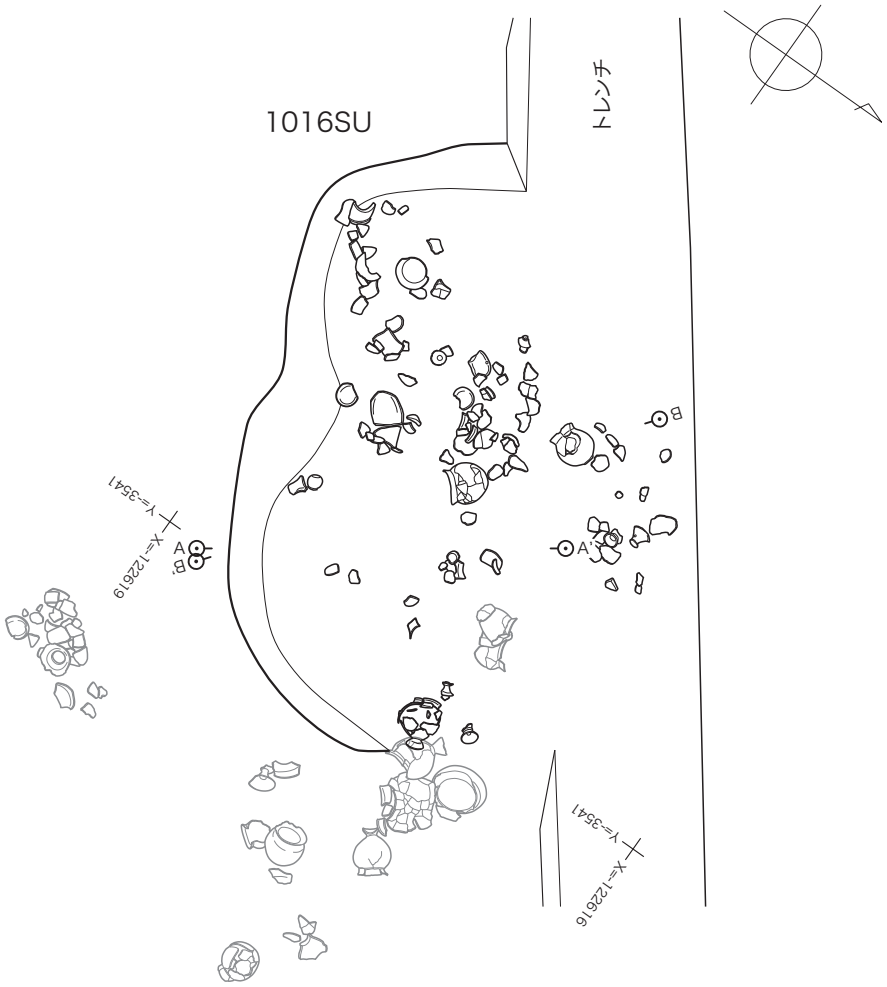
第21図　1006SU 平面・断面図（1:40）

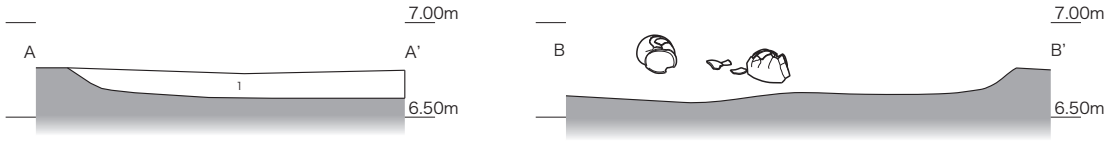


A・B
1　明黄褐色(10YR6/6)中粒砂。
2　灰色(N4/)極細粒砂。炭化物を少量含む。灰白色極細粒砂を含む。
3　灰色(5Y5/1)極細粒砂。浅黄色中粒砂を含む。

C・D
1　灰色(5Y5/1)極細粒砂。灰白色極細粒砂を少量含む。
2　灰色(N4/)極細粒砂。炭化物を少量含む。灰白色極細粒砂を含む。
3　灰色(5Y5/1)極細粒砂。浅黄色中粒砂を含む。

第22図　1007SU 平面・断面図（1:40）

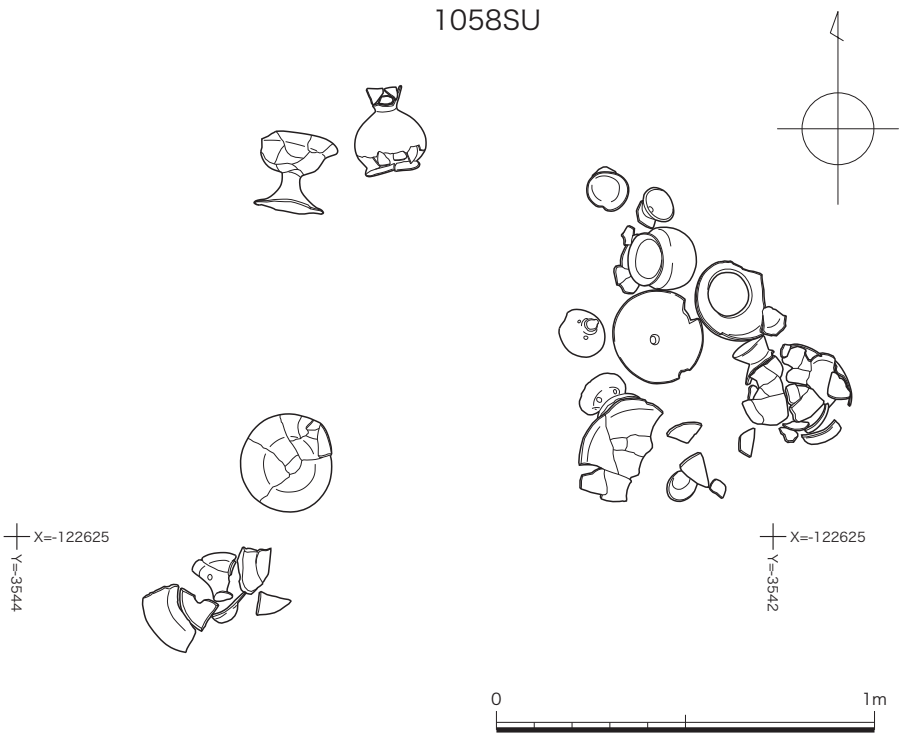




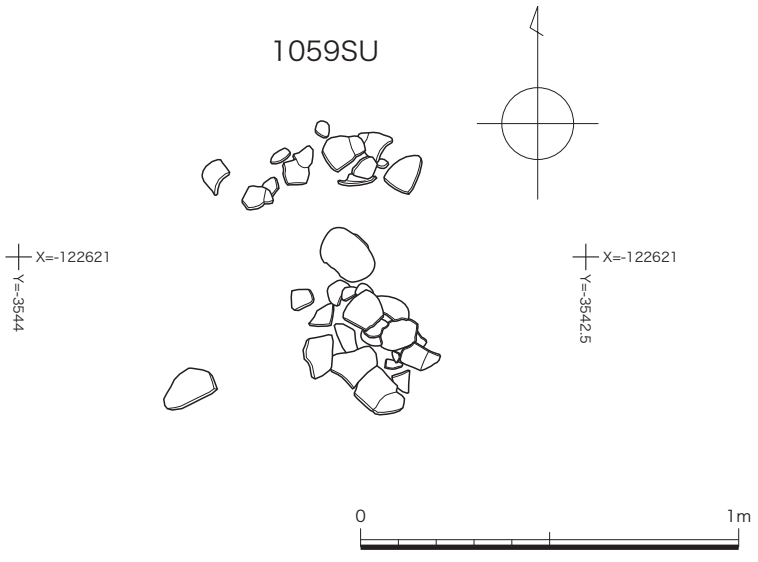
1　灰色（5Y4/1）極細粒砂。浅黄色中粒砂を少量含む。
※黒色の遺物は1016SUとして捉えて掘削した土層から出土した遺物であり、
灰色の遺物は1016SU調査後、検出3として掘削した土層から出土した遺物の内、1016SUの範囲内に位置して出土した遺物である。
両者ともに、1016SUの遺物として取り上げてある。



第23図　1016SU 平面・断面図（1:40）



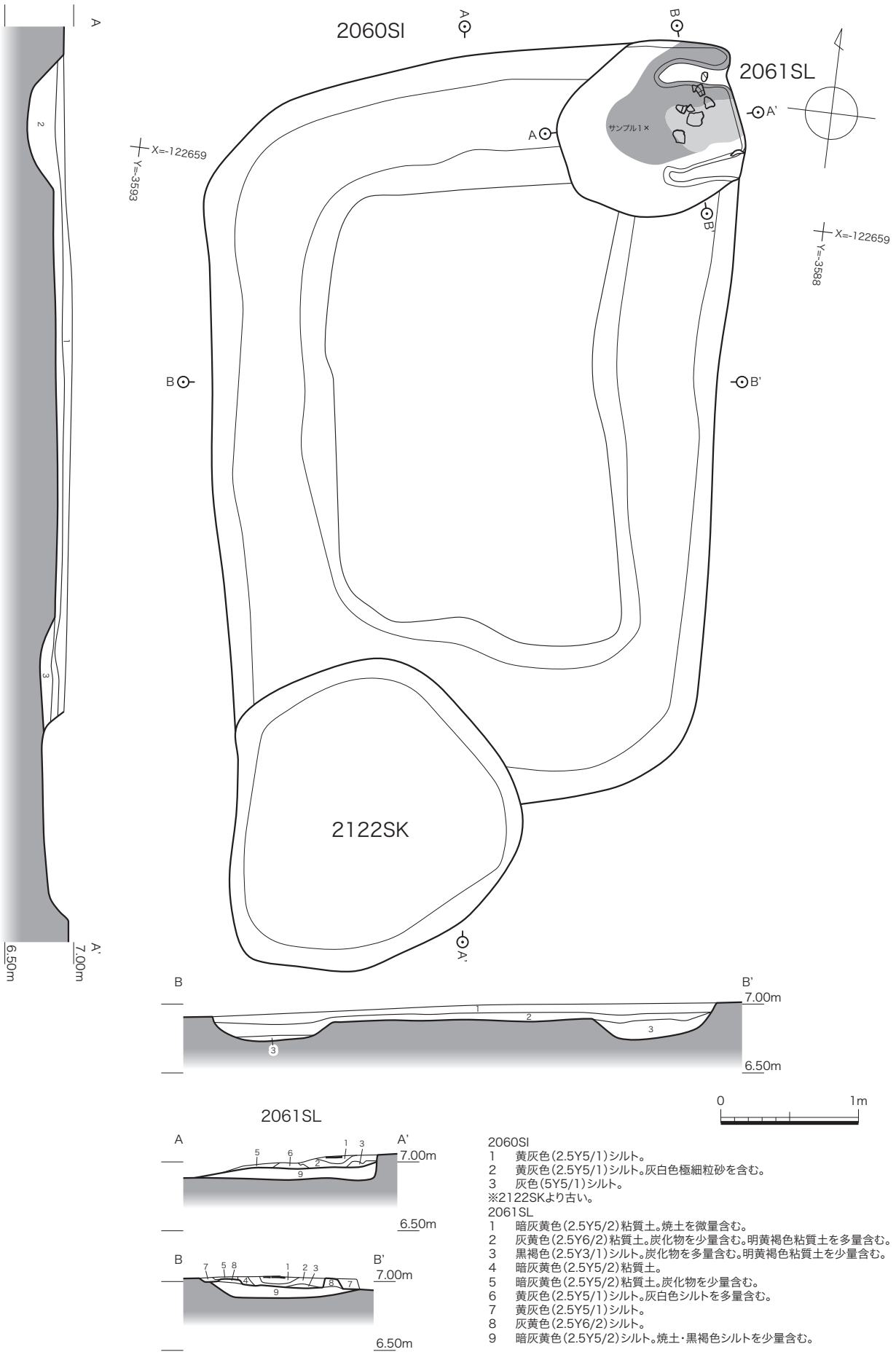
第24図　1058SU 平面図（1:20）



第25図　1059SU 平面図（1:20）



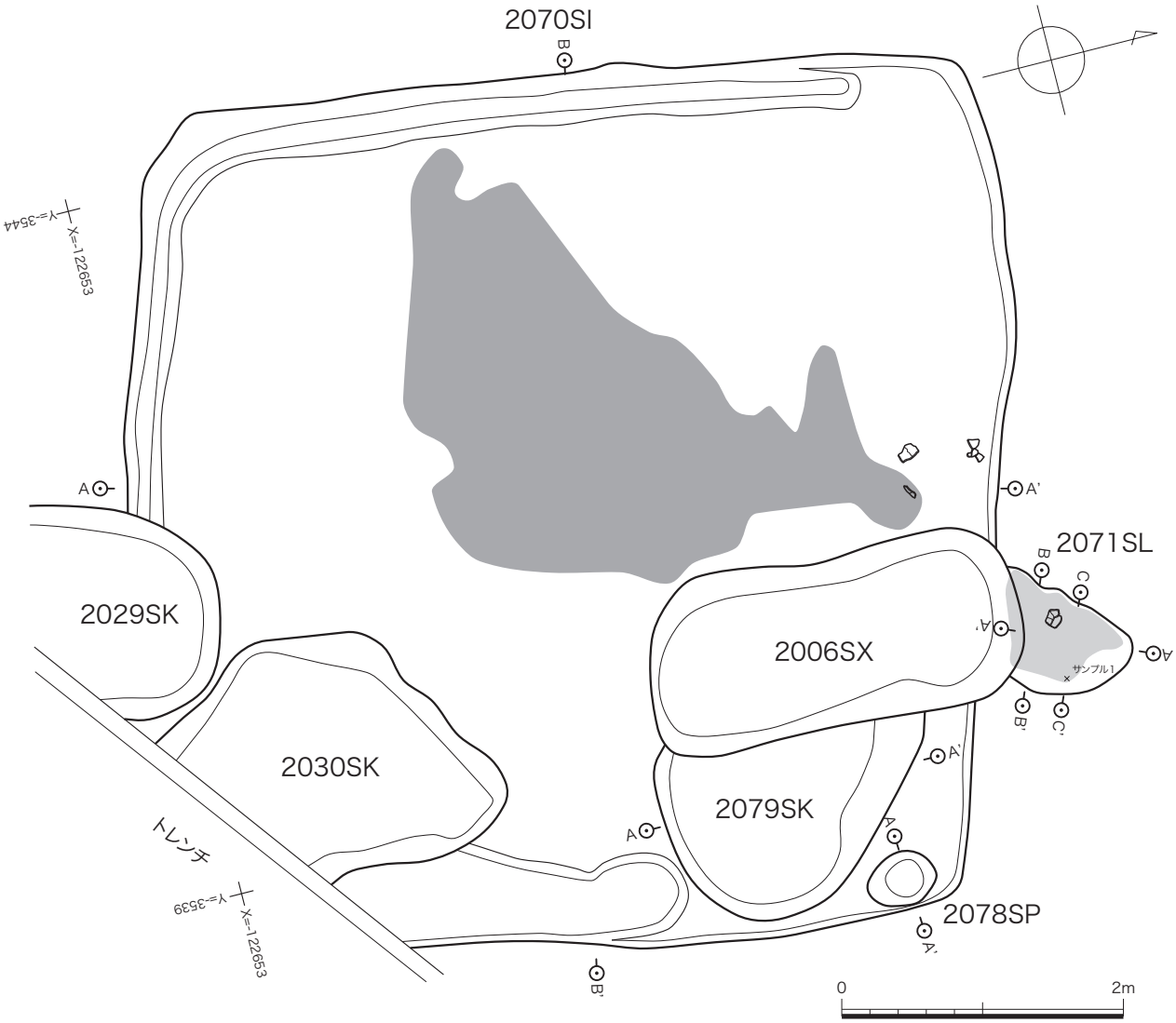
第26図　B 区第 1 面全体図（1:300）

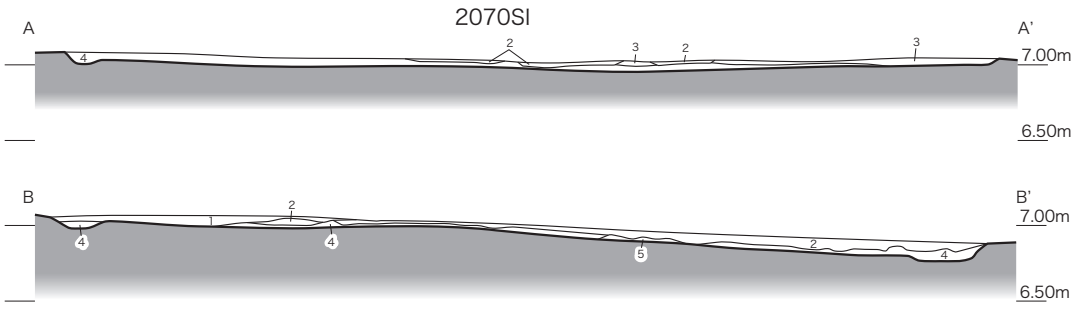


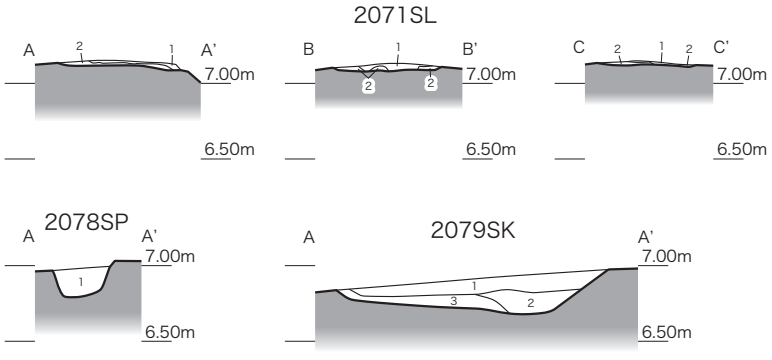
2060SI
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色極細粒砂を含む。
3　灰色(5Y5/1)シルト。
※2122SKより古い。

2061SL
1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土。焼土を微量含む。
2　灰黄色(2.5Y6/2)粘質土。炭化物を少量含む。明黄褐色粘質土を多量含む。
3　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。炭化物を多量含む。明黄褐色粘質土を少量含む。
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土。
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土。炭化物を少量含む。
6　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。
7　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。
8　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
9　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。焼土・黒褐色シルトを少量含む。

第27図　2060SI・2061SL 平面・断面図（1:40）

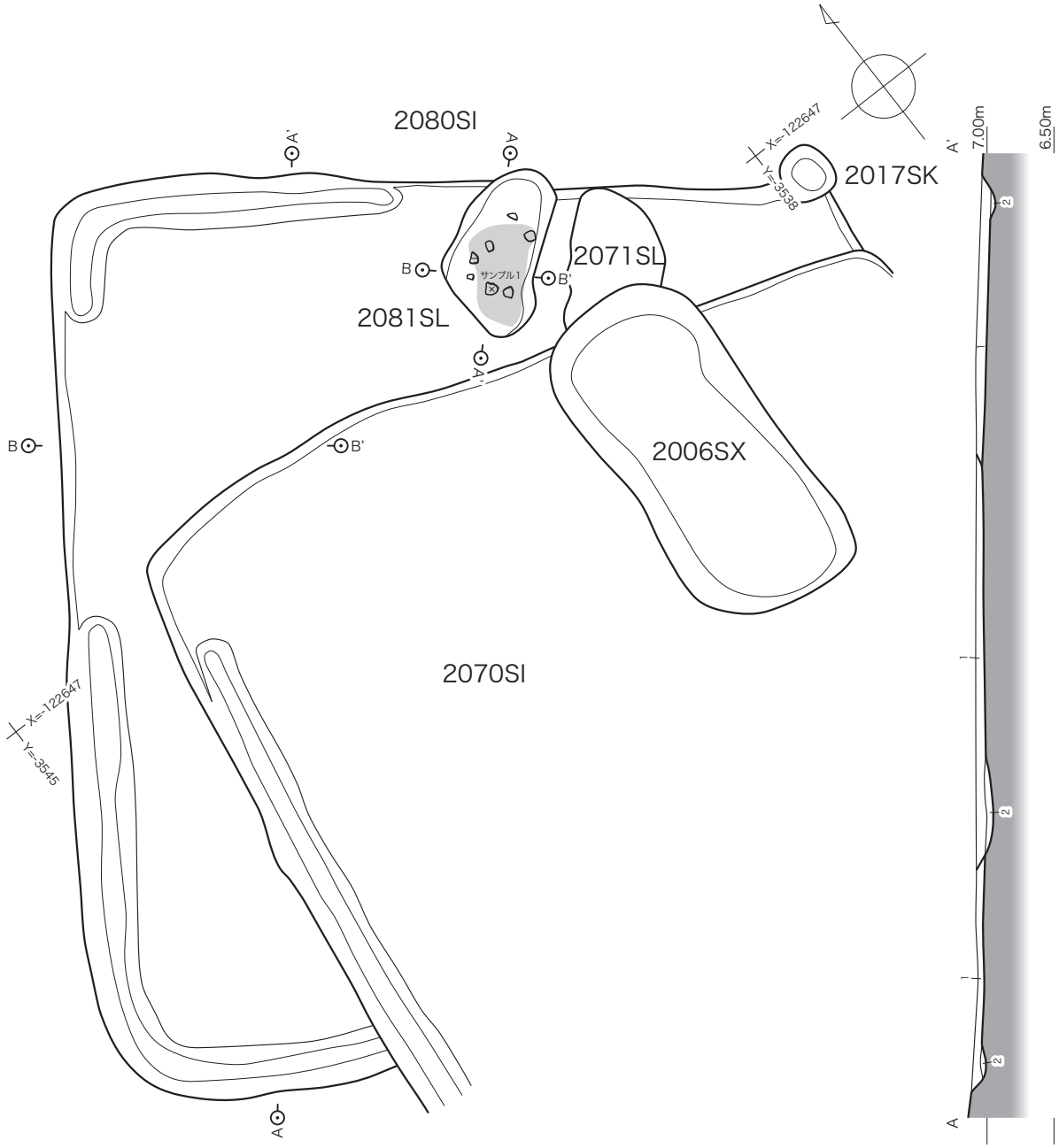


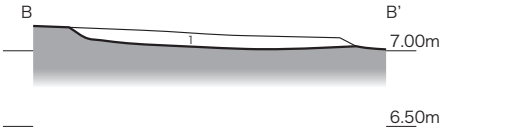




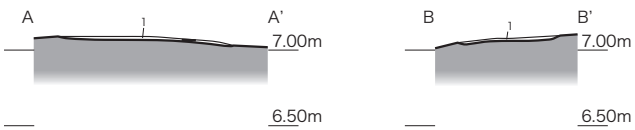
2070SI
1　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を微量含む。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を多量含む。
3　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。灰白色シルトを少量含む。
4　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を含む。
5　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。灰白色シルトを少量含む。
※2029・2030SK・2006SXより古い。
2071SL
1　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を微量含む。
2　炭化物層。灰黄色シルトを少量含む。
2078SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。浅黄色極細粒砂を少量含む。
2079SK
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。酸化鉄を含む。
2　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを微量含む。
3　灰白色(5Y7/2)シルト。灰色シルトを少量含む。

第28図　2070SI・2071SL 平面・断面図（1:50）





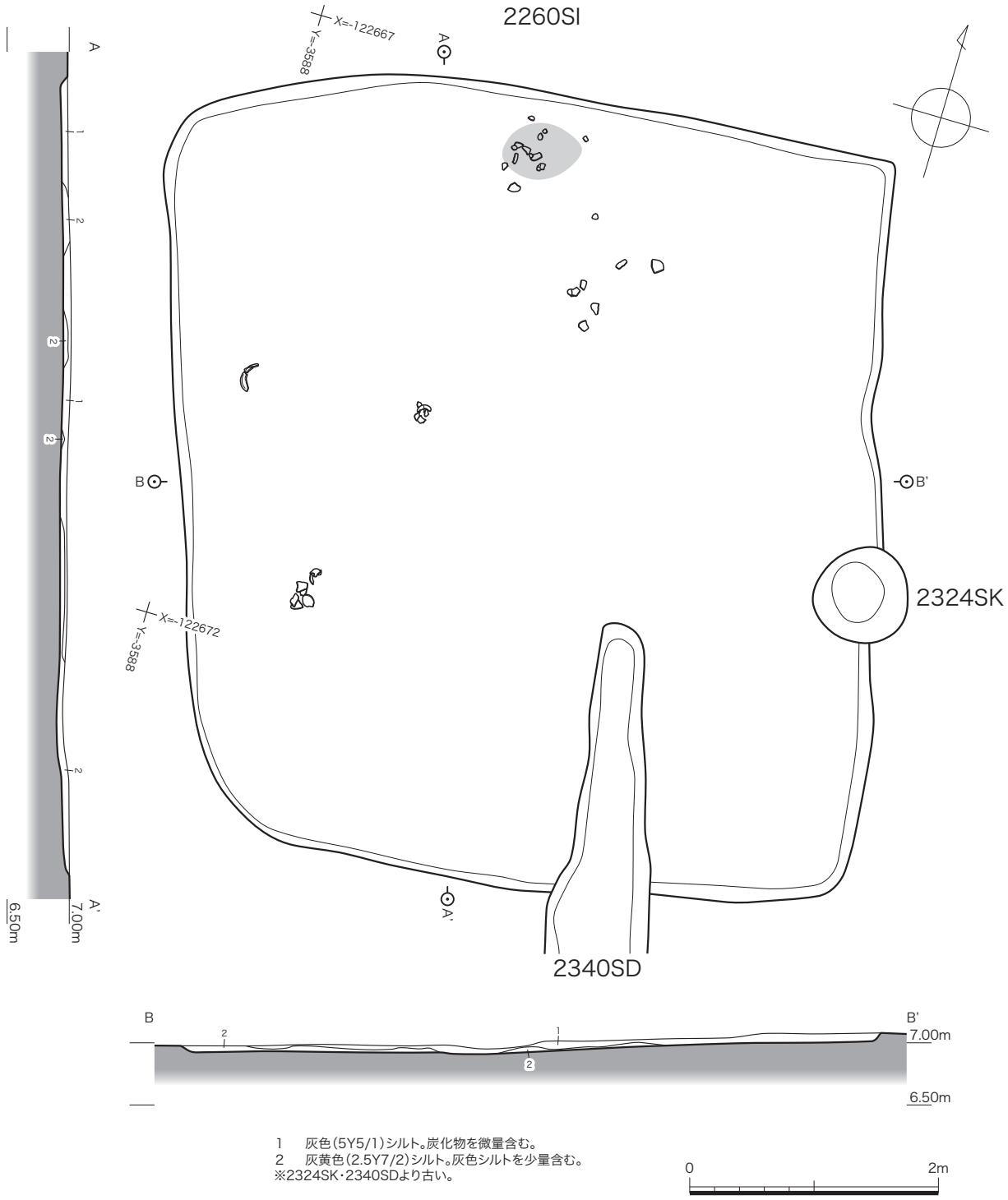
2081SL



2070SI
1　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を微量含む。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。炭化物を含む。(2070SI内の4層に相当)
2080SI
1　浅黄色(2.5Y7/3)シルト。灰白色シルトを含む。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。
※2070SI・2071SL・2006SX・2017SKより古い。
2081SL
1　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。焼土・炭化物を微量含む。

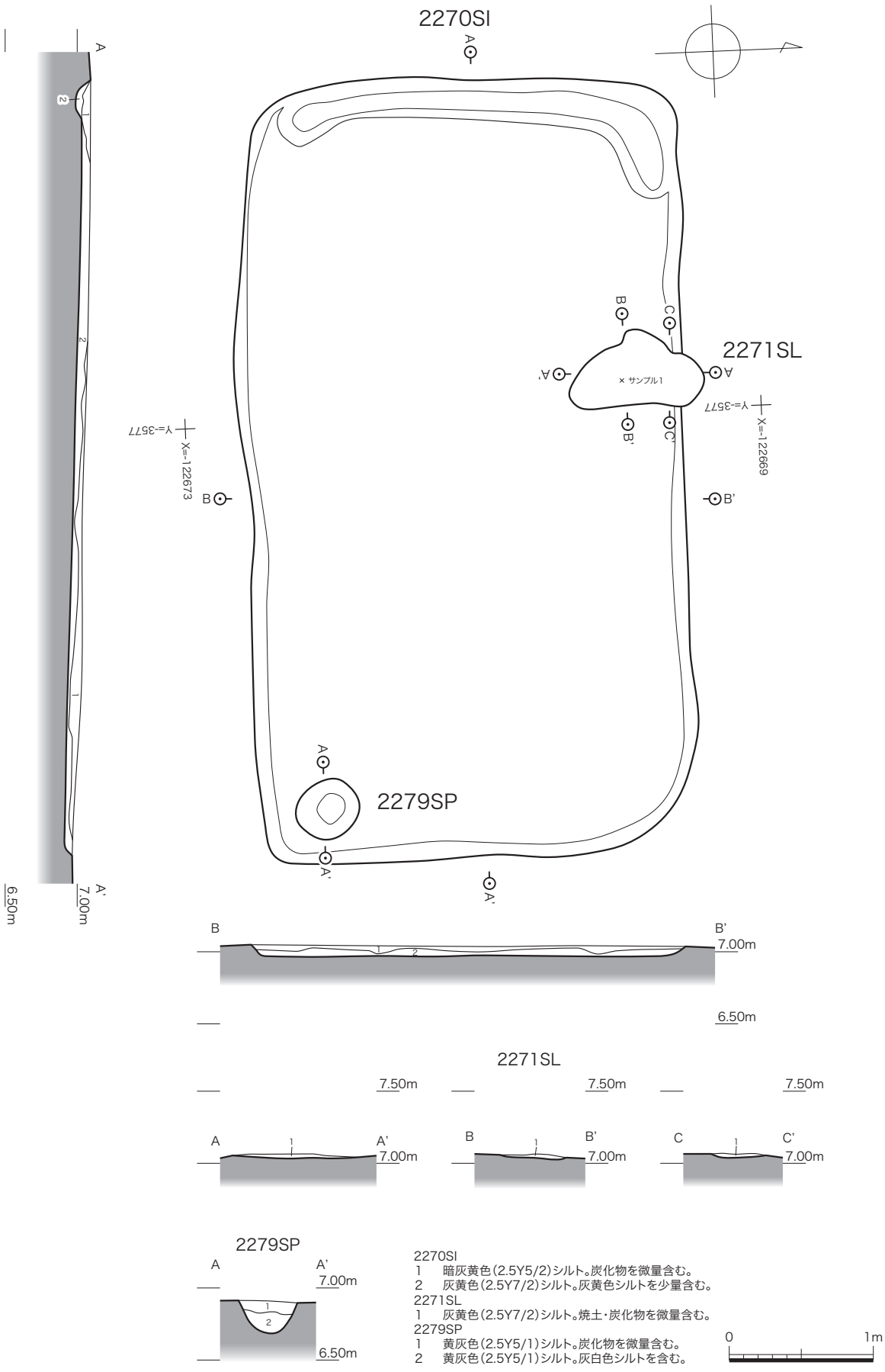


第29図　2080SI・2081SL 平面・断面図（1:50）

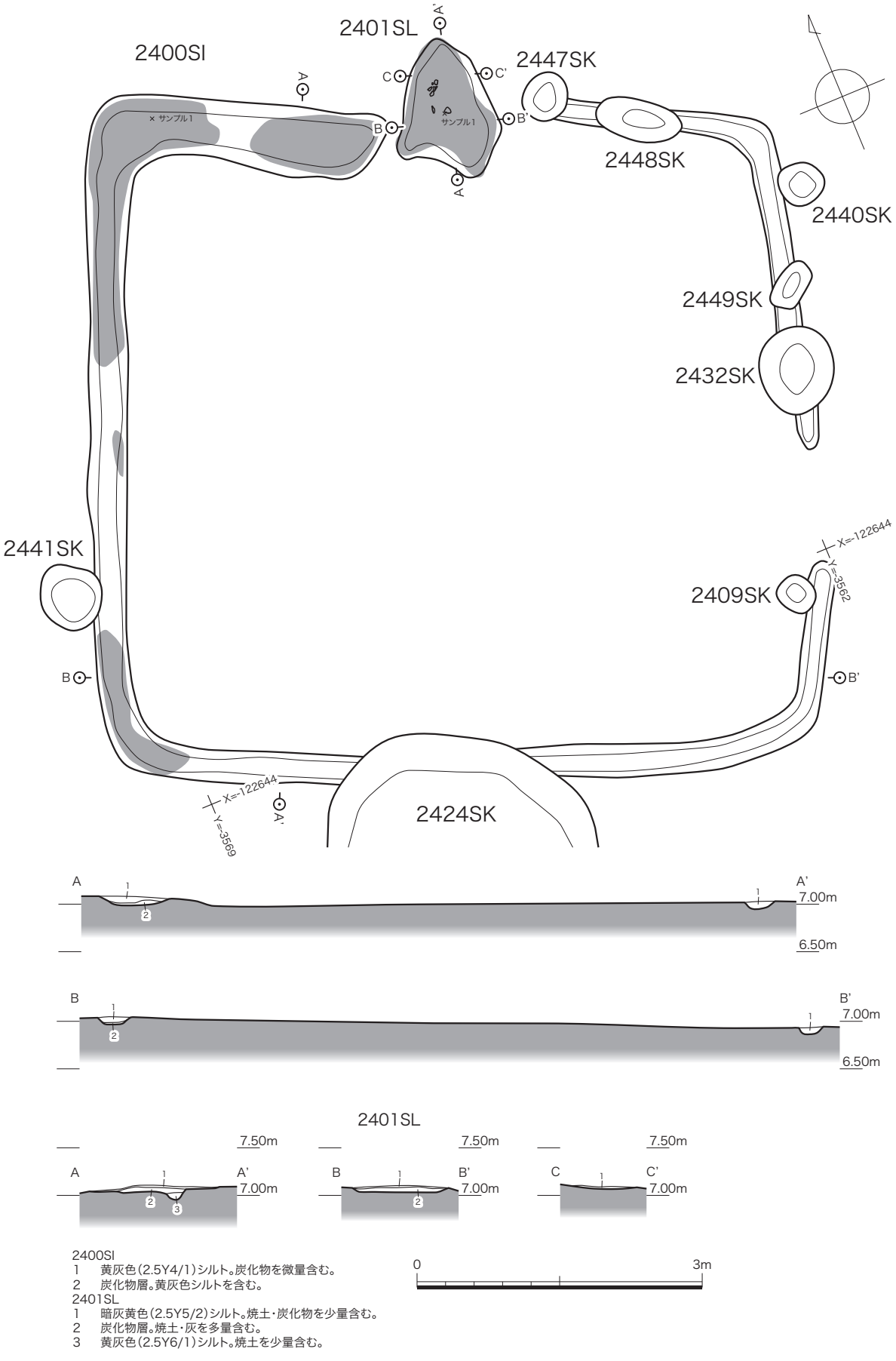


1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。灰色シルトを少量含む。
※2324SK・2340SDより古い。

第30図　2260SI 平面・断面図（1:50）

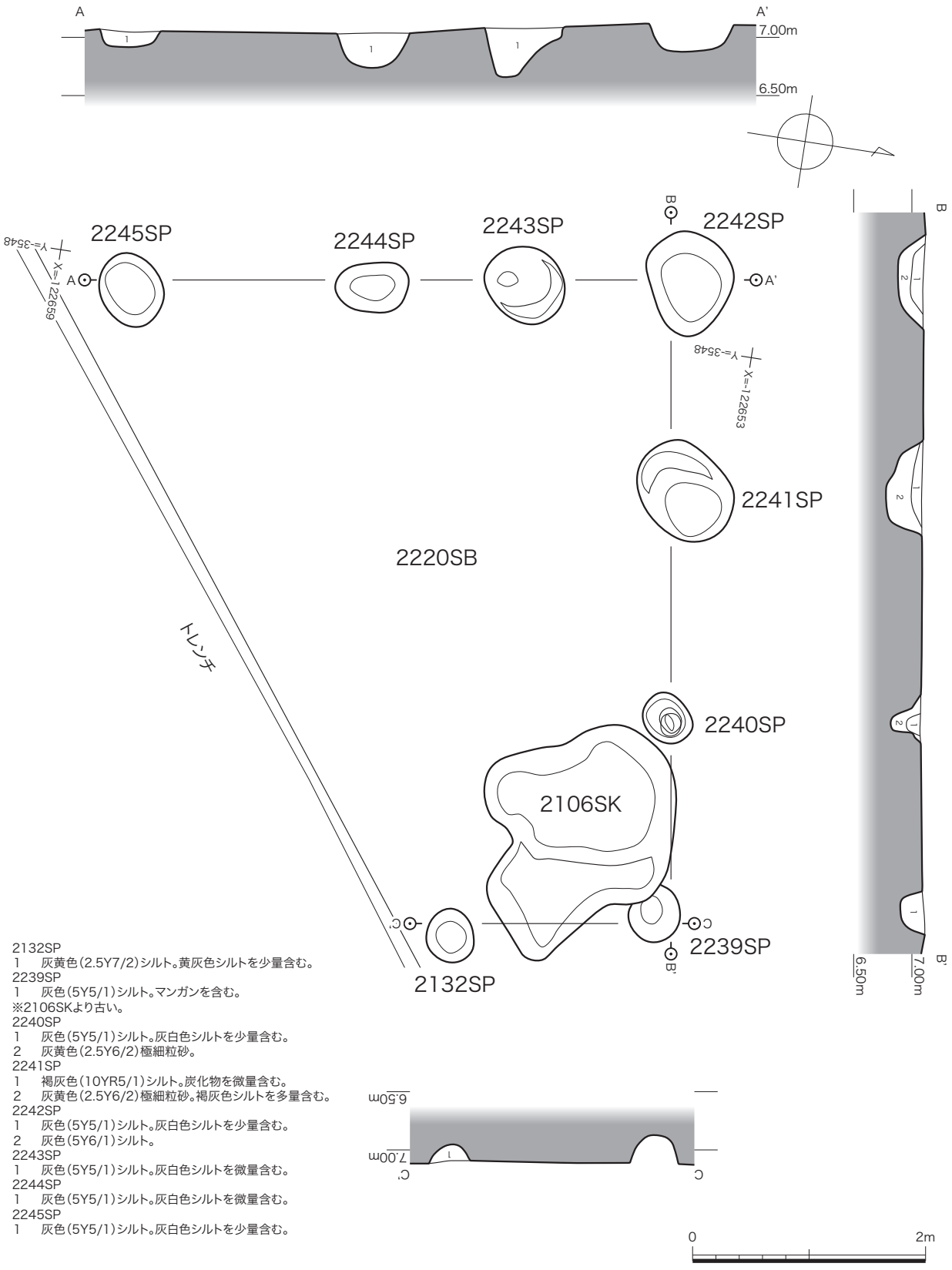


第31図　2270SI・2271SL 平面・断面図（1:40）



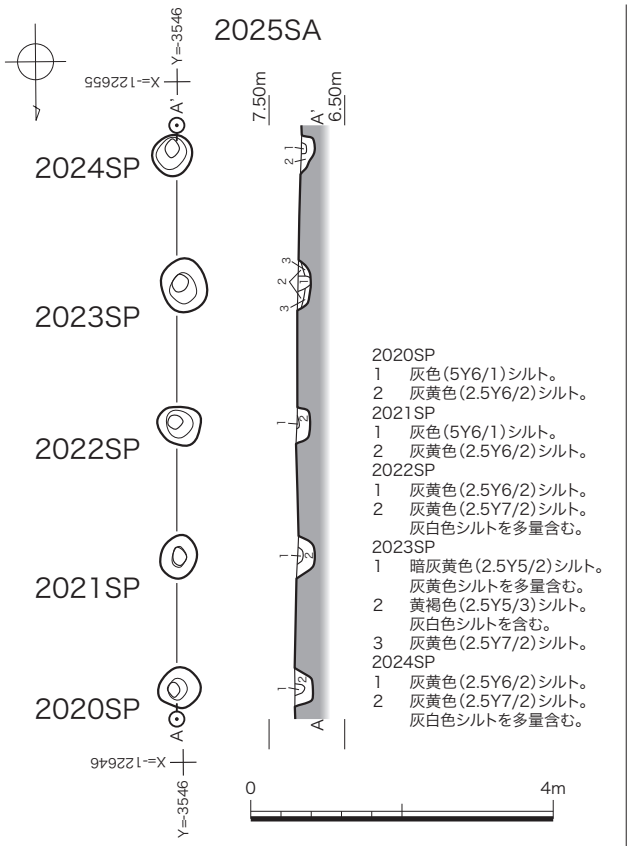
2400SI
1　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　炭化物層。黄灰色シルトを含む。
2401SL
1　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。焼土・炭化物を少量含む。
2　炭化物層。焼土・灰を多量含む。
3　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。焼土を少量含む。

第32図　2400SI・2401SL 平面・断面図（1:60）



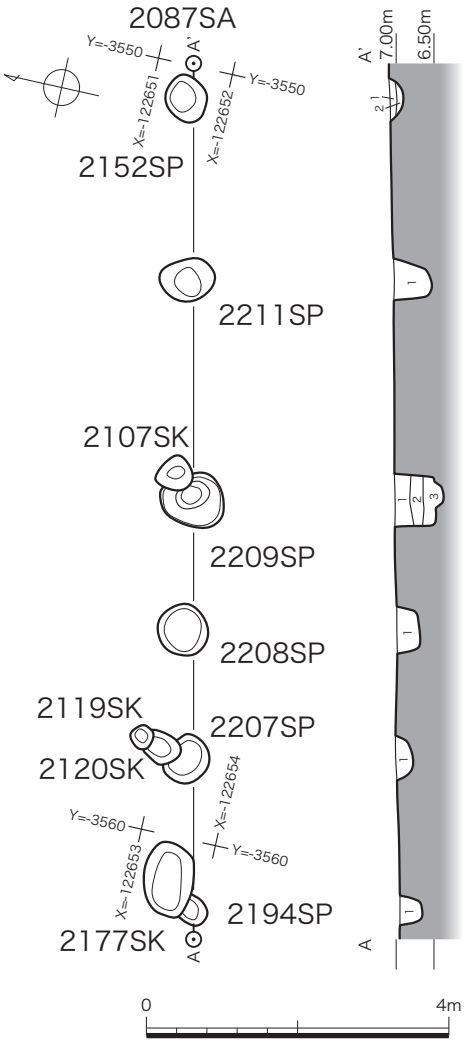
2132SP
1　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。黄灰色シルトを少量含む。
2239SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。マンガンを含む。
※2106SKより古い。
2240SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2　灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂。
2241SP
1　褐灰色(10YR5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂。褐灰色シルトを多量含む。
2242SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2　灰色(5Y6/1)シルト。
2243SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを微量含む。
2244SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを微量含む。
2245SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。

第33図　2220SB 平面・断面図（1:50）



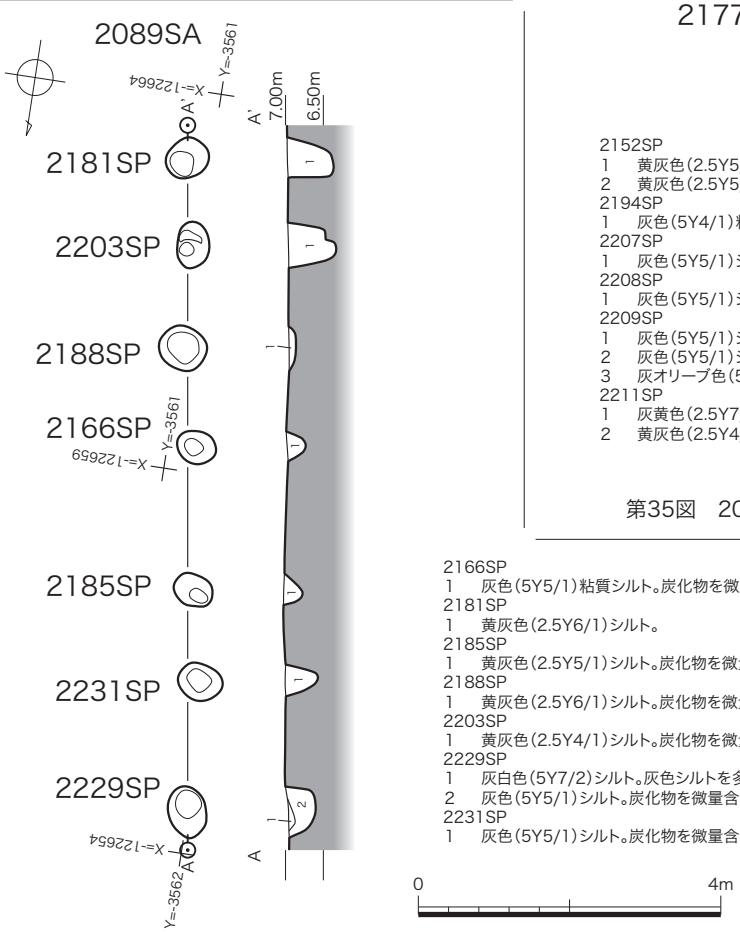
2020SP
1　灰色(5Y6/1)シルト。
2　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
2021SP
1　灰色(5Y6/1)シルト。
2　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
2022SP
1　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。
　灰白色シルトを多量含む。
2023SP
1　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。
　灰黄色シルトを多量含む。
2　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。
　灰白色シルトを含む。
3　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。
2024SP
1　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
2　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。
　灰白色シルトを多量含む。

第34図　2025SA平面・断面図(1:100)



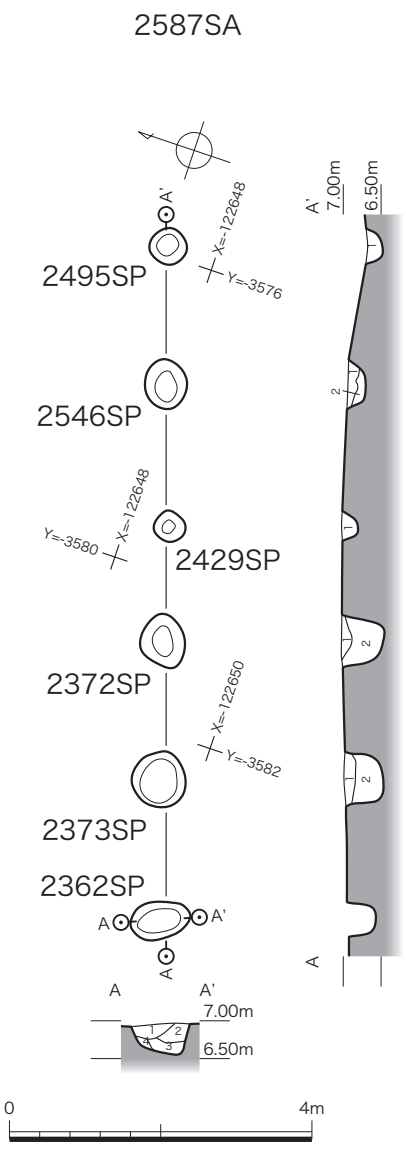
2152SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト。焼土・炭化物を微量含む。
2194SP
1　灰色(5Y4/1)粘質土。灰白色シルトを多量含む。
2207SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2208SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2209SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。灰白色シルトを含む。
2　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを微量含む。
3　灰オリーブ色(5Y6/2)極細粒砂。灰色シルトを少量含む。
2211SP
1　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。黄灰色シルトを少量含む。
2　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。

第35図　2087SA平面・断面図(1:100)



2166SP
1　灰色(5Y5/1)粘質シルト。炭化物を微量含む。
2181SP
1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。
2185SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2188SP
1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。炭化物を微量含む。灰白色シルトを含む。
2203SP
1　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。炭化物を微量含む。浅黄色シルトを少量含む。
2229SP
1　灰白色(5Y7/2)シルト。灰色シルトを多量含む。
2　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。灰白色シルトを少量含む。
2231SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。灰白色シルトを少量含む。

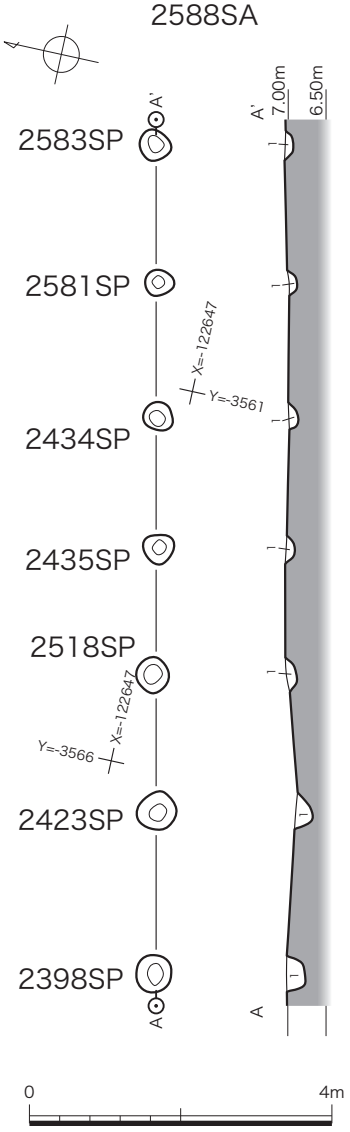
第36図　2089SA 平面・断面図（1:100）



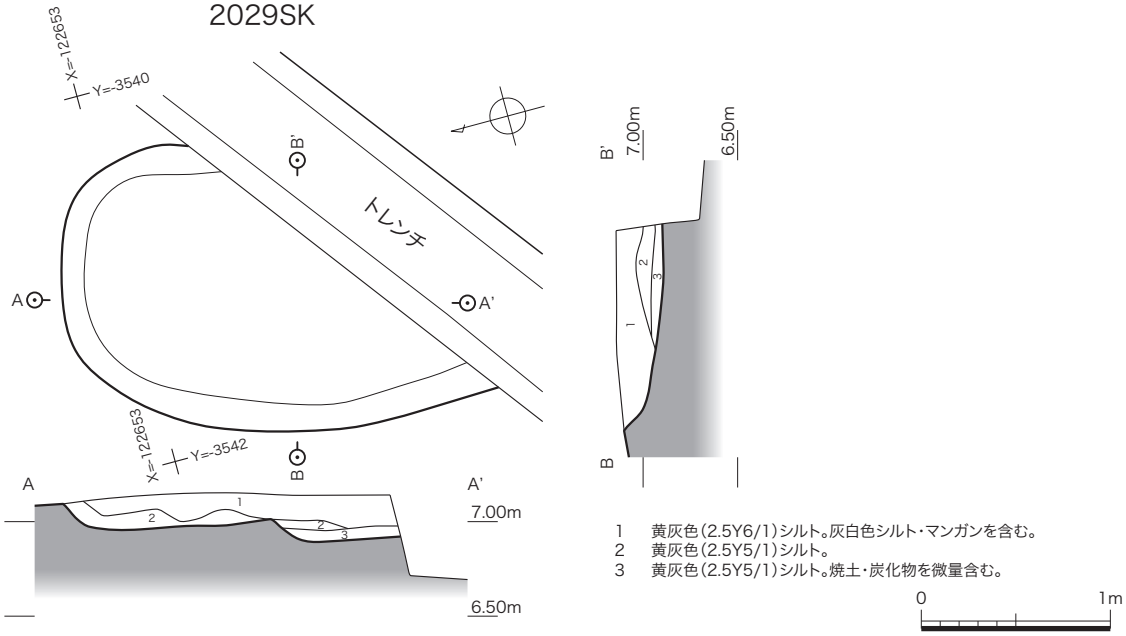
2398SP
1　灰色(5Y5/1)粘質シルト。灰白色シルトを少量含む。
2423SP
1　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2434SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2435SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2518SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2581SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2583SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。

2362SP
1　灰色(5Y5/1)粘質シルト。浅黄色極細粒砂を少量含む。
2　灰白色(5Y7/2)シルト。灰色粘質シルトを多量含む。
3　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
4　灰白色(5Y7/2)シルト。灰色シルトを少量含む。
2372SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。
2　灰色(5Y4/1)シルト。炭化物・灰白色シルトを微量含む。
2373SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。
2429SP
1　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを含む。
2495SP
1　灰色(5Y4/1)粘質シルト。灰白色シルト・木質を少量含む。
2546SP
1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　灰色(5Y4/1)粘質シルト。炭化物を微量含む。

第37図　2587SA 平面・断面図（1:100）

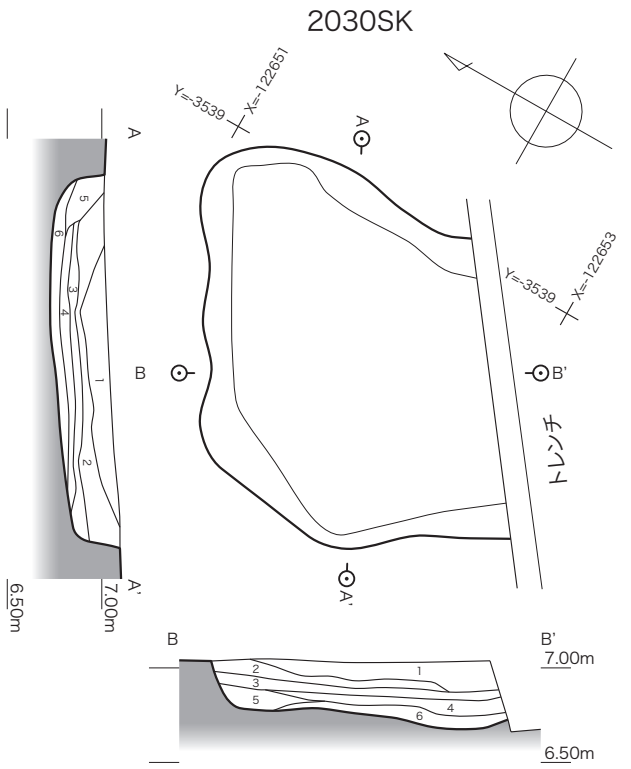


第38図　2588SA 平面・断面図（1:100）



1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。灰白色シルト・マンガンを含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。
3　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。焼土・炭化物を微量含む。

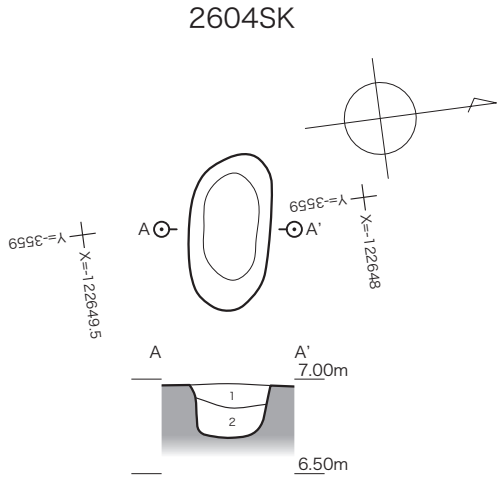
第39図　2029SK 平面・断面図（1:40）



1　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。灰黄色シルトを多量含む。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。灰白色シルトを多量含む。炭化物を微量含む。
3　黄褐色(10YR5/6)粘質土。炭化物を微量含む。黄灰色シルトを少量含む。
4　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。灰白色シルトを微量含む。
6　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。炭化物を微量含む。

0　1m

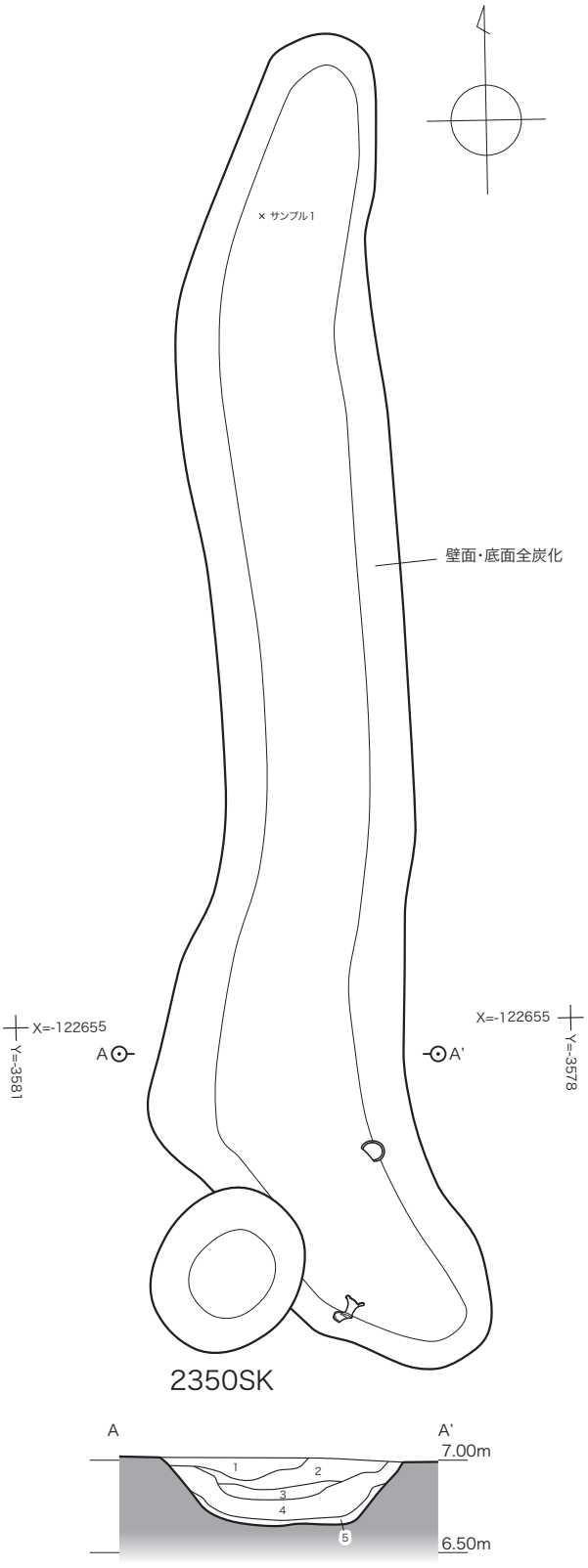
第40図　2030SK 平面・断面図（1:40）



1　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルト・黄灰色シルトを少量含む。

0　1m

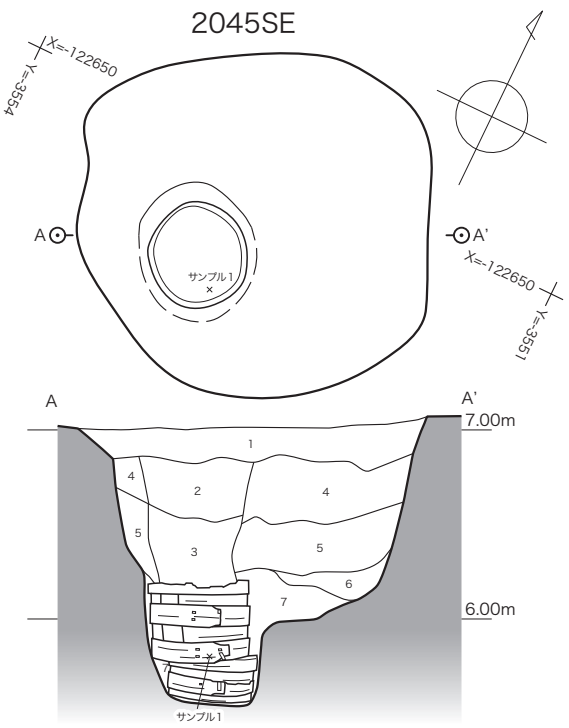
第41図　2604SK 平面・断面図（1:40）



1　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。炭化物を微量含む。明黄褐色粘質土を少量含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。炭化物を少量含む。明黄褐色粘質土を含む。
3　黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト。炭化物を微量含む。
4　黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト。炭化物を微量含む。
5　炭化物層。黒褐色粘質土を含む。
※2350SKより古い。

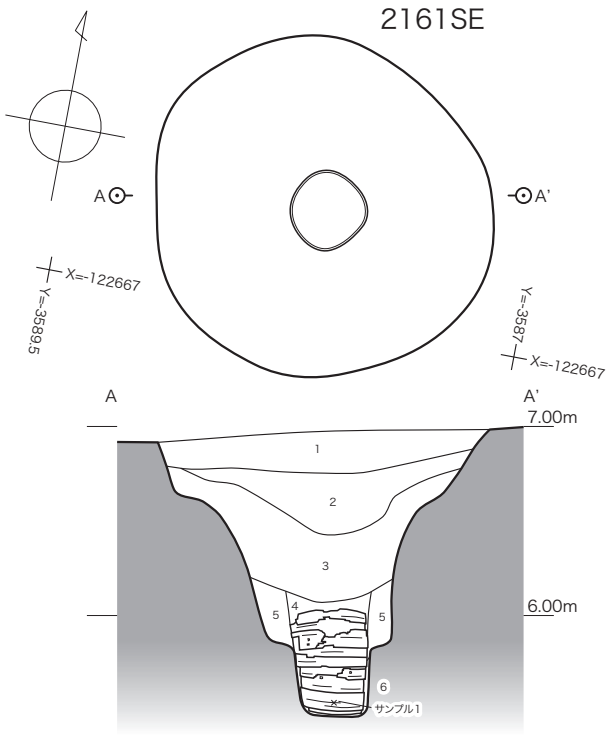
0　1m

第42図　2367SD 平面・断面図（1:40）



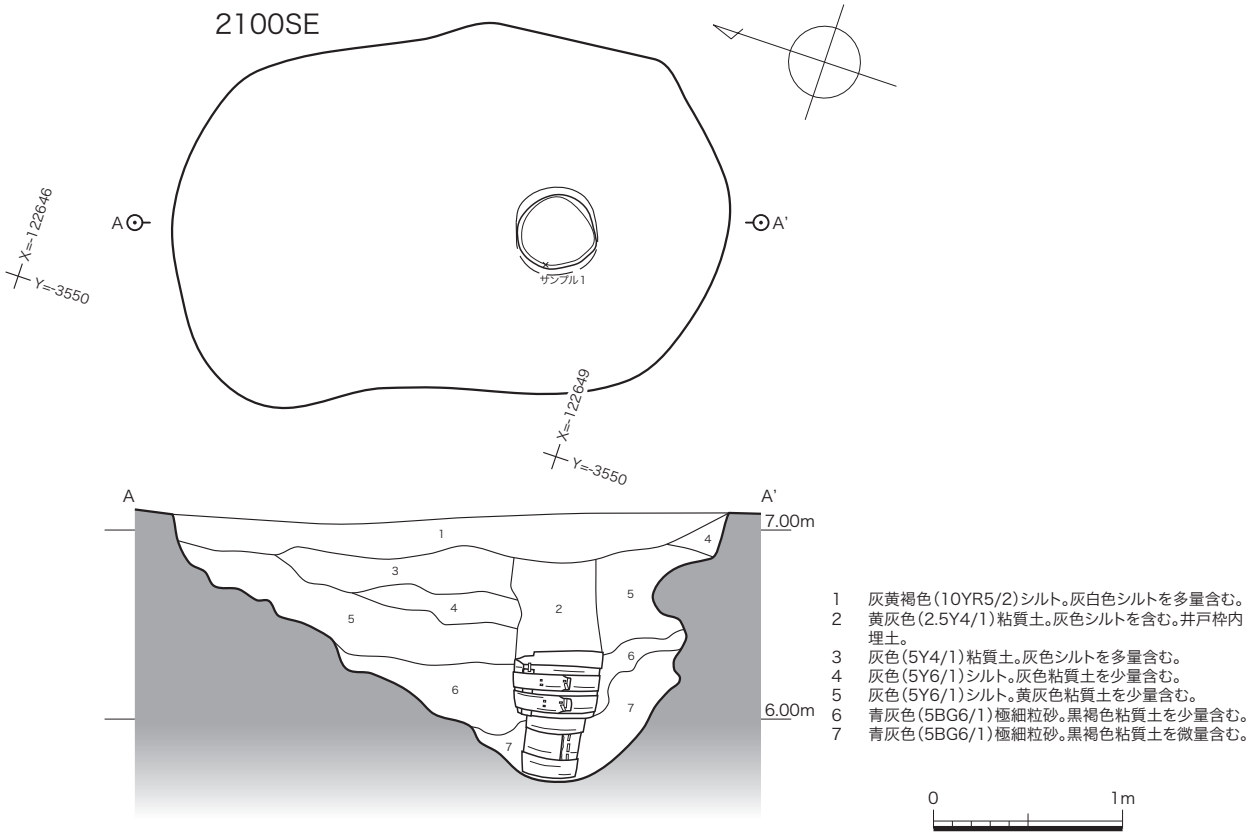
1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト。灰白色シルトを多量含む。
2　灰色(5Y4/1)粘質土。灰白色シルトを少量含む。井戸枠内埋土。
3　灰色(5Y4/1)粘質土。灰白色シルトを少量含む。2層に比べ締まり弱い。井戸枠内埋土。
4　灰色(5Y6/1)シルト。灰色粘質土を多量含む。
5　灰色(5Y6/1)シルト。灰色粘質土を少量含む。
6　灰黄色(2.5Y7/2)シルト。黄灰色シルトを微量含む。
7　青灰色(5BG6/1)極細粒砂。黒褐色シルトを微量含む。

第43図　2045SE 平面・断面図（1:40）



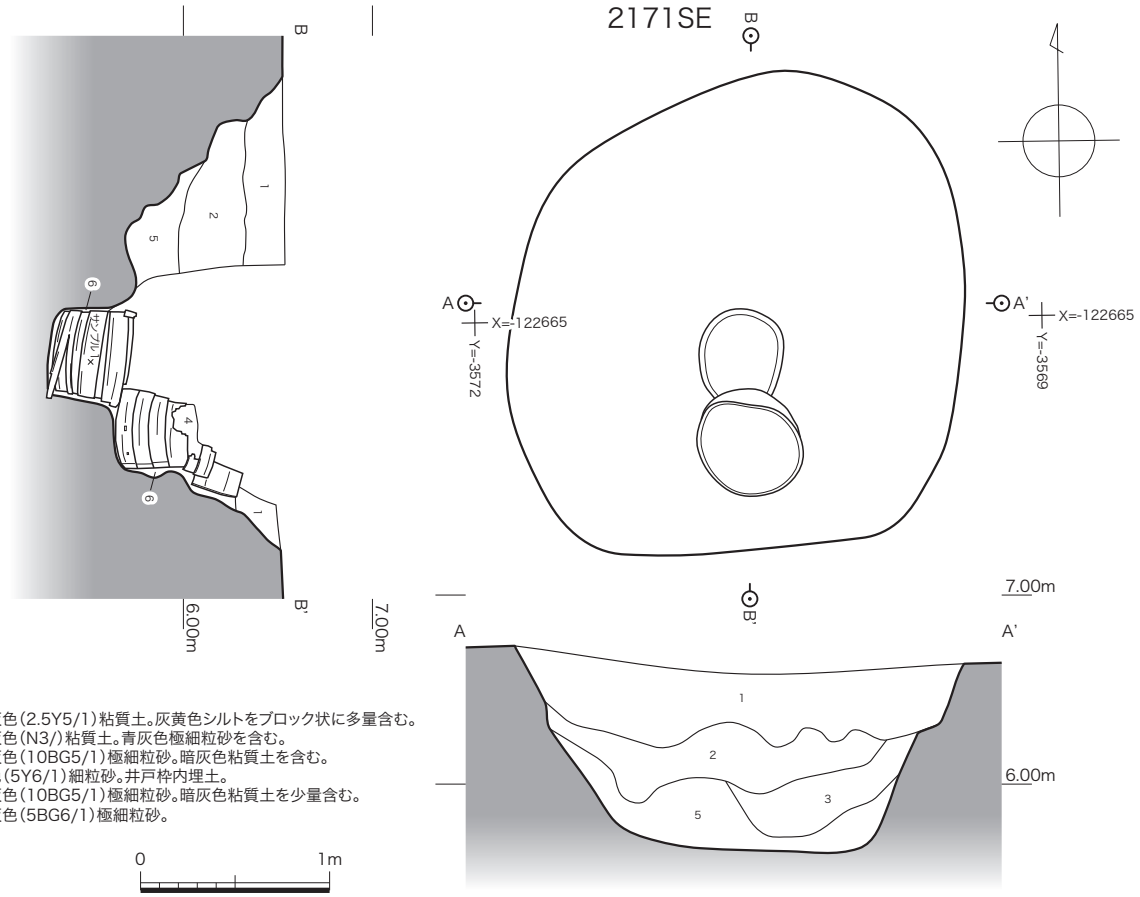
1　褐灰色(10YR5/1)粘質土。灰黄色シルトをブロック状に含む。
2　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰黄色シルトをブロック状に含む。
3　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰白色シルトを少量含む。
4　灰色(5Y6/1)細粒砂。井戸枠内埋土。
5　灰白色(2.5Y8/1)細粒砂。
6　灰色(5Y5/1)極細粒砂。

第44図　2161SE 平面・断面図（1:40）



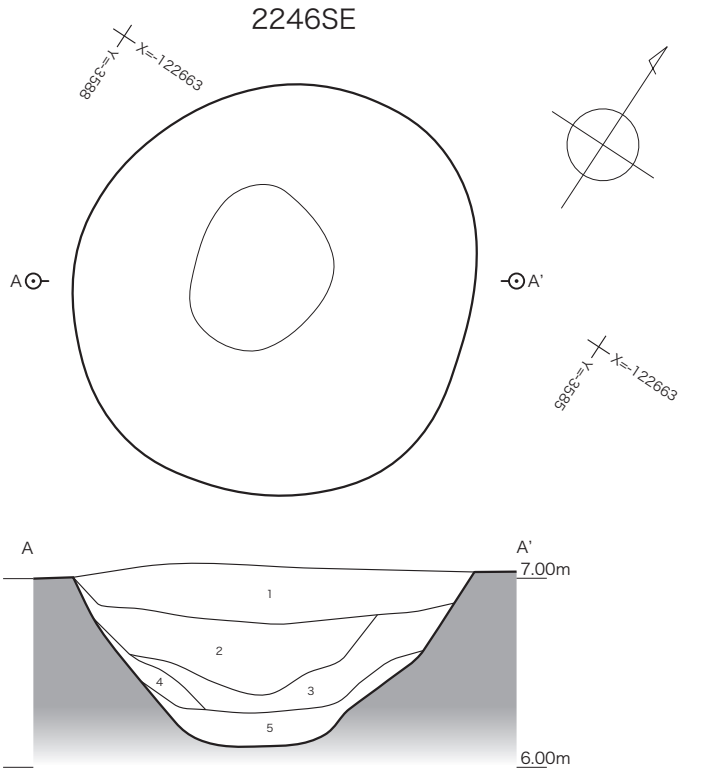
1　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。灰白色シルトを多量含む。
2　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰色シルトを含む。井戸枠内埋土。
3　灰色(5Y4/1)粘質土。灰色シルトを多量含む。
4　灰色(5Y6/1)シルト。灰色粘質土を少量含む。
5　灰色(5Y6/1)シルト。黄灰色粘質土を少量含む。
6　青灰色(5BG6/1)極細粒砂。黒褐色粘質土を少量含む。
7　青灰色(5BG6/1)極細粒砂。黒褐色粘質土を微量含む。

第45図　2100SE 平面・断面図（1:40）



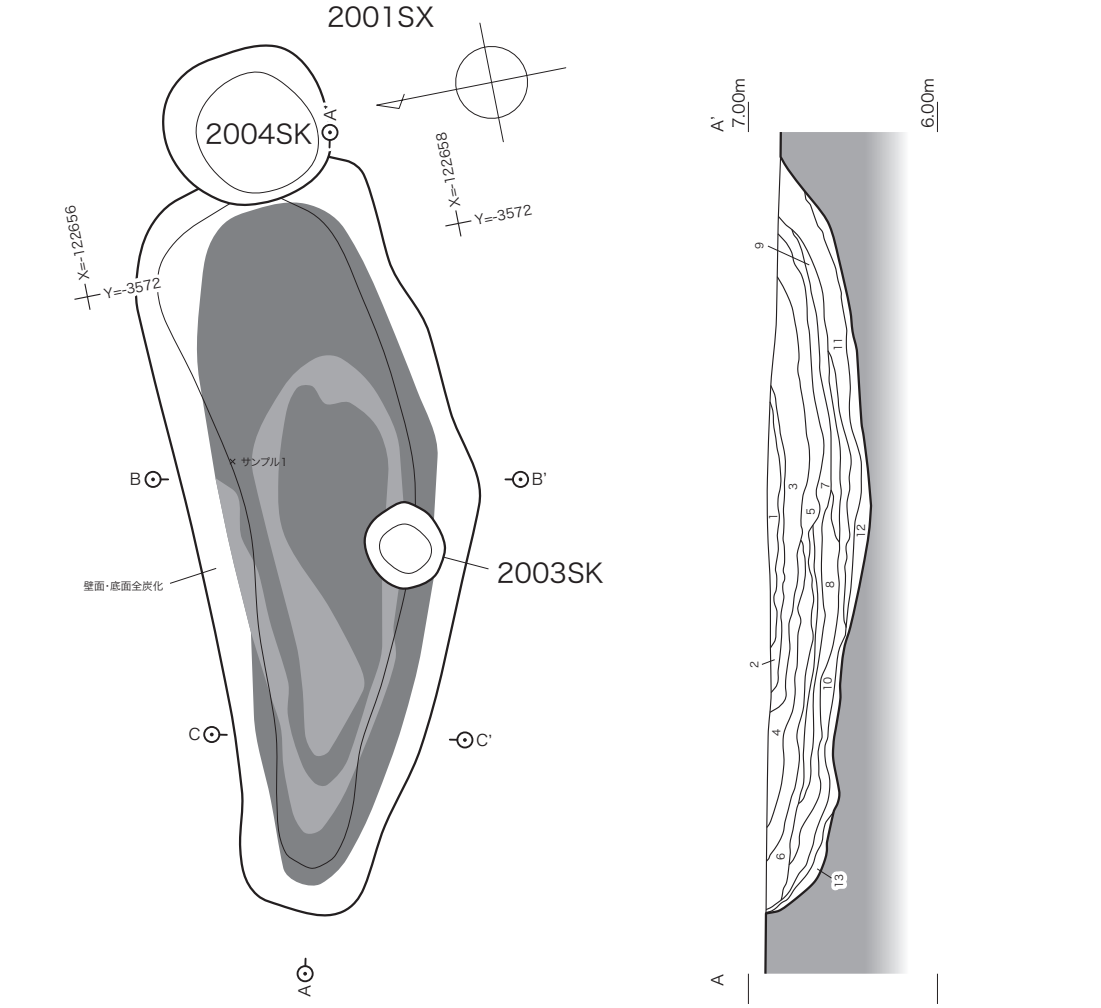
1　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。灰黄色シルトをブロック状に多量含む。
2　暗灰色(N3/)粘質土。青灰色極細粒砂を含む。
3　青灰色(10BG5/1)極細粒砂。暗灰色粘質土を含む。
4　灰色(5Y6/1)細粒砂。井戸枠内埋土。
5　青灰色(10BG5/1)極細粒砂。暗灰色粘質土を少量含む。
6　青灰色(5BG6/1)極細粒砂。

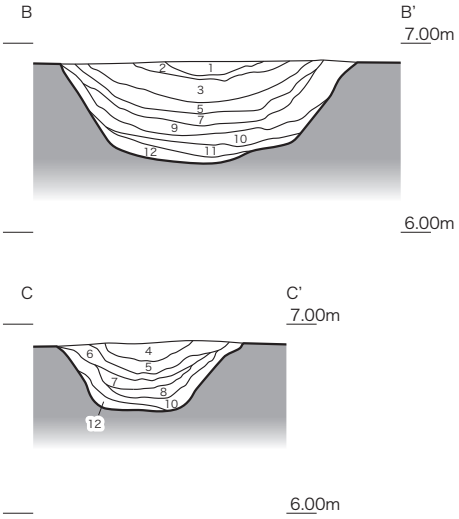
第46図　2171SE 平面・断面図（1:40）



1　褐灰色(10YR6/1)粘質土。暗褐色粘質土を多量含む。
2　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰黄色シルトをブロック状に含む。
3　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。黄灰色粘質土を少量含む。
4　灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂。
5　灰色(5Y6/1)シルト。

第47図　2246SE 平面・断面図（1:40）

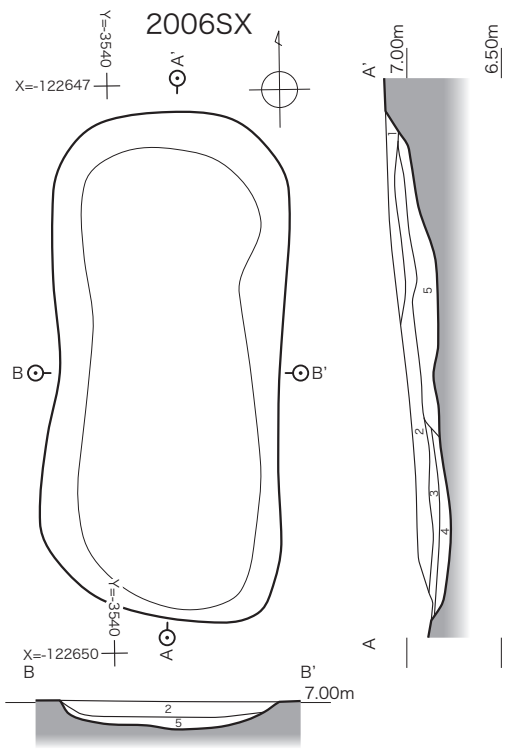




1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。灰白色シルトを互層状に含む。
2　炭化物層。黄灰色シルトを含む。
3　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。焼土・炭化物を微量含む。灰白色シルトを含む。
4　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。炭化物を含む。
5　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。炭化物・灰白色シルトを少量含む。
6　黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂。明黄褐色シルトを多量含む。
7　黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細粒砂。炭化物を微量含む。
8　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。灰黄色シルトを互層状に含む。炭化物・灰を微量含む。
9　黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト。
10　黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト。最上部(9層との層界)に木片層あり。
11　灰色(5Y4/1)粘質土。最上部(10層との層界)に木片層あり。
12　炭化物層。黒褐色シルトを含む。
13　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。
※2003・2004SKより古い。

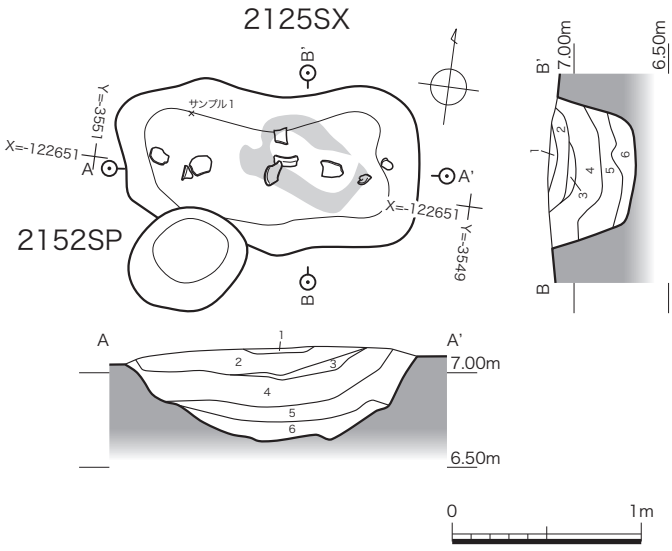
0　1m

第48図　2001SX 平面・断面図（1:40）



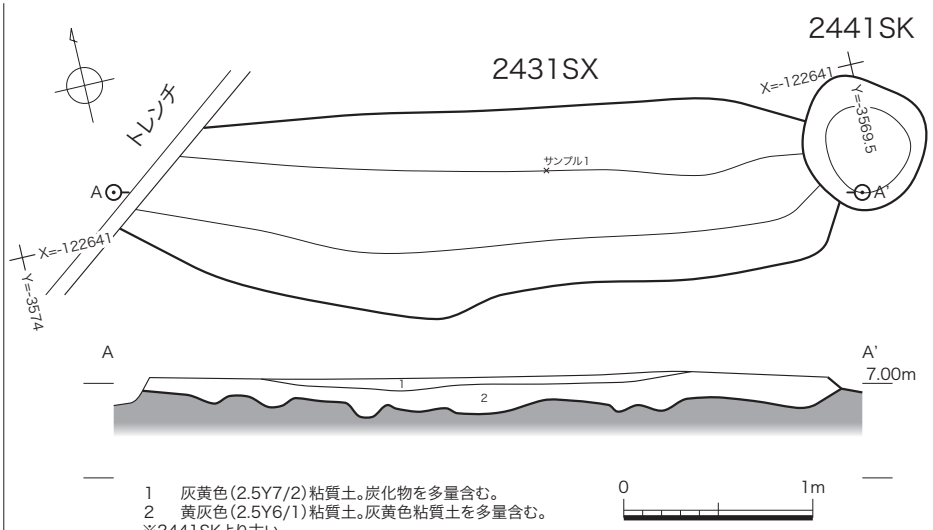
1　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。
　　炭化物を微量含む。
　　灰白色シルトを含む。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。
　　マンガン・灰白色シルトを多量
　　含む。炭化物を少量含む。
3　明黄褐色(10YR6/6)粘質土。
　　炭化物を少量含む。暗灰黄色粘
　　質土を含む。
4　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土。炭
　　化物・灰を少量含む。
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。焼
　　土・炭化物・灰を少量含む。

第49図　2006SX 平面・
断面図（1:40）



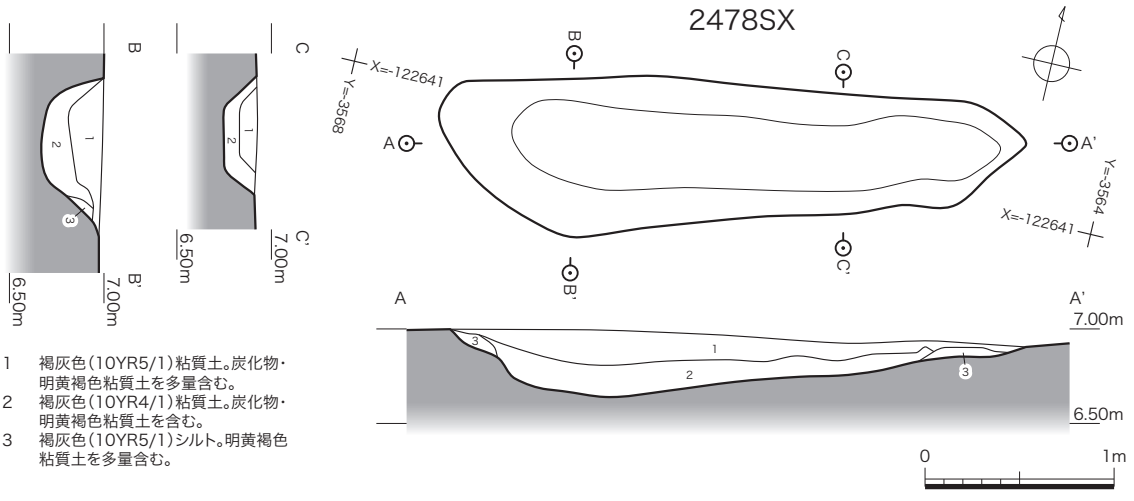
1　橙色(5YR6/6)焼土層。
2　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。焼土・炭化物を少量含む。灰白色シルトを含む。
3　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。焼土を多量含む。炭化物を少量含む。
4　褐灰色(10YR5/1)粘質土。焼土・炭化物を少量含む。灰白色シルトを含む。
5　褐灰色(10YR5/1)粘質土。焼土・炭化物を少量含む。
6　灰色(5Y5/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。
※2152SPより古い。

第50図　2125SX 平面・断面図（1:40）



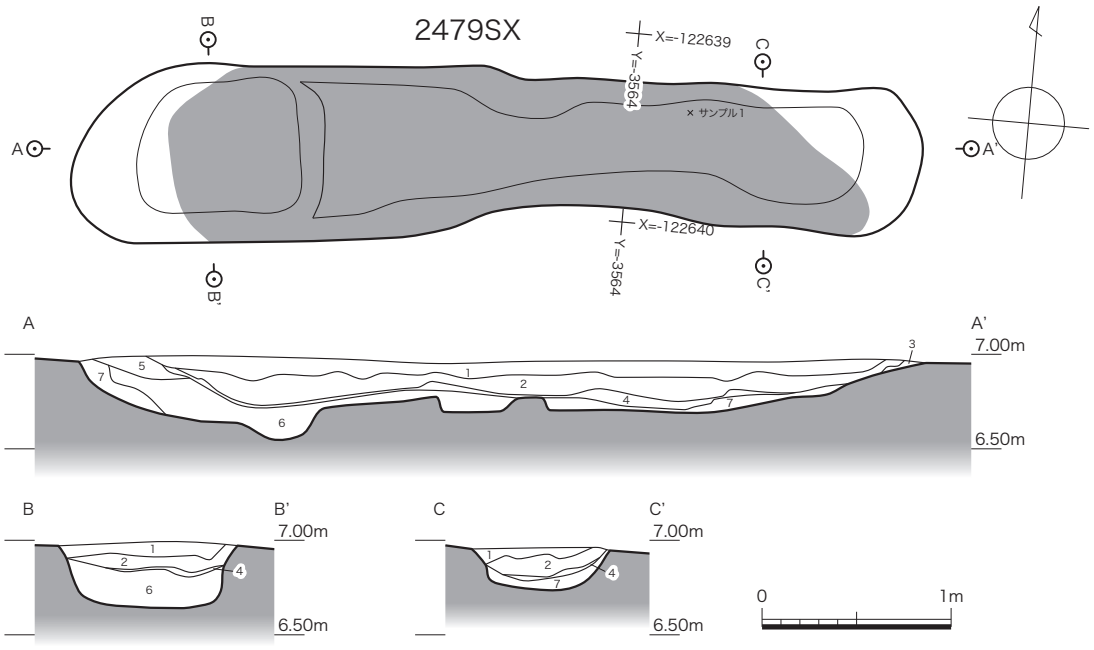
1　灰黄色(2.5Y7/2)粘質土。炭化物を多量含む。
2　黄灰色(2.5Y6/1)粘質土。灰黄色粘質土を多量含む。
※2441SKより古い。

第51図　2431SX 平面・断面図（1:40）



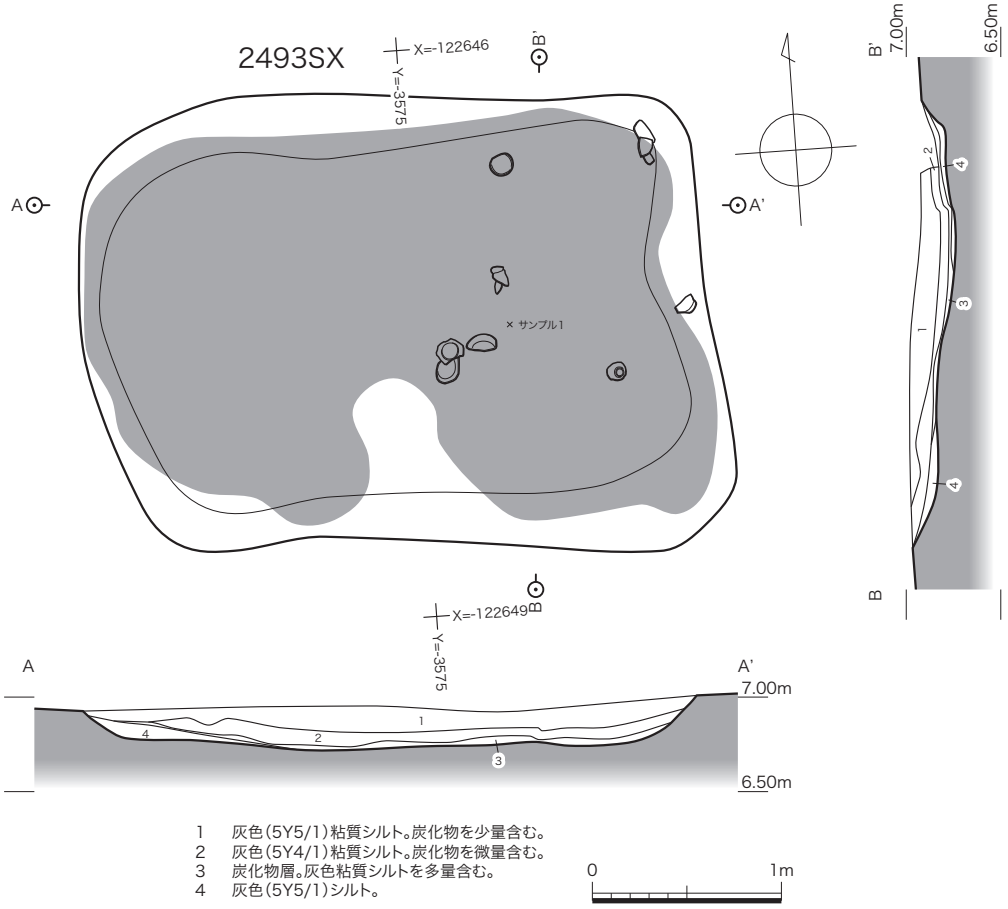
1　褐灰色(10YR5/1)粘質土。炭化物・
　　明黄褐色粘質土を多量含む。
2　褐灰色(10YR4/1)粘質土。炭化物・
　　明黄褐色粘質土を含む。
3　褐灰色(10YR5/1)シルト。明黄褐色
　　粘質土を多量含む。

第52図　2478SX 平面・断面図（1:40）



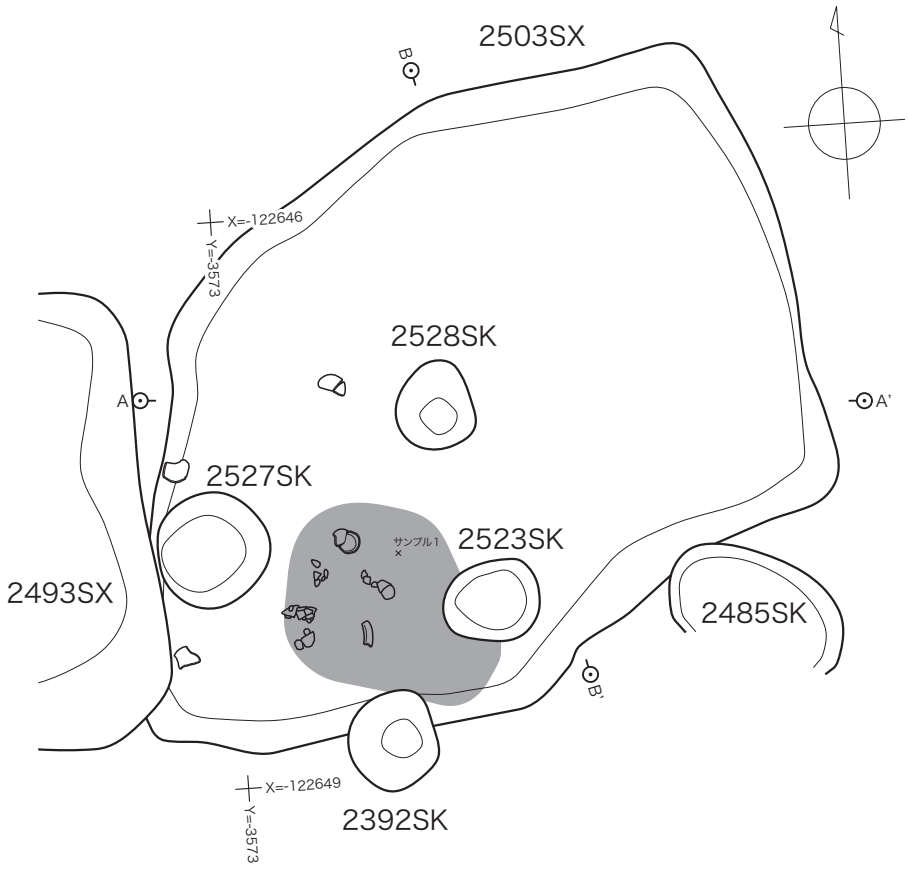
1　褐灰色(10YR5/1)シルト。炭化物を微量含む。
2　褐灰色(10YR4/1)シルト。炭化物を少量含む。
3　灰色(5Y5/1)シルト。明黄褐色極細粒砂を多量含む。
4　炭化物層。
5　灰色(5Y5/1)粘質土。炭化物を含む。
6　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。炭化物・灰白色シルトを微量含む。
7　灰黄色(2.5Y7/2)極細粒砂。炭化物を微量含む。

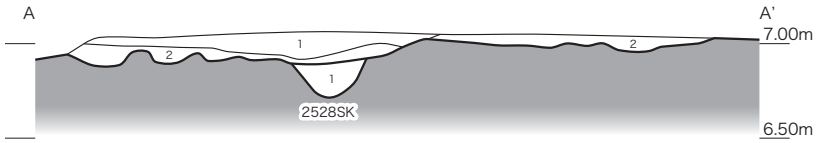
第53図　2479SX 平面・断面図（1:40）

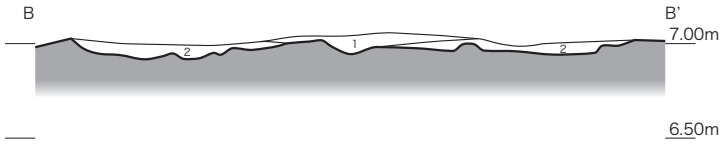


1　灰色(5Y5/1)粘質シルト。炭化物を少量含む。
2　灰色(5Y4/1)粘質シルト。炭化物を微量含む。
3　炭化物層。灰色粘質シルトを多量含む。
4　灰色(5Y5/1)シルト。

第54図　2493SX 平面・断面図（1:40）



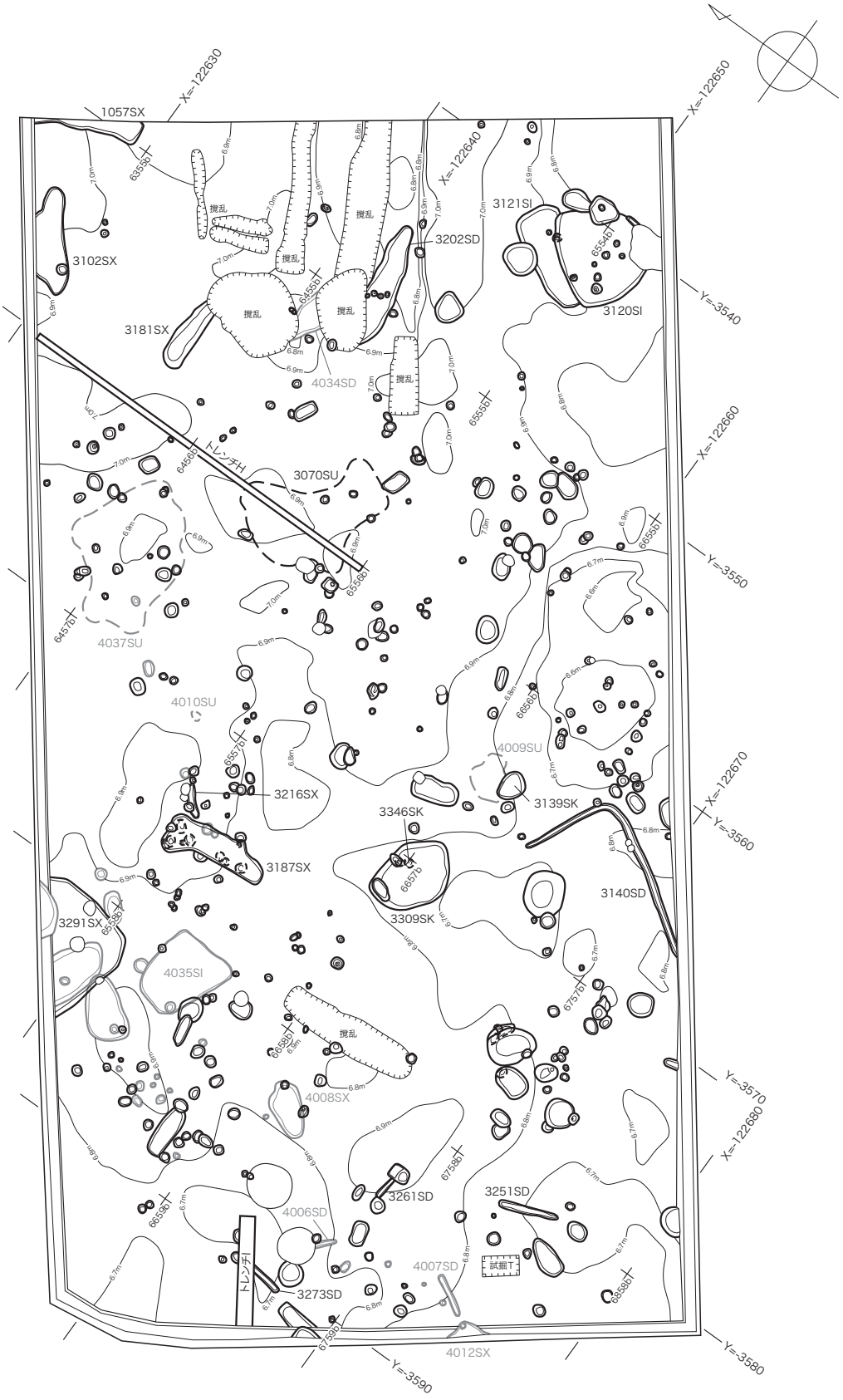




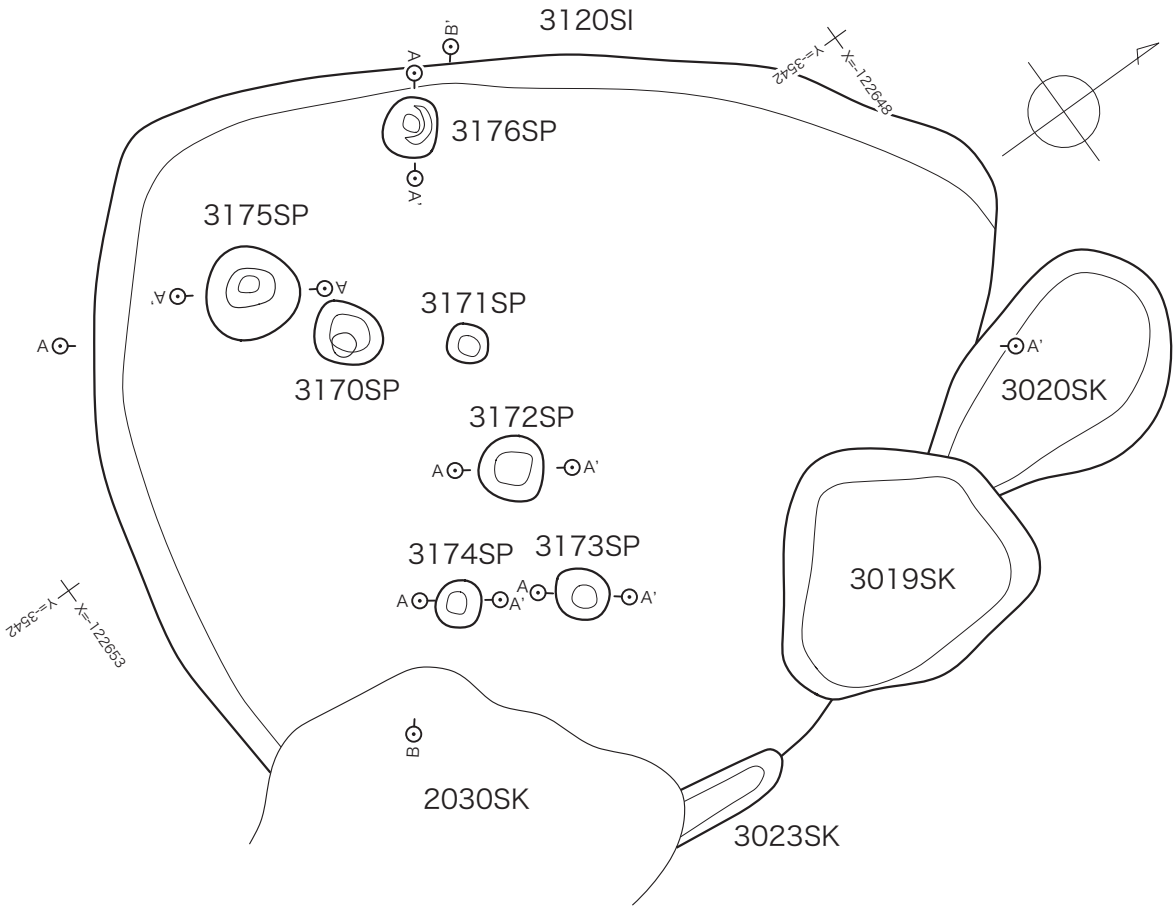


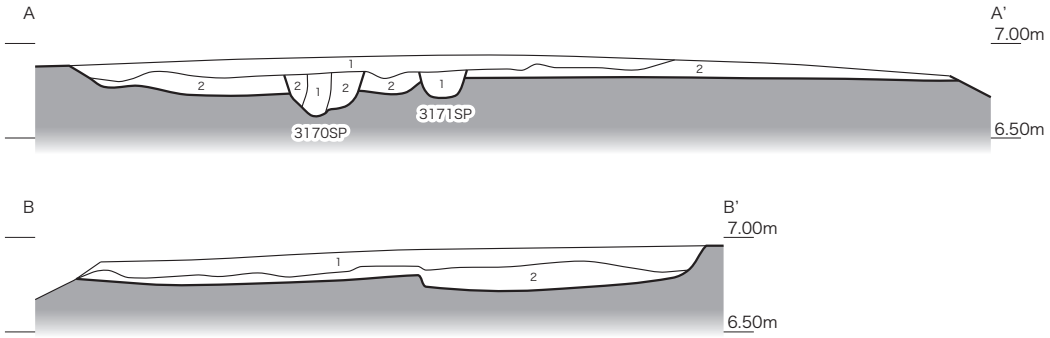
2503SX
1　灰黄色(2.5Y7/2)粘質土。炭化物を少量含む。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土。炭化物を微量含む。
2528SK
1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。灰白色シルトを少量含む。
※2392・2485SK・2493SXより古く、2523・2527・2528SKより新しい。

第55図　2503SX 平面・断面図（1:40）

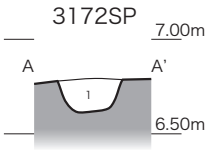


第56図　B 区第 2 面全体図（1:300）

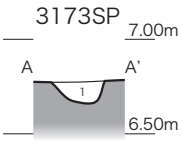




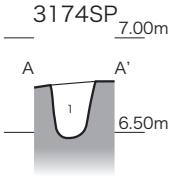
3120SI
1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物を微量含む。灰白色シルトを多量含む。
2　灰色(5Y6/1)シルト。黄灰色シルトを少量含む。
3170SP
1　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。
2　灰白色(5Y7/2)極細粒砂。灰色シルトを少量含む。
3171SP
1　灰色(5Y4/1)シルト。炭化物・灰白色シルトを微量含む。
※3019・3020・3023SKより古い。



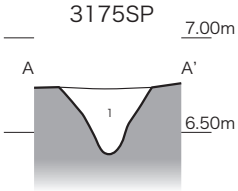
1　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを含む。



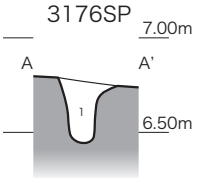
1　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを多量含む。



1　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。



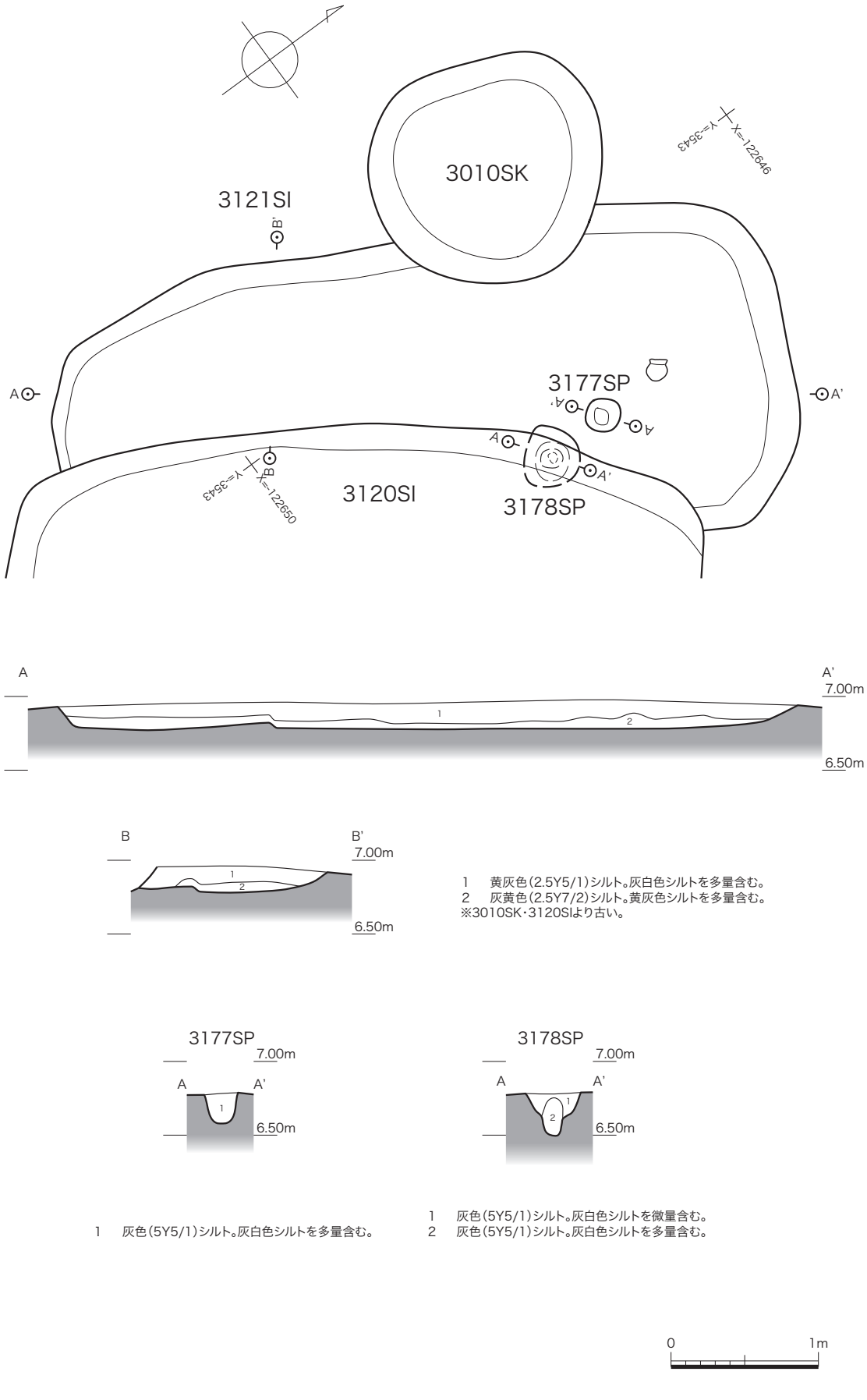
1　灰色(5Y5/1)シルト。黒褐色シルトを少量含む。
灰白色極細粒砂を多量含む。



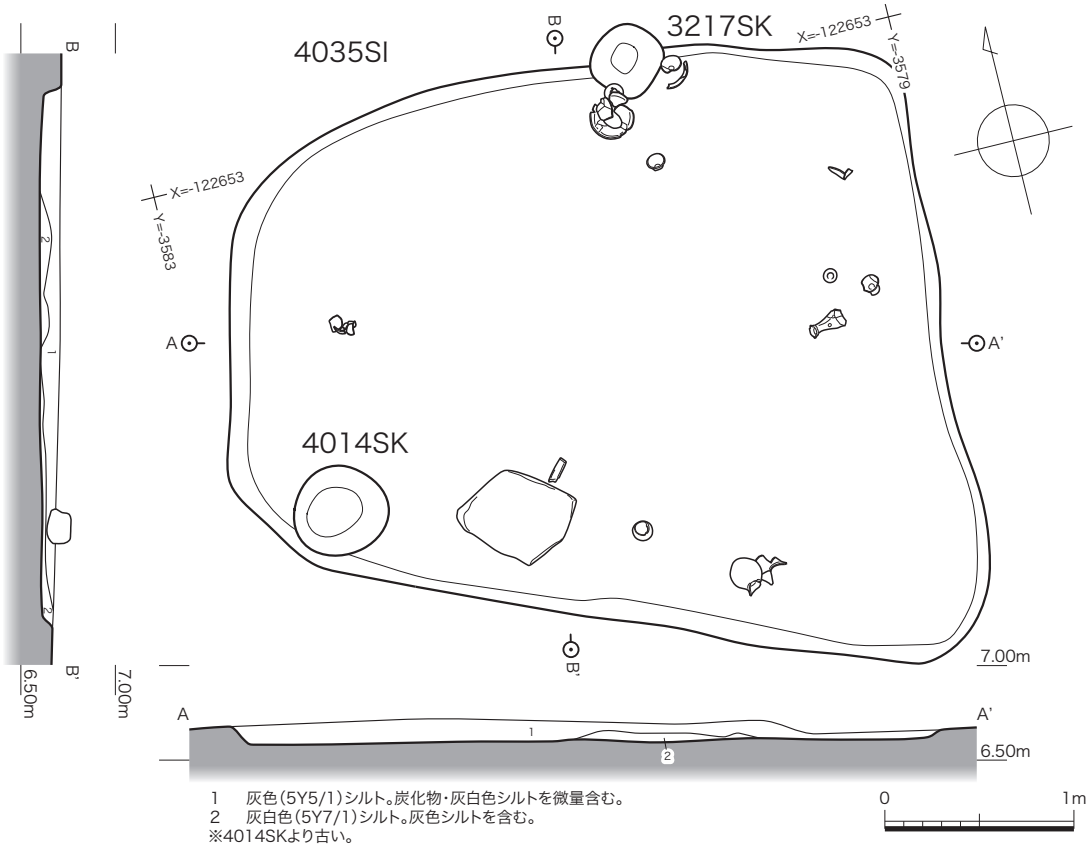
1　灰色(5Y4/1)シルト。灰白色シルトを少量含む。



第57図　3120SI 平面・断面図（1:40）

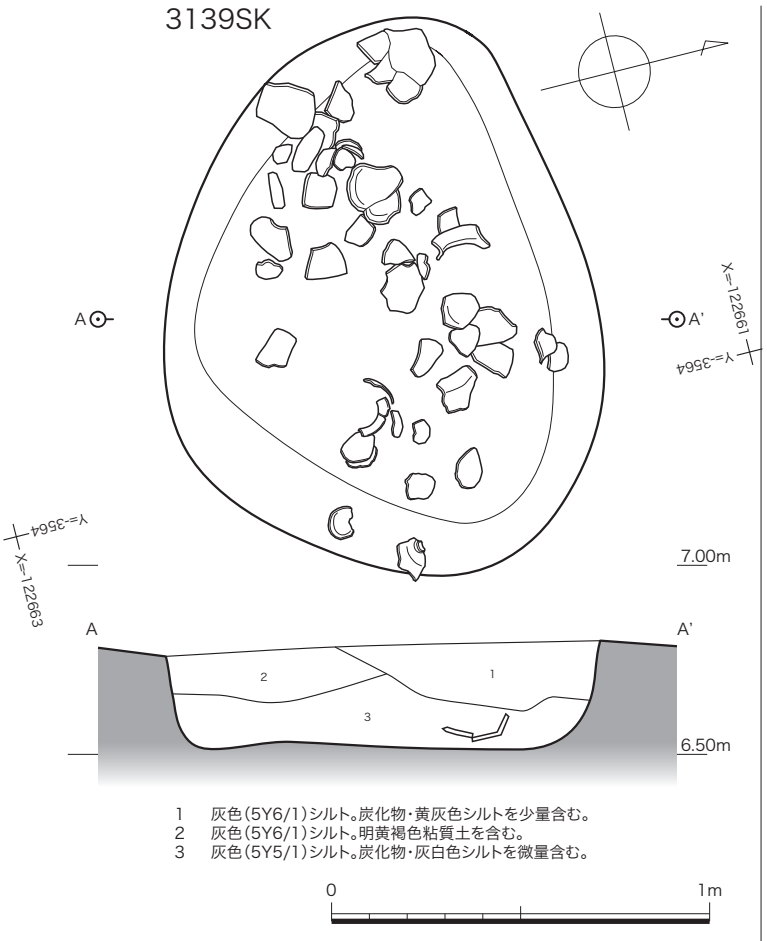


第58図　3121SI 平面・断面図（1:40）



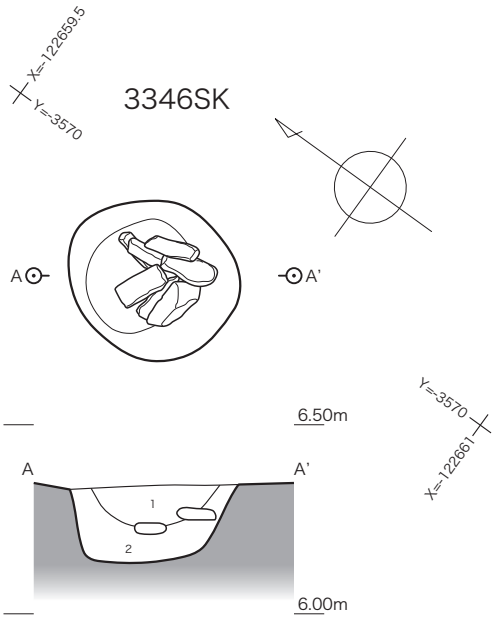
1　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物・灰白色シルトを微量含む。
2　灰白色(5Y7/1)シルト。灰色シルトを含む。
※4014SKより古い。

第59図　4035SI 平面・断面図（1:40）



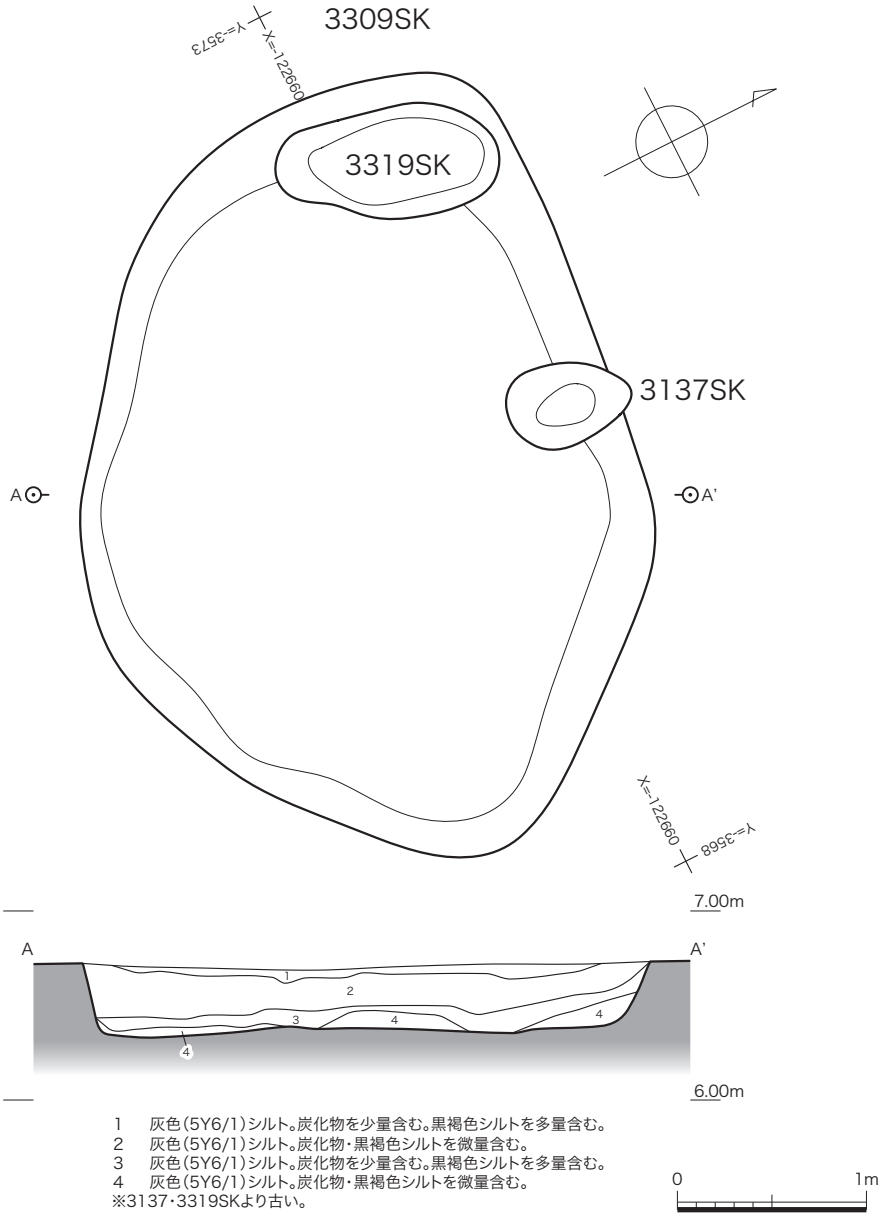
1　灰色(5Y6/1)シルト。炭化物・黄灰色シルトを少量含む。
2　灰色(5Y6/1)シルト。明黄褐色粘質土を含む。
3　灰色(5Y5/1)シルト。炭化物・灰白色シルトを微量含む。

第60図　3139SK 平面・断面図（1:20）

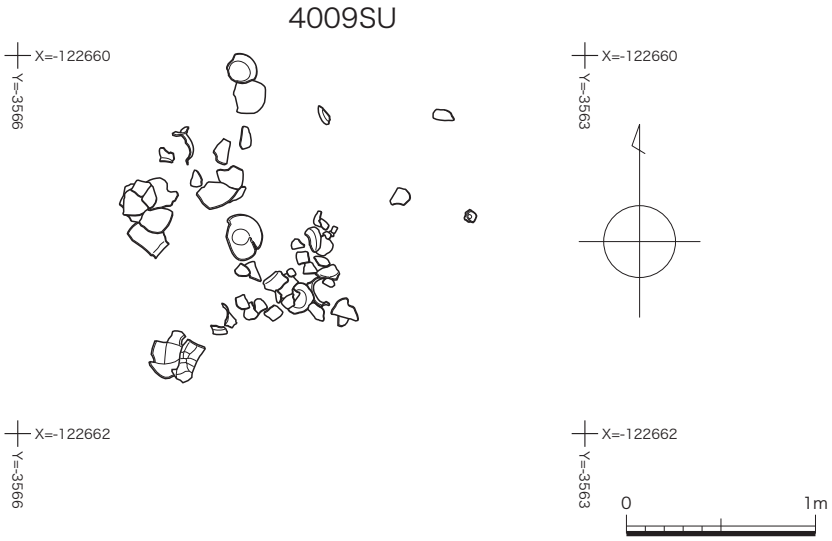


1　灰白色(5Y7/2)極細粒砂。
2　灰白色(5Y7/2)極細粒砂。黒褐色シルトを多量含む。

第61図　3346SK 平面・断面図（1:20）



第62図　3309SK 平面・断面図（1:40）



第63図　4009SU 平面図（1:40）



第64図　3070SU 平面図（1:40）

第 IV 章　遺物

第 1 節　遺物の記述

遺物番号の前には焼き物は E、石製品は S などの遺物記号が付けられるが、本報告書では省略して記述している。縮尺については、掲載頁内に明記した。

各遺物の時期については、下記の文献の分類・型式・時期区分を参照した。また石製品の石材については本センター 堀木真美子氏のご教示を得た。

・弥生時代～古墳時代前期：

赤塚次郎1990「V　考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

赤塚次郎1994「付論 1　松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集

石黒立人・宮腰健司2007「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』

・古墳時代後期～平安時代：

城ヶ谷和広2010「第 1 章総論　第 3 節　編年及び編年表　土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史資料編 4 考古 4　飛鳥～平安』

・鎌倉時代～室町時代：

中野晴久1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久2012「第 1 章総論　第 3 節常滑窯」『愛知県史　別編 窯業 3　中世・近世　常滑系』

藤澤良祐1990「付論 2　山茶碗と中世社会」『尾呂―愛知県瀬戸市　定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

藤澤良祐2007「第 1 章総論　第 2 節　灰釉陶器から山茶碗生産へ」「第 1 章総論　第 3 節　古瀬戸生産の成立と展開」『愛知県史　別編 窯業 2　中世・近世　瀬戸系』

・畿内系土師器：

奈良国立文化財研究所1976『平城京発掘調査報告』VII（奈良国立文化財研究所学報　第26冊）

林部均1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第 1 号

樋上昇2001「考察編　III 八王子遺跡の古代をめぐる諸問題」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

・製塩土器：

立松彰1994「第 III 部近畿～東海　5 愛知県」『日本土器製塩研究』青木書店

立松彰2010「伊勢湾と三河湾の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム

第２節　出土遺物

１．土器・土製品

398SK　１はI-17号窯期の須恵器合子型蓋杯の身。

403SK　２はハケ調整がなされた土師器甕。３は横方向のミガキ調整後に内面に放射状暗文が施された畿内系土師器皿で、内外面とも赤彩が施されるが、口縁部端は赤彩が剥離している。４はミガキ調整がされた畿内系土師器杯で、内面には羽状の暗文が施される。５～７は須恵器合子型蓋杯の身で、５がH-50号窯期、６・７がI-17号窯期に比定される。９～12はI-41号窯期の須恵器有台杯身で、11の底部外面には先割れした工具によるヘラ記号が、12の底部外面にもＸ字状のヘラ記号が描かれる。13は製塩土器の脚部で、知多式３類に相当する。

405SK　14は６世紀中頃のH-61号窯期に比定される須恵器合子型蓋杯の蓋。

407SK　15はI-41～C-２号窯期に比定される須恵器の杯蓋。

285SD　16・17は須恵器杯蓋、18・19はやや深い須恵器無台杯身でC-２号窯期に相当する。21は須恵器捏ね鉢で、小片のためはっきりしないが底部外面に刺突らしき痕跡がみられる。20は畿内系土師器の皿か。全体に磨滅しているが、ミガキ調整がなされていると思われる。22は三河型甕で、口縁部がヨコナデ、体部外面には細かいハケ調整が施される。

001SX　23～30は須恵器で、23・24が杯蓋、26～28が有台杯身、25が𤭯、29が２条の沈線が巡る長頸瓶の頸部、30が横瓶である。30の横瓶はタタキ成形されており、内面に当て具痕が残り、縦方向の２～３条のヘラ沈線が描かれる。時期はI-17～I-41号窯期。31は土師器鍋または甑で、体部に手捏ね成形された把手が付く。調整は外面と口縁部内面がハケ、体部内面はイタナデがなされる。

002SX　32～36は須恵器杯身・有台杯身、37は鉢である。37の鉢は回転ナデ・タタキ成形、ユビナデ調整がなされる。時期はC-２号窯期。38～44は土師器甕で、38はほぼ直立する口縁部と円球状の体部をもち、やや粗いハケとナデ調整が施される。39は口縁部が直線的にく字状に折れ、ハケ・ナデ調整された体部は縦長形を呈する。40・41は伊勢型甕、口縁部が強いヨコナデによって外湾し、端部が上または上内方につまみ上げられている。41はハケ調整。43・44は三河型甕で、強く折れ曲がる口縁部をもち、主にナデ調整がなされる。42はやや湾曲しながら斜め上方に延びる長い口縁部をもつ甕で、口縁上部はヨコナデ調整、口縁部内面と体部外面はハケ調整、体部内面はイタナデ・ナデ調整が施される。45～47は畿内系土師器の杯Ｃで、外面に横方向の、内面に縦または斜方向のミガキ調整がなされている。

284SX　48～53は須恵器で、48・49はI-17号窯期の合子型蓋杯の身、50は無台杯身、51は大型の平瓶口縁部か、52は高杯、53は甕である。うち48・49の身口縁部と受け部の端部には細かな欠損が見受けられ、53の甕はやや軟質な焼き上がりを呈している。54は口縁部が外湾する土師器甕。

321SX　55・56はI-41～C-２号窯期に比定される須恵器有台杯身。57は畿内系土師器の皿。

1022SK　58は柳ヶ坪型壺であるが、体部外面上部は不整方向のハケ調整のみで文様が見られない。口縁部外面には斜位の連続刺突が１段のみ、内面には羽状の連続刺突が３段施される。

1026SK　59は柳ヶ坪型壺で、口縁部外面にはイタによる斜位の連続刺突が１段施される。また内

面には２段の羽状連続刺突がなされ、施文部の下位に部分的ではあるが斜位刺突が施される。体部外面はハケ・ミガキ調整後、上半に直線文・波状文が施される。内面はナデ・イタナデ調整。

1034SK　60は長頸壺で口縁部は欠損しており、頸部に突帯が巡る。体部外面はハケとケズリ状のイタナデ調整がなされる。内面はイタナデ調整。底部外面には木葉痕が見られる。

1042SK　61はユビ押圧・ナデ成形・調整された椀状の鉢で、口縁部がわずかに外反する。62は外面がミガキ、内面がハケ調整された壺体部下半。63は口縁部がやや内湾する短頸壺。

1048SK　64の短頸壺は、口縁部がやや内湾し、体部外面がケズリ調整、内面がケズリ状のイタナデ調整がなされる。65の台付甕は口縁端部外面にケズリ状のイタナデ、内面にケズリ・イタナデ調整を施す。また体部外面下部にもケズリ状のイタナデがなされる。

1001SX　66は直口壺と思われる壺で、体部と底部の接合部で段をなす。調整はミガキ調整。

1002SX　68は受部が浅い皿状を呈する器台で、ミガキ調整される。70はミガキ調整される脚台部。

1003SX　71はく字状口縁甕で、体部から口縁部外面にかけて条痕状のイタナデ、体部下半や内面にはケズリ調整が施される。72は口縁部がやや内湾して延びる甕。

1004SX　74はユビ押圧・ナデ・イタナデ成形・調整された椀状の鉢で、体部外面にはひび割れ痕が見られる。75は口縁部が短く垂直の延びる甕で、現状では口縁端面には３～４ヶ所の凹みがあるが、意図的なものであるのかは不明である。また凹み部は磨滅している。76はハケ・イタナデ調整された台付甕の体部下半であるが、粘土接合部分で脚台部と分離したと思われる底部の剥離面は研磨され整えられている。

1035SX　77・78は二重口縁壺。両者とも施文されておらず、77は口縁部外面がハケ・ヨコナデ、内面が横方向のミガキ調整、体部外面がハケ・横または斜方向のミガキ、内面がナデ・イタナデ調整される。78はやや内湾して開く逆八字状の口縁部に、突帯状の粘土を付加することによって有段部を作り出しているもので、直立する短い頸部をもつ。また口縁端部は打欠かれたように欠損しており波状を呈する。体部は円球状を呈し、外面はケズリ状のイタナデと横・縦方向のミガキ調整、内面はイタナデ調整される。80は口縁部が欠損しているが、二重口縁壺である可能性が高い。81の壺は頸部と体部の変換点に突帯が巡り、イタ連続刺突が施される。体部は円く、外面はハケ調整、内面はイタナデ調整がなされる。82は全面がミガキ調整された鉢。

1006SU　85・90～94は柳ヶ坪型壺。90～93は口縁部外面が２段で内面が３段の、85は内面が２段、94は外面が１段で内面が２段のイタによる羽状連続刺突が施される。86は85と近接して出土した壺体部～底部で、同一個体であると考えられる。両者とも文様は見られない。また底部外面には木葉痕がある。95は二重口縁壺の口縁部下半から頸部。96は柳ヶ坪型壺と同様の文様構成をもつが、口縁部の段は粘土を付加することによって作り出している。97は口縁部が折り返されてわずかに外頃する面をなす。口縁部外面には羽２段のイタ連続刺突が施される。89はほぼ全面にわたってイタナデ調整される単純口縁の太頸壺で、外面上半に編み物痕が見られる。98は短頸壺か。99の小型壺は全体に被熱し、体部下半に焼成後の穿孔が見られる。100は細かいミガキ調整がなされた椀型高杯の杯部。102は逆ハ字状の受部をもつ器台で、受部内面は激しく磨滅している。105は台付甕の脚台部の製作技法によって作られた器台で、ナデ・イタナデ調整される。103・104は全体に丁寧なミガ

キ調整がなされる有段口縁鉢。106～108はく字状口縁甕の口縁部～体部で、それぞれ内面はケズリ調整されており、108は体部外面下半にも施される。

これらの遺物群は、廻間III式期の中頃を中心とした時期に比定される。

1007SU　112・113は柳ヶ坪型壺。114は単純口縁壺の口縁部内面に2段の連続刺突が施される。115はハケ調整された二重口縁壺。116はミガキ調整された二重口縁壺の口縁部か。117は加飾太頸壺で、垂直な面をなす口縁部の外面には2段の羽状刺突が施される。また体部外面上半には直線文と波状文が交互に施文されるが、波状文は上下の動きが少なく、簾状文のようになっている。118は加飾壺体部片で、直線文と羽状刺突、竹管刺突が施される円形浮文が付けられる。119～120の壺底部海面には木葉痕が見られる。124の壺底部は細かいミガキ調整がなされ、外内面とも赤彩が施される。125・126は全体に細かいミガキ調整がなされた鉢で、126は有段口縁となる。132～134は甕口縁部～体部で、134はわずかに内湾する口縁部をもち体部内面がケズリ調整される。135は受口状口縁甕。136～141はS字状口縁甕で、136・137はB類、138～140はC類、141は体部～脚台部となる。145～147は口縁部が逆八字状に大きく広がり、体部が円球形を呈する大型甕で、体部の調整はS字状口縁甕と同様に、体部外面にやや粗いハケが羽状に施され、横方向の直線文が施文される。また145の体部外面下半にはハケ調整の前に行われてケズリ成形・調整が認められる。

これらの遺物群は廻間II式期後半からIII式期前半に比定される。

1009SU　83･84はく字状口縁甕で、84の口縁部はヨコナデ･ユビナデによる極わずかな段をもつ。

1016SU　148・149・151～155はく字状口縁台付甕で、151は全体にイタナデ調整され、他はハケ調整とイタナデ調整がなされる。156・158～160は柳ヶ坪型壺になる。156は体部上半に横方向の直線文のみが施文される。157波状文と直線文が施された加飾壺の体部。161は二重口縁壺の口縁部～頸部。壺底部165は外面がミガキ調整された後赤彩が施される。167は口縁部が逆八字状に立ち上がり、体部は明瞭な稜をもち底部が尖った形態を呈する。調整は細かい丁寧なミガキがなされる。168・169は小型器台で、168は内湾して八字状に広がる脚部をもつ。170～172は高杯で、170の杯部内面は激しく磨滅しており、端部が欠損する。173・176は平底甕で、173はハケ調整後ケズリ調整される。174は丸底甕で、体部外面には煤･炭化物痕が付着して吹きこぼれの痕跡が確認できる。179・180はS字状口縁甕C類で、181は脚台部である。

これらの遺物群は廻間III式前半期を中心とした時期に比定される。

1058SU　182は平底甕で、口縁部が短くやや内湾して延びる。183はS字状口縁甕のC類で、184は脚台部である。185・186はく字状口縁台付甕で、両者とも外面にやや粗いハケ調整、内面にケズリ状のイタナデ調整が施される。187・188は有段高杯で形状は類似するが、188は187に比して杯部稜線もはっきりせず、透し孔もない。また187は細かいミガキ調整が全面に施されて胎土も密であるが、188はミガキ調整もやや太く胎土も粗雑である。189～191は有稜高杯で、杯部外面のミガキ調整が189・191は縦方向、190は斜方向となっている。

これらの遺物群は廻間III式前半期を中心とした時期に比定される。

1059SU　195は直口壺の体部と思われ、頸部で打ち欠かれている可能性がある。また全体に被熱している。196はハケ・イタナデ調整された壺体部。

A区撹乱・トレンチ　197は廻間II式期初頭に比定される有稜高杯。杯部は外内面とも縦方向のミガミ調整がなされ、口縁部内面は肥厚して面をなし、イタナデによって整えられている。脚部は杯部から直ぐに八字状に開いており、上部にクシによる直線文が描かれる。198は下部に回転ケズリが施された壺体部で、199はNN-32号窯期の鉢、200は盤である。

A区検出1　201～209・212は須恵器。201・202は合子型蓋杯で、H-50号窯期に比定される。203･204の有台杯身は8世紀前半になると思われる。205～207は杯蓋で、205･206は8世紀前半、207は後半のNN-32～O-10号窯期に比定される。208の捏鉢はC-2号窯期に比定される。209は小型瓶で、口縁部がV字状に打ち欠かれた可能性がある。212は盤。211は畿内系土師器の杯A。210は廻間III式～松河戸式期の小型壺。213は製塩土器脚部。

A区検出2　214は直口壺で、外面と口縁部内面に細かい横・斜方向のミガキ調整がなされた後赤彩が施される。また体部内面にも一部赤彩が見られる。215の甕は、強く短く屈曲する口縁部と円球状の体部をもつ。口縁部内面はイタナデによって直線的に整えられており、体部は外面がイタナデ、内面がケズリ状のイタナデ調整がなされる。216は甕の体部を用いた加工円盤で、側面の一ヶ所が打ち欠かれた可能性がある。

A区検出3　217・218は単純口縁壺で、217は体部中央に成形時に生じた大きな凹みがある。調整はハケ・イタナデ・ケズリ状のイタナデがなされる。

219・220は丸底甕で、220は全体に歪みがある。221～223・225は直口壺で、222はケズリ状のイタナデ調整前にハケまたはタタキ調整がなされており、222・223・225には煤・炭化物が付着する。224はヒサゴ形壺である。226は内湾する口縁をもつ鉢。227～230は高杯で、230の脚部外面には横方向のミガキ調整が施される。また227の杯部外面も横方向のミガキ調整がなされる。231・232はく字状口縁甕で、232は頸部に横方向のナデが施されている。233は複合口縁甕で、S字状口縁甕と同様の調整がなされる。234はS字状口縁甕の脚台部。

2060SI　235は屈折脚高杯の杯部下端から脚部上半。時期は廻間III式後半～松河戸I式期か。

2070SI　236は須恵器高杯で、I-17号窯期かそれよりやや古い時期に比定される。237は古墳時代初頭の有段高杯になるか。

2080SI　238はH-44号窯期の合子型須恵器の身で、239は口縁部があまり屈曲しない土師器甕。

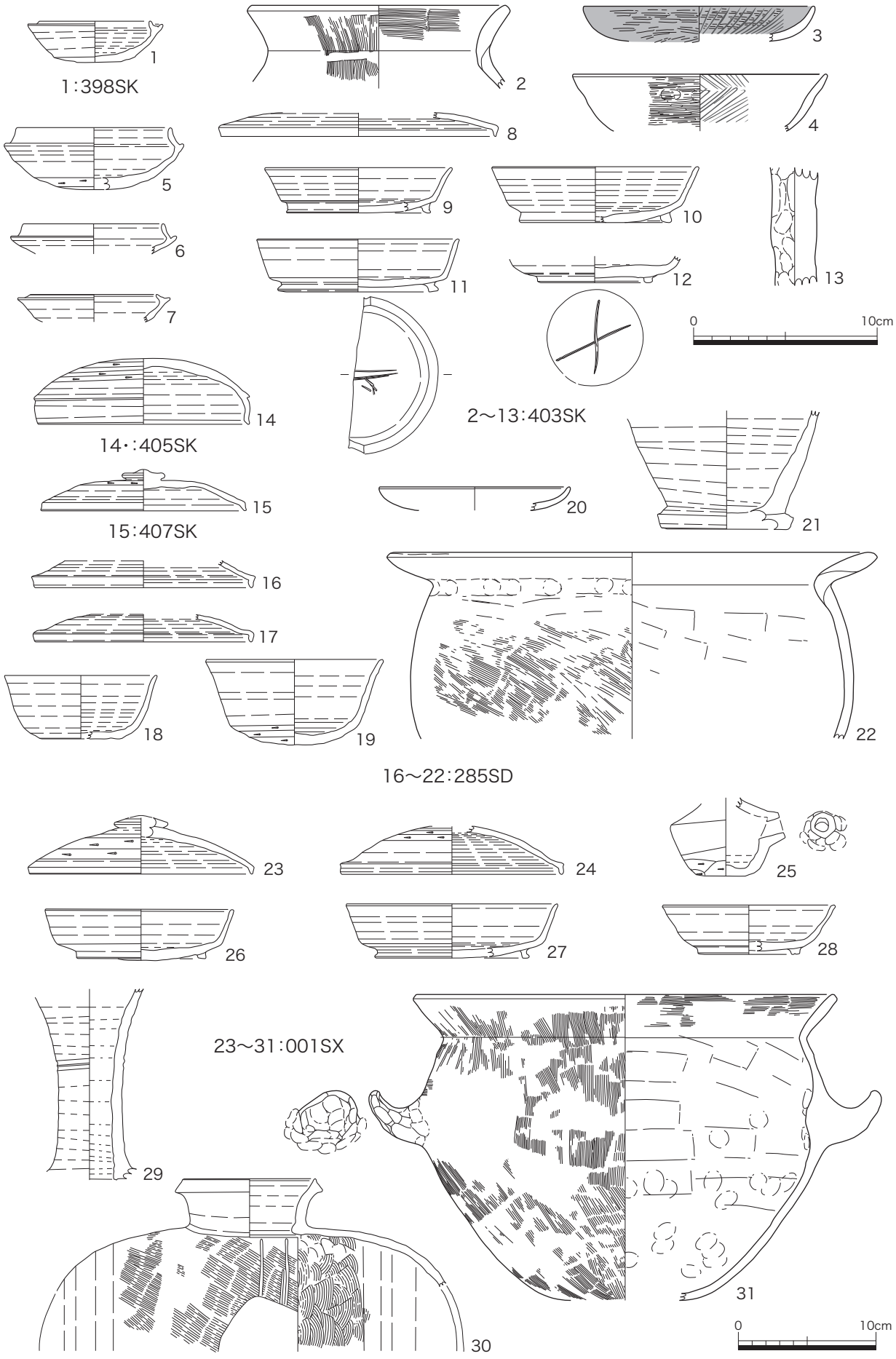
2260SI　240は口縁部に粘土は付加されて段をもつ二重口縁壺で、ミガキ調整と条痕状のイタナデ調整がなされる。241は大型の直口壺。242・243は口縁部に明瞭な段をもつ有段鉢で、細かいミガキ調整が施される。245はS字状口縁甕C類。

これら土器群は廻間III式前半期を中心とした時期に比定される。

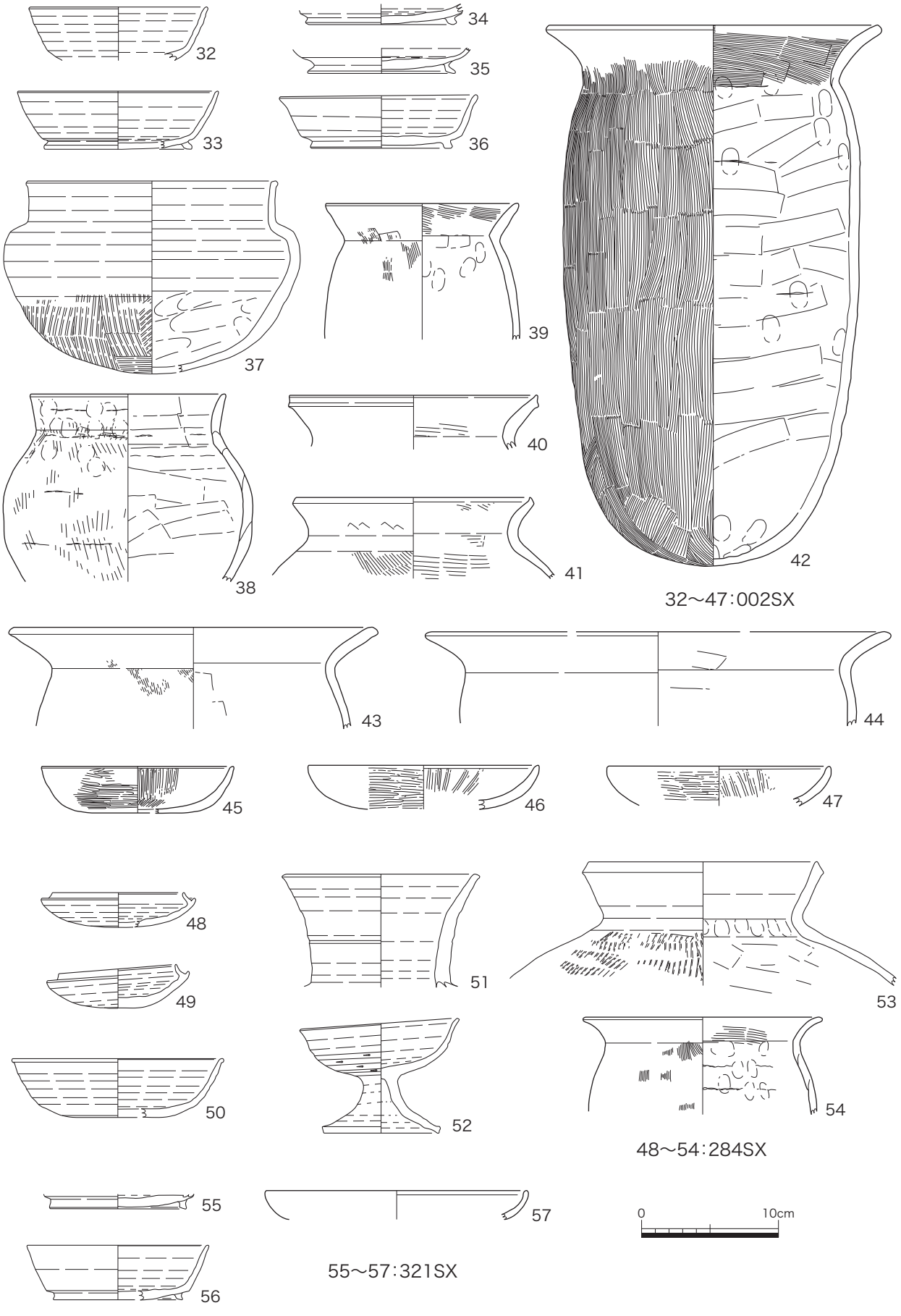
2400SI　248は口縁部がヨコナデされて端部が上内方につまみ上げられた伊勢型甕。

2401SL　249は6世紀中葉の蝮ヶ池～H-44号窯期の合子型蓋杯の身。

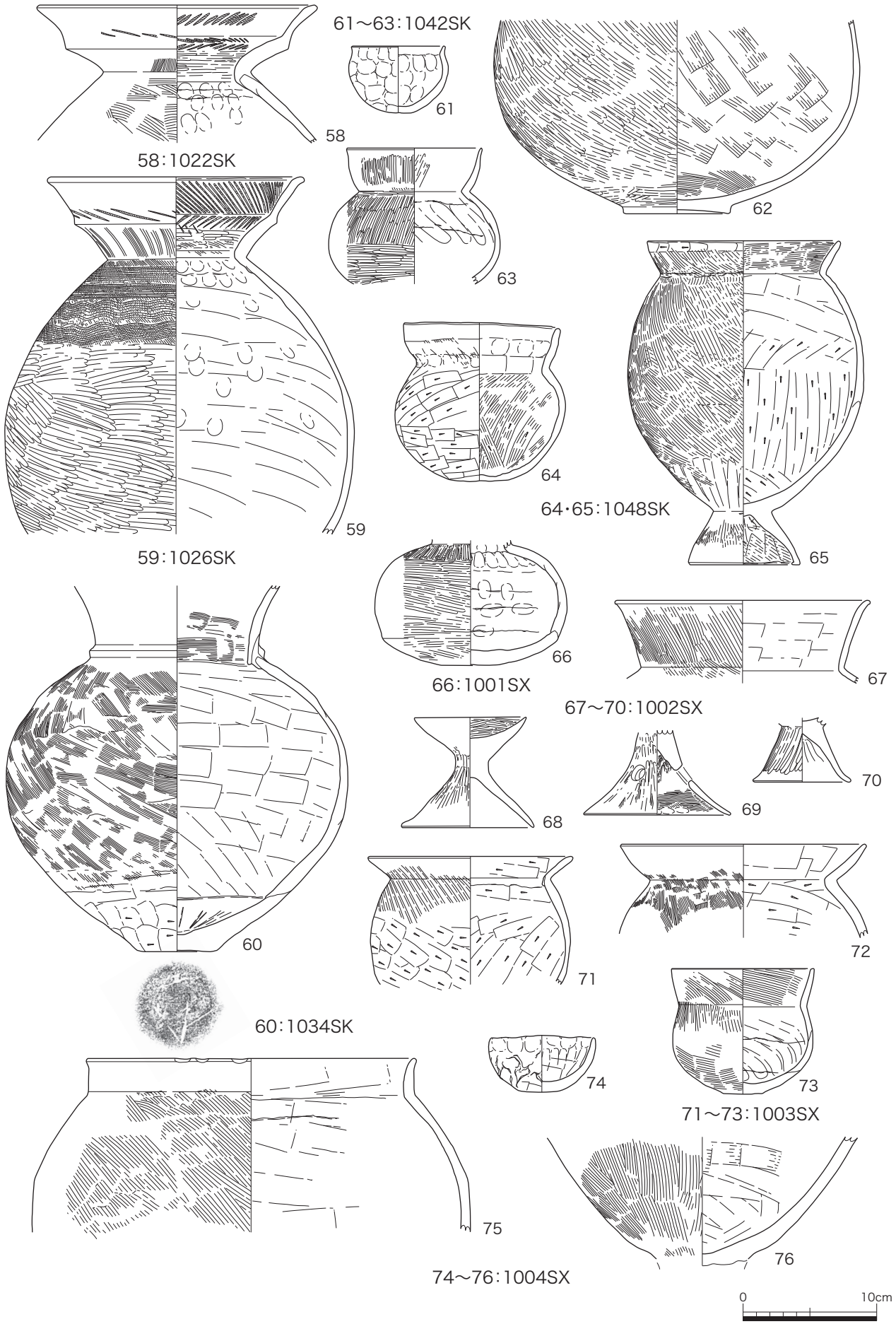
2029SK　250～253は須恵器杯蓋・杯身で、250の内面にはヘラ記号が描かれる。時期はC-2号窯期。254は土師器の鉢。形状はやや扁平な砲弾形をしており、底部外面には木葉痕が残る。ユビ押圧・ナデによって成形・調整されており、被熱し煤・炭化物が付着する。255・256は畿内系土師器の皿Aで、細かいミガキ調整がなされる。257･258は土師器甕。259は知多式4類の製塩土器脚部。



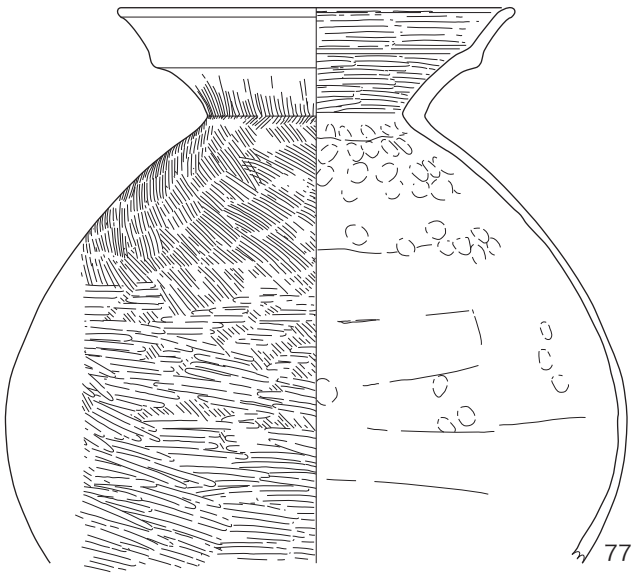
第65図　出土遺物実測図（１）　※縮尺は13が１/３、他は１/４

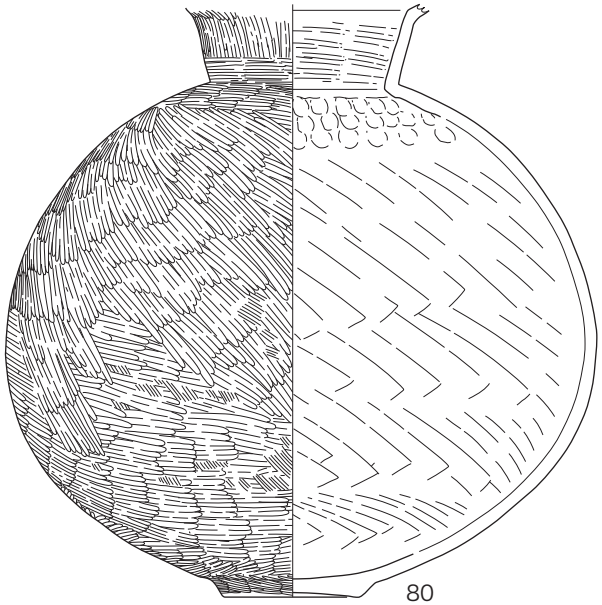


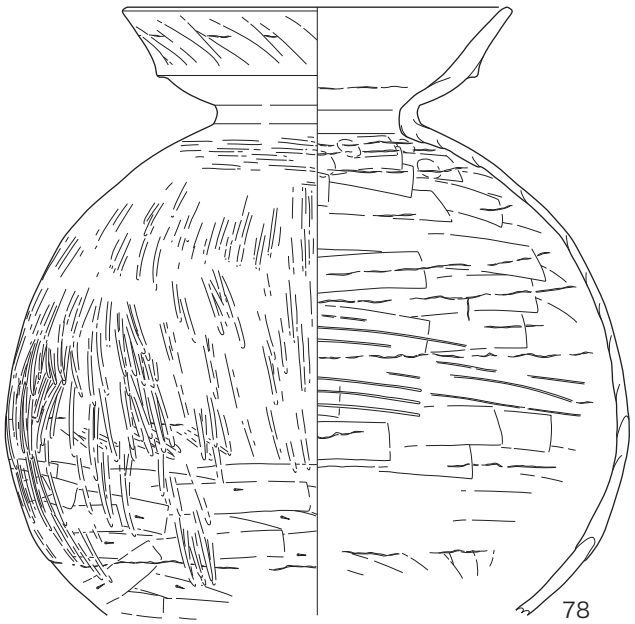
第66図　出土遺物実測図（２）　※縮尺は１/４

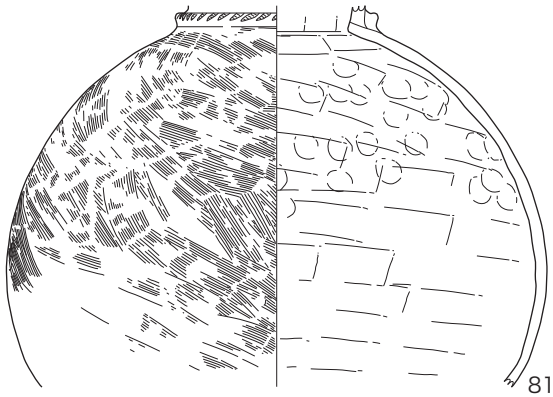


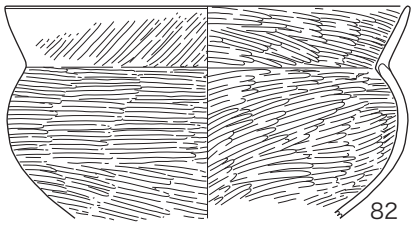
第67図　出土遺物実測図（３）　※縮尺は１/４

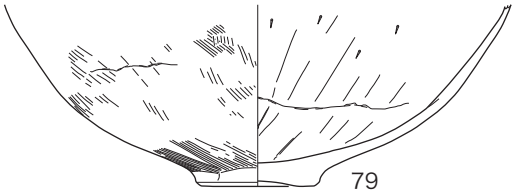


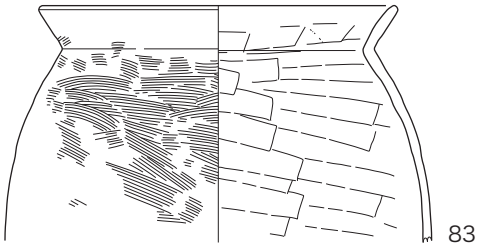








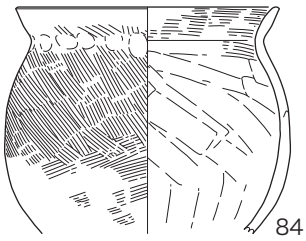




77～82：1035SX

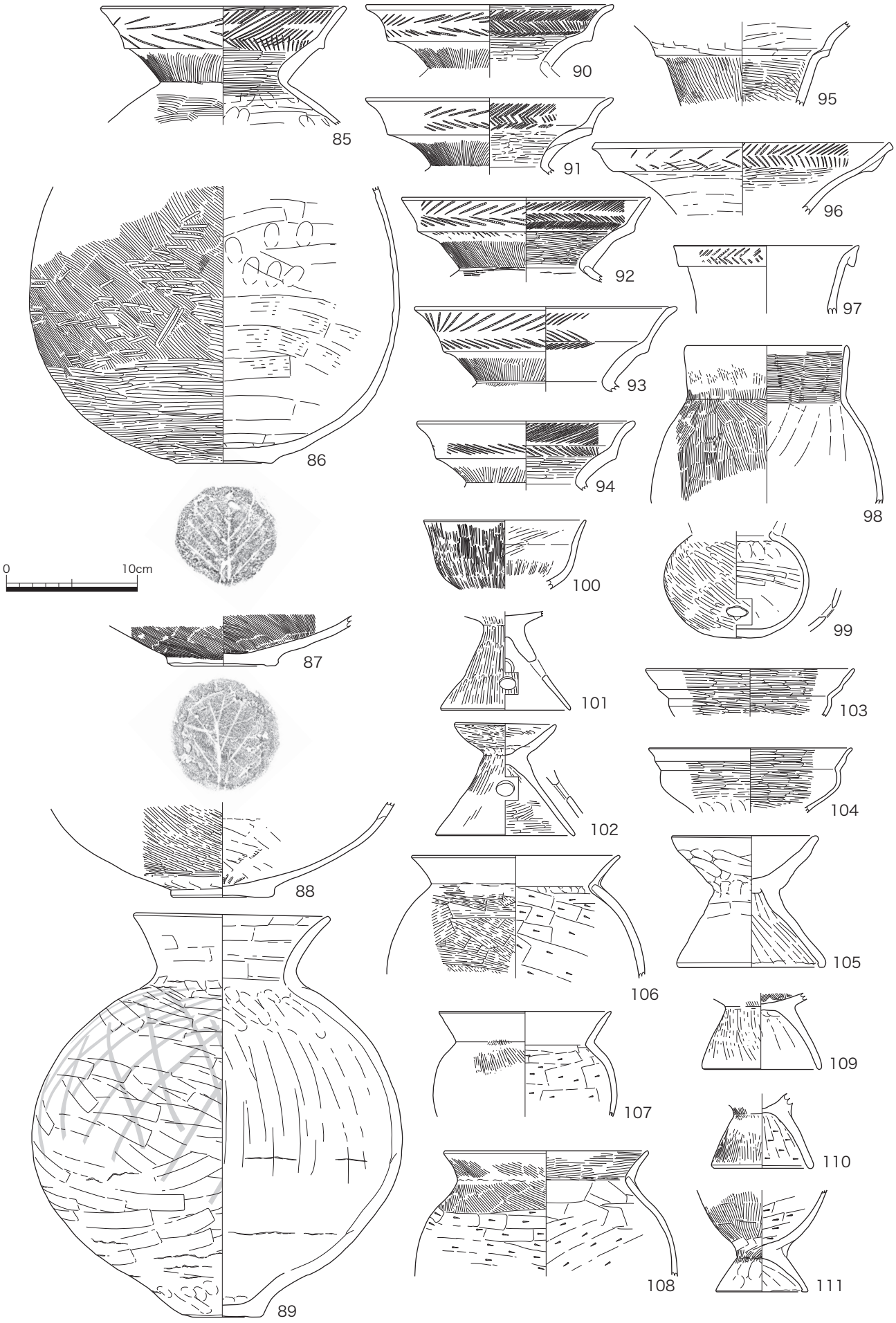


83・84：1009SU



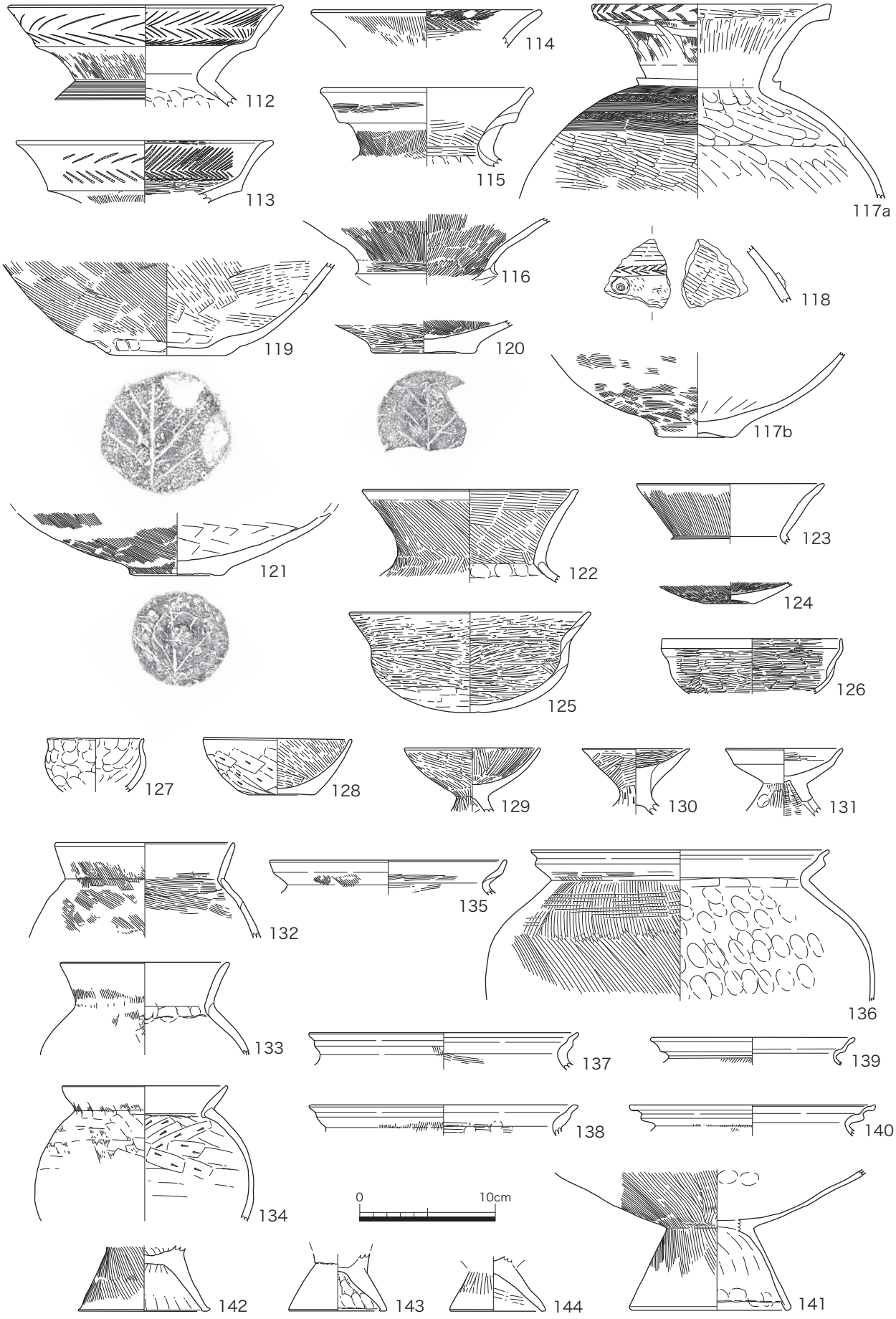
第68図　出土遺物実測図（４）　※縮尺は１/４

85～111：1006SU



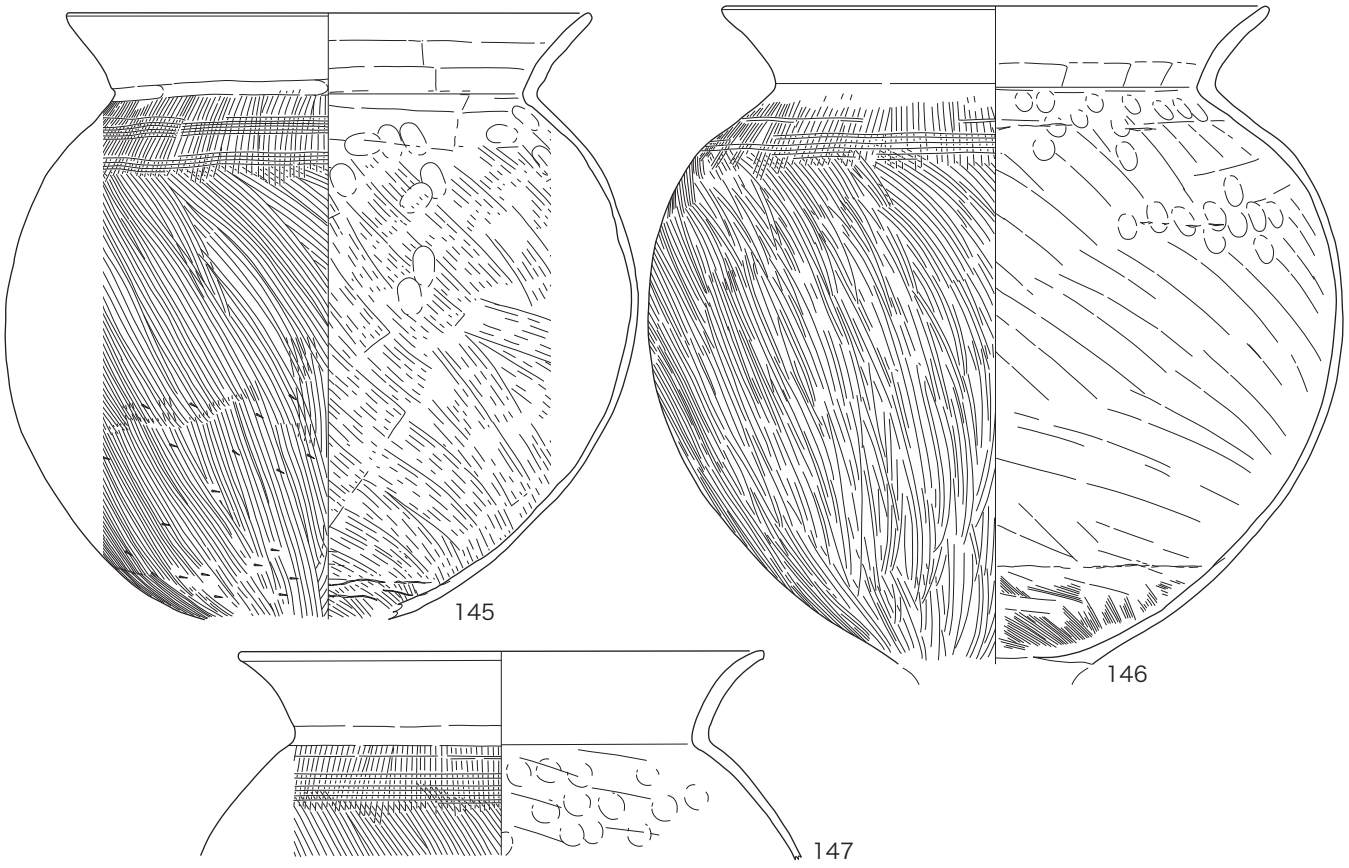
第69図　出土遺物実測図（５）　※縮尺は１/４

112～144：1007SU－1

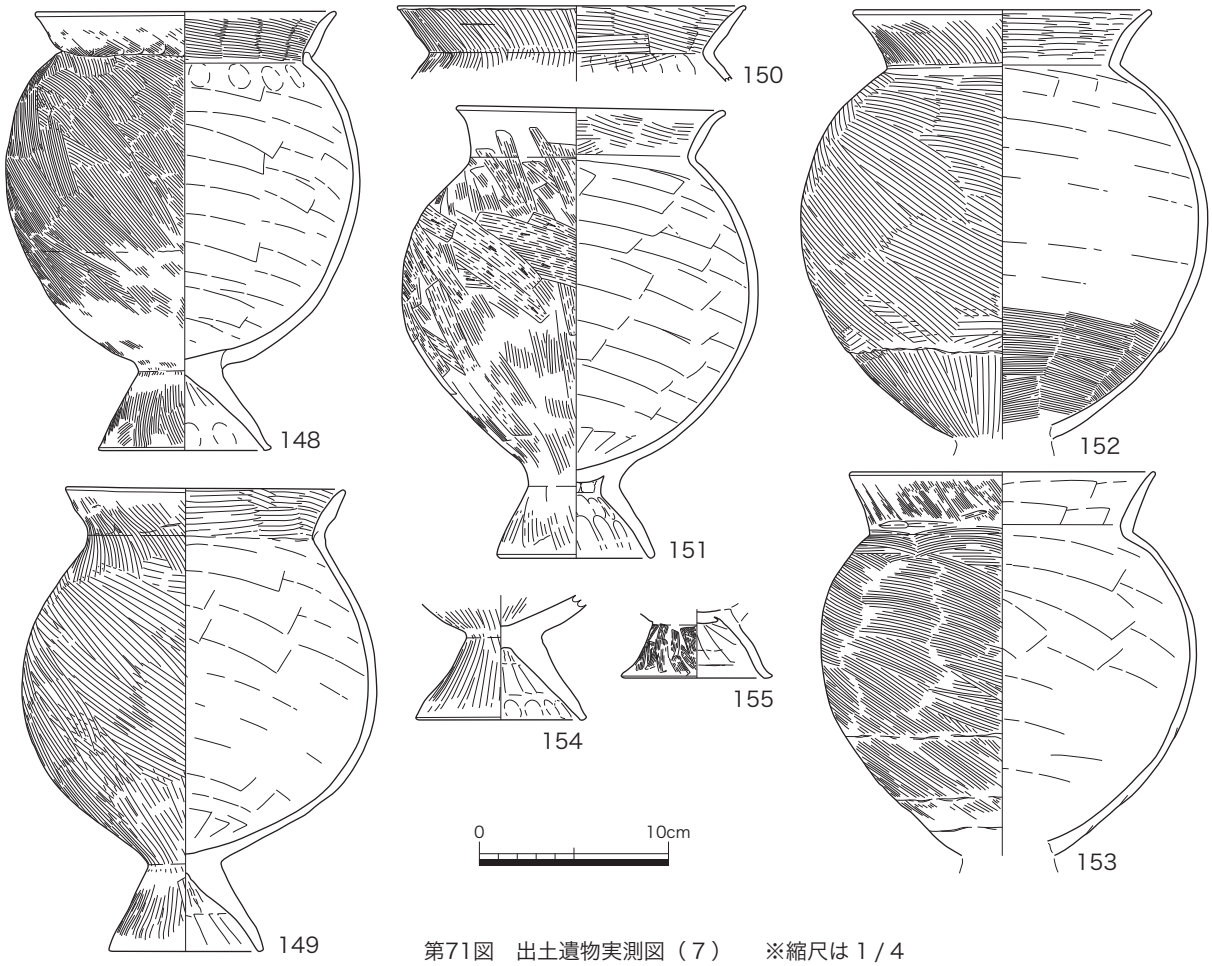


第70図　出土遺物実測図（６）　※縮尺は１/４

145～147：1007SU－2

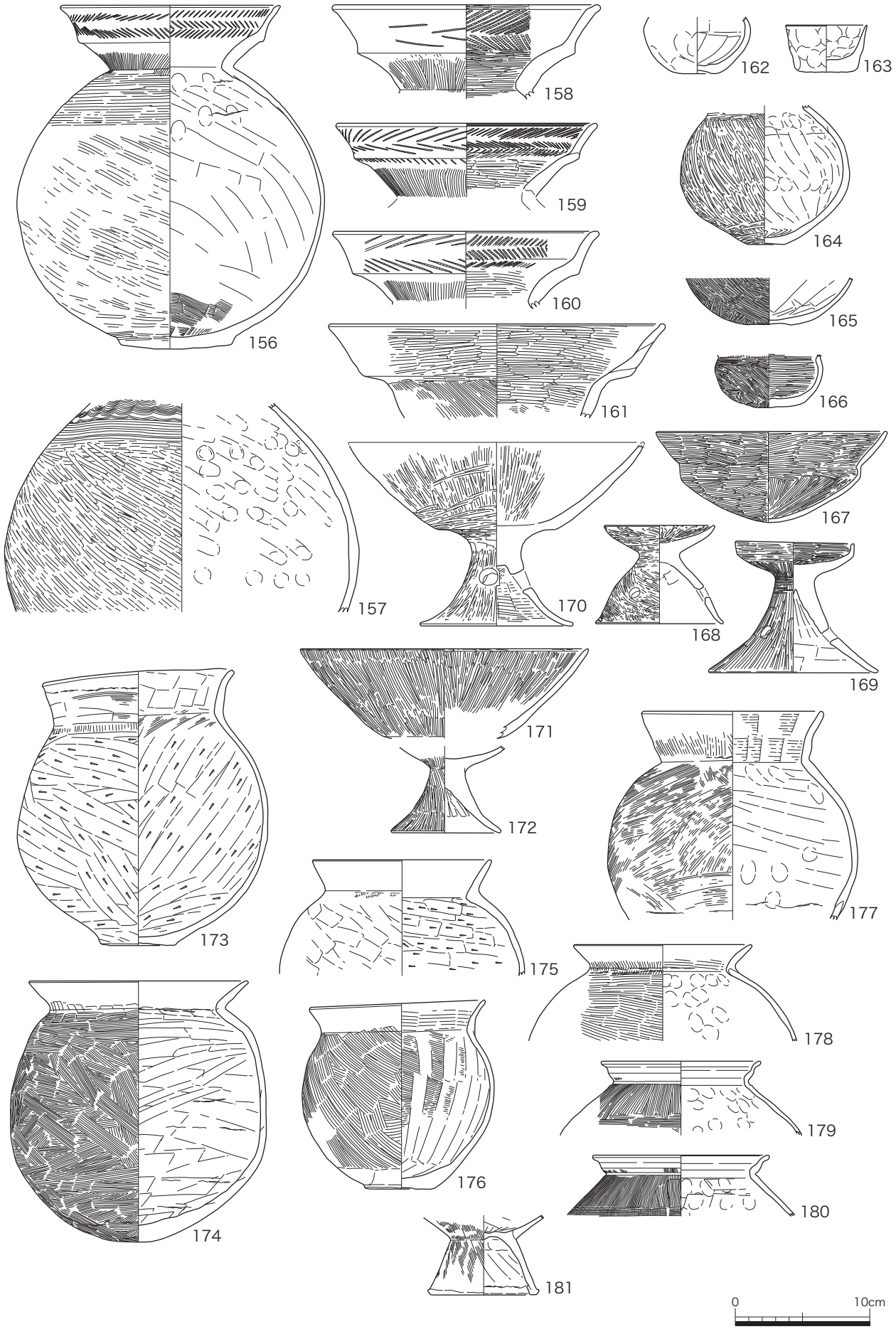


148～155：1016SU－1

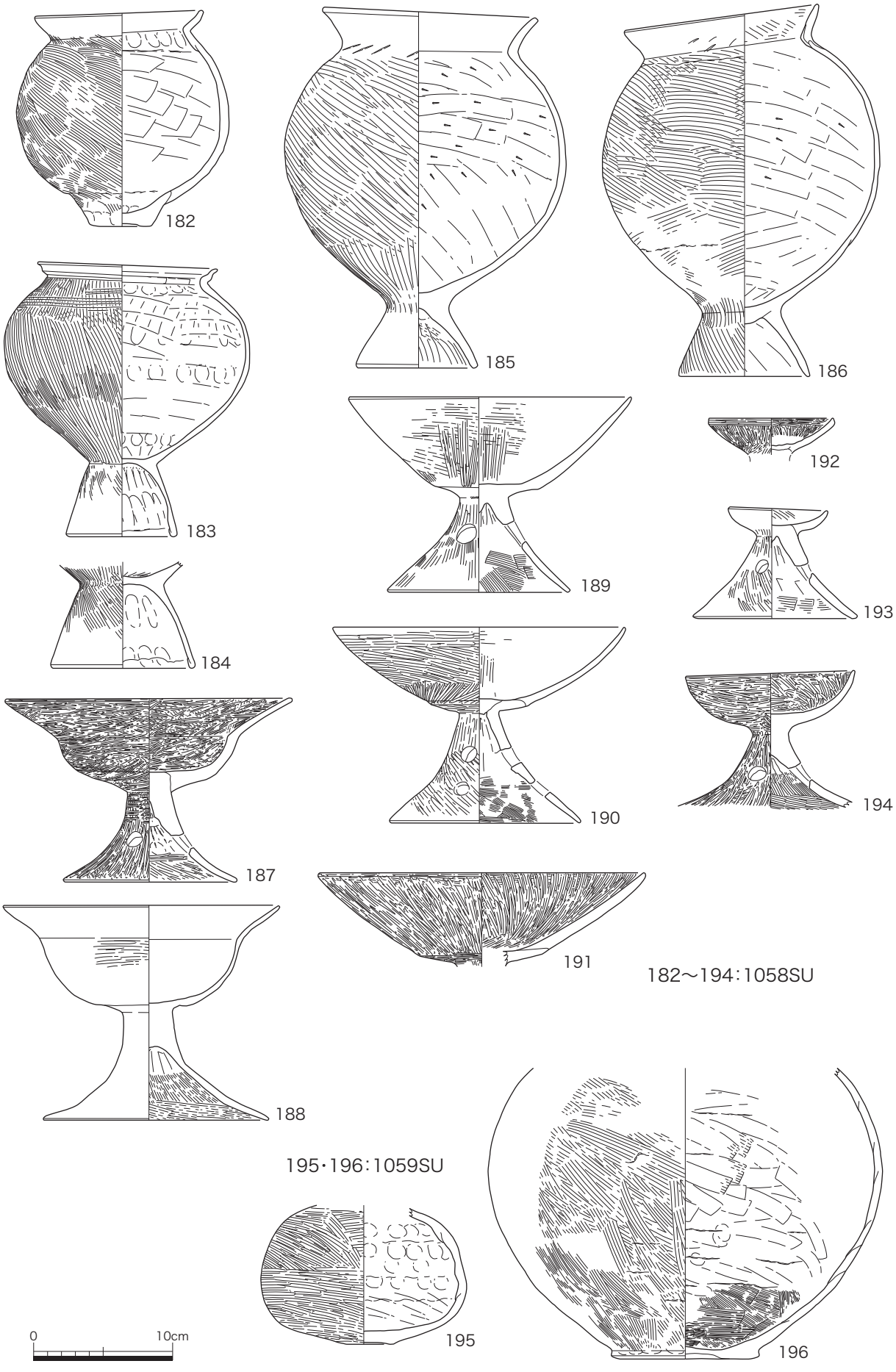


第71図　出土遺物実測図（７）　※縮尺は１/４

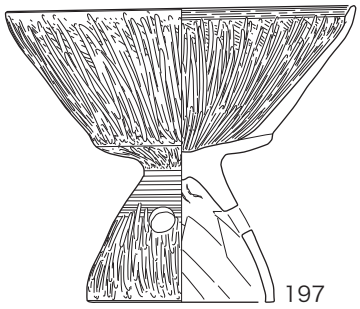
156～181：1016SU－2

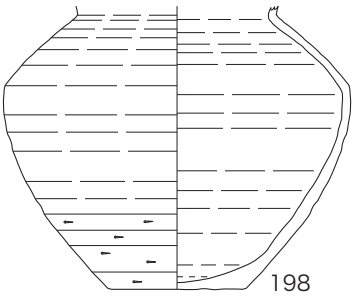


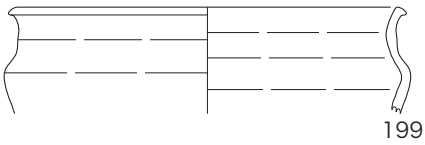
第72図　出土遺物実測図（８）　※縮尺は１/４



第73図　出土遺物実測図（９）　※縮尺は１/４

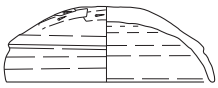

197

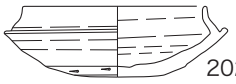

198

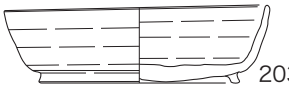

199

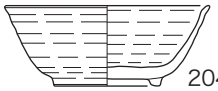

200

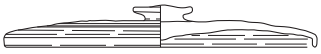
197～200：撹乱・トレンチ


201


202

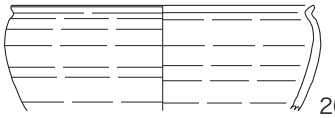

203


204

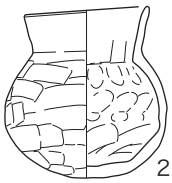

205

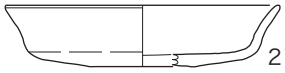

206

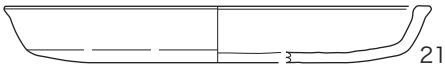

207


208


209


210

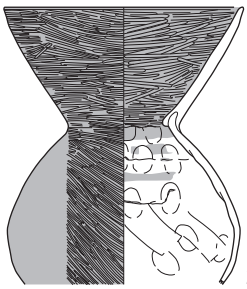

211

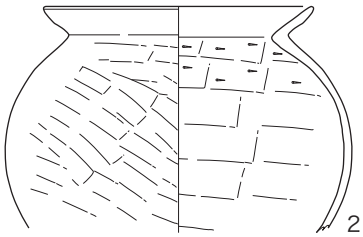

212

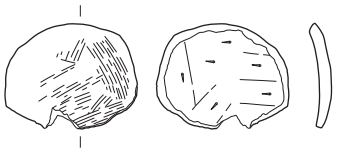
201～213：検出1


213

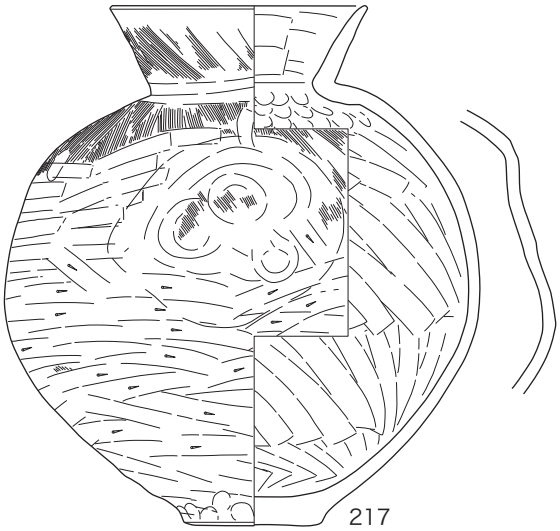


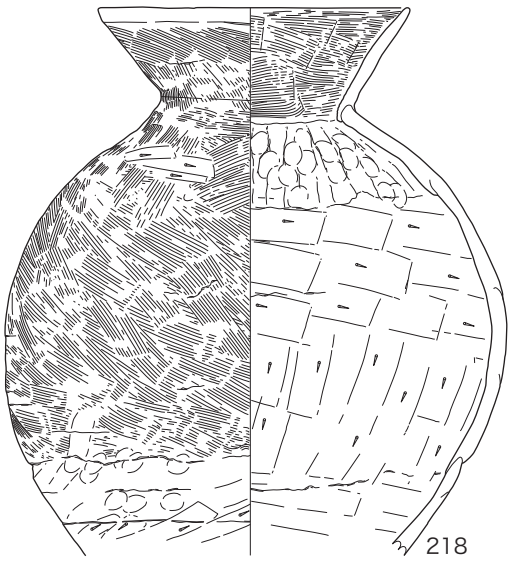

214


215


216

214～216：検出2

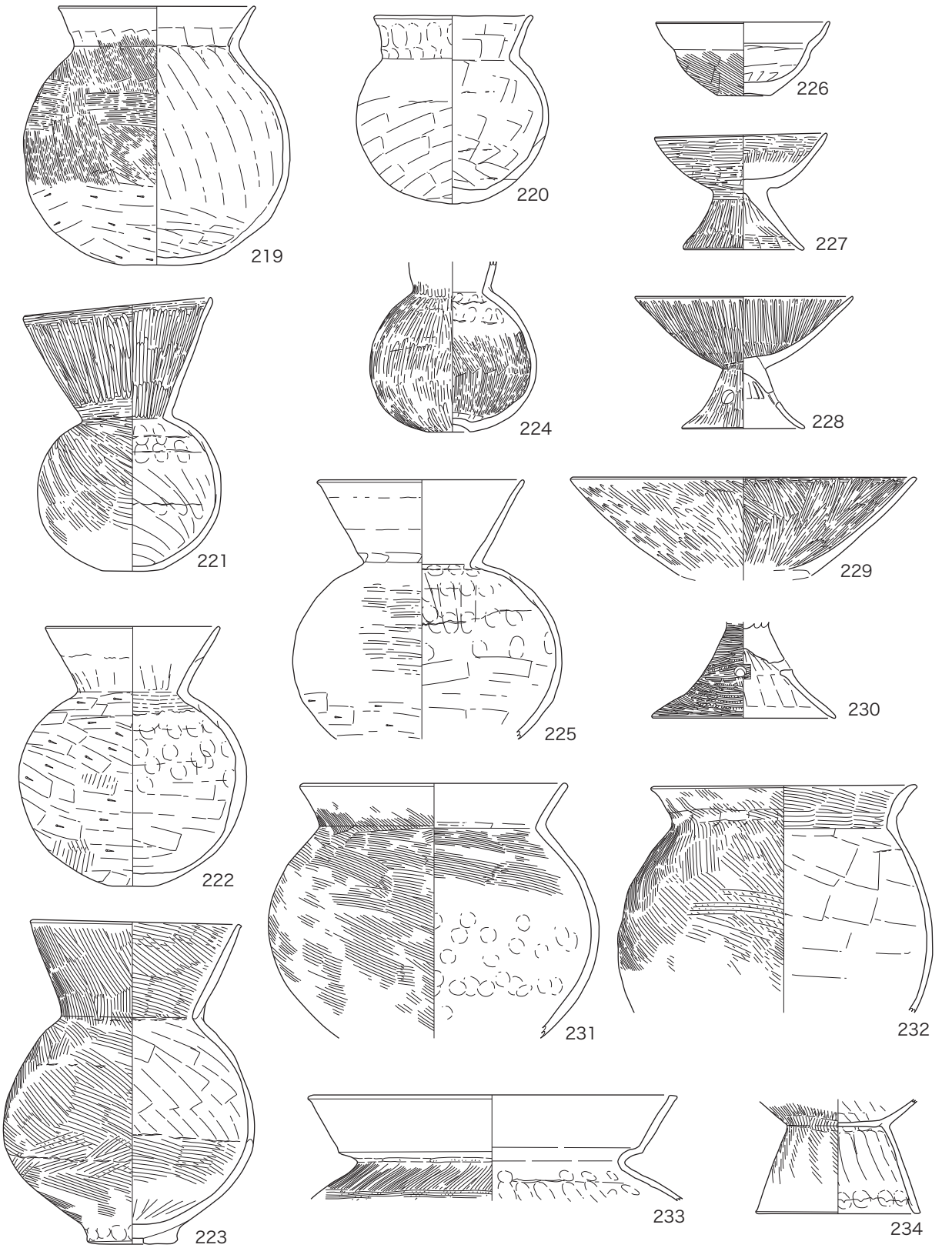

217


218

217・218：検出3ー1



第74図　出土遺物実測図（10）　※縮尺は213が１/３、他は１/４



第75図　出土遺物実測図（11）　※縮尺は 1 / 4

2030SK　260は須恵器蓋、261は高杯で、I-17号窯期に比定される。262は土師器の体部と脚台部の接合部分で、かなり大型のものになると思われるが器種は不明。被熱している。

2108SK　263は知多式４類の製塩土器脚部か。

2122SK　264は須恵器の蓋で、蝮ヶ池～H-44号窯期に比定される。

2164SK　265は畿内系土師器の杯で、内面に放射状の暗文が描かれる。外面はミガキ調整。

2288SK　266は製塩土器の杯部で、ユビ押圧による凹凸が見られる。

2357SK　267は11世紀に比定される清郷型鍋の口縁部。

2490SK　268は須恵器無台杯身。時期はC-２号窯期に比定される。

2530SK　269は山茶碗碗の口縁部から体部。

2604SK　270・271はC-２号窯期に比定される須恵器杯蓋と有台杯身。272・273は土師器甕で、273は接合部分で剥離した破面が磨滅しており、椀状の器として転用された可能性もある。274～277は畿内系土師器で、皿Ａの274は内面に放射状の暗文が描かれる。暗文は底部から口縁部、さらに底部へと折り返して描かれる部分が確認できる。内外面とも赤彩が施される。同じく赤彩が塗布された277にも、放射状の暗文がある。皿Ａの275は磨滅していて調整は不明。杯Ａの276は被熱していて、内外面とも煤・炭化物が付着している。そのため内面の調整・施文がミガキか暗文であるのかは判然しない。剥離が激しいが、内外面とも赤彩が認められる。

2367SD　返しをも須恵器杯蓋278・279は、やや大ぶりな278がI-17号窯期、小ぶりな279がI-41号窯期に比定される。280の須恵器有台杯身は口縁部がやや丸く、内面上端に凹線が巡る。281は半球状の杯部をもつ須恵器高杯で、焼成がやや軟質である。282は土師器把手、283は製塩土器脚部。

2425SD　284は畿内系土師器の杯Ｃで、外面にはやや太いミガキが施される。

2607SD　285は柳ヶ坪型壺で、口縁外面には２段の、内面には３段の羽状連続刺突が、体部には半裁竹管による直線文と波状文が施文される。

2045SE　286は山茶碗小皿、287は山茶碗椀である。時期は南部系山茶碗第７または８型式に比定される。288は底部外面に糸切り痕を残す土師器底部で、打ち欠いて円形に加工された可能性がある。289と290は常滑産の広口壺で、同一個体の可能性が高い。289は口縁部がヨコナデ、頸部～体部はユビ押圧・ナデ、ヘラ調整がなされる。ヘラ調整の工具にはイタが用いられており、部分的に木目が確認できる。時期は常滑窯２型式期に比定される。

2100SE　291～296は山茶碗椀で、291～294が南部系山茶碗第７または８型式に、295が第８または９型式に、296が第９型式に比定される。297～299は山茶碗小皿。300は土師質の小皿。301は玉縁口縁の常滑産壺で、常滑窯６ａ型式期に比定される。302は陶丸で、303は底部外面に糸切り痕を残す土師皿の底部。304は常滑窯６ｂ型式期の広口壺で、肩上部に押印文が見られる。

2161SE　305～309は山茶碗椀で、305が南部系山茶碗第４型式に、306～309が第７型式に、310の山茶碗小皿は第８型式に比定される。311は外面に蓮弁文が施された青磁碗。312は古瀬戸前期様式II期に比定される四耳壺。313は常滑窯６ａ型式期の広口壺で、314も常滑産の壺または甕である。315はゆるやかにく字状に屈曲する口縁部をもつ甕で、全体にナデ調整される。古代以前の遺物の混入である可能性が高い。

2171SE　316は南部系山茶碗第９型式に比定される山茶碗碗。

2246SE　317は南部系山茶碗第７型式に比定される山茶碗碗。318は混入品で、弥生時代の山中式期中葉に属する高杯の杯部。

2001SX　319～323は須恵器。319は杯蓋、320・321は合子型杯蓋で、320が６世紀中頃のH-61号窯期の身、319と321がI-17号窯期の蓋と身に比定される。322は壺蓋と思われる。323は口縁端部が内上方に延びる壺。324は口縁端部がつまみ上げられた土師器の伊勢型甕で、325は横方向にミガキ調整がなされる畿内系土師器杯Ｃである。326～329は製塩土器の脚部で、326は知多式３類、他は４類である可能性が高い。

2006SX　330・331は須恵器の合子型杯蓋の蓋で、H-50号窯期に比定される。332・333は口縁部に強いヨコナデ調整がなされ、端部がつまみ上げられる土師器の伊勢型甕。

2125SX　334・335はC-２号窯期の杯蓋。336は口縁部内面上端に回転ナデによる凹線が巡り、底部内面にはハケまたはイタによる調整がなされる。南部系山茶碗第４型式前後の山茶碗の可能性が高いと思われる。337は畿内系土師器皿Ａで、外面がやや太いミガキ調整がなされ、内面に放射状の暗文が施文される。338はゆるやかに屈曲する口縁部をもつ土師器甕。

2149SX　339はI-25号窯期の須恵器合子。

2284SX　340は畿内系土師器皿Ａで、全体に被熱し磨滅しているが、外面がミガキ調整され、内面には放射状の暗文が施される。

2337SX　341・342は須恵器杯蓋で、343は鉢である。343は体部中央に沈線が巡らされた後、山形または波状文様が描かれている。時期はI-17号窯期に比定される。

2431SX　344・345は須恵器杯蓋で、NN-32号窯期に比定される。346は知多式４類の製塩土器脚部。

2493SX　347～356は須恵器。347はI-17号窯期の杯蓋の蓋。348・349は有台杯身。350・351は無台杯身で、350は口縁内面上端に回転ナデによる凹線が巡る。352～354は高杯で、352はI-41号窯期に比定される。また皿状を呈する杯部353・354は、焼成が軟質である。356は大型の杯。357の畿内系土師器杯Ｃは磨滅しているため調整は不明で、被熱している。

2478SX　358～365は須恵器。蓋358はC-２号窯期、359はN-32号窯期に比定される。362・363の無台杯身はI-41号窯期に比定される。364の鉢と365の捏ね鉢はNN-32号窯期に比定される。366～371は畿内系土師器。366～369は皿で、366・367は磨滅しているがミガキ調整が確認され、369は外面にミガキ調整、内面に放射状の暗文が施される。370・371は杯で、371は外面にミガキ調整、内面に放射状の暗文が施される。372は製塩土器の脚部。知多式４類になるか。

2503SX　373～375は須恵器で、373の蓋はI-17号窯期に、493の無台杯身はI-41号窯期に比定される。376・377はく字状口縁をもつ土師器甕。378・379は畿内系土師器で、杯Ｃの379は外面にはヨコナデ・ミガキ調整、内面にはミガキ調整後に放射状の暗文が施される。

2531SX　須恵器合子型杯蓋の身380は、杯部が丸くて深くなり、外部底面にはヘラ記号が描かれる。時期は６世紀初頭のH-11号窯期に比定される。

2542SX　381は須恵器合子型杯蓋の身で、H-61号窯期に比定される。382・383は土師器甕で、

383は口縁部がゆるやかに外湾して上方に延びる。

2505SX　384はミガキ・イタナデ調整される短頸壺で、385は杯部がミガキ調整、脚部内面が成形・調整される高杯。時期は松河戸Ⅰ式期か。

2552SX　386は柳ヶ坪型壺で、口縁部外面に２段の羽状連続刺突、内面に３段の羽状連続刺突が施される。387・388とも磨滅が進んでおり調整が判然としないが、378にはハケ・ミガキ調整の痕がうかがえる。時期は廻間III式～松河戸Ⅰ式期。

3121SI　389はケズリ・イタナデ成形・調整される短頸壺で、体部内面下半に薄く赤色顔料痕が見られる。390は小型の高杯で、ミガキ調整がなされるが、特に頸部は帯状に細かく施される。391は有段口縁太頸壺の口縁部で、口縁部外面にはイタによる凹線が巡らされ、端面にはイタ連続刺突がなされる。また内外面とも細い不整方向のミガキ調整が施され、内面には放射状になると思われる赤彩が塗布される。

4035SI　392は小型の太頸壺で、底部はケズリ成形・調整によってわずかに尖ったような形状をなす。口縁部端面には部分的に、やや不定形であるがイタの刺突痕が見られる。393・394はS字状口縁甕B類。395・396はく字状口縁甕で、396の体部外面には吹きこぼれ痕が残る。細かいミガキ調整がなされる399・400は有稜高杯で、同一個体の可能性がある。400は頸部に焼成前の縦位の穿孔があり、上部は円盤充填された粘土の剥離痕が見られる。401・402は細かいミガキ調整が施される小型高杯。これらの土器群の時期は、399・400の有稜高杯は山中式期末～廻間Ⅰ式期初頭、393・394廻間II式期に比定される。

3009SK　404のく字状口縁甕は外面がハケと条痕状のイタナデ､内面がハケ･イタナデ調整される。

3139SK　405は口縁部が薄く折り返されてわずかな段をもつ短頸壺で、イタナデ調整される。406は皿状の鉢で、外面がイタナデと不明瞭であるがミガキ調整、内面がミガキ調整され、底部外面に木葉痕が見られる。408はS字状口縁甕C類。409・410ともイタナデまたはケズリ状イタナデ調整がなされるく字状口縁甕で、410の頸部には横方向のユビナデ調整がある。

3225SK　411は脚台部が付く小型精製複合土器で、細かいミガキ調整がなされる。

3267SK　412は粗いハケ調整がなされる手焙り形土器で、棒状の工具で連続押圧された突帯が巡る。

3294SK　413は口縁端部がわずかに屈曲する鉢で、イタナデ・ミガキ調整される。

3308SK　414の高杯杯部は、弥生時代後期の山中式期中頃に比定される。

3309SK　415の柳ヶ坪型壺は、口縁部外面に粘土が付加されて垂下し、やや外湾する面をなしている。417はS字状口縁甕A類で、418はS字状口縁甕C類である。

3202SD　421・422はS字状口縁甕C類で、422は廻間III式後半期に比定される。

3291SX　423・424は主にミガキ調整された小型壺と高杯脚部。

3070SU　425～428・431・432は柳ヶ坪型壺の口縁部で、431・432は屈曲部が明瞭で、口縁部は短く垂直気味に立ち上がる。磨滅して文様や調整が判然としないものが多いが、口縁部内面の羽状連続刺突が２段のもの（426・428）と３段（425・431・432）がある。また427は体部に直線文と波状文が描かれ、425・426の体部の横方向の条線も直線文の可能性が高い。さらに427の底部外

面には木葉痕が見られる。429・430は外面がミガキ調整された壺体部で、底部外面に木葉痕が見られる。また429の体部上半はハケ調整後横方向のイタナデ調整が施される。437は外面がミガキ調整、内面がミガキ・イタナデ・ケズリ調整がなされる小型鉢。438の小型壺は口縁部が体部に比してやや大きく、体部から垂直に延びて端部で外反する。体部外面は縦・斜方向のミガキ調整がなされる。439～441は器台で、439は受部が上方に屈曲する。

442～447は高杯で、444の脚部上端は打ち欠かれている可能性がある。448～457はS字状口縁甕で、448がB類、他はC類である。また453は粗いハケ調整がなされ、施文も間隔が粗い工具で施されている。458は大型短頸壺で、口縁口縁部はやや内湾して上方に延びて、ヨコナデにより端部内面外頃する面をもつ。体部は球形を呈し、頸部に突帯が巡る。口縁部は外面がハケ、内面がヨコナデ・イタ調整され、体部は外内面ともイタナデまたはケズリ状のイタナデ調整がなされ、上半に直線文・波状文が描かれる。

459～461は畿内系土師器杯Aで、後代のものが混入したと思われる。３点とも外面が横方向、内面が体部上部が横方向、体部下部～底部が縦方向の丁寧なミガキ調整が施されており、460と461は同一個体の可能性もある。

462～481はく字状口縁甕と台付甕の脚台部である。466は平底甕で、底部はケズリ成形・調整によって平らな面を作り出している。体部内面はケズリ状のイタナデ調整。467の口縁部は端部が上方につまみ上げられており、体部が縦位に長い。474・475は口縁部が内湾するもので、475はイタナデ調整された丸い体部をもつ。476は平底甕の底部で、外面に螺旋状のタタキ成形・調整がなされ、底部外面には木葉痕が見られる。477は台付甕で、体部が横位の延びて楕円形を呈する。外面はハケ・ケズリ状のイタナデ、内面はケズリ状のイタナデがなされる。478・479の体部外面には、条痕状のイタナデが施されている。また464・465・480には頸部に横方向のナデ調整が施されている。

4037SU　482～494は柳ヶ坪型壺である。482・483・494の口縁段部は粘土が貼付けられて垂下する。また494は頸部に突帯が巡り、パレススタイル壺との関連が窺える。口縁部内面の羽状連続刺突は、489のみが２段で他は３段となる。体部上半には直線文と波状文が施文される。495・496はミガキ調整される二重口縁壺で、496は口縁部内面に３段の羽状連続刺突が施される。497は丁寧なミガキ調整される有段口縁壺で、頸部に幅広の突帯が巡る。498・499は壺体部下半で、499は外面がケズリ状イタナデ・ハケ調整、内面がハケ調整され、底部外面には木葉痕が見られる。500の直口壺・501のヒサゴ形壺とも丁寧な細いミガキ調整が目立つが、501は太い横方向のミガキ調整を行った後細かい縦方向のミガキ調整が行われている。505～507は細かいミガキ調整が施された鉢で、口縁部が505は有段、506は直線的、507はわずかに内湾して延びる。

512～518は高杯で、杯部がミガキ調整、脚部がミガキ・ハケ調整がなされる。519～531はく字状口縁甕で、523・529は口縁端部がわずかに上方に延びて面をもつ。また、528は頸部の屈曲はゆるやかでほぼ垂直に延び、530はゆるやかなS字状を呈し、531は内湾する。調整は519・520・521・523・528・530が、外面がハケ・イタナデ調整、内面がイタナデ・ケズリ状のイタナデ調整が施されている。522～527の体部外面には条痕状のイタナデ調整、内面にはイタナデ・ケズリ状のイタナデ調整が施されている。さらに520・527の頸部外面には横方向のナデ調整が見られる。529

は脚部が台形を呈し、端部が内面に折り返される。調整は体部外内面ともイタナデ及びケズリ状のイタナデ調整がなされる。531は体部外面がナデ・イタナデ、内面が内面がイタナデ・ケズリ状のイタナデ調整がされる。534～539はS字状口縁甕C類の口縁部～体部で、540は脚部になる。

これら土器群は廻間III式前半期に比定される。

4009SU　541の柳ヶ坪型壺は口縁外面に文様がなく、内面は2段の羽状連続刺突が施される。542は口縁端部がわずかに肥厚する太頸壺で、イタナデ・ケズリ調整がなされる。545の鉢は口縁部が内湾して有段状を呈する。細かいミガキ調整がなされる。546の鉢は口縁部がわずかに外反して延びる鉢で、ハケ・ミガキ調整がなされる。547は手捏ね状の鉢で、部分的にケズリ状のイタナデ調整が施される。543・544は壺体部下半で、543はイタナデ・ケズリ成形・調整、544がケズリ成形・調整がなされる。549～551はく字状口縁甕、552・553はS字状口縁甕C類である。

4010SU　554は短頸壺で、外面がイタナデ・ミガキ調整、内面がイタナデ・ミガキ・ケズリ調整がなされる。555の高杯は、脚部中央に柱状の充填部分が確認できる。

B区検出・撹乱・トレンチ　556は口縁部がヨコナデによってわずかにS字状をなすもので、体部外面には粗い縦方向のハケ調整と横方向の直線文が見られる。557は高台の高い有台杯身で、H-50号窯後半期に比定される。558・559は畿内系土師器で、杯Cの558内面には放射状の、底面には横方向の暗文が描かれる。

B区検出1　562・563は折り返されて有段となる口縁部をもつ壺。564はH-50号窯後半期に比定される壺蓋。565は外面にタタキ成形・調整がなされる脚部で、被熱して全体に薄く煤・炭化物が付着する。大阪湾周辺地域の製塩土器の可能性が考えられる。

B区検出2　566は口縁端部が垂直に立ち上がり面をなすもので、外面に羽状連続刺突が施され、体部にも直線文と波状文が描かれる。

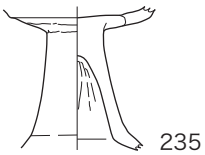
B区検出3　572はパレススタイル壺であるが､赤彩は施されていない。器面の色調は淡茶色を呈し、胎土中に雲母片を多く含んでいる。577は小型の受口状口縁甕で、丁寧なイタナデ・ナデ調整が施され、体部下端には斜位のタタキ成形・調整の痕跡が残る。また内面中位にリング状に煤・炭化物が付着するが、その他の使用痕は見られない。580はハケ・イタナデ調整された脚付短頸壺。583は大型甕の脚台部で、イタナデ調整がなされる。

2．石器・石製品

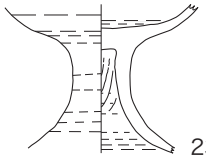
4035SI　1は竪穴建物よりA面を上に水平な状態で出土したもので、A面中央部および辺に近い部分に浅い敲打痕が見られる。石材は凝灰質砂岩で、台石のような使われ方をしていたと考えられる。

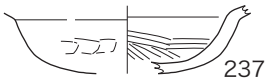
4037SU　2は上・下面、3は上面に敲打痕が見られる。4は上・下面に敲打痕があり、全体に磨痕が見られるが、平坦面をなす両側面は特に顕著である。石材は2・3は片麻岩、4は砂岩である。

トレンチ　5・6は上・下面と側面に敲打痕があり、6はわずかに磨痕も見られる。石材は5は片麻岩、6は凝灰質砂岩である。

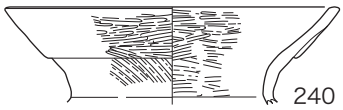

235

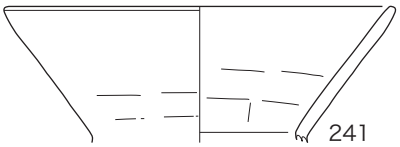
235：2060SI

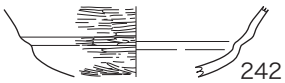

236

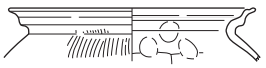

237

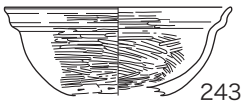
236・237：2070SI

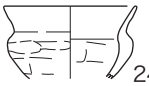

240

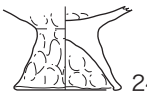

241


242


245


243

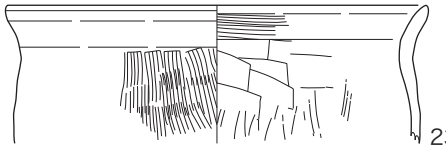

244


246

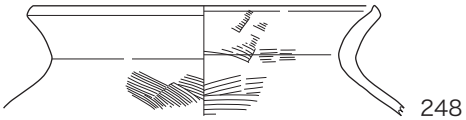

247

240～247：2260SI

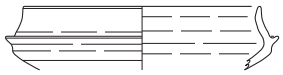

238


239

238・239：2080SI

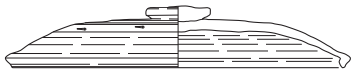

248

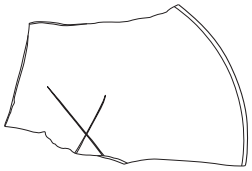
248：2400SI

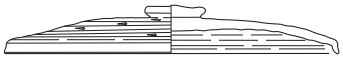

249

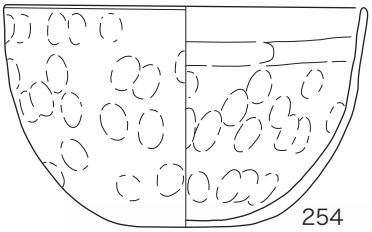
249：2401SL



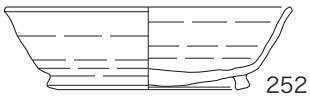

250



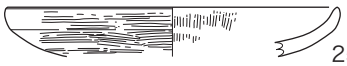

251


254



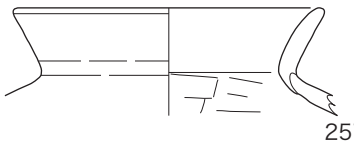

252

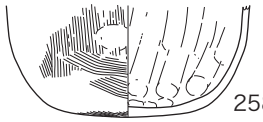

253


255


256

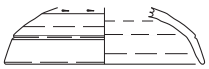
250～259：2029SK

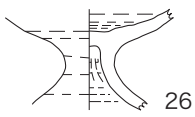

257


258


259

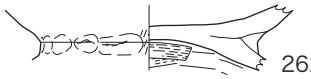



260


261

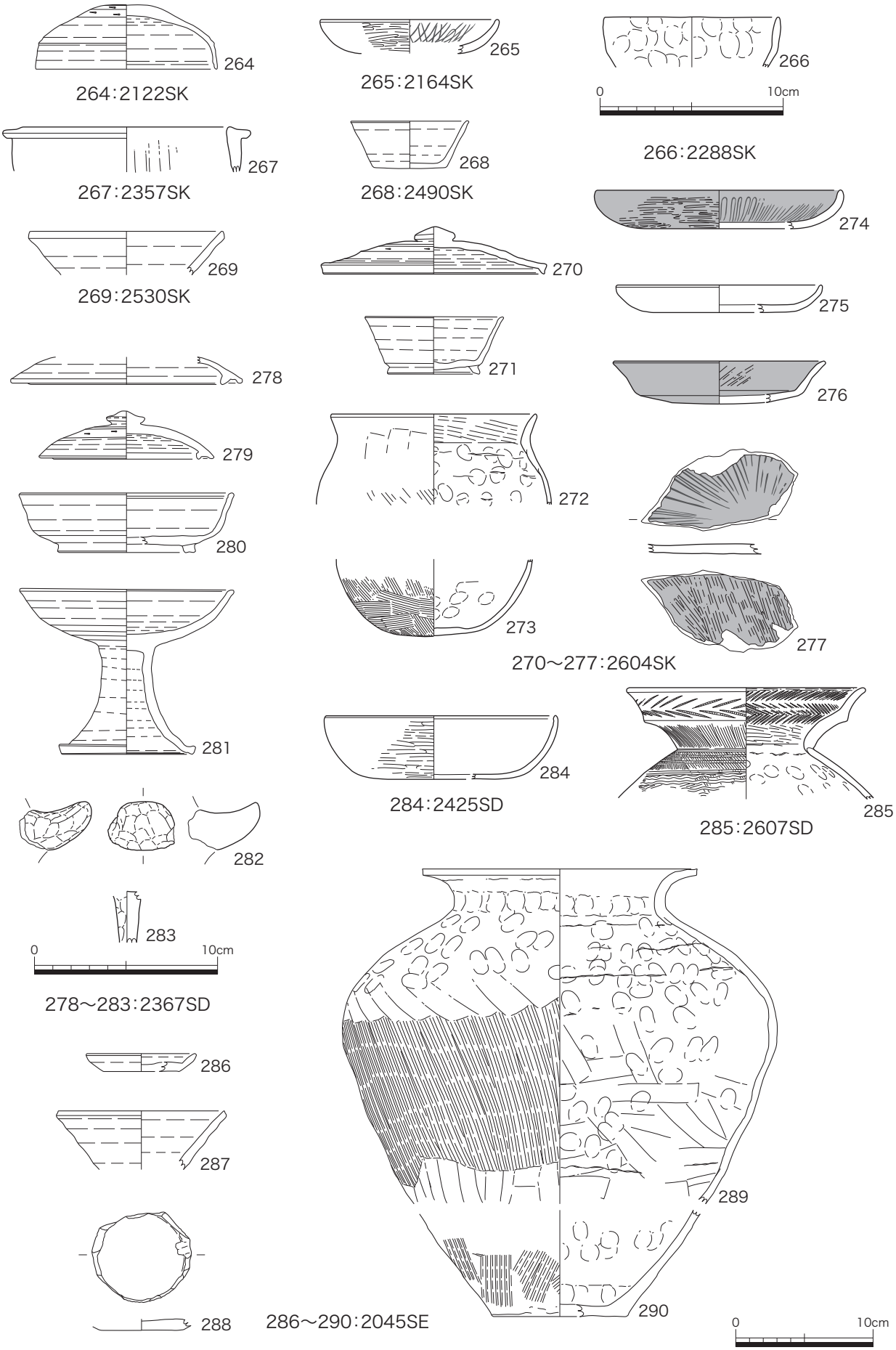

263

263：2108SK

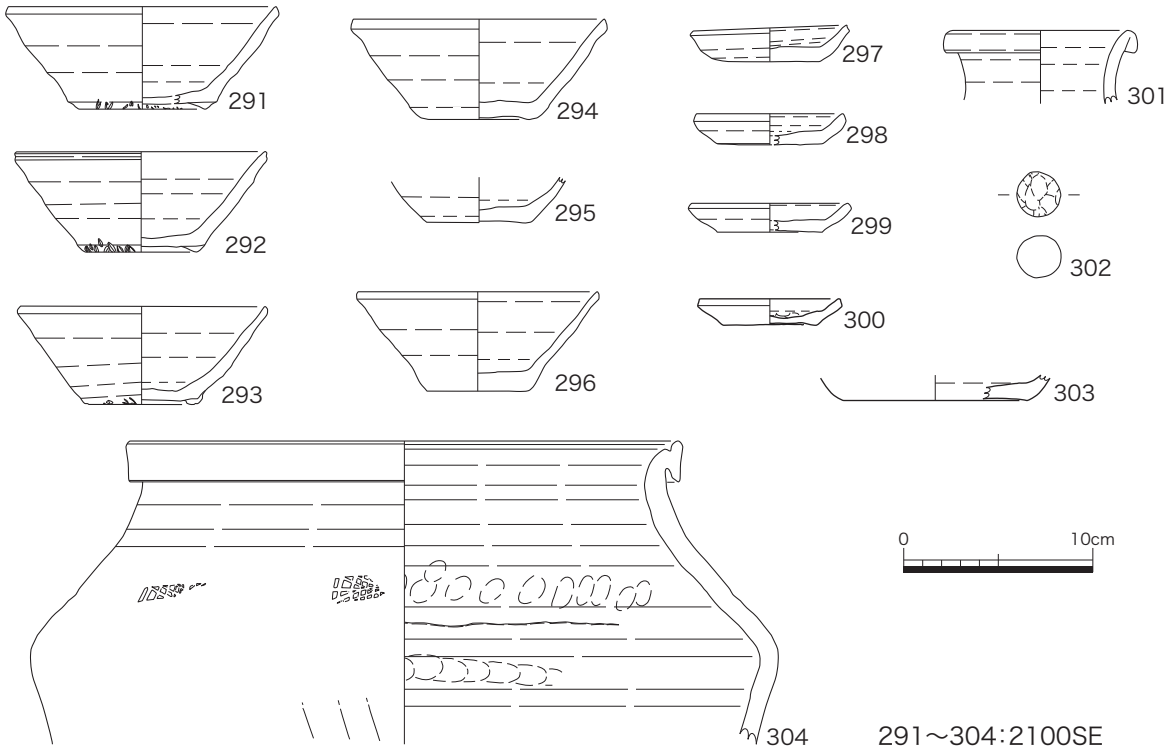

262

260～262：2030SK

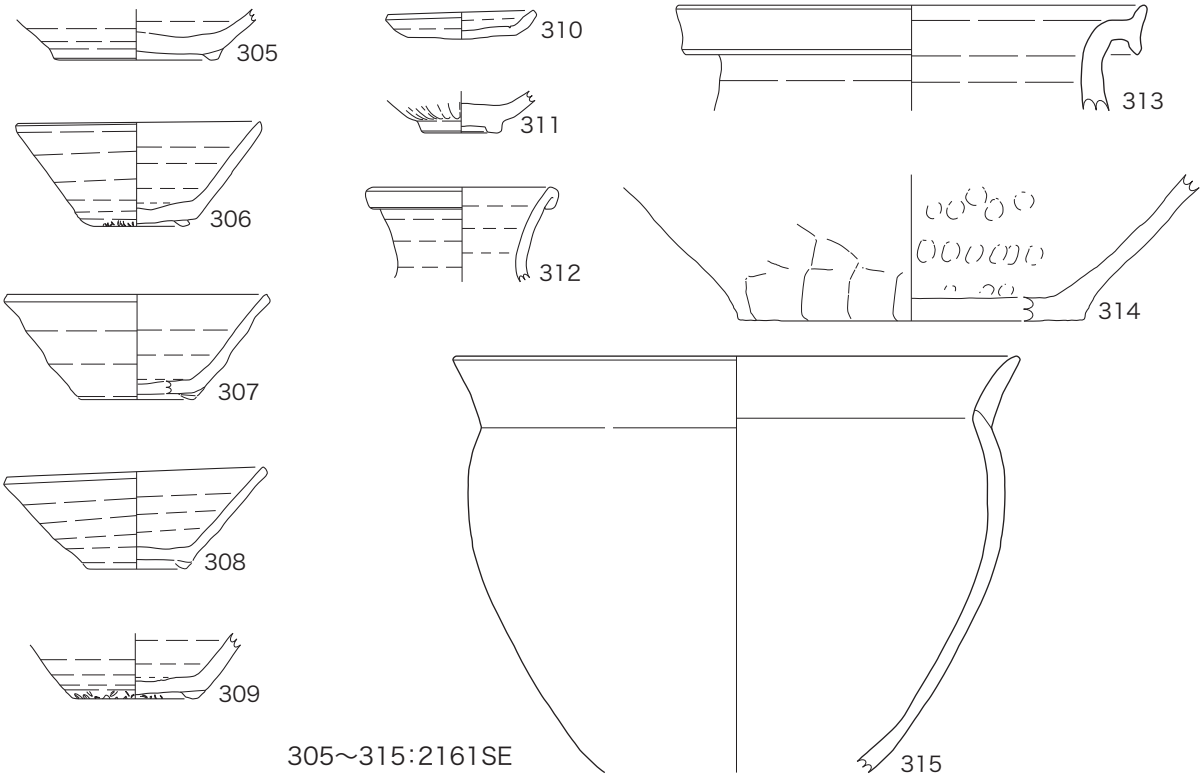
第76図　出土遺物実測図（12）　※縮尺は259・263が１/３、他は１/４



第77図　出土遺物実測図（13）　※縮尺は266・283が１/３、他は１/４



291～304:2100SE

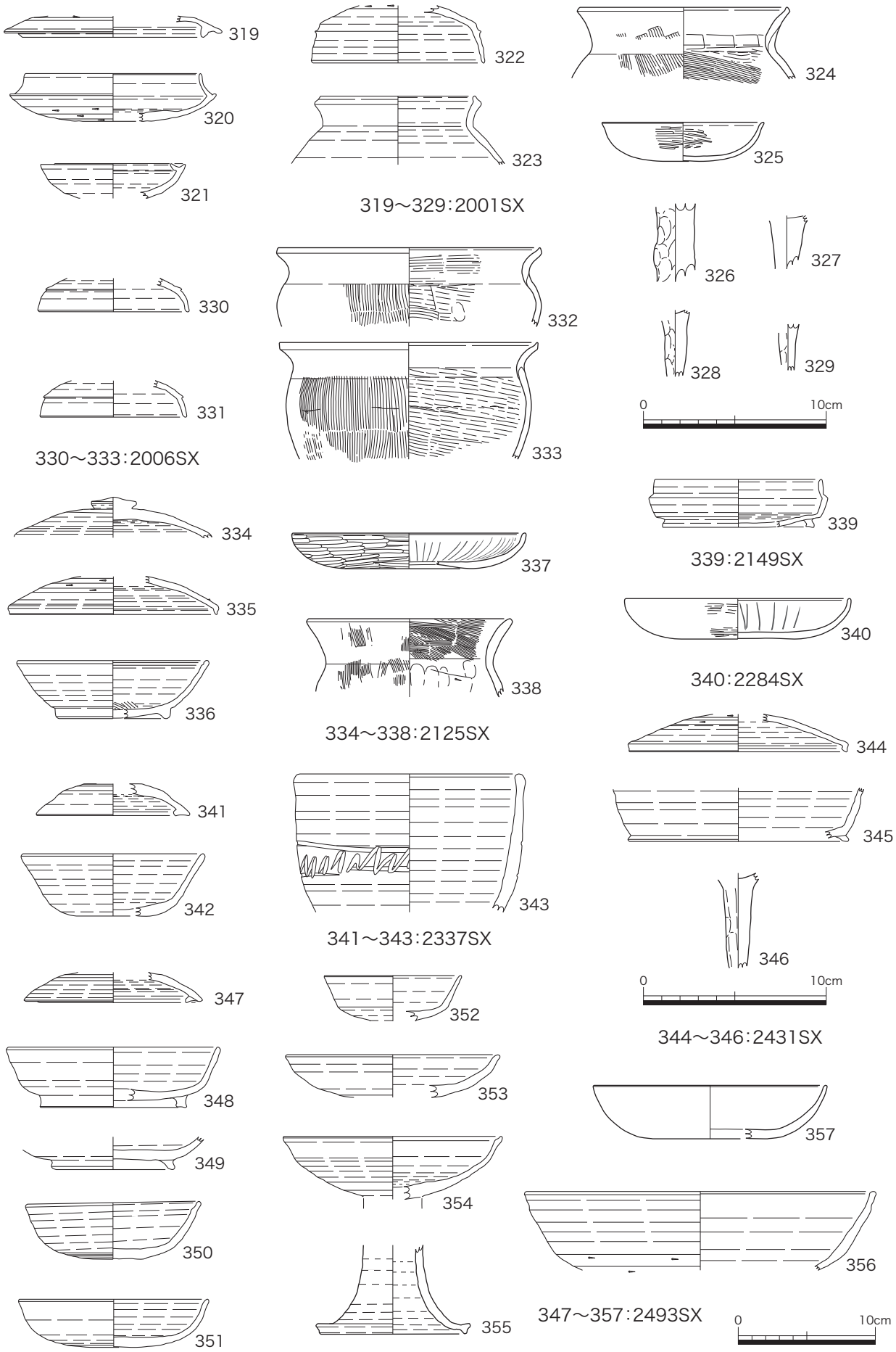


305～315:2161SE

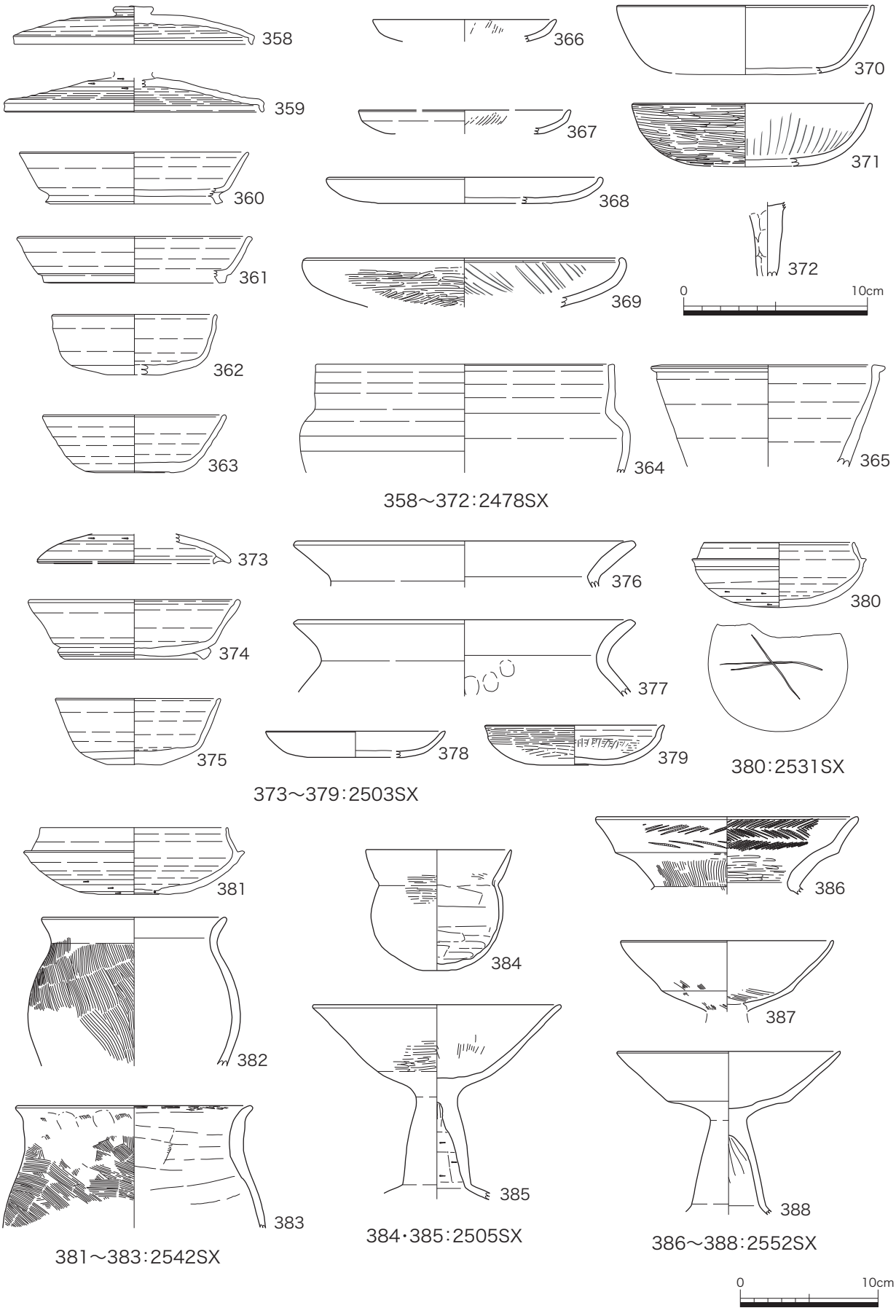


316:2171SE　　317･318:2246SE

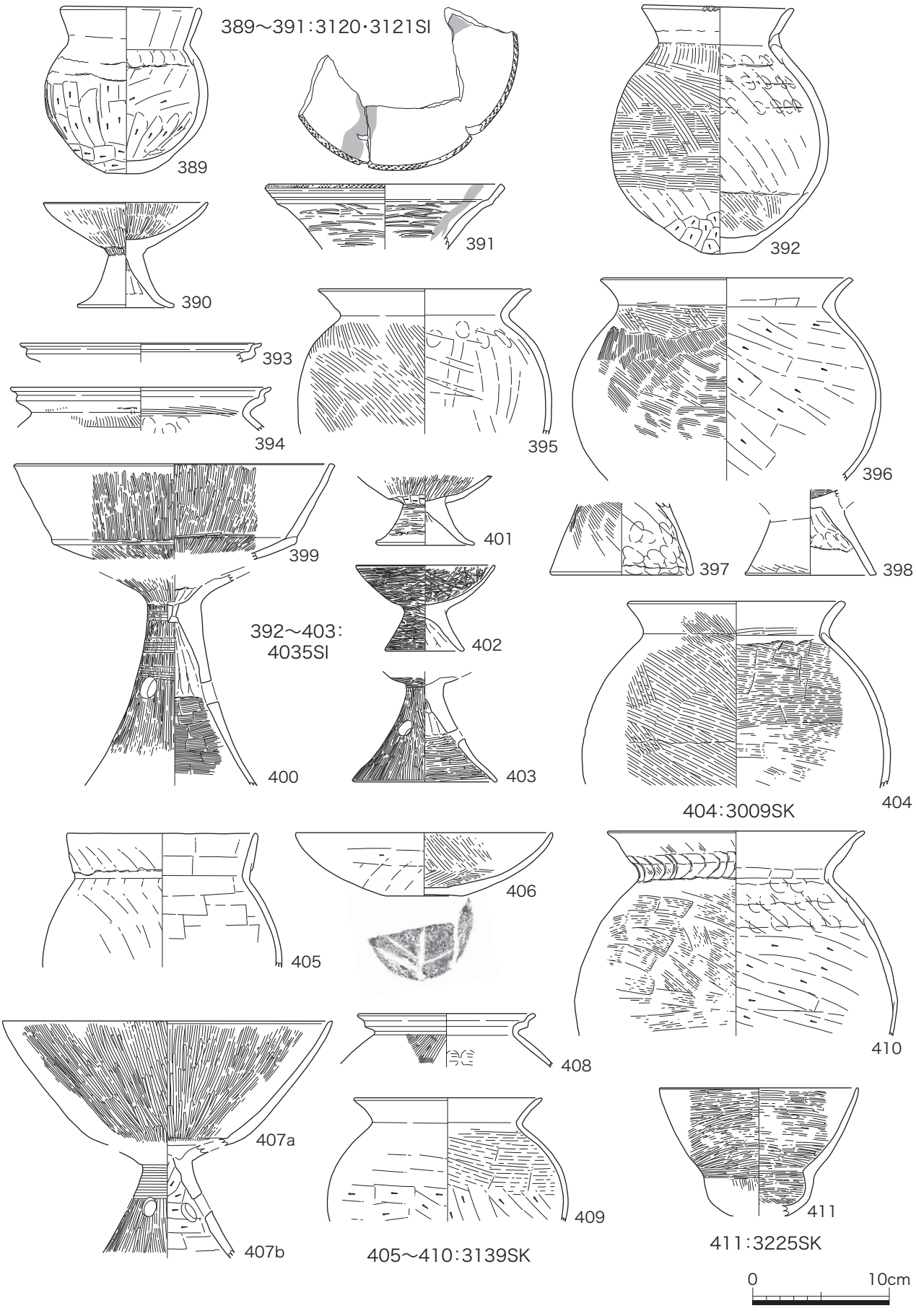
第78図　出土遺物実測図（14）　※縮尺は 1 / 4



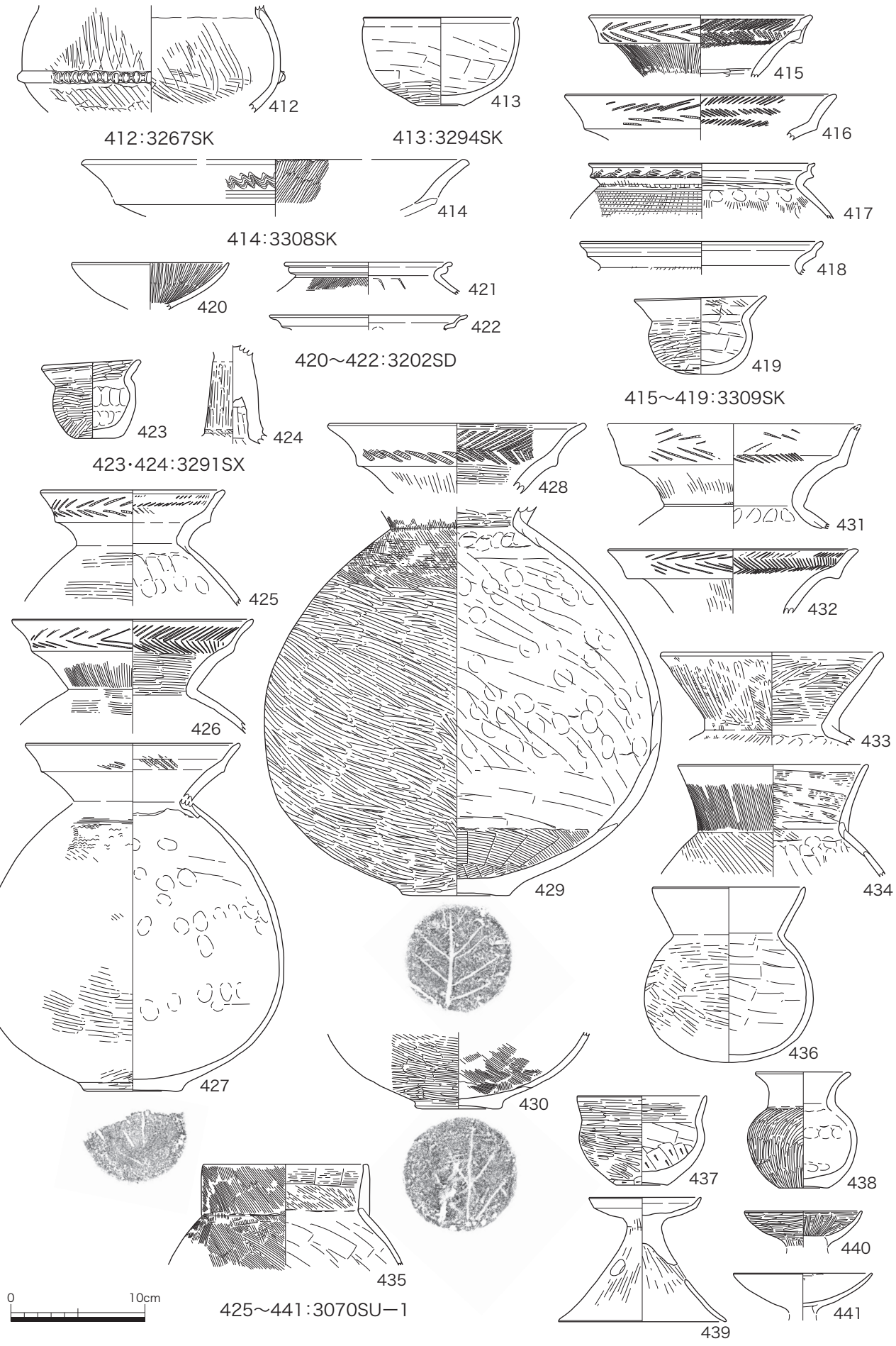
第79図　出土遺物実測図（15）　※縮尺は326～329・346が１/３、他は１/４



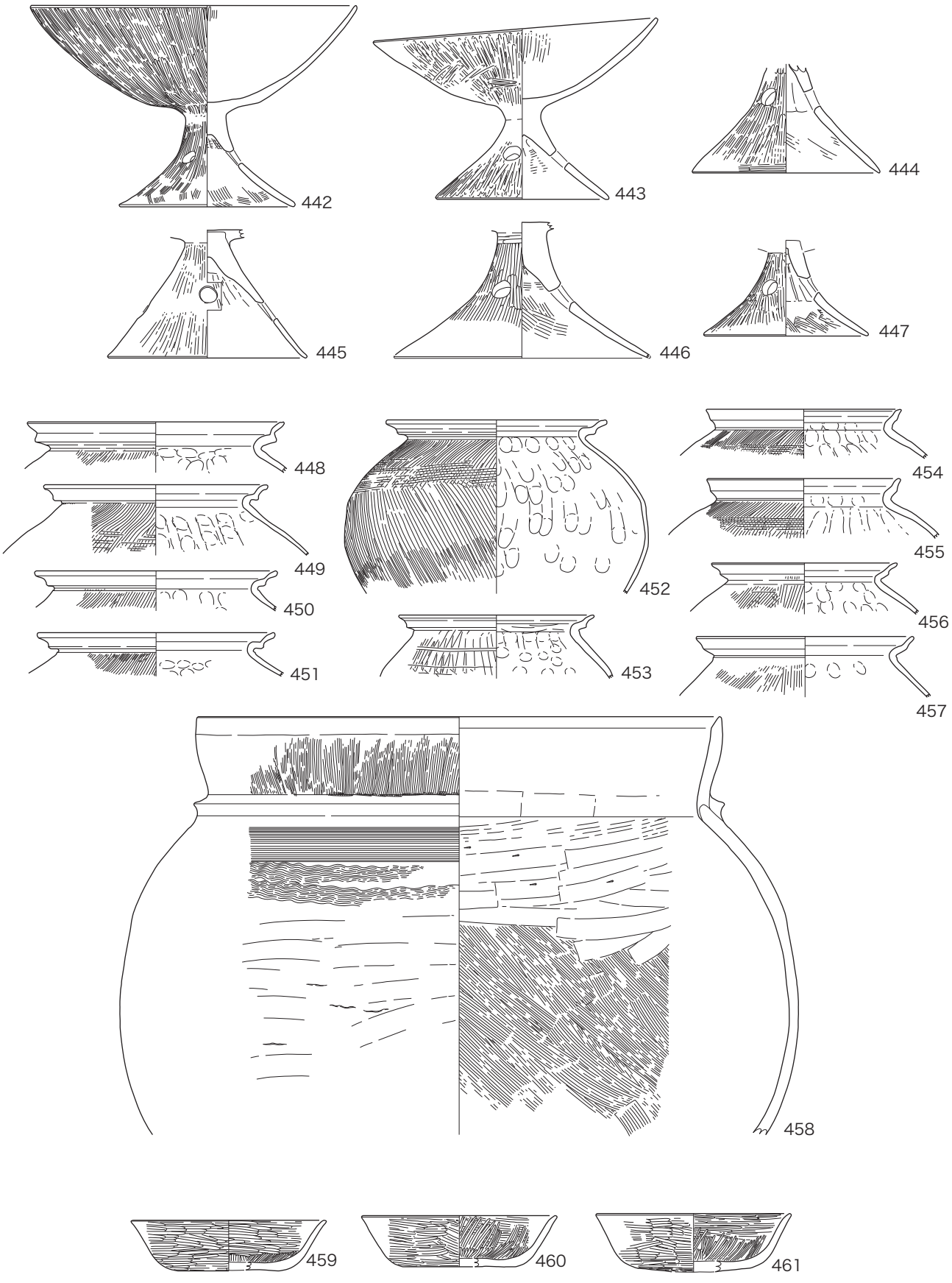
第80図　出土遺物実測図（16）　※ 縮尺は372が 1 / 3 、他は 1 / 4



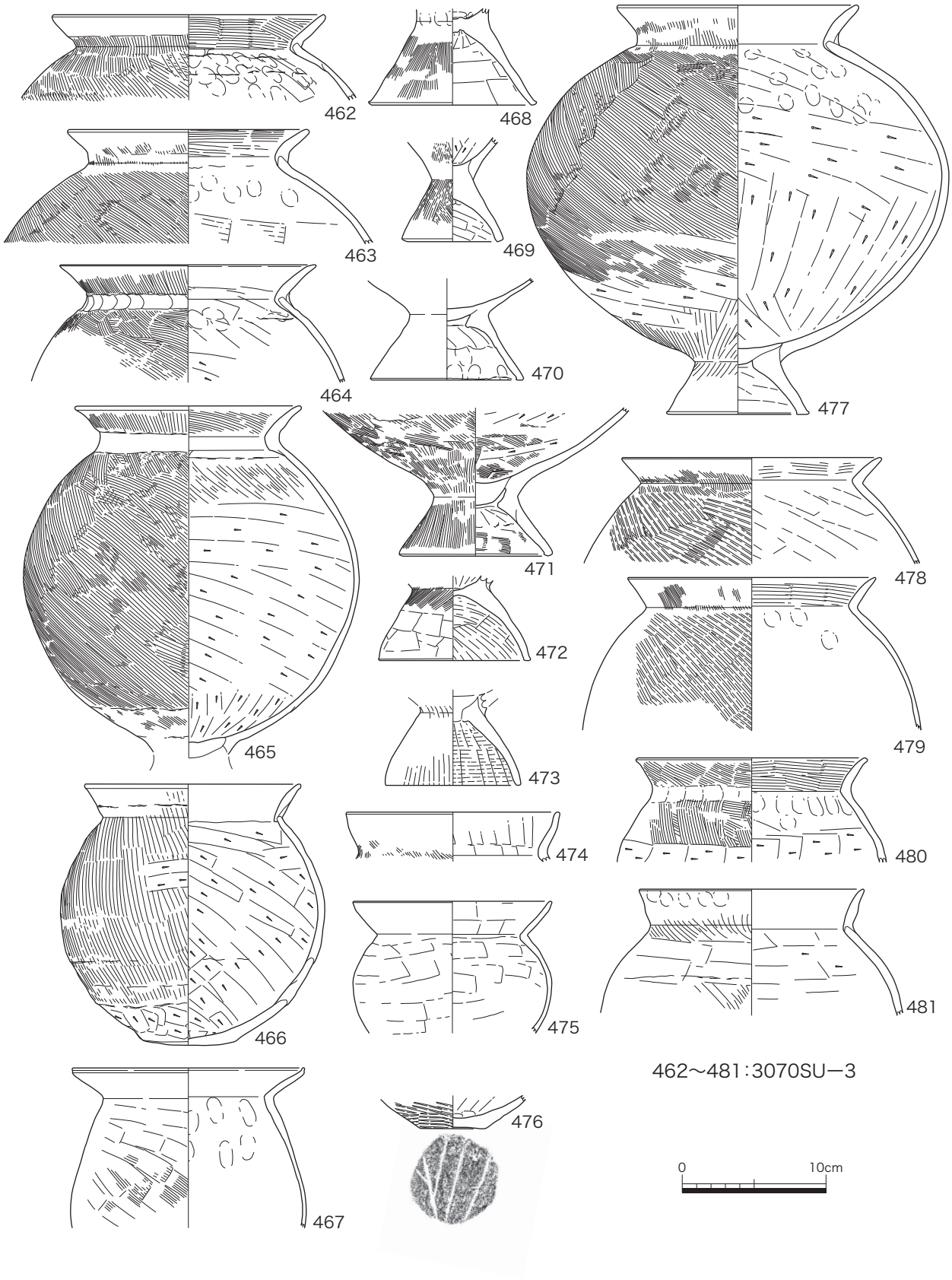
第81図　出土遺物実測図（17）　※縮尺は 1 / 4



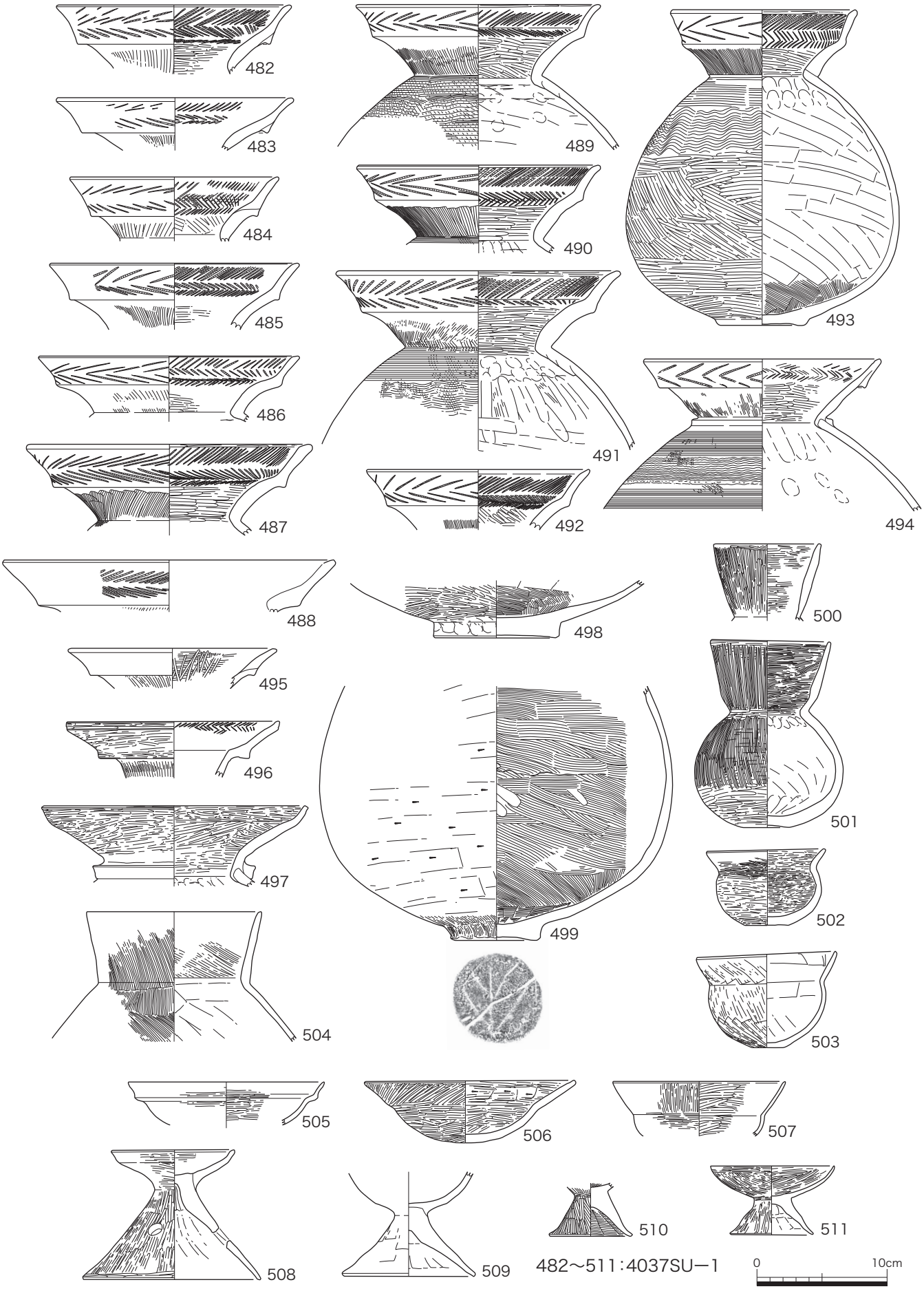
第82図　出土遺物実測図（18）　※縮尺は 1 / 4



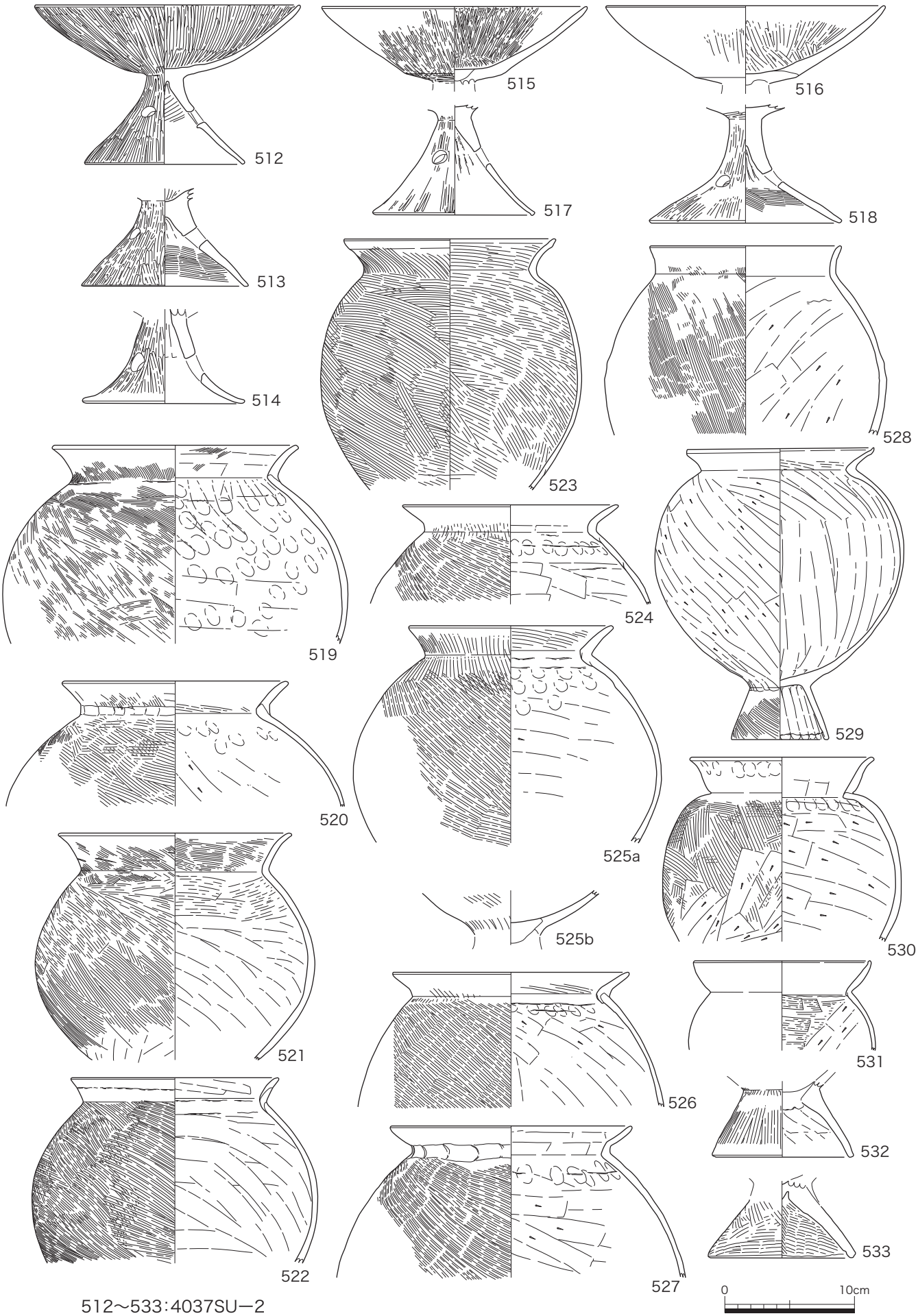
第83図　出土遺物実測図（19）　　※縮尺は 1 / 4



第84図　出土遺物実測図（20）　　※縮尺は 1 / 4

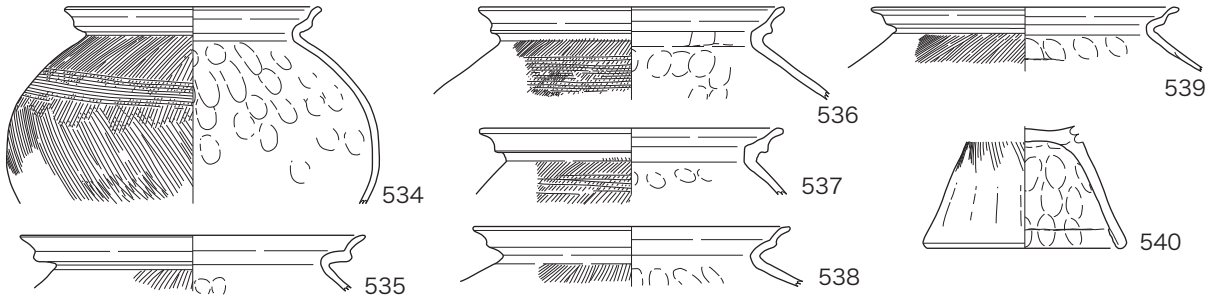


第85図　出土遺物実測図（21）　※縮尺は 1 / 4

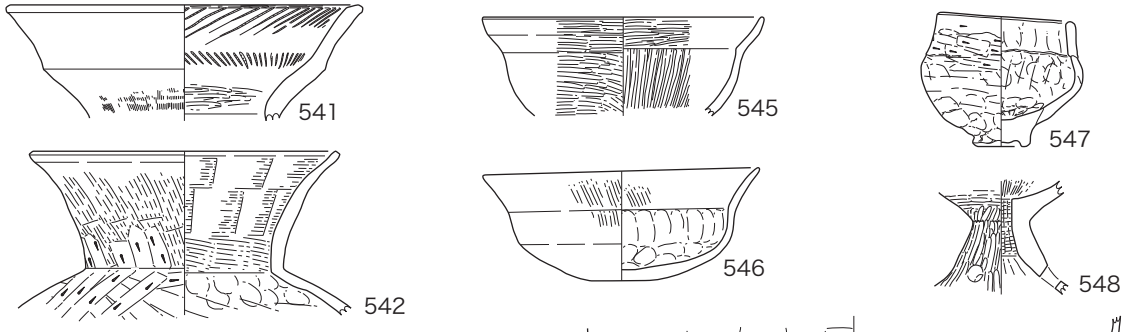


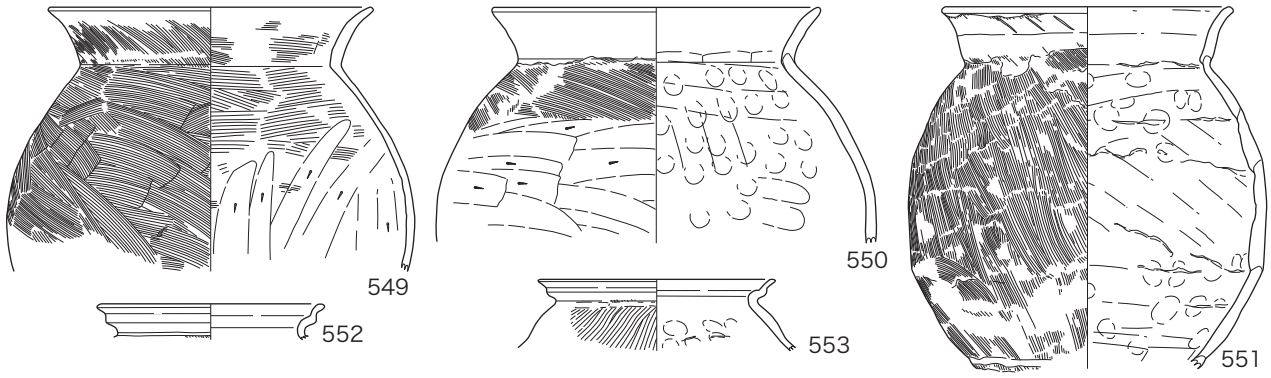
512～533：4037SU－2

第86図　出土遺物実測図（22）　※縮尺は 1 / 4

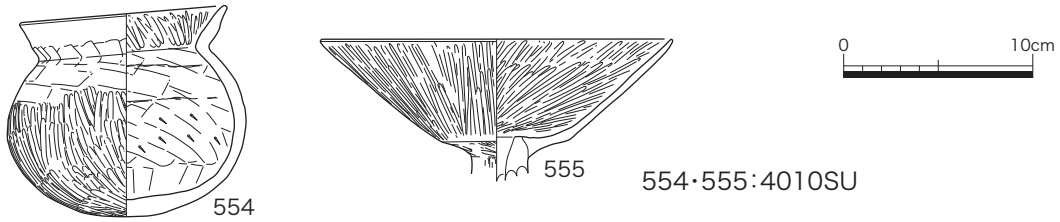


534～540：4037SU－3



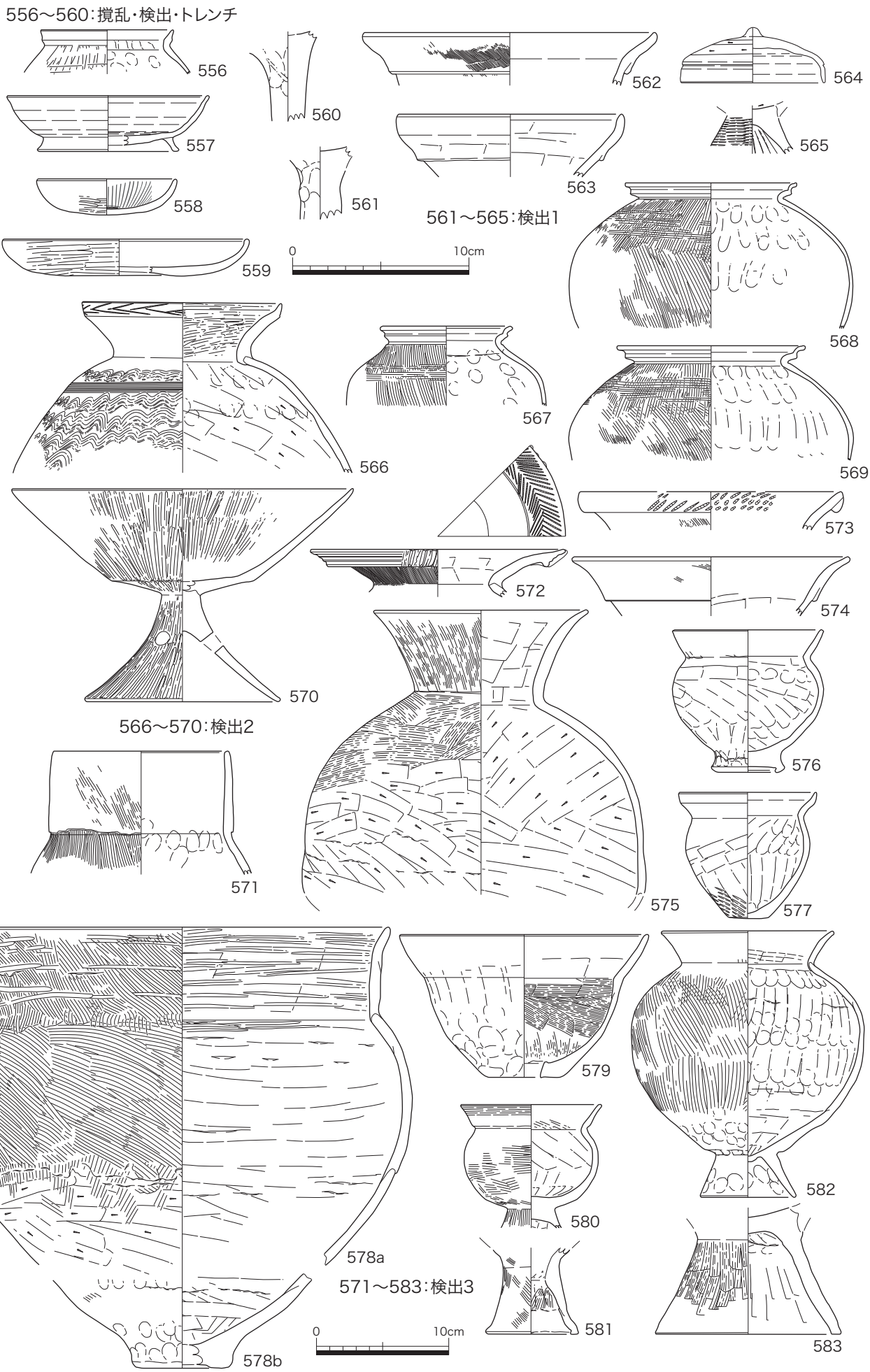


541～553：4009SU

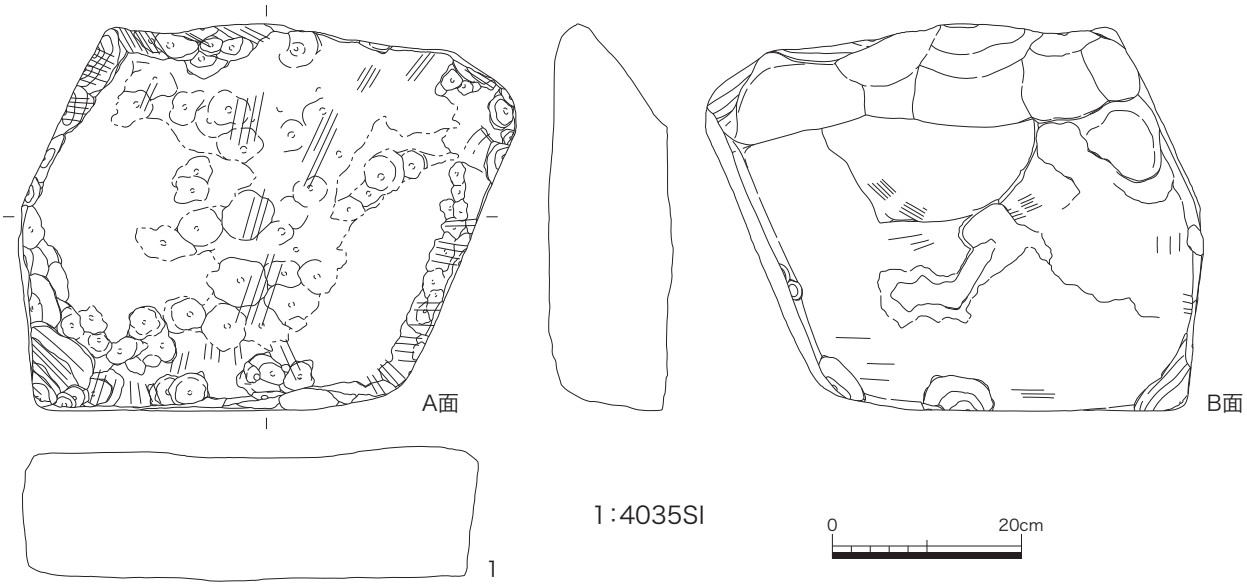


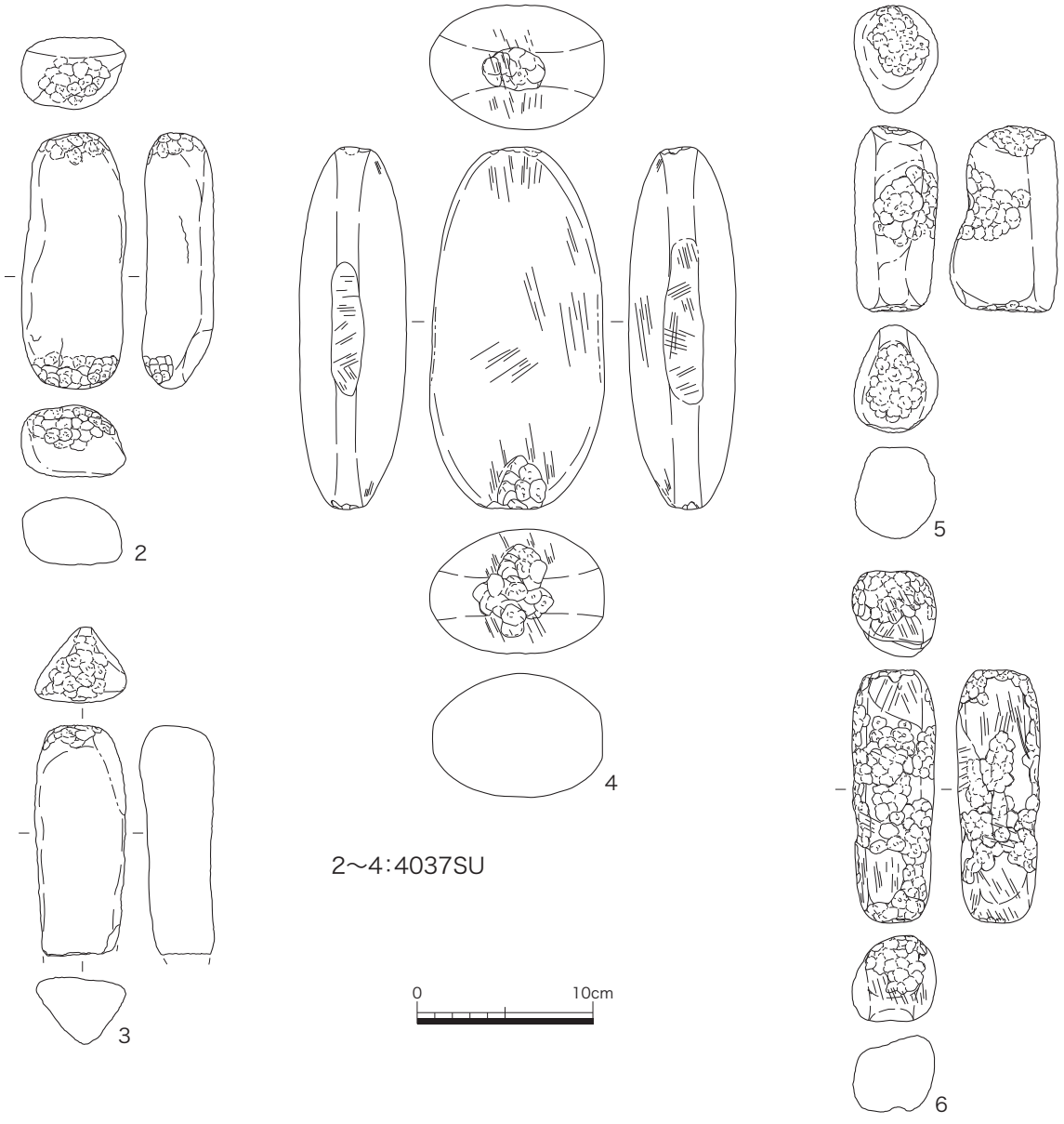
554・555：4010SU

第87図　出土遺物実測図（23）　※縮尺は 1 / 4



第88図　出土遺物実測図（24）　※縮尺は560・561：が 1 / 3 、他は 1 / 4





第89図　出土遺物実測図（25）　※縮尺は１が１/８、他は１/４

第Ⅴ章　自然科学的分析

第１節　炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

矢作川およびその支流によって形成された氾濫原の沖積地に立地する八畝畑遺跡で井戸や土坑などから出土した木材について、樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料と方法

試料は、13A区の検出２から出土した５点、040SEから出土した３点、263spから出土した２点、13B区の2045SE、2100SE、2161SE、2171SEから出土した各１点の、計14点の生材と、13B区の002SXから出土した２点、1006SU、2271SL、2401SL、2431SX、2479SX、2503SXから出土した各１点の、計８点の炭化材で、総計22点である。各試料について、樹種同定前に木取りの確認を行なった。

いずれの試料も放射性炭素年代測定が行われ、検出２の試料No.６～10と1006SUの試料No.18は古墳時代早期～前期、263spの試料No.４、５と2401SLの試料No.28は古墳時代後期、002SXの試料No.15、16と2271SLの試料No.24、2431SXの試料No.29、2479SXの試料No.30、2503SXの試料No.31は古墳時代後期～奈良時代、040SEの試料No.１～３と2045SEの試料No.11、2100SEの試料No.12、2161SEの試料No.13、2171SEの試料No.14は平安時代後期～鎌倉時代に相当する暦年代を示した。

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

３．結果

同定の結果、針葉樹であるマツ属複維管束亜属とコウヤマキ、ヒノキの３分類群、広葉樹であるヤナギ属とクリ、コナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、ツバキ属の５分類群の、計８分類群が産出した。ヒノキが最も多く７点で、ヤナギ属が５点、クヌギ節が３点、マツ属複維管束亜属とクリが各２点、コウヤマキとコナラ節、ツバキ属が各１点であった。同定結果を表１に、一覧を表２に示す。

表１　出土木材の樹種同定結果

試料の時期	古墳時代早期～前期		古墳時代後期		古墳時代後期～奈良時代					平安時代後期～鎌倉時代						合計
遺構	検出2	1006 SU	263 sp	2401 SL	002 SX	2271 SL	2431 SX	2479 SX	2503 SX	040 SE		2045 SE	2100 SE	2161 SE	2171 SE	
樹種 器種	自然木	炭化材	加工木	炭化材	炭化材					井戸枠曲物	井戸枠曲物？	井戸枠			井戸枠曲物	
マツ属複維管束亜属					2											2
コウヤマキ								1								1
ヒノキ										2	1	1	1	1	1	7
ヤナギ属	5															5
クリ			2													2
コナラ属クヌギ節		1		1		1										3
コナラ属コナラ節							1									1
ツバキ属									1							1
合計	5	1	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	22

表２　出土木材の樹種同定結果一覧

試料No.	調査区	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り	種類	年代測定番号
1	13A区	6154d	040SE	井戸枠曲物？	ヒノキ	板目	生材	PLD-27006
2	13A区	6154d	040SE	井戸枠曲物	ヒノキ	板目	生材	PLD-27007
3	13A区	6154d	040SE	井戸枠曲物	ヒノキ	板目	生材	PLD-27008
4	13A区	6050a	263sp	加工木	クリ	分割削出	生材	PLD-27009
5	13A区	6050a	263sp	加工木	クリ	分割削出	生材	PLD-27010
6	13A区	6254b	検出2	自然木	ヤナギ属	芯持丸木	生材	PLD-27011
7	13A区	6254b	検出2	自然木	ヤナギ属	芯持丸木	生材	PLD-27012
8	13A区	6254b	検出2	自然木	ヤナギ属	芯持丸木	生材	PLD-27013
9	13A区	6254b	検出2	自然木	ヤナギ属	芯持丸木	生材	PLD-27014
10	13A区	6254b	検出2	自然木	ヤナギ属	芯持丸木	生材	PLD-27015
11	13B区	6555b	2045SE	井戸枠	ヒノキ	板目	生材	PLD-27016
12	13B区	6454c	2100SE	井戸枠	ヒノキ	板目	生材	PLD-27017
13	13B区	6658c	2161SE	井戸枠	ヒノキ	板目	生材	PLD-27018
14	13B区	6657d	2171SE	井戸枠曲物	ヒノキ	板目	生材	PLD-27019
15	13A区	6452a	002SX	炭化材	マツ属複維管束亜属	割れ	炭化材	PLD-27020
16	13B区	6452a	002SX	炭化材	マツ属複維管束亜属	割れ	炭化材	PLD-27021
18	13B区	6254b	1006SU	炭化材	コナラ属クヌギ節	割れ	炭化材	PLD-27023
24	13B区	65511	2271SL	炭化材	コナラ属クヌギ節	割れ	炭化材	PLD-27029
28	13B区	6356c	2401SL	炭化材	コナラ属クヌギ節	割れ	炭化材	PLD-27033
29	13B区	6457d	2431SX	炭化材	コナラ属コナラ節	割れ	炭化材	PLD-27034
30	13B区	6356d	2479SX	炭化材	コウヤマキ	割れ	炭化材	PLD-27035
32	13B区	6457d	2503SX	炭化材	ツバキ属	割れ	炭化材	PLD-27037

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学・走査型電子顕微鏡写真を示す。

（１）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　第90図１a-１c（No.15）

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列のものと、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。どちらも材質は重硬だが、切削等の加工は容易である。

（２）コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Siebold et Zucc.　コウヤマキ科　第90図　２a-２c（No.30）

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～５列となる。分野壁孔は窓状である。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている１科１属１種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で水湿に対する耐朽性がある。

（３）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第90、91図　３a-３c（No.11）、４a-４c（No.12）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～10列となる。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

（４）ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　第91図　５a-５c（No.10）

小型の道管が単独ないし２～３個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は円形の単壁孔状となる。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、単列。

ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉大高木～灌木の広葉樹である。材は軽軟で強度が強く、切削加工などは容易である。

（５）クリ　*Castanea crenata* Siebold. et Zucc.　ブナ科　第91図　６a-６c（No.５）

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材。軸方向柔組織はいびつな線状で、道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

（６）コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　第92図　７a-７c（No.18）

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

（７）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. Prinus　ブナ科　第92図 8a-8c（No.29）

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が、火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靭で、切削加工はやや難しい。

（８）ツバキ属　*Camellia*　ツバキ科　第92図 9a-9c（No.32）

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は10段以下の階段穿孔を有する。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、１～２列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

４．考察

古墳時代早期～前期の試料では、土器集石である1006SU から出土した炭化材１点がクヌギ節であった。材は燃料材の残渣または焼けた建築材などの可能性が考えられるが、用途は不明である。クヌギ節は堅硬だが割裂性が良く、建築材によく利用され、火持ちが良いため薪炭材としても多く利用される樹種である（伊東ほか，2011）。検出２から出土した自然木５点は、いずれもヤナギ属であった。ヤナギ属は湿地や河川の近くなど水気の多い場所を好んで生育する樹種である（伊東ほか，2011）。古墳時代早期～前期頃の八畝畑遺跡周辺には水気の多い場所があり、ヤナギ属が生育していたと考えられる。

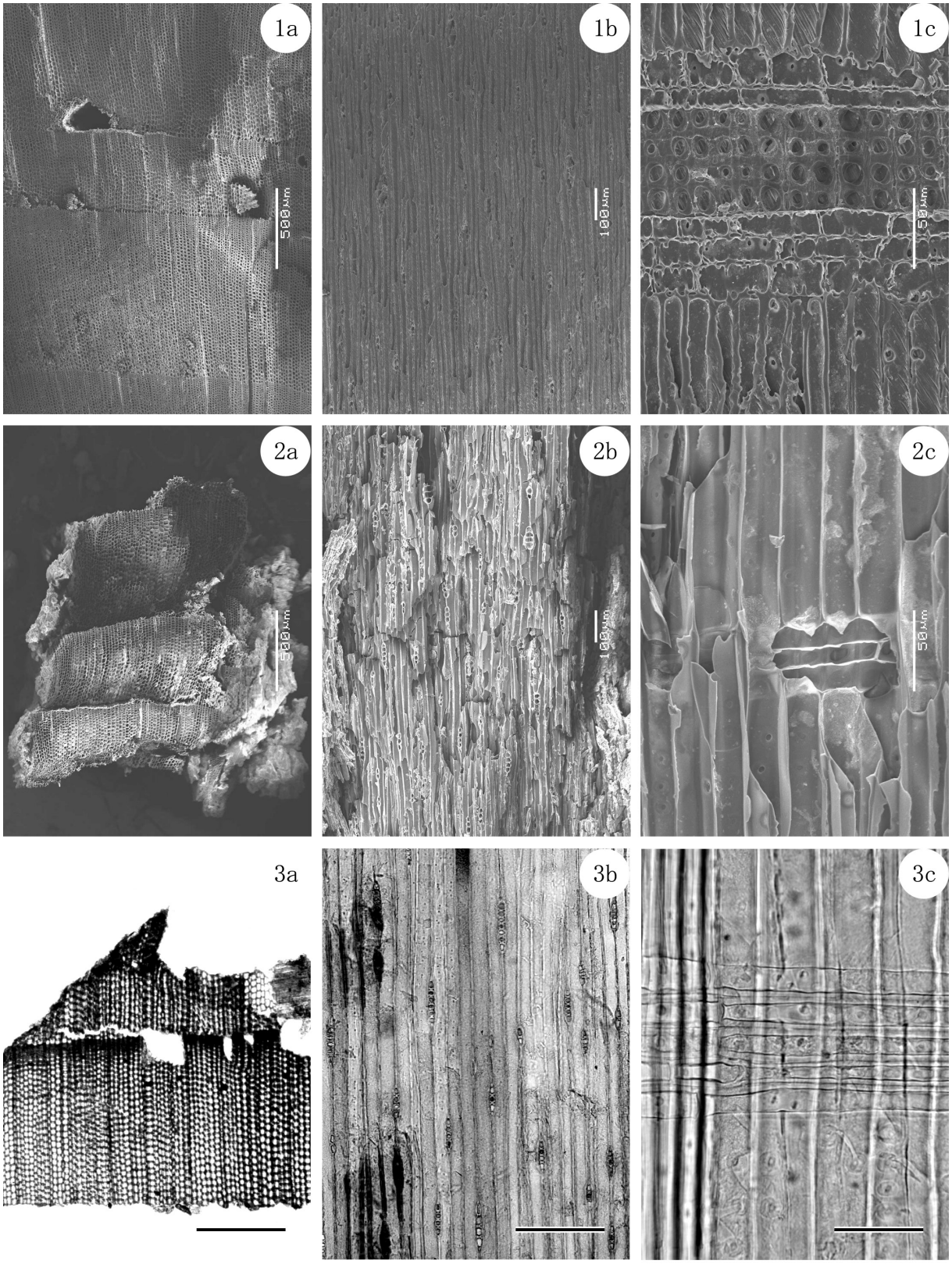
古墳時代後期の試料では、ピットである263sp から出土した加工木２点がクリであった。クリは堅硬だが割裂性が良く、耐朽性が高い（伊東ほか，2011）。炉跡である2401SL から出土した炭化材１点は、クヌギ節であった。これは燃料材として利用されていた可能性がある。

古墳時代後期～奈良時代の試料では、炉跡である2271SL から出土した炭化材１点がクヌギ節であった。燃料材として利用されていた可能性がある。不明遺構である002SX から出土した炭化材２点はマツ属複維管束亜属、2431SX の炭化材はコナラ節、2503SX の炭化材はツバキ属であった。いずれも材の用途は不明である。マツ属複維管束亜属は油分が多く、燃焼性が高いという材質を持つ（伊東ほか，2011）。コナラ節とツバキ属の性質はクヌギ節と同様で、薪炭材としても、建築材としても有用な樹種である（伊東ほか，2011）。

平安時代後期～鎌倉時代の試料では、井戸跡である040SE、2045SE、2100SE、2161SE、2171SE の井戸枠曲物および井戸枠がいずれもヒノキであった。ヒノキは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持つ。井戸の構築材にヒノキを選択利用していた可能性がある。

参考文献

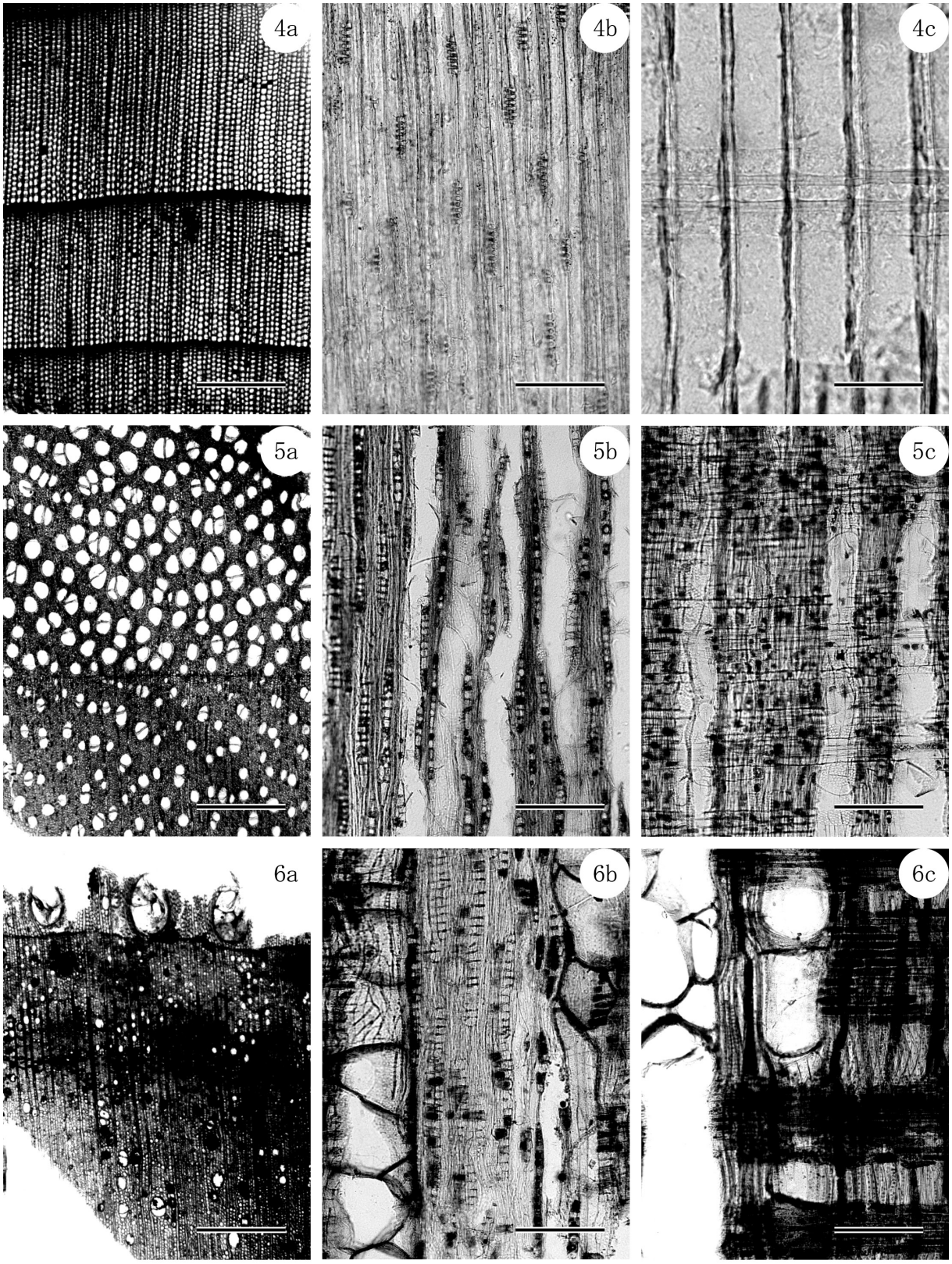
伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.



第90図　出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真（１）

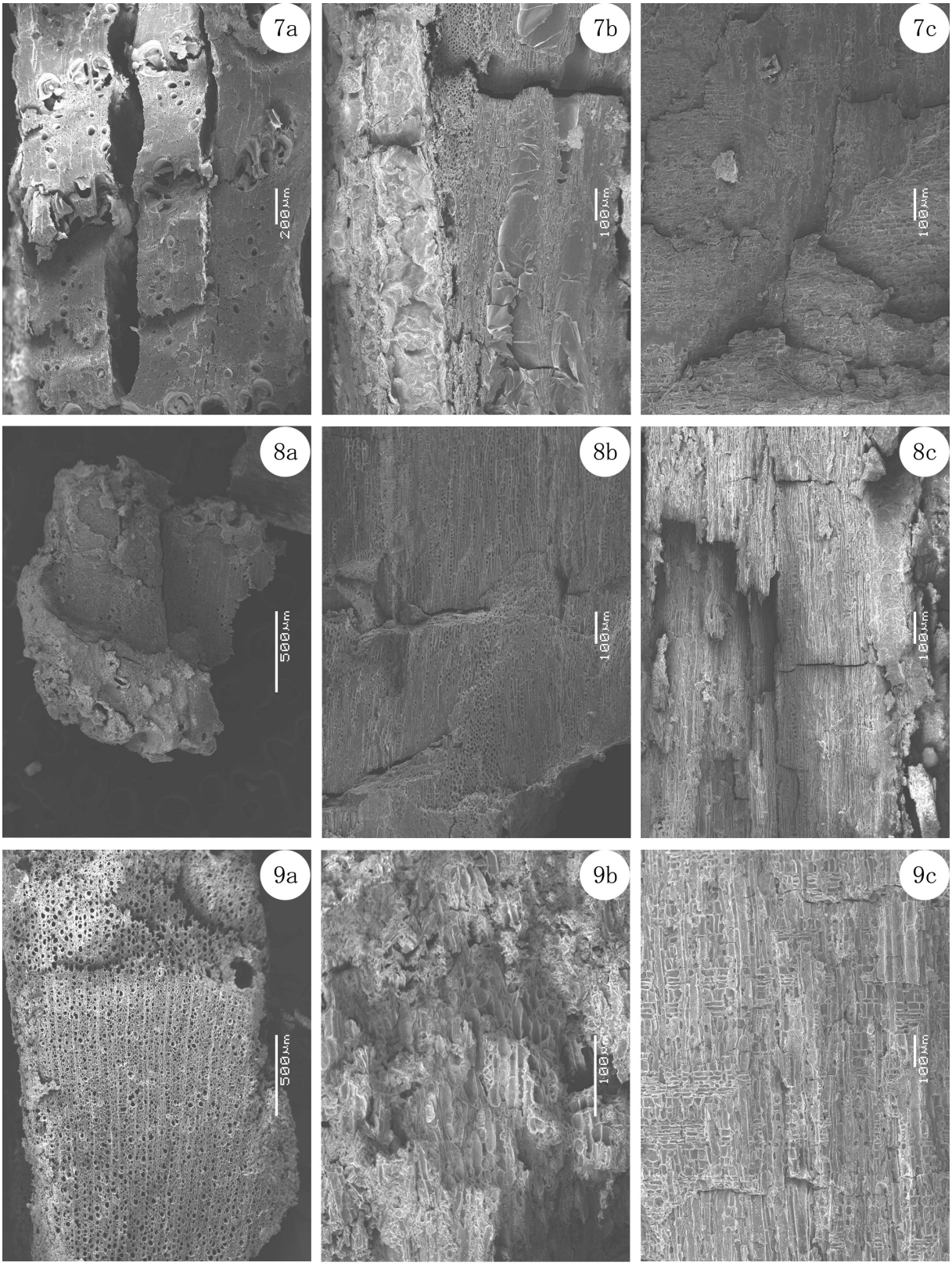
１a-１c. マツ属複維管束亜属（No.15）、２a-２c. コウヤマキ（No.30）、３a-３c. ヒノキ（No.11）

a：横断面（スケール =500 μm）、b：接線断面（スケール =200 μm）、c：放射断面（スケール =50 μm）



第91図　出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真（２）

４a-４c. ヒノキ（No.12)、５a-５c. ヤナギ属（No.10)、６a-６c. クリ（No.５）a：横断面（スケール =500 μm)、b：接線断面（スケール =200 μm)、c：放射断面（スケール = ４ ：50 μm・ ５ ・ ６ ：200 μm)



第92図　出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真（３）

７a-７c. コナラ属クヌギ節（No.18）、８a-８c. コナラ属コナラ節（No.29）、９a-９c. ツバキ属（No.32）

第２節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也

１．はじめに

愛知県岡崎市に位置する八畝畑遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお一部の試料について、樹種同定が行われている（樹種同定の項参照）。

２．試料と方法

試料は、13A 区から14点、13B 区から18点の、計32点である。

13A 区では、検出２から５点の生材（試料 No.６～10：PLD-27011～27015）、040SE から３点の生材（試料 No.１～３：PLD-27006～2708）、263SP から２点の生材（試料 No.４・５：PLD-27009・27010）、002SX から２点の炭化材（試料 No.15・16：PLD-27020・27021）、1006SU から１点の炭化材（試料 No.18：PLD-27023）、131SX から１点の炭化草本類（試料 No.17：PLD-27022）を対象とした。

13B 区では、2045SE、2100SE、2161SE、2171SE から出土した生材各１点（試料 No.11～14：PLD-27016～27019）、2125SX、2271SL、2401SL、2431SX、2479SX、2503SX から出土した炭化材各１点（試料 No.23～24・28～30・32：PLD-27028～27029・27033～27035・27037）、2001SX、2367SD、2400SI、2493SX で出土した炭化草本類各１点（試料 No.19・26・27・31：PLD-27024・27031・27032・27036）、2071SL と2006SX から出土した炭化物各１点（試料 No.21・33：PLD-27026・27462）、2061SL、2081SL、2319SX から出土した土壌各１点（試料 No.20・22・25：PLD-27025・27027・27030）を対象とした。

試料の一部では、樹種同定が行われている。試料 No.15・16はマツ属複維管束亜属、試料 No.30はコウヤマキ、試料 No.１・２・３・11・13・14はヒノキ、試料 No.12はサワラ、試料 No.６・７・８・９・10はヤナギ属、試料 No.４・５はクリ、試料 No.18・24・28はコナラ属クヌギ節、試料 No.29はコナラ属コナラ節、試料 No.32はツバキ属であった。

試料 No.６～10の生材と、試料 No.16・24の炭化材では最終形成年輪が残っていたが、他の生材および炭化材では、最終形成年輪は残っていなかった。測定試料の情報、調製データは表３-１～３-３のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

３．結果

表４-１～４-３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を

丸めて表示した^{14}C 年代を、第93図にマルチプロット図を、第94～98図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

以下、２σ暦年代範囲（確率95.4％）に着目して結果を整理する。また測定結果を、マルチプロット図で示す（第93図）。なお、暦年代と考古学編年との対応関係については、縄文時代は小林（2008）、小林編（2008）、工藤（2012）、弥生時代は小林（2009）、山本（2007）、古墳時代は赤塚（2009）を参照した。

2061SL の試料 No.20（PLD-27025）は、763-538 cal BC（95.4％）を示した。これは、縄文時代晩期後半に相当する。

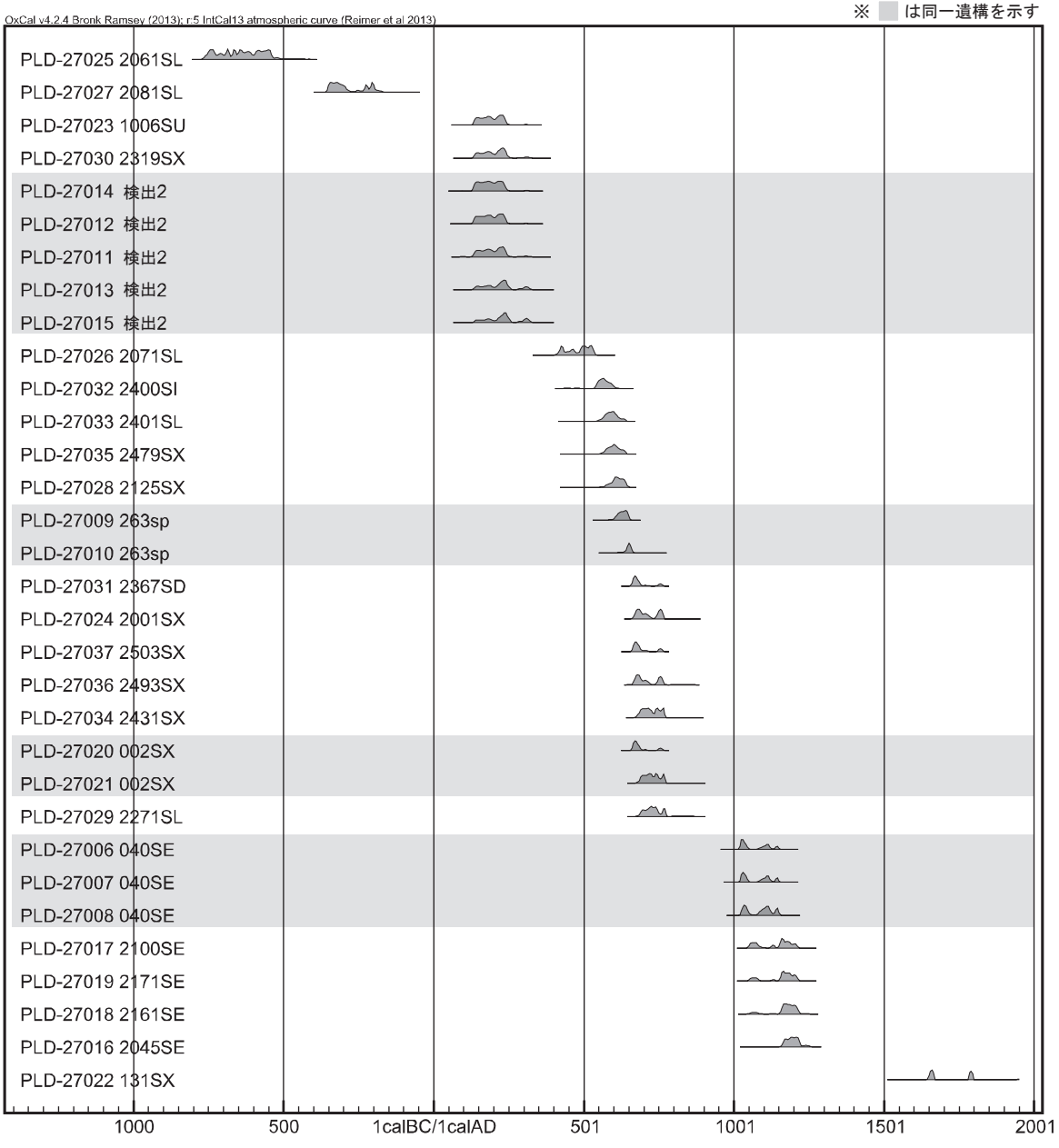
2081SL の試料 No.22（PLD-27027）は、357-282 cal BC（63.4％）、258-246 cal BC（2.2％）、236-180 cal BC（29.8％）を示した。これは弥生時代中期に相当する。

1006SU の試料 No.18（PLD-27023）は、134-240 cal AD（95.4％）、2319SX の試料 No.25（PLD-27030）は、133-251 cal AD（95.4％）、検出２では、試料 No. 9（PLD-27014）は132-239 cal AD（95.4％）、試料 No. 7（PLD-27012）は134-240 cal AD（95.4％）、試料 No. 6（PLD-27011）は133-245 cal AD（95.4％）となり、２世紀前半～３世紀中頃の暦年代を示した。また検出２の試料 No. 8（PLD-27013）は134-257 cal AD（87.1％）および298-319 cal AD（8.3％）、試料 No.10（PLD-27015）は136-258 cal AD（80.4％）および284-322 cal AD（15.0％）となり、２世紀前半～４世紀前半の暦年代を示した。これらは、古墳時代早期～前期に相当する。なお試料の最終形成年輪は、試料 No. 6 ～10の生材では残っていたが、試料 No.18の炭化材では残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料

No.18は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

2071SLの試料No.21（PLD-27026）は、415-537 cal AD（95.4％）で、５世紀前半～６世紀前半の暦年代を示した。これは古墳時代中期～後期に相当する。

2400SIの試料No.27（PLD-27032）は536-609 cal AD（95.4％）、2006SXの試料No.33（PLD-27462）は549-623 cal AD、2401SLの試料No.28（PLD-27033）は556-637 cal AD（95.4％）、2479SXの試料No.30（PLD-27035）は564-640 cal AD（95.4％）、2125SXの試料No.23（PLD-27028）は573-645 cal AD（95.4％）、263spでは、試料No.４（PLD-27009）は601-654 cal AD（95.4％）、試料No.５（PLD-27010）は617-665 cal AD（95.4％）を示し、６～７世紀代の暦年代を示した。これは古墳時代後期に相当する。なお、試料No.27の炭化草本類



第93図　マルチプロット図

では、測定結果が枯死・伐採年代を示すが、試料No.４・５の生材、試料No.23・28・30の炭化材では最終形成年輪が残っておらず、枯死・伐採年代よりも古い年代であると考えられる。

2367SDの試料No.26（PLD-27031）は656-710 cal AD（85.2％）および746-764 cal AD（10.2％）、2001SXの試料No.19（PLD-27024）は665-721 cal AD（63.0％）および741-768 cal AD（32.4％）、2503SXの試料No.32（PLD-27037）は657-712 cal AD（79.8％）および745-765 cal AD（15.6％）、2493SXの試料No.31（PLD-27036）は664-717 cal AD（65.7％）および742-767 cal AD（29.7％）、2431SXの試料No.29（PLD-27034）は681-770 cal AD（95.4％）、002SXでは、試料No.15（PLD-27020）は656-711 cal AD（83.5％）および746-764 cal AD（11.9％）、試料No.16（PLD-27021）は685-772 cal AD（95.4％）、2271SLの試料No.24（PLD-27029）は680-776 cal AD（95.4％）で、７～８世紀代を示した。これらは、古墳時代後期～奈良時代に相当する。

参考文献

赤塚次郎（2009）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代．日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26 回大会研究機発表要旨集」：14-20，日本文化財科学会．

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（１）, 337-360.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学２　歴史のものさし」：257-269，同成社．

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82，雄山閣．

小林達雄編（2008）総覧縄文土器．1322p，アム・プロモーション．

工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―．373p，神泉社．

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C 年代編集委員会編「日本先史時代の14C 年代」：３-20，日本第四紀学会．

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D.L., Hogg, A. G., Hughen, K.A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J. R., Staff, R.A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（４）, 1869-1887.

山本直人（2007）東海・北陸における弥生時代の開始年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第２巻　縄文時代から弥生時代へ」：35-44，雄山閣．

表３-１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27006	調査区：13A区 グリッド：6154ｄ 遺構：040SE 試料No.1	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27007	調査区：13A区 グリッド：6154ｄ 遺構：040SE 試料No.2	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27008	調査区：13A区 グリッド：6154ｄ 遺構：040SE 試料No.3	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27009	調査区：13A区 グリッド：6050a 遺構：263sp 試料No.4	種類：生材（クリ） 試料の性状：部位不明 器種：加工木 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27010	調査区：13A区 グリッド：6050a 遺構：263sp 試料No.5	種類：生材（クリ） 試料の性状：部位不明 器種：加工木 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27011	調査区：13A区 グリッド：6254b 遺構：検出2 試料No.6	種類：生材（ヤナギ属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：流木 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27012	調査区：13A区 グリッド：6254b 遺構：検出2 試料No.7	種類：生材（ヤナギ属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：流木 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27013	調査区：13A区 グリッド：6254b 遺構：検出2 試料No.8	種類：生材（ヤナギ属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：流木 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27014	調査区：13A区 グリッド：6254b 遺構：検出2 試料No.9	種類：生材（ヤナギ属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：流木 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27015	調査区：13A区 グリッド：6254b 遺構：検出2 試料No.10	種類：生材（ヤナギ属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：流木 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27016	調査区：13B区 グリッド：6555b 遺構：2045SE 試料No.11	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27017	調査区：13B区 グリッド：6454c 遺構：2100SE 試料No.12	種類：生材（サワラ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

表３-２　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27018	調査区：13B区 グリッド：6658c 遺構：2161SE 試料No.13	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27019	調査区：13B区 グリッド：6657b 遺構：2171SE 試料No.14	種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27020	調査区：13A区 グリッド：6452a 遺構：002SX 試料No.15	種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27021	調査区：13A区 グリッド：6452a 遺構：002SX 試料No.16 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27022	調査区：13A区 グリッド：6153c 遺構：131SX 試料No.17 遺物No.サンプル1	種類：炭化草本類 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27023	調査区：13A区 グリッド：6254b 遺構：1006SU 試料No.18 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27024	調査区：13B区 グリッド：6557d 遺構：2001SX 試料No.19 遺物No.サンプル1	種類：炭化草本類 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27025	調査区：13B区 グリッド：6356d 遺構：2061SL 試料No.20 遺物No.サンプル1	種類：土壌 状態：wet	湿式篩分：106μm 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD-27026	調査区：13B区 グリッド：6558c 遺構：2071SL 試料No.21 遺物No.サンプル1	種類：炭化物 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.5N,塩酸：1.2N）
PLD-27027	調査区：13B区 グリッド：6453c 遺構：2081SL 試料No.22 遺物No.サンプル1	種類：土壌 状態：dry	湿式篩分：106μm 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD-27028	調査区：13B区 グリッド：6454d 遺構：2125SX 試料No.23 遺物No.サンプル1	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27029	調査区：13B区 グリッド：6551l 遺構：2271SL 試料No.24 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

表３-３　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27030	調査区：13B区 グリッド：6657c 遺構：2319SX 試料No.25 遺物No.サンプル1	種類：土壌 状態：dry	湿式篩分：106μm 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD-27031	調査区：13B区 グリッド：6558c 遺構：2367SD 試料No.26 遺物No.サンプル1	種類：炭化草本類 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27032	調査区：13B区 グリッド：6557a 遺構：2400SI 試料No.27 遺物No.サンプル1	種類：炭化草本類 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27033	調査区：13B区 グリッド：6356c 遺構：2401SL 試料No.28 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27034	調査区：13B区 グリッド：6457d 遺構：2431SX 試料No.29 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27035	調査区：13B区 グリッド：6356d 遺構：2479SX 試料No.30 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（コウヤマキ） 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27036	調査区：13B区 グリッド：6457d 遺構：2493SX 試料No.31 遺物No.サンプル1	種類：炭化草本類 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27037	調査区：13B区 グリッド：6457d 遺構：2503SX 試料No.32 遺物No.サンプル1	種類：炭化材（ツバキ属） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27462	調査区：13B区 グリッド：6454d 遺構：2006SX 試料No.33	種類：炭化物 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

表４-１　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

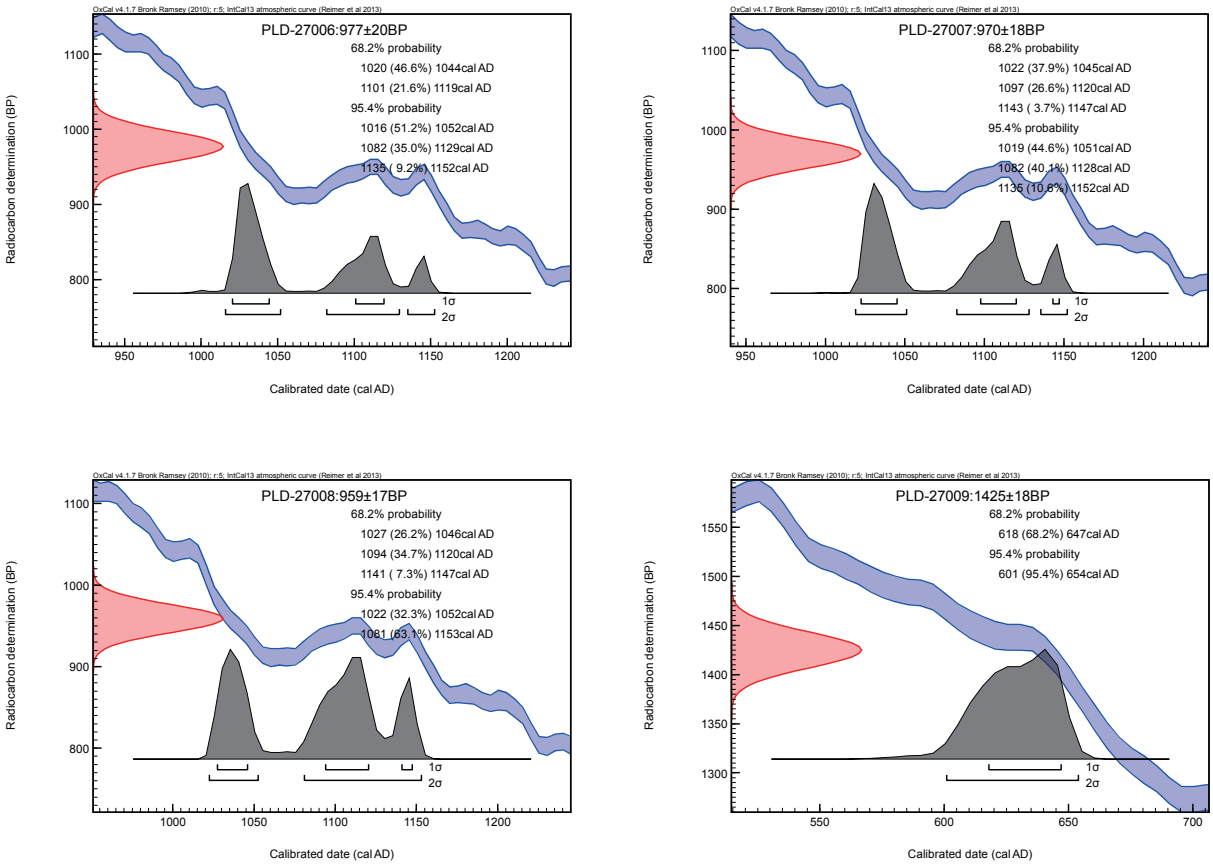
測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-27006 040SE 試料No.1	-24.18±0.18	977±20	975±20	1020AD(46.6%)1044AD 1101AD(21.6%)1119AD	1016AD(51.2%)1052AD 1082AD(35.0%)1129AD 1135AD(9.2%)1152AD
PLD-27007 040SE 試料No.2	-24.22±0.14	970±18	970±20	1022AD(37.9%)1045AD 1097AD(26.6%)1120AD 1143AD(3.7%)1147AD	1019AD(44.6%)1051AD 1082AD(40.1%)1128AD 1135AD(10.6%)1152AD
PLD-27008 040SE 試料No.3	-22.42±0.16	959±17	960±15	1027AD(26.2%)1046AD 1094AD(34.7%)1120AD 1141AD(7.3%)1147AD	1022AD(32.3%)1052AD 1081AD(63.1%)1153AD
PLD-27009 263sp 試料No.4	-26.05±0.14	1425±18	1425±20	618AD(68.2%)647AD	601AD(95.4%)654AD
PLD-27010 263sp 試料No.5	-25.62±0.13	1390±18	1390±20	641AD(68.2%)660AD	617AD(95.4%)665AD
PLD-27011 検出2 試料No.6	-27.13±0.14	1813±18	1815±20	143AD(10.3%)155AD 168AD(25.1%)195AD 209AD(32.8%)239AD	133AD(95.4%)245AD
PLD-27012 検出2 試料No.7	-28.99±0.14	1817±18	1815±20	142AD(11.7%)155AD 168AD(26.8%)195AD 209AD(29.8%)236AD	134AD(95.4%)240AD
PLD-27013 検出2 試料No.8	-29.01±0.17	1799±19	1800±20	144AD(5.6%)154AD 168AD(17.0%)195AD 210AD(45.6%)252AD	134AD(87.1%)257AD 298AD(8.3%)319AD
PLD-27014 検出2 試料No.9	-28.72±0.11	1822±19	1820±20	140AD(15.8%)157AD 167AD(28.6%)196AD 208AD(23.8%)231AD	132AD(95.4%)239AD
PLD-27015 検出2 試料No.10	-31.12±0.12	1795±19	1795±20	145AD(2.1%)150AD 170AD(12.2%)194AD 211AD(45.4%)255AD 301AD(8.5%)316AD	136AD(80.4%)258AD 284AD(15.0%)322AD
PLD-27016 2045SE 試料No.11	-25.81±0.12	850±19	850±20	1170AD(6.2%)1174AD 1183AD(62.0%)1217AD	1158AD(92.1%)1226AD 1231AD(3.3%)1245AD
PLD-27017 2100SE 試料No.12	-25.10±0.14	887±19	885±20	1054AD(21.3%)1078AD 1153AD(44.6%)1190AD 1199AD(2.3%)1202AD	1046AD(28.7%)1090AD 1121AD(6.7%)1140AD 1147AD(59.9%)1215AD
PLD-27018 2161SE 試料No.13	-25.37±0.18	869±19	870±20	1163AD(68.2%)1206AD	1054AD(5.7%)1078AD 1152AD(89.7%)1220AD
PLD-27019 2171SE 試料No.14	-24.40±0.13	879±19	880±20	1155AD(68.2%)1210AD	1050AD(16.2%)1084AD 1126AD(2.3%)1136AD 1151AD(76.9%)1218AD

表４-２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

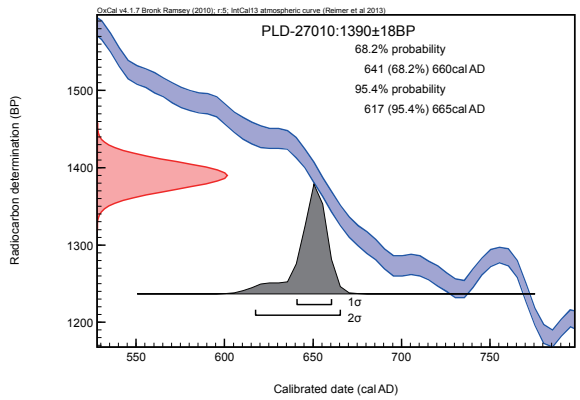
測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-27020 002SX 試料No.15	-25.81±0.19	1321±17	1320±15	661AD(68.2%)688AD	656AD(83.5%)711AD 746AD(11.9%)764AD
PLD-27021 002SX 試料No.16	-25.86±0.17	1261±17	1260±15	693AD(61.3%)748AD 762AD(6.9%)768AD	685AD(95.4%)772AD
PLD-27022 131SX 試料No.17	-26.72±0.13	229±16	230±15	1654AD(42.1%)1665AD 1785AD(26.1%)1793AD	1646AD(55.0%)1670AD 1780AD(40.4%)1800AD
PLD-27023 1006SU 試料No.18	-27.73±0.14	1816±17	1815±15	143AD(11.0%)155AD 168AD(26.6%)195AD 209AD(30.6%)237AD	134AD(95.4%)240AD
PLD-27024 2001SX 試料No.19	-23.85±0.20	1298±17	1300±15	670AD(34.7%)695AD 700AD(9.2%)710AD 746AD(24.3%)764AD	665AD(63.0%)721AD 741AD(32.4%)768AD
PLD-27025 2061SL 試料No.20	-19.54±0.21	2479±17	2480±15	752BC(12.1%)730BC 692BC(5.0%)682BC 669BC(5.3%)659BC 651BC(19.4%)612BC	763BC(95.4%)538BC
PLD-27026 2071SL 試料No.21	-27.31±0.20	1593±17	1595±15	420AD(13.3%)433AD 460AD(5.0%)466AD 489AD(49.9%)533AD	415AD(95.4%)537AD
PLD-27027 2081SL 試料No.22	-19.68±0.15	2183±17	2185±15	351BC(55.2%)300BC 227BC(2.9%)224BC 210BC(10.1%)200BC	357BC(63.4%)282BC 258BC(2.2%)246BC 236BC(29.8%)180BC
PLD-27028 2125SX 試料No.23	-26.15±0.18	1453±17	1455±15	599AD(68.2%)636AD	573AD(95.4%)645AD
PLD-27029 2271SL 試料No.24	-26.40±0.16	1253±17	1255±15	695AD(5.4%)700AD 710AD(53.3%)746AD 764AD(9.5%)771AD	680AD(95.4%)776AD
PLD-27030 2319SX 試料No.25	-20.31±0.14	1808±17	1810±15	144AD(7.4%)154AD 169AD(22.1%)195AD 210AD(38.7%)242AD	133AD(95.4%)251AD
PLD-27031 2367SD 試料No.26	-28.63±0.14	1323±17	1325±15	661AD(68.2%)686AD	656AD(85.2%)710AD 746AD(10.2%)764AD
PLD-27032 2400SI 試料No.27	-11.81±0.14	1506±17	1505±15	545AD(68.2%)584AD	536AD(95.4%)609AD
PLD-27033 2401SL 試料No.28	-29.33±0.19	1474±18	1475±20	570AD(68.2%)610AD	556AD(95.4%)637AD

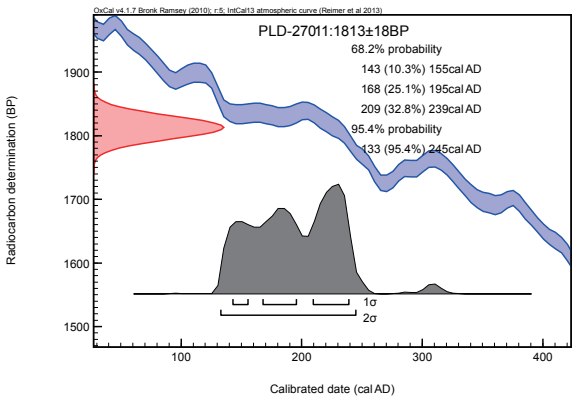
表４-３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

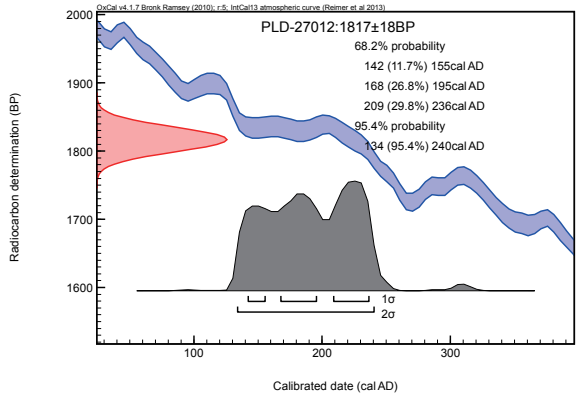
測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-27034 2431SX 試料No.29	-26.48±0.16	1269±17	1270±15	690AD(45.1%)723AD 740AD(14.9%)751AD 761AD(8.2%)767AD	681AD(95.4%)770AD
PLD-27035 2479SX 試料No.30	-25.45±0.15	1466±17	1465±15	575AD(68.2%)620AD	564AD(95.4%)640AD
PLD-27036 2493SX 試料No.31	-27.76±0.16	1302±17	1300±15	668AD(44.1%)694AD 747AD(24.1%)763AD	664AD(65.7%)717AD 742AD(29.7%)767AD
PLD-27037 2503SX 試料No.32	-24.78±0.15	1317±17	1315±15	662AD(63.6%)689AD 753AD(4.6%)758AD	657AD(79.8%)712AD 745AD(15.6%)765AD
PLD-27462 2006SX 試料No.33	-11.77±0.16	1481±16	1480±15	567AD(68.2%)605AD	549AD(95.4%)623AD

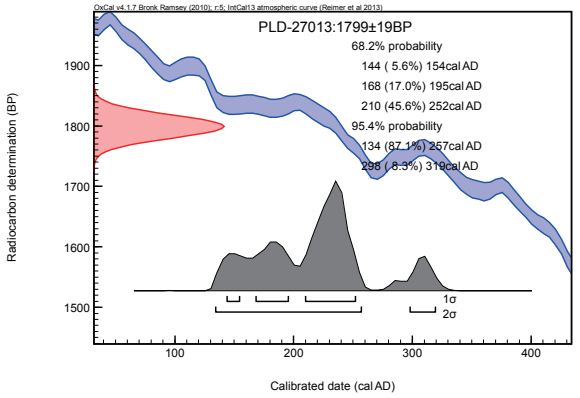


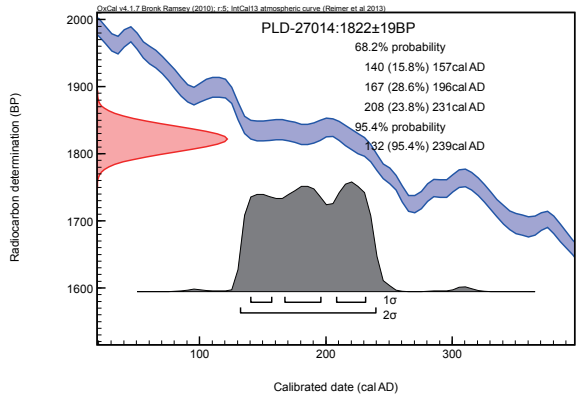
第94図　暦年較正結果（１）

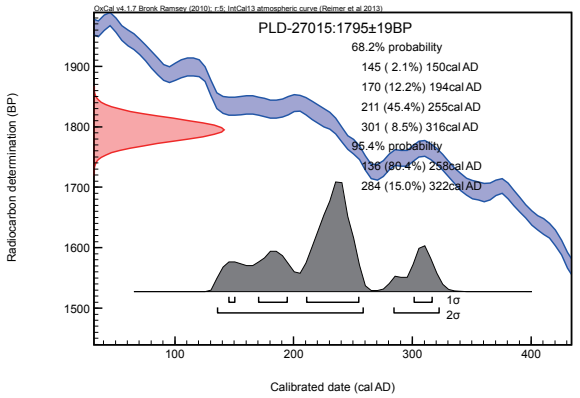


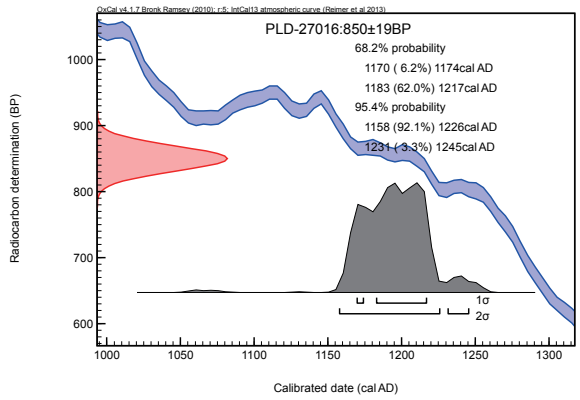


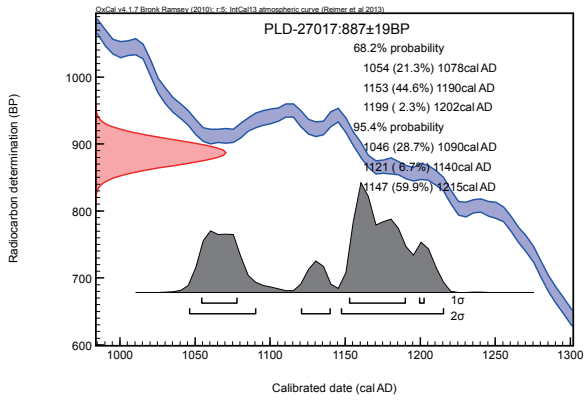




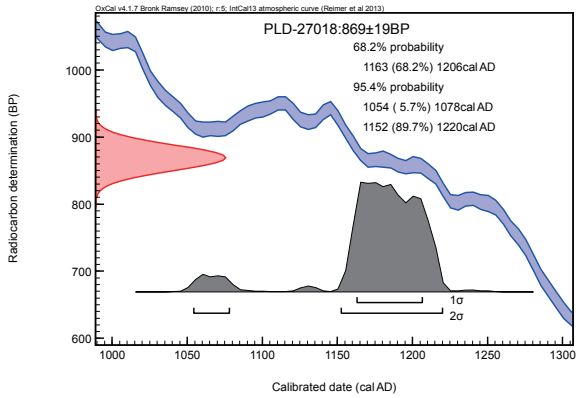


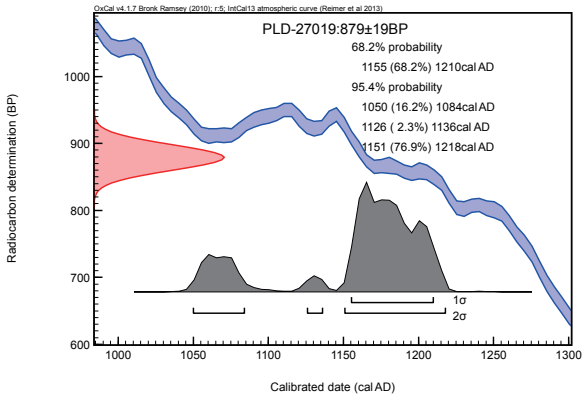


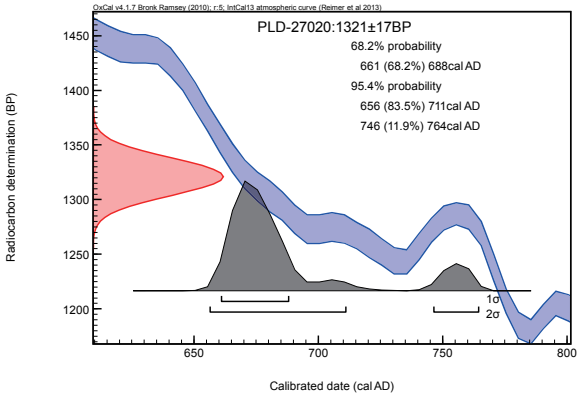


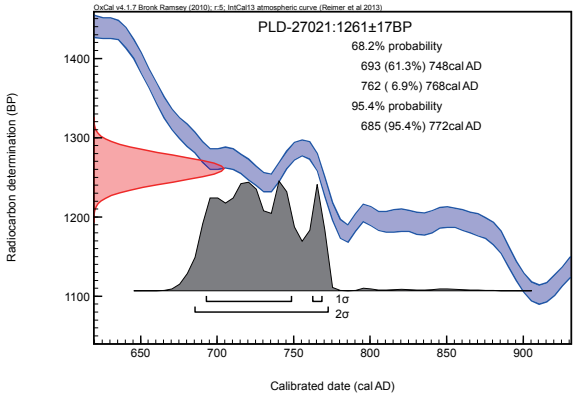


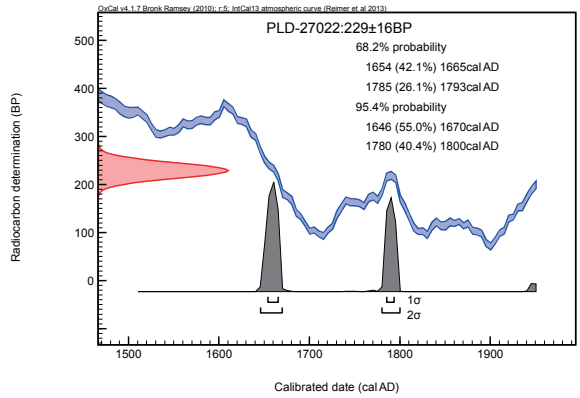
第95図　暦年較正結果（２）

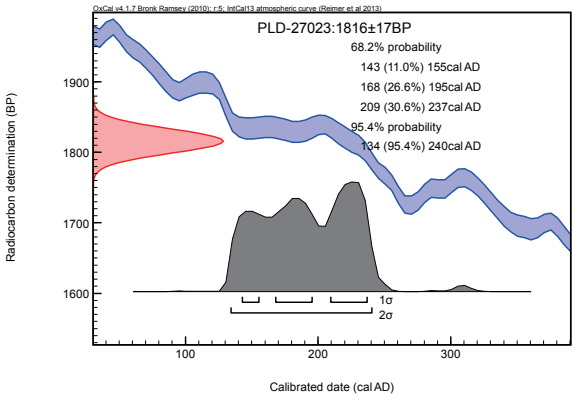


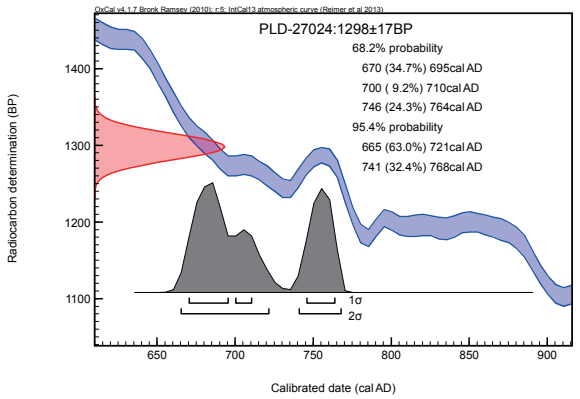


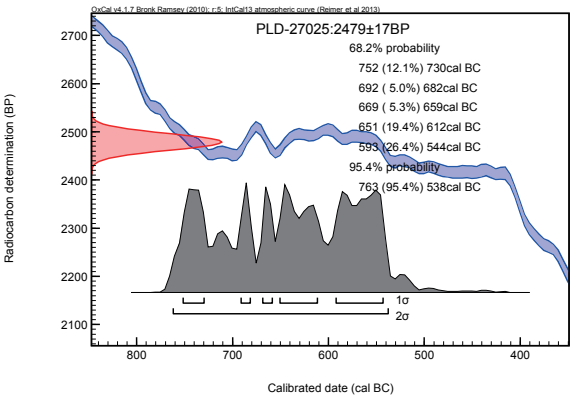




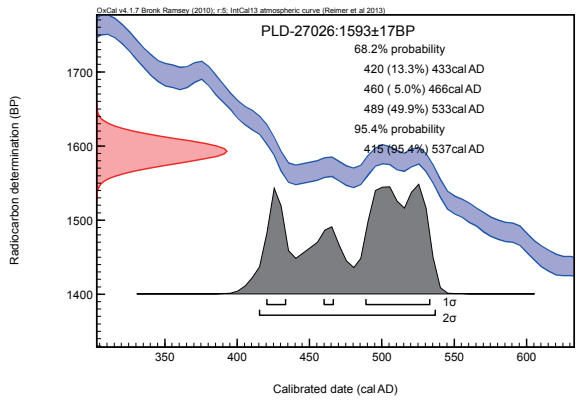


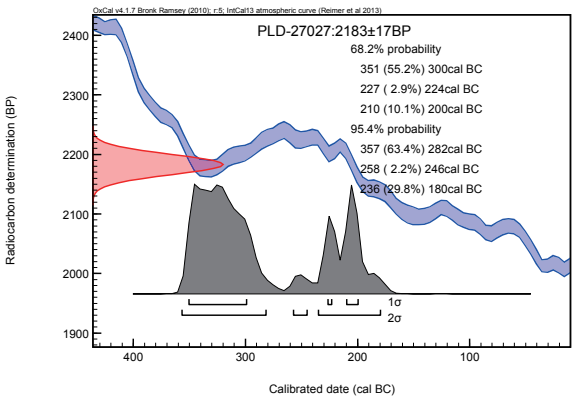


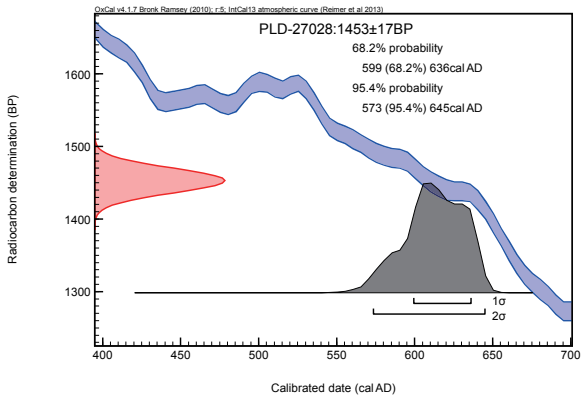


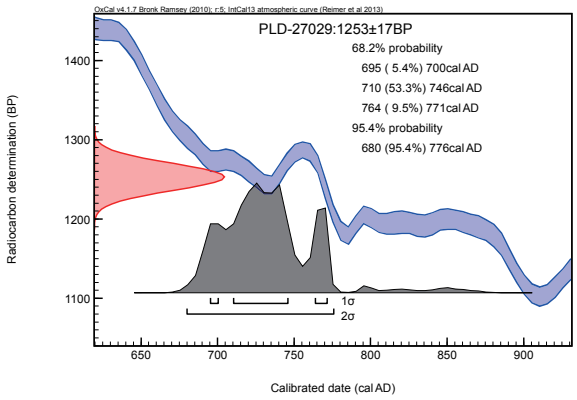


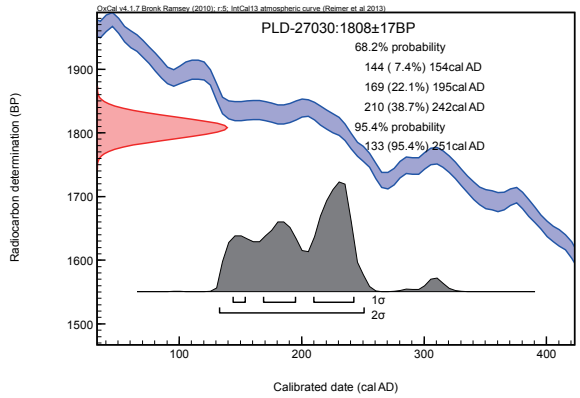
第96図　暦年較正結果（３）

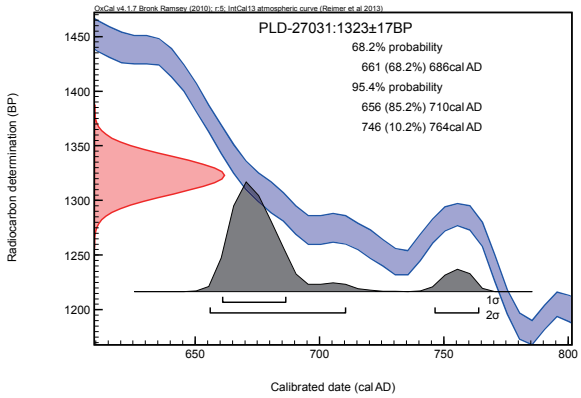


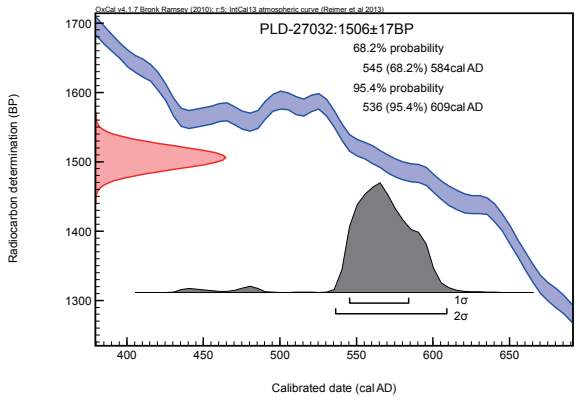


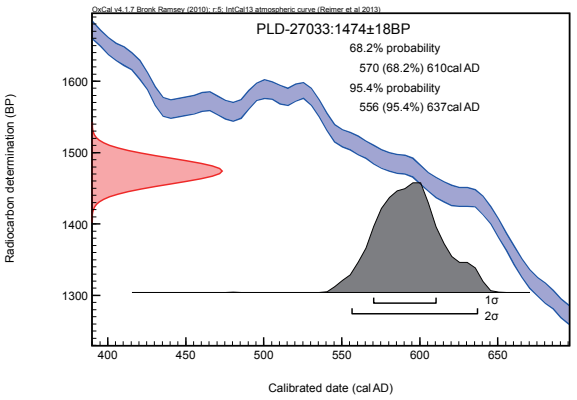




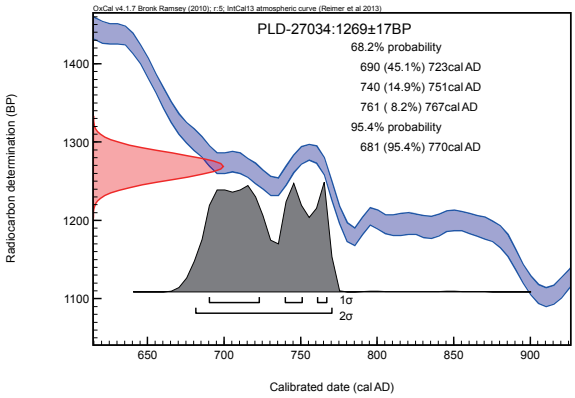


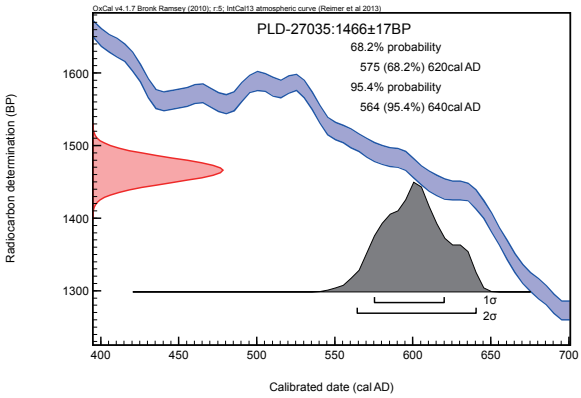


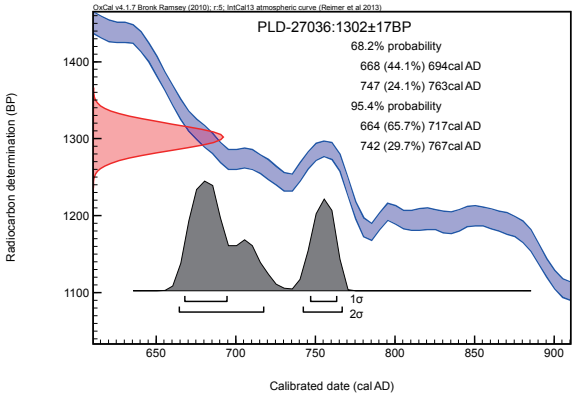


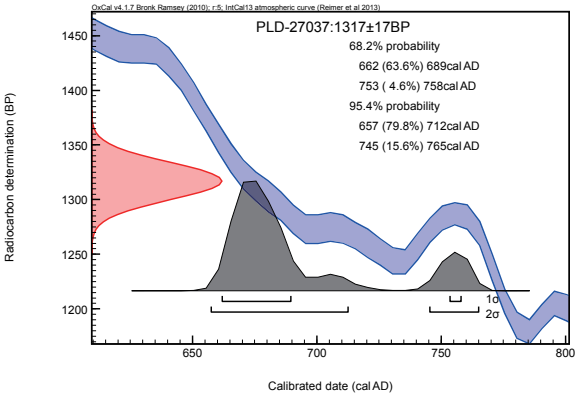


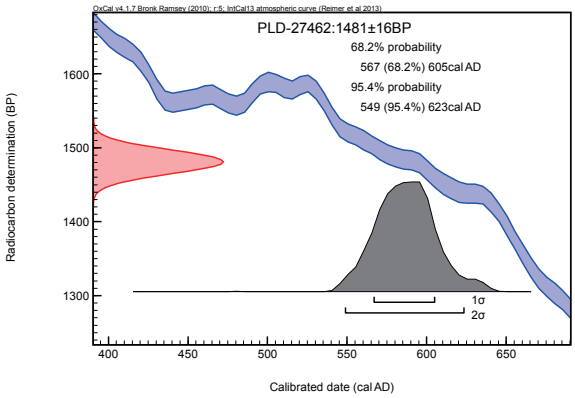
第97図　暦年較正結果（４）











第98図　暦年較正結果（５）

第 VI 章　総括

本報告書では、平成25年度に愛知県岡崎市において発掘調査した八畝畑遺跡について、整理報告作業を行った。ここでは、調査によって得られたいくつかの情報から、その意味するところを提示しまとめてみたい。

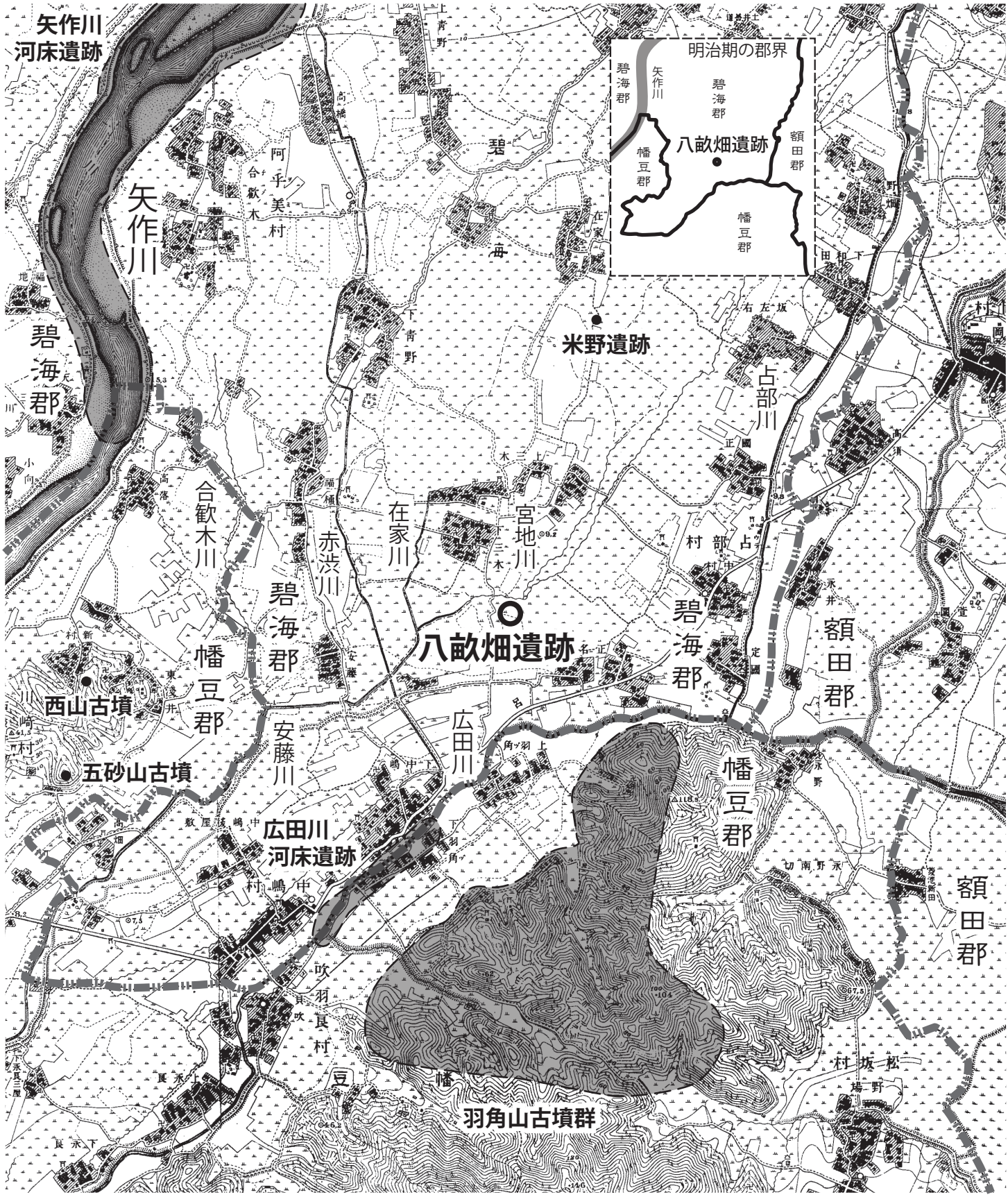
発掘調査　調査は、愛知県建設部による県道岡崎碧南線改良工事に伴う事前調査として、平成25年５月から10月にかけて実施された。調査面積は3500m^{2}で、これを二分割してＡ・Ｂ区とし、北東側（Ａ区）から実施した。

立地　遺跡は岡崎市南西部に所在し、矢作川及びその支流によって形成された沖積地に立地する。遺跡の周辺は、第99図に示したように矢作川の支流にあたる中小の河川が入り乱れ、これらの流路は自然災害によって逐次変化したものと思われる。これらの河川によって形成される自然堤防と後背湿地は、高低差は大きくないものの、複雑に変化する地形を生み出した。

第99図は、明治期に日本陸軍参謀本部の陸地測量部によって測量された地形図である。明治23年に測量され、同26年に製版されたこの地図を見ると、中小河川に沿った位置に集落が形成されているのが見てとれる。沖積平野の中で、自然堤防上を活用している状況は、基本的には現代にも引き継がれている。

空間的特質　まず、八畝畑遺跡が位置する地点とその周辺は、どのような帰属関係に有るのかについて述べてみたい。上述したように、遺跡は自然環境においては沖積平野に立地するが、現在の行政区画では愛知県岡崎市正名町に位置する。

調査地点は、近世以前における三河国碧海郡に属した。碧海郡は、矢作川の西側（右岸）に広がる碧海台地とその縁辺上に所在する。ただしこの郡域は、矢作川を越えて東側（左岸）まで一部が広がっており、調査地点の位置する現在の岡崎市南西部は、かつての碧海郡に相当する。さらにこの下位における帰属は、現在の住所を参考にすれば、明治22年まで存在した正名村と判断される。しかし第99図を見ると、調査地点の北西に位置する下三ツ木と正名とは、境界や字界を判断し難いため断定できない。下三ツ木は、正名村と同様に明治22年まで下三ツ木村であった。明治21年に市制・町村制が交付されると、全国規模で町村の統廃合が行われるようになった。正名村は明治22年に、この時流による合併によって、占部村となる。第99図は明治23年に測量が行われているため、調査地点は占部村の一部となっている。占部村として合併により統合されたのは、正名村や先述した下三ツ木村の他に、上三ツ木村、国正村、中村、野畑村、下和田村、坂左右村、定国村である。碧海郡の中で矢作川を東に越えて所在する一部は、明治22年の合併によってこの占部村と、南西側の中嶋村、西側の阿乎美村、北側の糟海村の四村となった。これらの四村は一部で再び分立して五村となるが、明治39年にはこの五村である合歓木村、上青野村、糟海村、中井村、占部村の全てが合併して六ツ美村となる。調査地点はこの時点で、占部村から六ツ美村となった。やがて六ツ美村は、昭和33年に町制が施行されて六ツ美町となり、昭和37年には岡崎市に編入した。



第99図　周辺河川等位置図（1:25000）

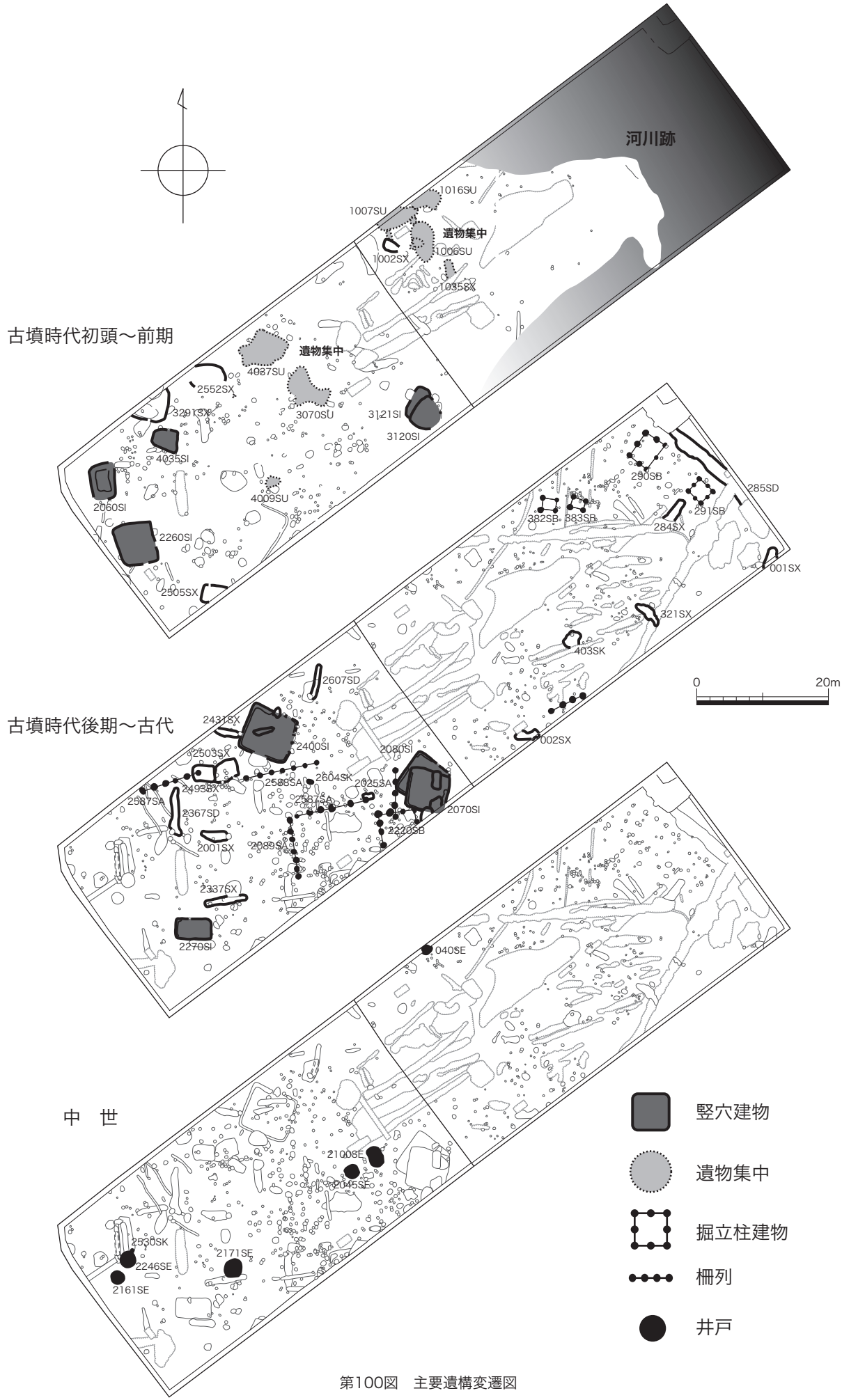
※陸地測量部　明治26年製版　二万分一地形図「福岡村」を縮小加筆

調査地点周辺について、郡界という視点にて述べるてみる。調査地点は、碧海郡が矢作川を越えて東側（左岸）まで及んでいる地域に所在するが、南に約0.6kmの広田川を越えると幡豆郡であり、西に約1.2kmの距離には額田郡との郡界が位置する。調査地点から南南東約1.2kmでは、碧海郡、額田郡、幡豆郡の三郡が接する。この三郡が接する地点から西側約0.3kmの付近は、羽角山古墳群の範囲北端である。ここで注意すべきは、三郡が接する地点の南側、羽角山古墳群の東側付近は、現在は幸田町に編入され、帰属する郡が変わり額田郡の一部となっていることである。この付近は、明治22年以前は幡豆郡野場村であり、明治21年に市制・町村制が交付されると、全国規模での町村統廃合に伴い、明治22年には同郡須美村、六栗村と合併して松坂村となった。明治23年測量の第99図では、幡豆郡松坂村である。その後、明治39年に松坂村が幡豆郡豊国村と合併し、幡豆郡豊坂村となる。この豊坂村は、郡境を越えて昭和29年に額田郡幸田町に編入するので、この時点で羽角山古墳群に沿う東側付近は、幡豆郡から額田郡の一部となった。このように、郡境は変更する場合があるため、第99図での境界はどこまでさかのぼることができるのか、不確定要素を伴う。しかし愛知県では、明治23年に府県制および郡制が公布された時に、郡の統合再編を行わず従来の郡をそのまま継承して郡制が施行された。調査地点の郡界は、律令制の行政区分とどの程度一致しているか明確にできないが、例えば当時の郡界と大きく異なっていないとするならば、羽角山古墳群、さらに西山古墳・五砂山古墳などの位置は、支配領域などの境界に築造された可能性が考えられる。これら三郡の境界は、「額田郡と幡豆郡地域」に対する碧海郡、「碧海郡と額田郡地域」に対する幡豆郡、といった対峙する姿勢が想起され、そうした位置に八畝畑遺跡が所在することは、遺跡の性格を読み取る上で重要だと思われる。

八畝畑遺跡の変遷　今回の発掘調査では、A・B両調査区の遺構について、複数面での検出を行った。調査区内では、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、ピット、溝、井戸、土坑列、遺物集中、その他が検出された。この中で、居住域が想定できる建物跡、井戸等の遺構は、出土遺物から判断すると古墳時代、古代、中世といった時期が想定できる。ただし、基本層序、遺構の概要についての説明部分でも述べたように、調査地点は平成期に大規模な水田造成事業時が行われたため、この時点で古墳時代の自然堆積土層まで全面的に削平を受けている。旧地形の中で残ったのは、微凹地や旧河川縁辺部など、削平面より低い部分のみであった。したがって検出された遺構は、削平面より低い部分に所在したものか、削平面より深く掘削されていたものであり、基底部のみ残存しているものがほとんどであった。こうした事態は、規模、共伴遺物など観察される情報が乏しくなるため、掘削時期、掘削理由の不明瞭な遺構が多かった。調査によって得られた情報から遺跡の変遷を概観すると、第100図のような状況が想定される。

古墳時代初頭～前期　古墳時代初頭から前期の段階では、調査地点北東側にて蛇行河川が確認された。蛇行河川縁辺部では、その自然流路方向に傾いた堆積層にて、古墳時代初頭～前期の遺物が集中する地点が確認され、これよりやや上位の微凹地でも遺物集中地点が見られた。そして蛇行河川の縁辺部では、竪穴建物と考えられる遺構が検出され、古墳時代初頭～前期の遺物が確認できたため、この時期に調査地点が居住域であった可能性が提示できることとなった。

自然流路縁辺部における遺物集中地点の土層は、流路方向である北側に向かって低くなる斜面に細



第100図　主要遺構変遷図

かく重なる状況が観察でき、洪水性の堆積が繰り返されたことが考えられる。こうした堆積状況は、当該期における調査地点の居住環境などを考える上で、重要である。遺物の周囲では、掘削された痕跡が確認できないことから、自然流路に向かって地形が落ち始める地点を選んで土器が廃棄されたものと考えられる。この遺物集中部では、遺存度の良好な壺、甕、高杯などが多く、短期間に集中して一定の場所に廃棄された要因が注目される。また、わずかではあるが、弥生時代後期の遺物を伴う土坑、竪穴建物も存在するため、居住域としての開始はさらにさかのぼる可能性も考えられる。

古墳時代後期～古代　調査地点は、先述したように平成期に大規模な水田造成事業が行われたため、古墳時代の自然堆積土層まで全面的に削平を受けている。したがって、この造成事業によって削平、盛土、耕作土搬入が行われた土層を取り除いた面が、調査における第１面であった。

下位において確認された自然流路は、第100図にて図解したように、第１面の段階では埋没している。調査地点全体では、古墳時代後期から古代の遺構、遺物が検出されており、この時期には調査地点全体が陸地化したことが見てとれる。検出された遺構の中で竪穴建物は、古墳時代前期段階と同様に南側にあたるＢ区でのみ確認されたが、掘立柱建物、柵列はＡ区でも確認された。

竪穴建物は、いずれも後世の削平などにより基底部のみの残存であり、７世紀を主体とした須恵器がその大半で確認され、柱穴は明確ではなかった。北側にてカマドと思われる焼土、袖の基底部が確認できるものも検出されたが、いずれも残存部は浅く、壁溝のみ残存し壁まで残存していないものも見られた。掘立柱建物、柵列では、構成する柱穴の一部に須恵器片を含むものが多く、詳細な時期まで判じ得ないが、当該期の遺構と想定した。

この時期の遺物としては、検出面、竪穴建物、土坑などから畿内系土師器の出土が目立つ。その出土量は、当該期の県内遺跡と比較すると際立っており、居住域としての性格を考える上で興味深い。畿内系土師器については、個別の説明を後述する。

中世　出土遺物から中世と判断できる遺構は、井戸が６基確認された。当該期の遺構面は削平によって消失しているため､削平面より深く掘削された井戸のみ残存部を検出することができた。これらは、調査区中央から南側にて６基検出され、このうち５基は円形曲物が内部構造物として使用されていた。この円形曲物は、いずれも廃絶時に中途まで抜き取られていて、検出面まで残存するものは見られなかった。したがって、円形曲物が井筒部のみ使用されたのか、そのまま積上げて井戸側を構築したものなのか、内部構造の全容は判断できなかった。埋土に伴う出土遺物では、概ね鎌倉時代と判断することができる。

井戸の掘削は採水が目的で、利用手段としては生活用水の確保、農耕用などが考えられる。調査地点周辺では、大中小の河川が入り乱れていた環境を考えると、農耕用として井戸を掘削するより、生活用の採水施設として掘削された可能性の方が高い。したがって、これらの井戸跡は、鎌倉時代にもこの地点が居住域であった可能性を示すものと考えられる。

米野遺跡との共通性　米野遺跡は、八畝畑遺跡調査地点から約1.4km 北北東に所在し、昭和58年に岡崎市教育委員会によって40m^{2}の発掘調査が行われている。

古墳時代の遺物が集中して出土する様相は、米野遺跡でも確認された。2012年に出された報告書によれば､「完形品に近い土器がまとまって出土しているが、明確な遺構は確認されていない」状態

の土器集中地点が検出されている。集中して出土した遺物の中で、主体的な構成を占める高杯を例に、八畝畑遺跡出土資料と比較してみる。米野遺跡報告書に掲載される高杯では、５世紀代と報告されるように脚部が屈折するものが主体であり、古墳時代中期的様相が認められる。八畝畑遺跡では、遺物集中部だけでなく全出土遺物に含まれるこの時期の高杯に、屈折する脚がほとんど認められない。八畝畑遺跡の遺物集中部では、その他の形態的特徴も含めて、出土遺物は古墳時代前期的様相と判断できる。したがって、米野遺跡の土器集中地点は、八畝畑遺跡より後出段階と思われる。米野遺跡では、さらに遺物集中部の上位層にて須恵器が少量出土していて、1989年に出された岡崎市史にて８～９世紀と紹介されている。八畝畑遺跡から出土している須恵器は、６～８世紀に製産されたものが確認できるが、７世紀代のものが主体である。したがって出土須恵器の比較においても、八畝畑遺跡の方がやや先行した時期に該当する。

八畝畑遺跡の近隣では、特に沖積地における発掘調査の事例が、ほとんどみられない。米野遺跡は、唯一の近隣調査事例と言える。40m^{2}という面積の調査結果では、米野遺跡の全体的な様相を想定することは難しい。しかし両遺跡では、沖積地の自然堤防上で近似した時期の遺物集中地点が確認され、間層にて時間的な隔たりを経て須恵器が出土する、など共通する事項が見出せる。この共通性は、岡崎市六ツ美地区、矢作川左岸の沖積地、と言った視点において、郡界の設定や古環境を考える上で、重要な材料となるであろう。すなわち、調査地点周辺は、古墳時代の早い時期から中期までは、短期間に河川や自然災害がもたらす堆積が進んだことを示す。そうした中で調査地点付近では、水害の危険性は承知しつつ水利面などを優先した結果、居住域として八畝畑遺跡のような環境が選ばれた、ということになろう。この居住域としての八畝畑遺跡は、碧海郡の大部分が所在する矢作川対岸地域や、当時の支配体制に対してどのような位置にあったものか、また水利、という点が重要視されていたならば、その視野に入れたものは農耕なのか、水上交通なのか、解明すべき課題は多い。

畿内系土師器　今回の調査では、八畝畑遺跡から畿内系土師器が多く出土した。「畿内系土師器とは、７～８世紀に、飛鳥・藤原・平城宮（京）で用いられた食器で、精製された粘土を用い、赤焼きの内外面にヘラミガキによる金属器の光沢を模した暗紋を有する土師器の一群で、暗紋土師器とも呼ばれている」（樋上 2001）。畿内系土師器は、官職にある人などが都城で使用した器として、時期的にも場所としても限定的な性格を有する土師器とされてきたが、近年ではこれらが全国的に伝来すること、畿内産以外のものが存在すること、在地産のものには独自の広がりが認められること、などが明らかになってきた。その出土地点は、終末期の古墳や官衙、寺院に関連する遺跡であり、畿内系土師器が律令国家の地域支配と大きく関連することは、疑いのないものとなっている。

八畝畑遺跡では今回の調査で、畿内系土師器が143片出土している。このうち口縁部片は表５に示したように65点で、接合されるものはわずかであった。総個体数は、接合状況、出土地点の違いも考慮すると、50を超えるものと考えられるが、口縁部、底部などを基準として個体識別用のカウント作業は行っていない。畿内系土師器を伴う遺構は、28を数える。

第101図は、八畝畑遺跡における畿内系土師器出土地点の分布図である。調査区全体では、A区南側部分とB区中央部分の二群に、出土のまとまりを見出すことができる。遺構に伴うものでは、2478SXから25片、2604SKから11片、2493SXから６片などが量的に目立つ。これらの遺構は、いずれも

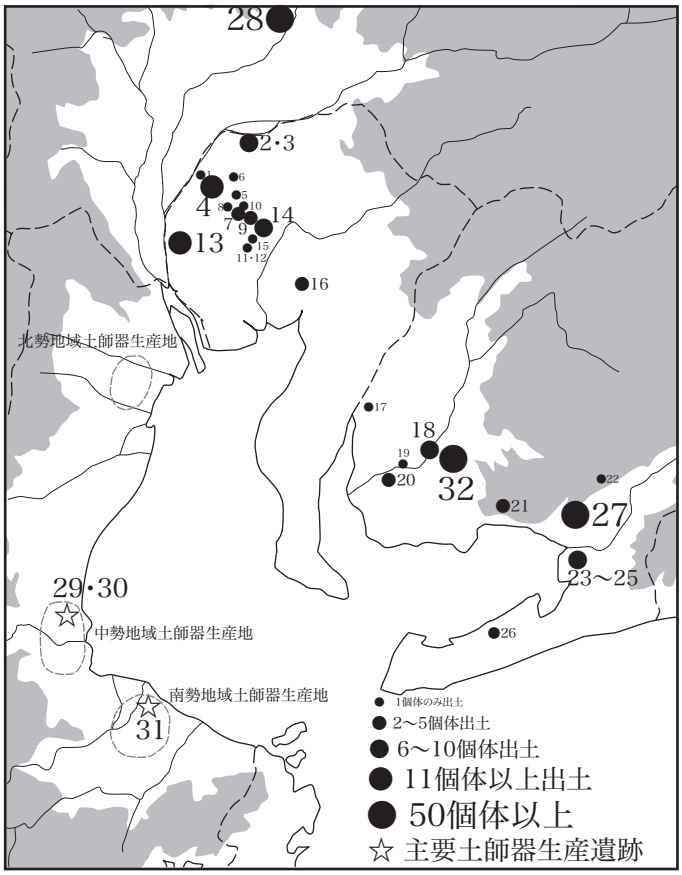
表５　畿内系土師器出土一覧

番号	調査区	グリッド	遺構	破片数	口縁数	種類(個数)	暗文	赤彩	暗文＋赤彩
3	13A	6251c	403SK	1	1	Ⅲ(1)			1
4	13A	6251c	403SK	1	1	杯(1)	1		
20	13A	5950d	285SD	1	1	Ⅲ(1)			
45	13A	6452a	002SX	1	1	杯C(1)			
46	13A	6452a	002SX	1	1	杯C(1)			
47	13A	6452a	002SX	1	1	杯C(1)			
57	13A	6250a	321SX	1	1	Ⅲ(1)			
211	13A	6049b	検出1	1	1	杯A(1)			
255	13B	6554b	2029SK	1	1	ⅢA(1)			
256	13B	6554b	2029SK	1	1	ⅢA(1)			
265	13B	6556d	2164SK	1	1	杯(1)	1		
274	13B	6455c	2604SK	1	1	ⅢA(1)			1
275	13B	6455c	2604SK	1	1	ⅢA(1)			
276	13B	6455c	2604SK	1	1	杯A(1)		1	1？
277	13B	6455c	2604SK	1					1
284	13B	6558d	2425SD	1	1	杯C(1)			
325	13B	6557d	2001SX	1	1	杯C(1)			
337	13B	6555b	2125SX	1	1	ⅢA(1)	1		
340	13B	6655b	2284SX	1	1	ⅢA(1)	1		
357	13B	6457d	2493SX	1	1	杯C(1)			
366	13B	6456a・b	2478SX	1	1	Ⅲ(1)			
367	13B	6456a・b	2478SX	1	1	Ⅲ(1)			
368	13B	6464a・b	2478SX	1	1	ⅢA(1)			
369	13B	6464a・b	2478SX	1	1	ⅢA(1)	1		
370	13B	6456a・b	2478SX	1	1	杯(1)			
371	13B	6456a・b	2478SX	1	1	杯C(1)	1		
378	13B	6457d	2503SX	1	1	Ⅲ(1)			
379	13B	6457d	2503SX	1	1	杯C(1)	1		
459	13B	6456d	3070SU	1	1	杯A(1)			
460	13B	6456d	3070SU下層	1	1	杯A(1)			
461	13B	6455c	3070SU	1	1	杯A(1)			
558	13B		南壁トレンチ	1	1	杯C(1)	1		
559	13B		南壁トレンチ	1	1	ⅢA(1)			
KH1	13A	6452a	002SX	1	1	杯C(1)	1		
KH2	13A	6452b	002SX	1		杯(1)	1		
KH3	13A	6049a	285SD	1	1	杯(1)		1	
KH4	13A	6050b	312SK	1	1	杯(1)			1
KH5	13A	6250b	321SX	1					
KH6	13A	6251c	403SK	4	1	Ⅲ(1)	1		
KH7	13A	6251c	403SK	3	1	ⅢA(1)		1	2
KH8	13A	6251c	403SK	1					
KH9	13A	6148a	検出1	1					
KH10	13A	6250a	検出1	1	1	杯C(1)			
KH11	13A	6252d	検出1	1					
KH12	13A	6252d	検出1	1	1	Ⅲ(1)			
KH13	13A	6352a	検出1	1	1	杯C(1)			
KH14	13A	6251a	検出1	1					
KH15	13A	6252a	検出1	3					
KH16	13A	6252d	検出1	1	1	Ⅲ(1)			
KH17	13A	6252b	検出	1	1	ⅢA(1)			
KH18	13A	6252b	検出	2	1	Ⅲ(1)		2	
KH19	13A		表土	1			1		
KH20	13A		表土	1			1		
KH21	13A		表土	1					
KH22	13A		南壁トレンチ	1					
KH23	13A		南壁トレンチ	1					
KH24	13A	6250a・6251b	撹乱	1	1	ⅢA(1)			
KH25	13A	6251b	撹乱	1					
KH26	13B	6554b	2029SK	1	1	Ⅲ(1)			
KH27	13B	6454c	2100SE	1	1	杯(1)			
KH28	13B	6554b	2106SK	1					
KH29	13B	6554b	2106SK	1	1	Ⅲ(1)			
KH30	13B	6554b	2106SK	1					1
KH31	13B	6656d	2212SD	1					
KH32	13B	6656d	2293SK	1	1	Ⅲ(1)			
KH33	13B	6555c	2323SK	1			1		
KH34	13B	6558d	2425SD	3	1	Ⅲ(1)			
KH35	13B	6558d	2425SD	1	1	ⅢA(1)			
KH36	13B	6455a	2458SK	1				1	
KH37	13B	6456a・b	2478SX	1	1	Ⅲ(1)			
KH38	13B	6456a・b	2478SX	1	1	Ⅲ(1)			
KH39	13B	6456a・b	2478SX	26	4	Ⅲ(4)	1		
KH40	13B	6457d	2493SX	5	1	Ⅲ(1)			
KH41	13B	6457d	2493SX	1					
KH42	13B	6354c	2510SK	2			1		
KH43	13B	6566a	2521SX	1	1	杯(1)	1		
KH44	13B	6566a	2521SX	1	1	Ⅲ(1)			
KH45	13B	6455c	2604SK	11	3	Ⅲ(3)		1	7
KH46	13B	6556b	3089SK	1					1
KH47	13B	6656d	3107SK	1					1
KH48	13B	6356c	3159SK	1	1	Ⅲ(1)	1		
KH49	13B	6356c	3159SK	1					
KH50	13B	6455c	検出2	1					1
KH51	13B	6655a	検出1	1				1	
KH52	13B	6658d	検出1	1			1		
KH53	13B	6455d	検出1	1					1
KH54	13B	6455d	検出1	1				1	
KH55	13B	6556a	検出1	1					
KH56	13B	6457c	検出1	1	1	ⅢA(1)	1		
KH57	13B	6555b	検出1	1					
KH58	13B		南壁トレンチ	1	1	ⅢA(1)			
KH59	13B		南壁トレンチ	1	1	ⅢA(1)			
KH60	13B	6355a	撹乱	1	1	Ⅲ(1)		1	
計				143	67		20	10	18

※カウントは取り上げ単位ごとにまとめた



第101図　八畝畑遺跡畿内系土師器出土分布図



1. 大平遺跡(尾西市)
2. 大毛池田遺跡(一宮市)
3. 大毛沖遺跡(一宮市)
4. 八王子遺跡(一宮市)
5. 三ツ井遺跡(一宮市)
6. 高畑遺跡(一宮市)
7. 尾張国府推定地(稲沢市)
8. 東畑廃寺(稲沢市)
9. 北市場屋敷遺跡(稲沢市)
10. 清敷遺跡(稲沢市)
11. 大渕遺跡(甚目寺町)
12. 甚目寺遺跡(甚目寺町)
13. 川田遺跡(佐織町)
14. 清洲城下町遺跡(清洲町)
15. 廻間遺跡(清洲町)
16. 東古渡町遺跡(名古屋市中区)
17. 芋川遺跡(刈谷市)
18. 矢作川河床遺跡(岡崎市)
19. 加美遺跡(安城市)
20. 住崎遺跡(西尾市)
21. 西川原1号墳(幡豆町)
22. 膳棚2号墳(一宮町)
23. 市道遺跡(豊橋市)
24. 公文遺跡(豊橋市)
25. さんまい貝塚(豊橋市)
26. 山崎遺跡(田原町)
27. 三河国府跡(豊川市)
28. 弥勒寺東遺跡(岐阜県関市)
29. 堀田遺跡(三重県一志郡嬉野町)
30. 片野遺跡(三重県一志郡一志町)
31. 北野遺跡(三重県多気郡明和町)

32. 八畝畑遺跡(岡崎市)

第102図　畿内系土師器出土遺跡分布図（樋上2001に八畝畑遺跡を補足）

B区中央部やや北側に位置する。出土破片数は、A区から41点、B区から102点で、遺構に伴うものもA区側の出土群に比べてB区側の方が多い。これらの畿内系土師器片は、ヘラミガキ調整が施されたもの、ヘラミガキ調整後、内面に放射状、羽状の暗文が施されたもの、内外面に赤彩が施されたものなど、特徴的な調整が観察された。

第102図は、愛知県における畿内系土師器出土遺跡分布図（樋上 2001）である。2001年時点のものであり、その後は追加資料として八畝畑遺跡のみを加え、その他の出土例が紹介できていない。しかし、2001年以降畿内系土師器が50個体以上出土した調査例は、現時点で八畝畑遺跡以外に見出すことができない。これまで愛知県内では、50個体を超えて畿内系土師器が出土した遺跡は、三河国府跡のみである。新たな出土例として、八畝畑遺跡が加わったことになる。

八畝畑遺跡の調査で、畿内系土師器がまとまって出土した結果は、何を示しているのであろうか。第102図の元となった八王子遺跡の報告（樋上 2001）では、東海地方各地の資料を集めて胎土分析を行い、生産地を推定しようと試みている。その結果、産地については畿内産、三重県一志郡を中心とした中勢地域産、在地性の強いものなど、畿内系土師器の供給について、いくつかの可能性が提示された。八畝畑遺跡出土の畿内系土師器では、理化学的な方法によって生産地の推定を試みていない。したがって、数量的な視点のみの比較であるが、出土量が県内の遺跡と比較して際立っているという点だけでも、特記事項であろう。

畿内系土師器の出土例は、終末期の古墳や官衙、寺院に関連する遺跡であるが、八畝畑遺跡の近隣

では、終末期の古墳群以外に関連付けられるものが不明である。八畝畑遺跡における畿内系土師器のまとまった出土例は、近隣調査の増加や、胎土分析の試みなどによって、その事由を検討することが課題となろう。

結語　最後に、調査によって得られた成果をふまえて、八畝畑遺跡の歴史的位置付けについて、今後の課題と問題点を考えてみる。

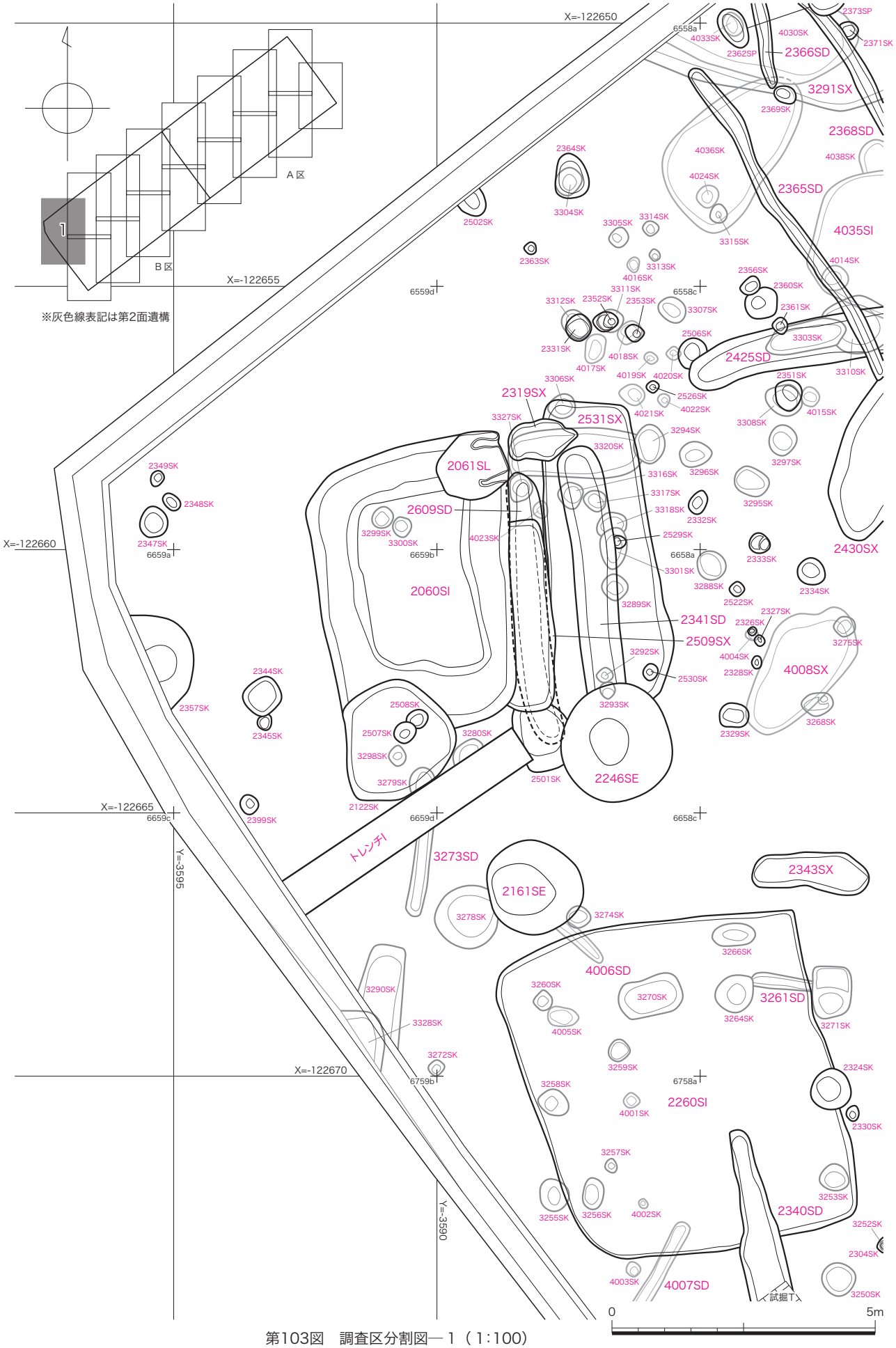
八畝畑遺跡に近接する周辺地域では、古墳時代、古代などに該当する明確な集落遺跡が確認されていない。先に触れた羽角山古墳群は、6世紀中葉から7世紀後葉という時期が想定された古墳群であるが、これらの造営母体となった集落、集団は、現時点では未解明である。八畝畑遺跡で確認された居住域は、まとまった畿内系土師器の出土が羽角山古墳群の造営時期と重なるなど、両遺跡がまったく無関係とは考え難い。それぞれの位置付けは、関連性も含めて検討課題である。

畿内系土師器については、現時点では、近隣に官衙、寺院など、関連付けられる遺跡が見出せないため、出土要因を想定することが難しい。そのため、畿内系土師器の際立つ出土量が何を示しているのか、今後の調査事例を注視しながら、当地域の支配体制を考えることが必要であろう。

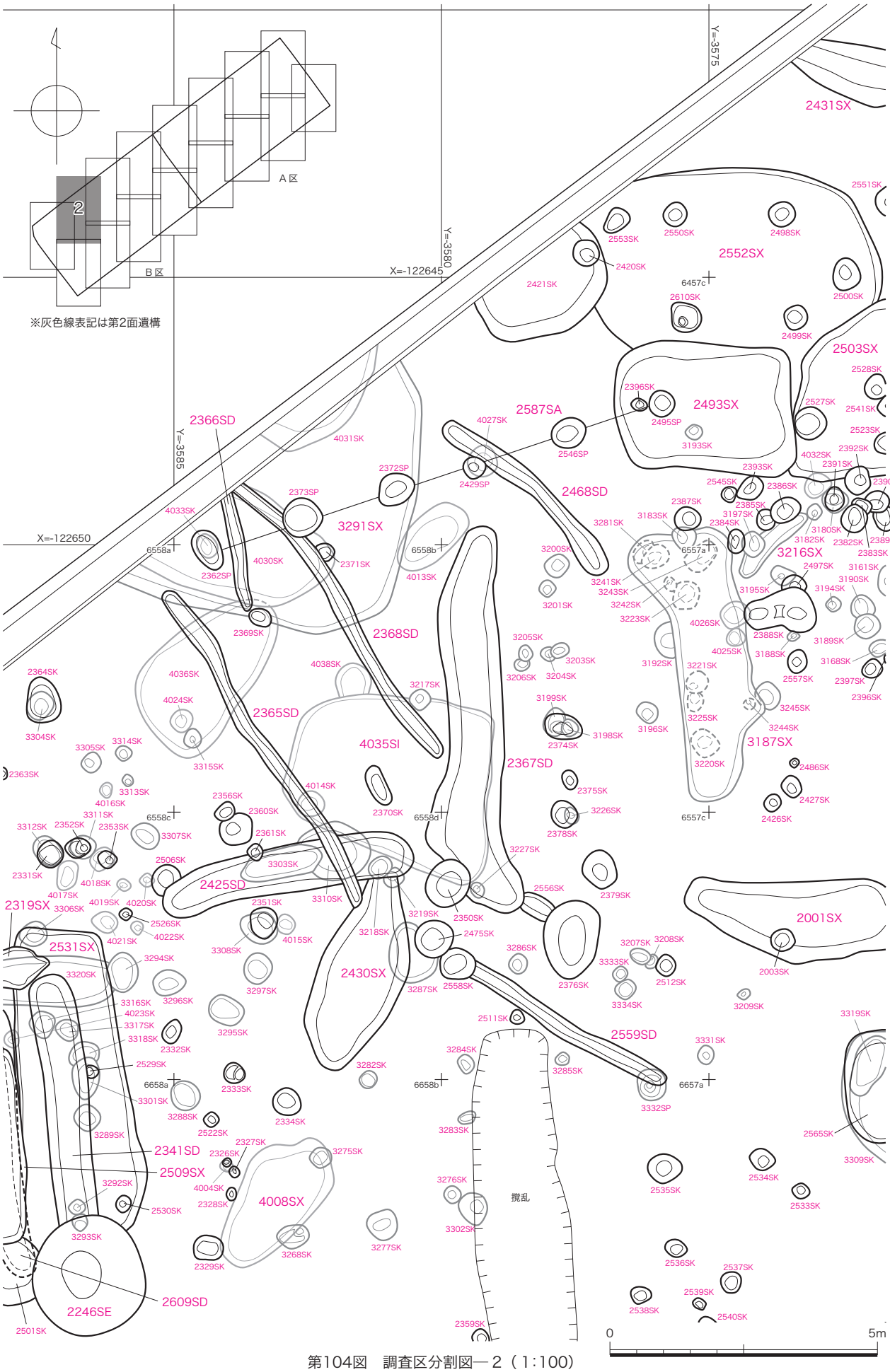
八畝畑遺跡は、矢作川とその支流によって形成された沖積平野に所在する。その位置は、平野部では丘陵寄りである。南東側の幡豆山塊と呼ばれる丘陵部には、八畝畑遺跡から0.8kmの距離に羽角山古墳群北端が位置する。この古墳群と同時期と考えられる近隣の集落は未解明であるが、この盛衰を把握することは、羽角山古墳群の造営母体を比定することにもつながる。これらの検討材料は、現時点において決定的に不足しており、資料の増加が待たれる。八畝畑遺跡のような地理的環境は、集落が営まれた歴史的背景とどのように関連しているのか、調査成果を一つ一つ積み重ねて、これらを明らかにしてゆくことが今後の課題となるであろう。

参考文献

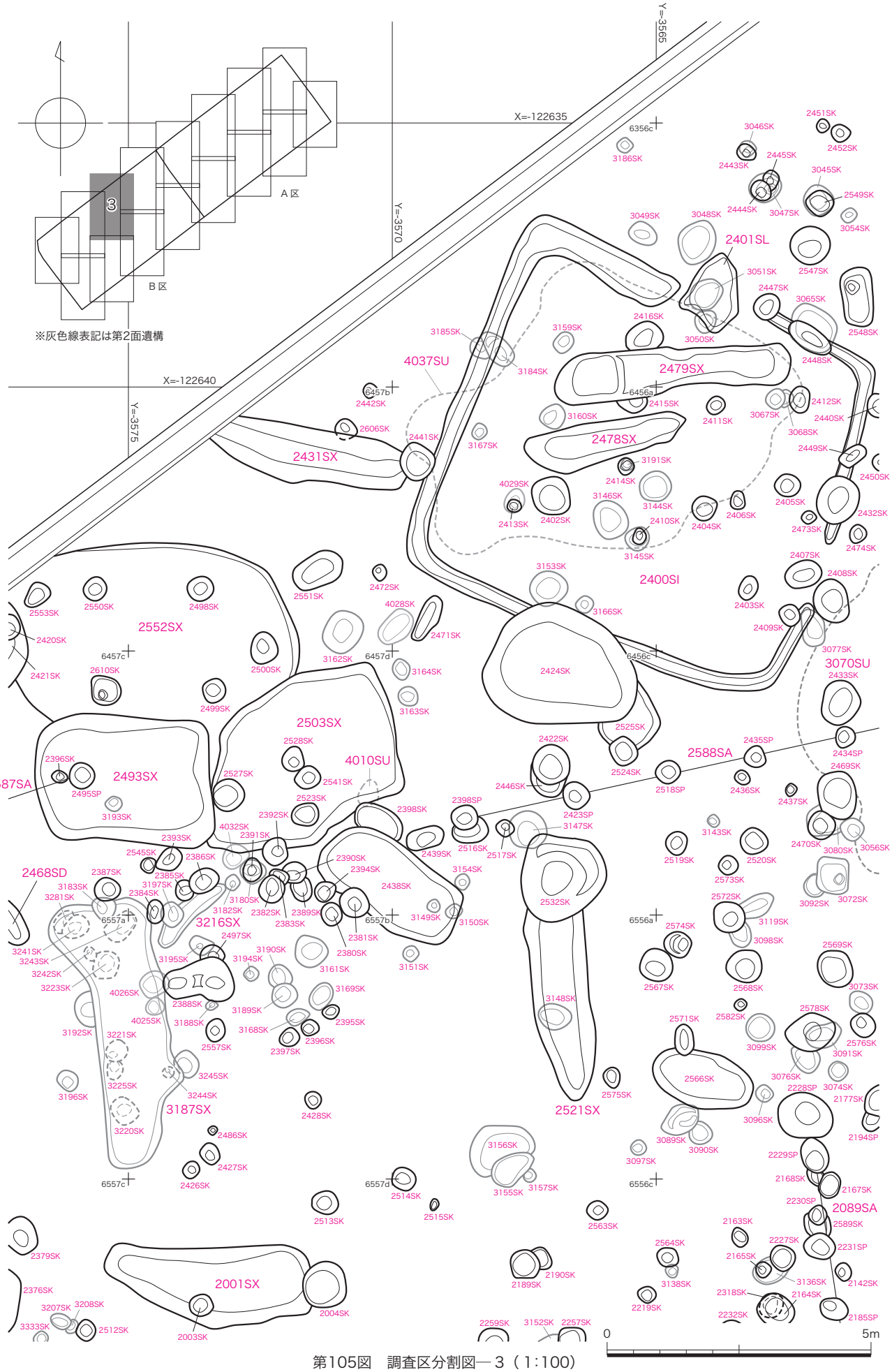
荒井信貴・川崎みどり　1983「米野遺跡」『新編岡崎市史 史料 考古 下 16』 新編岡崎市史編集委員会
林部　均　1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』 第72巻第1号　日本考古学會
赤塚次郎　1990「V　考察」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター　第10集
斎藤嘉彦　1992「古墳時代の社会と文化」『新編岡崎市史 原始・古代 1』 新編岡崎市史編集委員会
荒木敏夫　1992「奈良時代の三河」『新編岡崎市史 原始・古代 1』 新編岡崎市史編集委員会
赤塚次郎　1994「付論1　松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター　第48集
松井直樹　1999『羽角山古墳群』 西尾市教育委員会　第8集
樋上　昇　2001「考察編　III八王子遺跡の古代をめぐる諸問題」『八王子遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター　第94集
城ヶ谷和広　2010「土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史 資料編4』 愛知県史編さん委員会
青井美稚子・山口遥介　2012「米野遺跡」『市内遺跡発掘調査報告書I』 岡崎市教育委員会



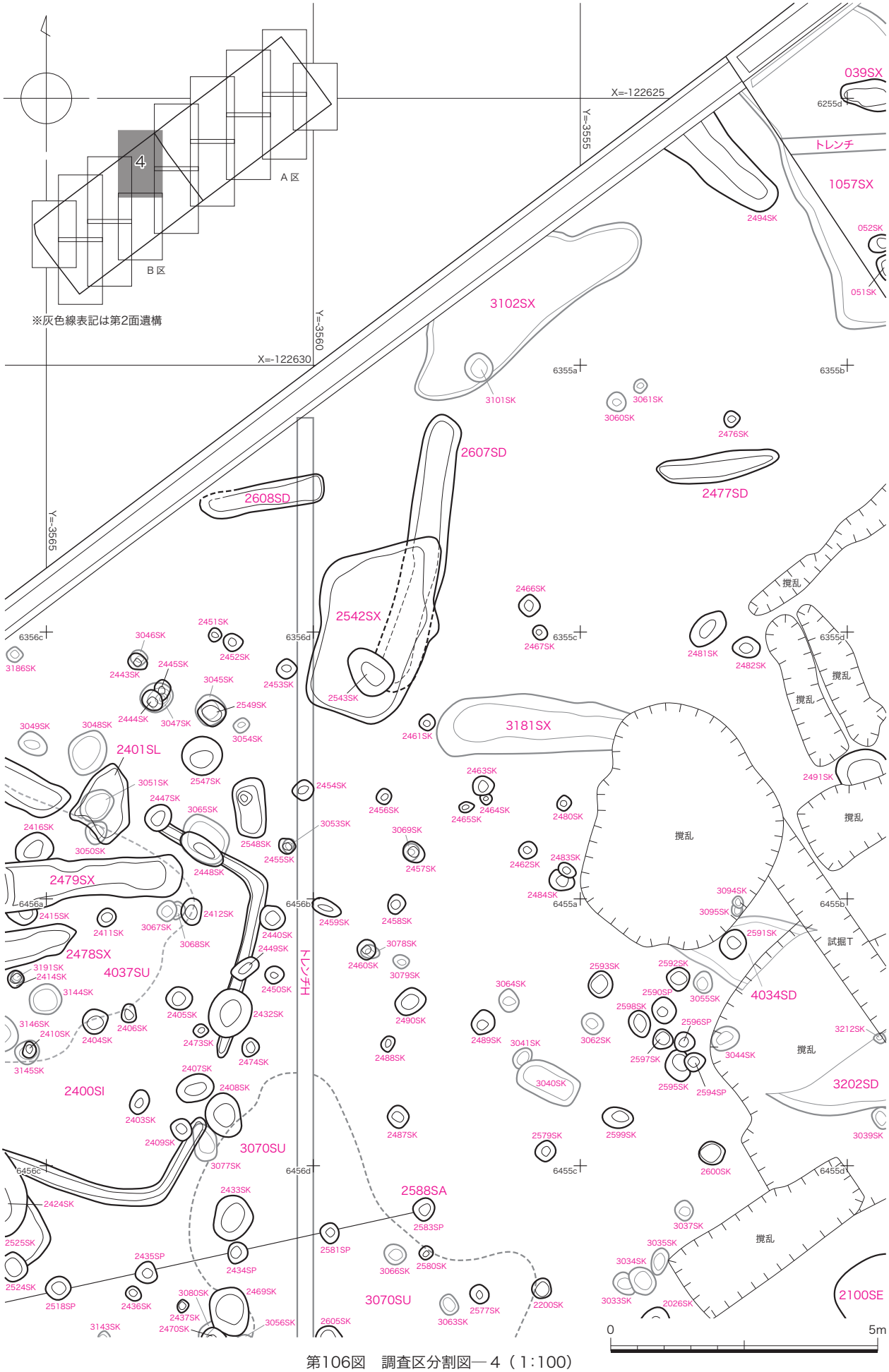
第103図　調査区分割図―1（1:100）



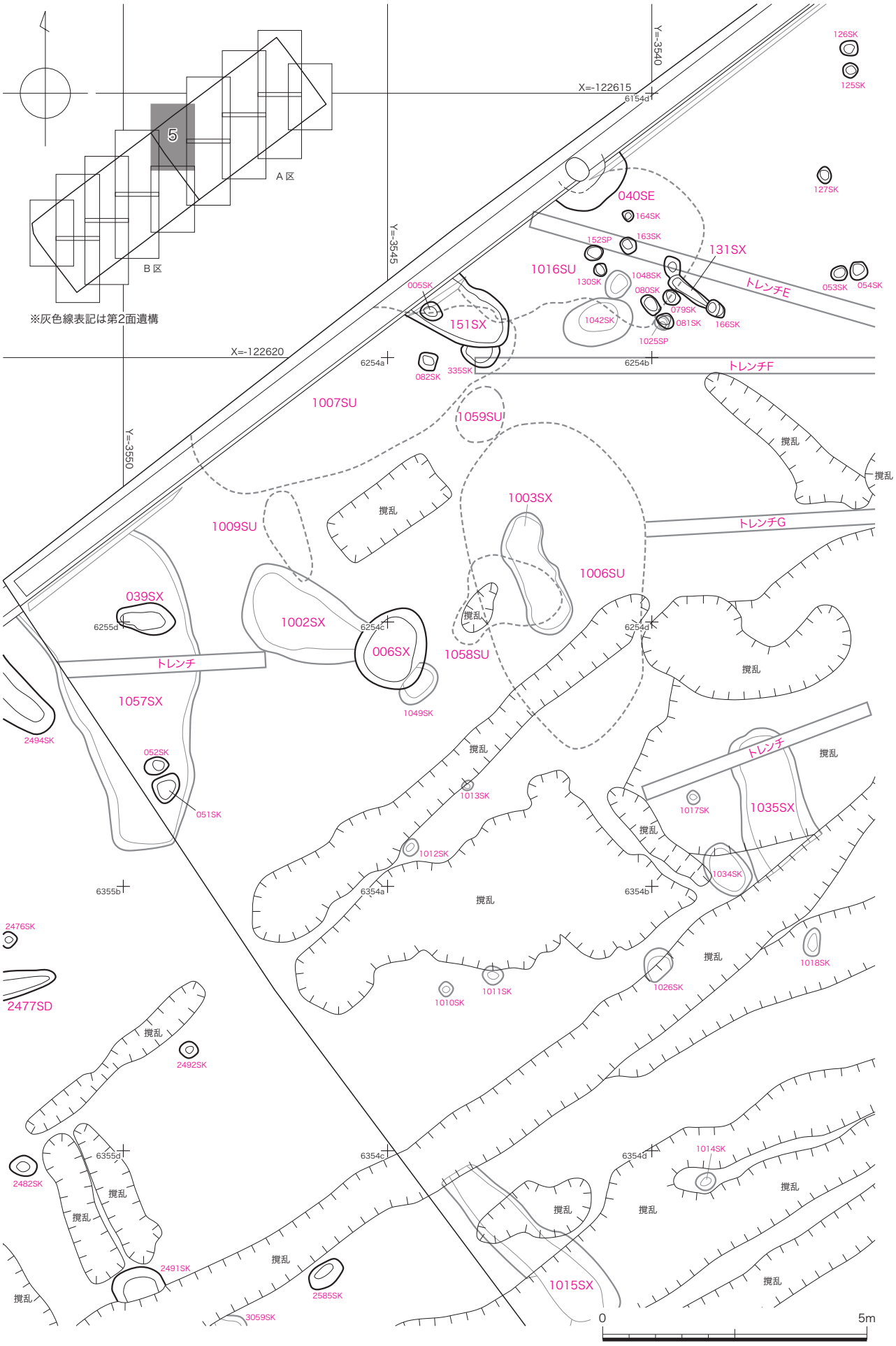
第104図　調査区分割図―２（1:100）



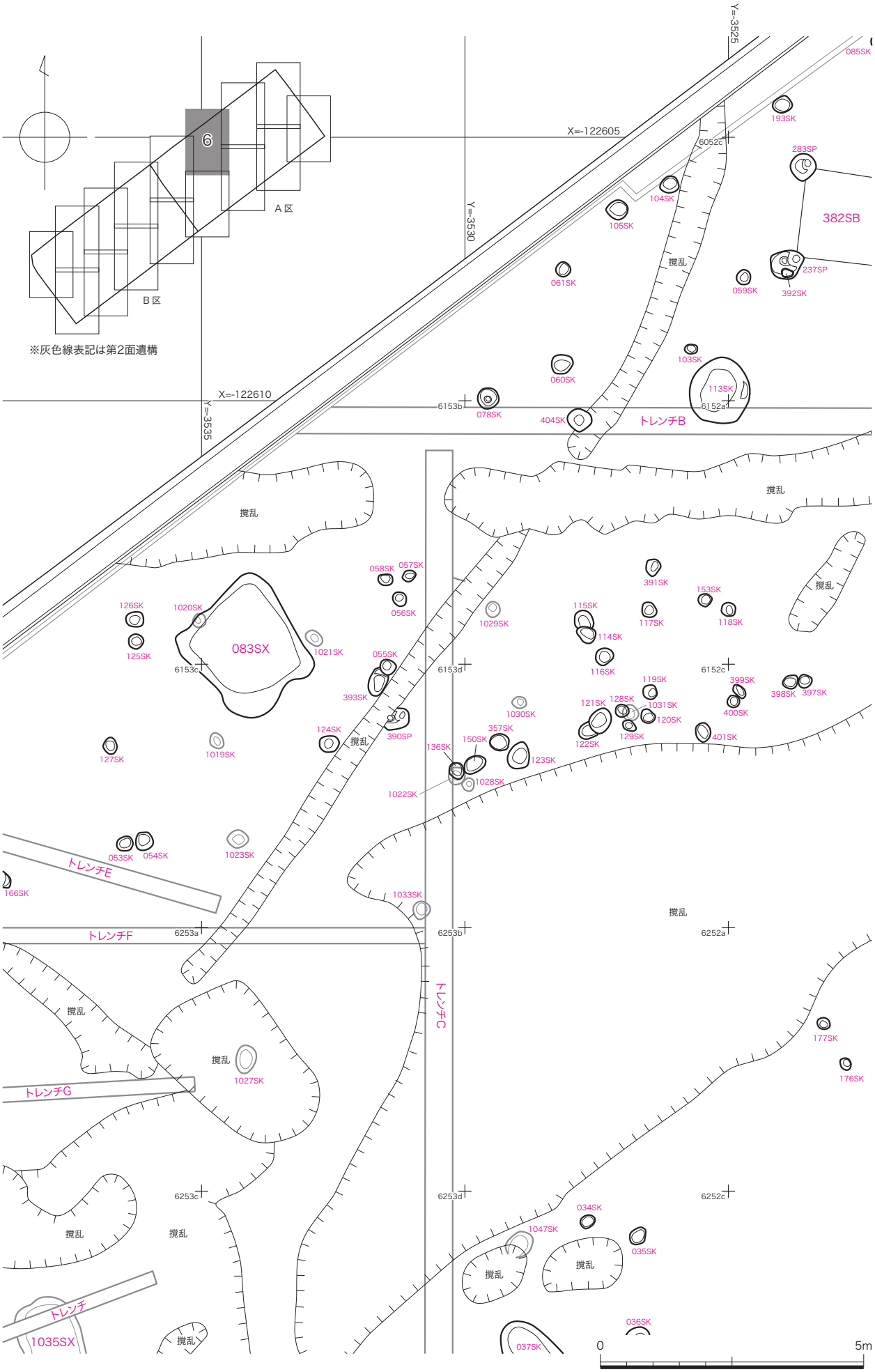
第105図　調査区分割図―３（1:100）



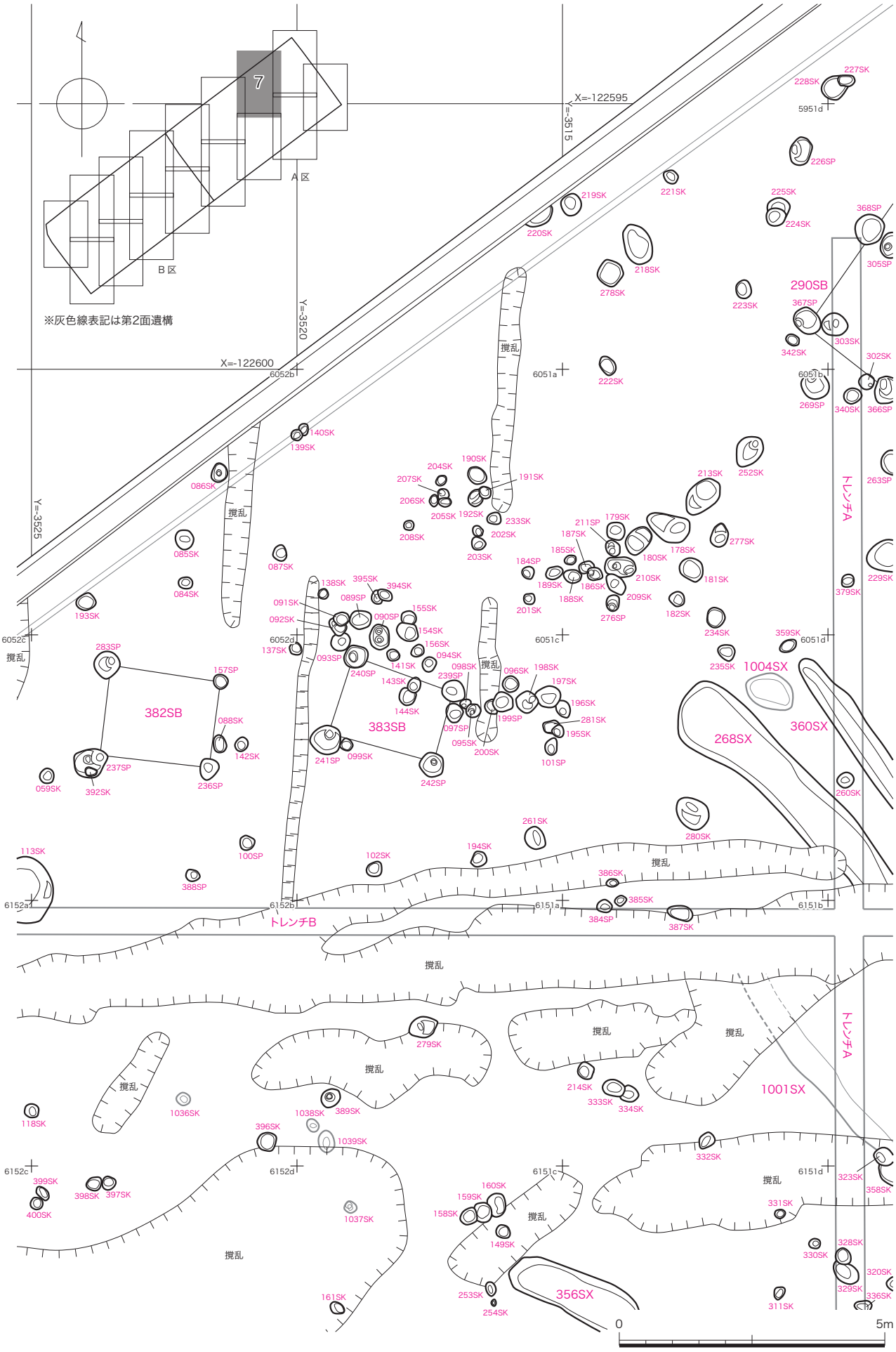
第106図　調査区分割図―４（1:100）



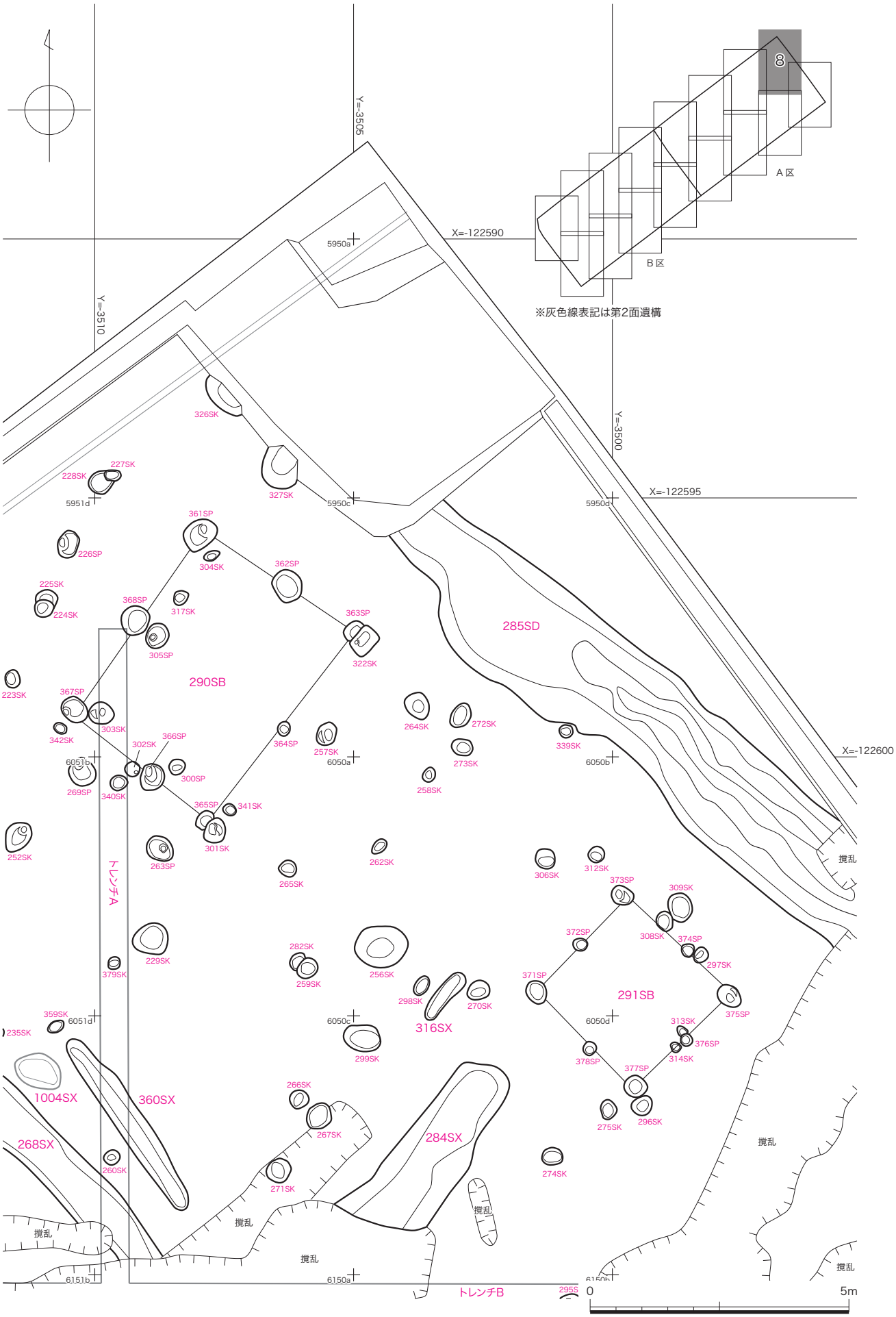
第107図　調査区分割図―５（1:100）



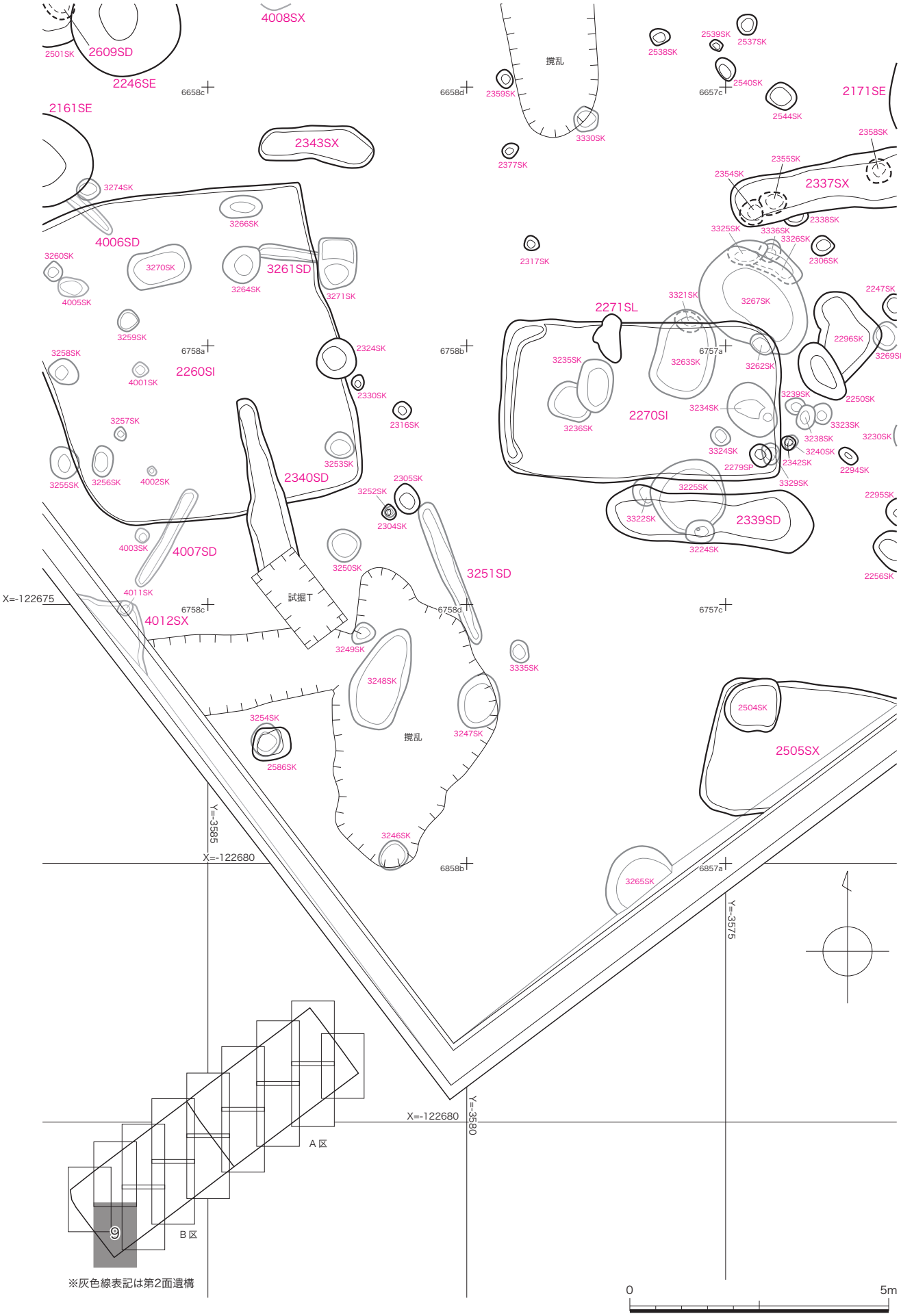
第108図　調査区分割図―６（1:100）



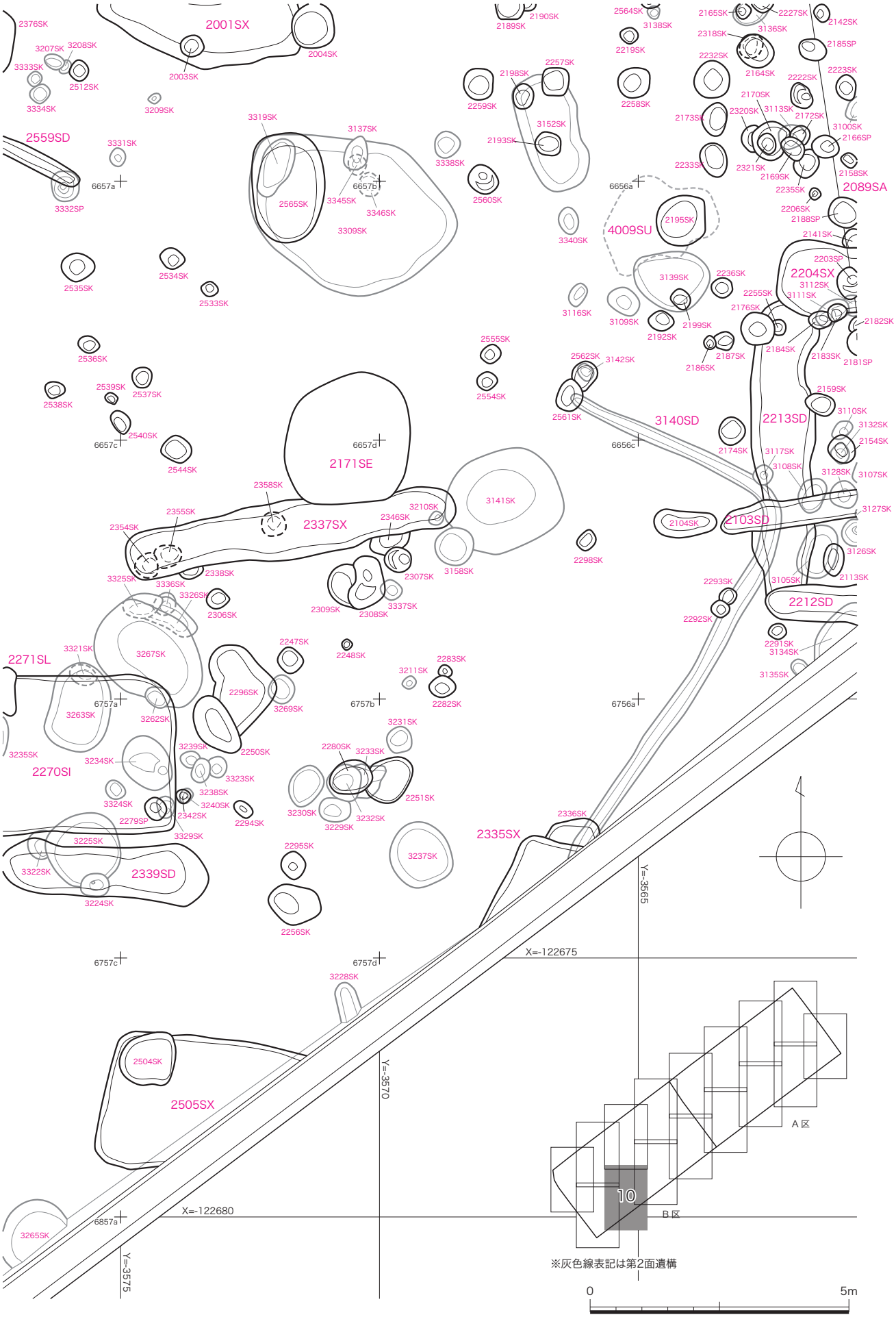
第109図　調査区分割図―7（1:100）



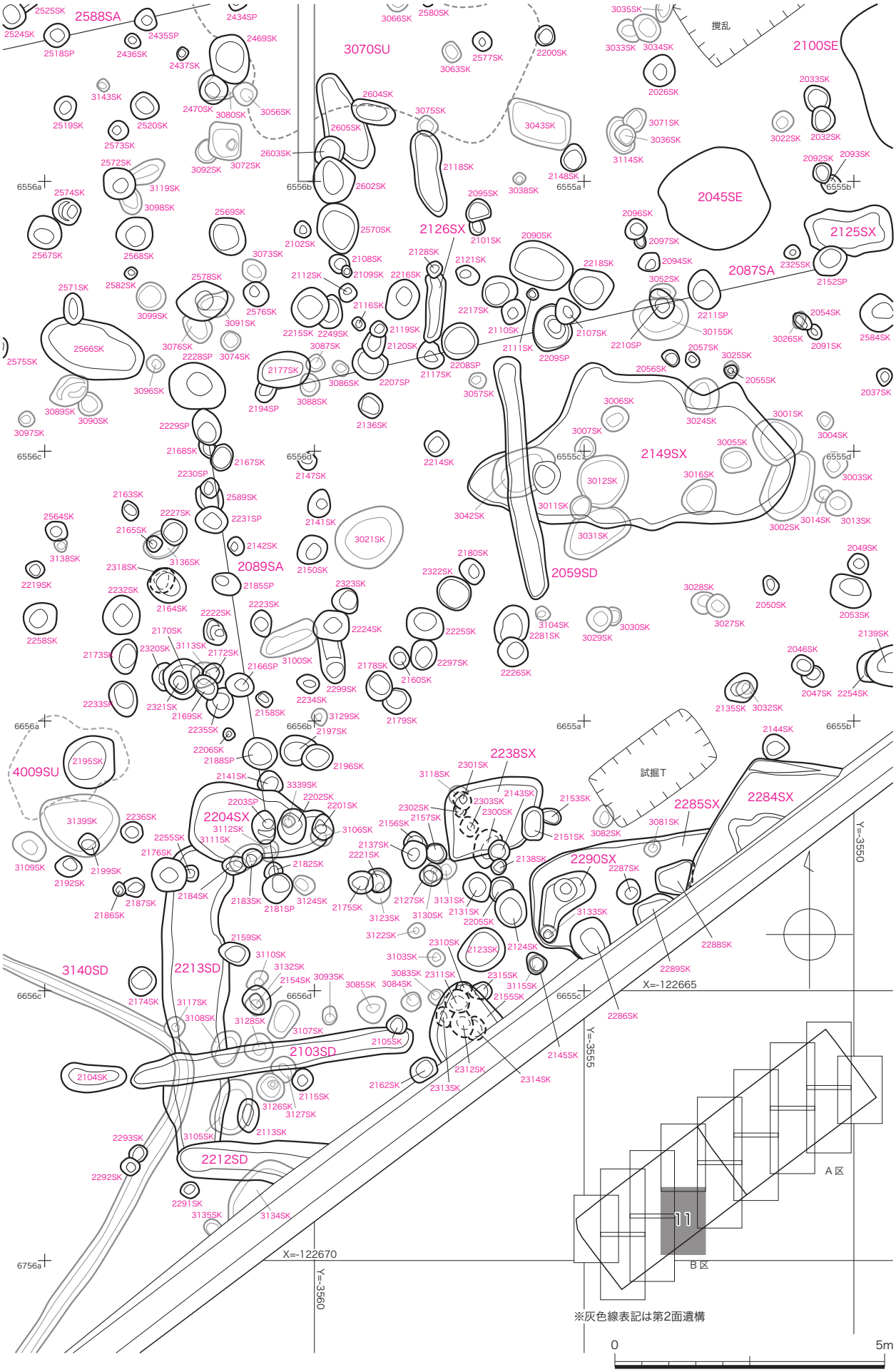
第110図　調査区分割図―８（1:100）



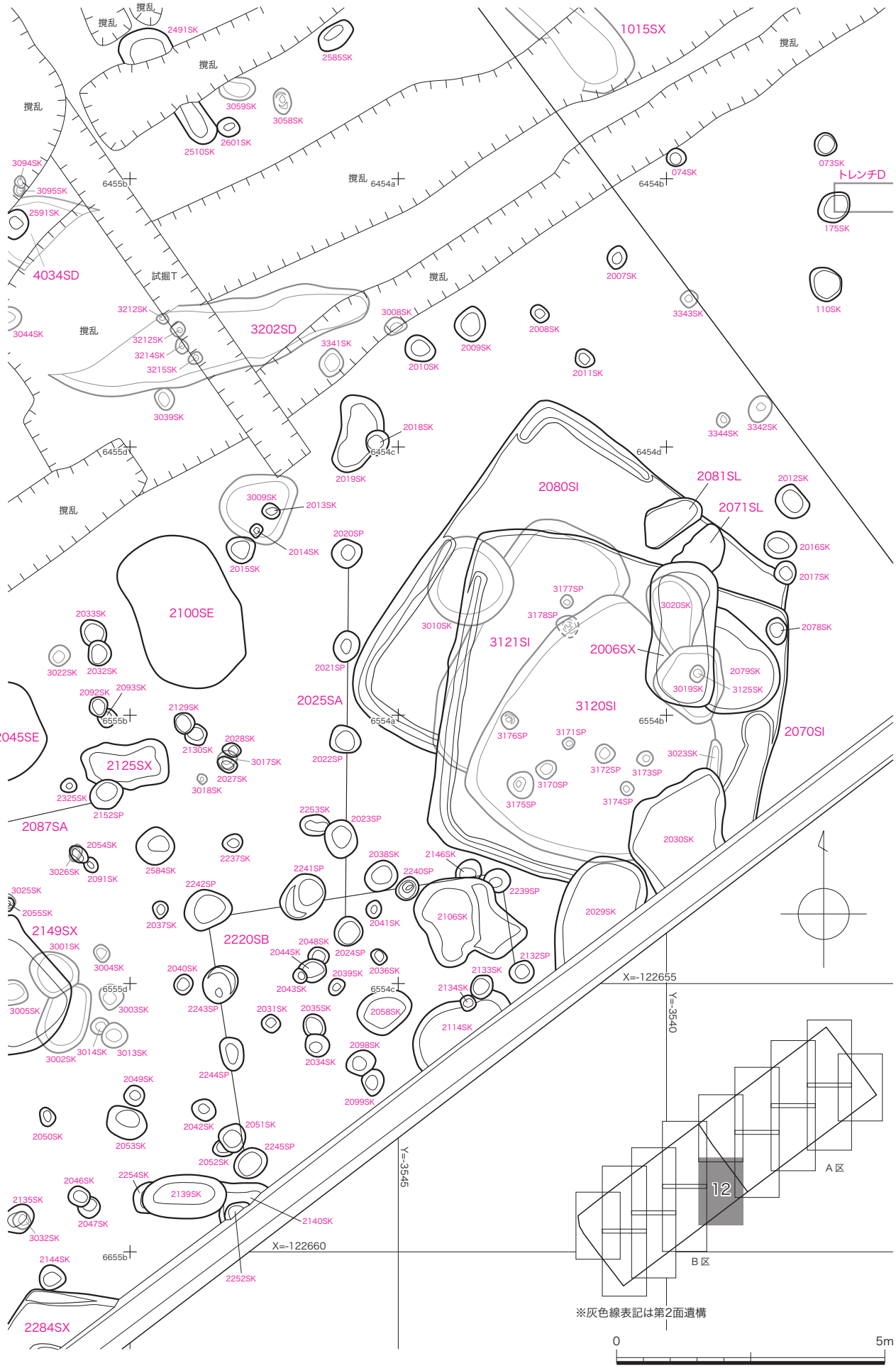
第111図　調査区分割図―9（1:100）



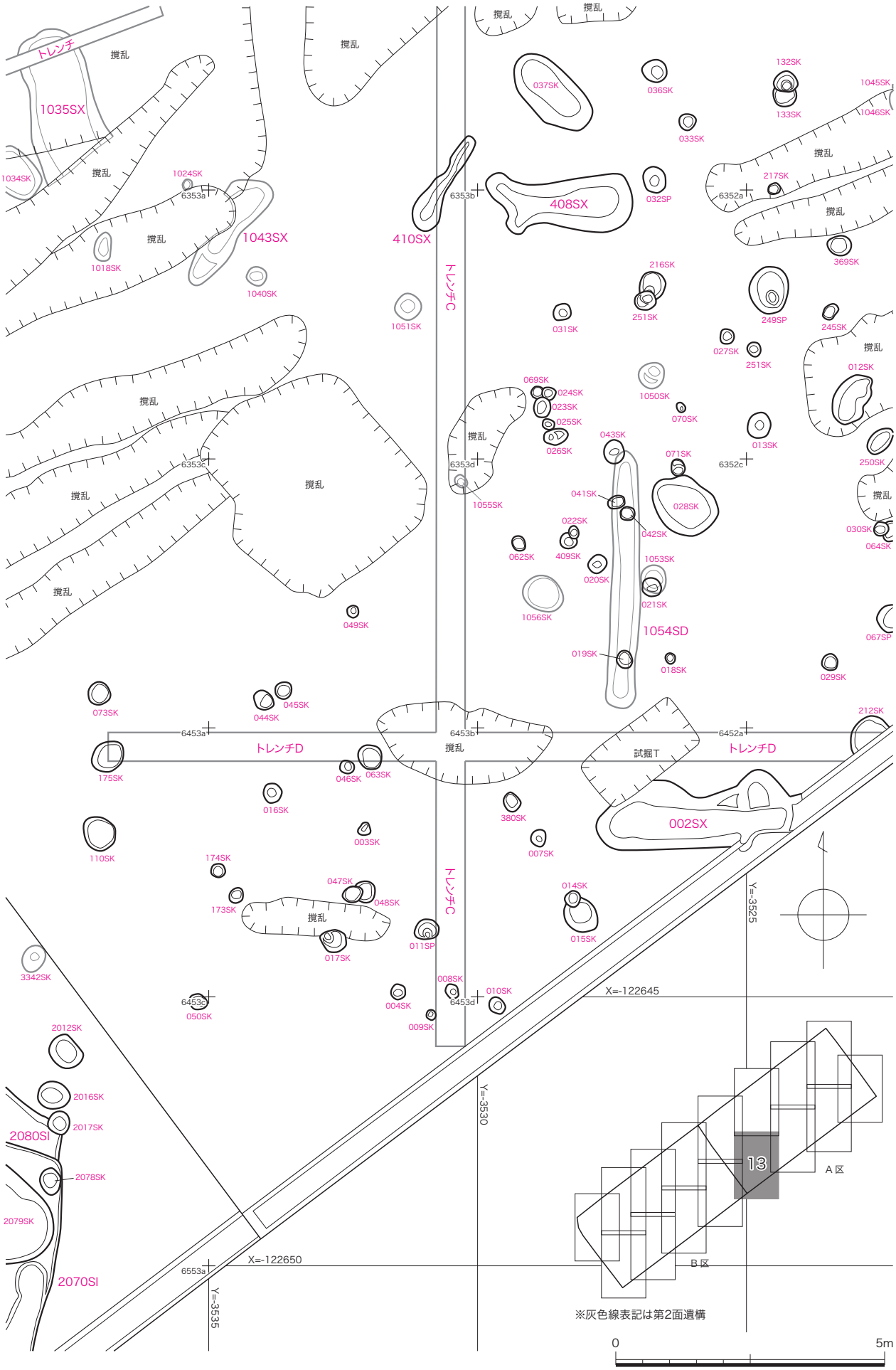
第112図　調査区分割図―10（1:100）



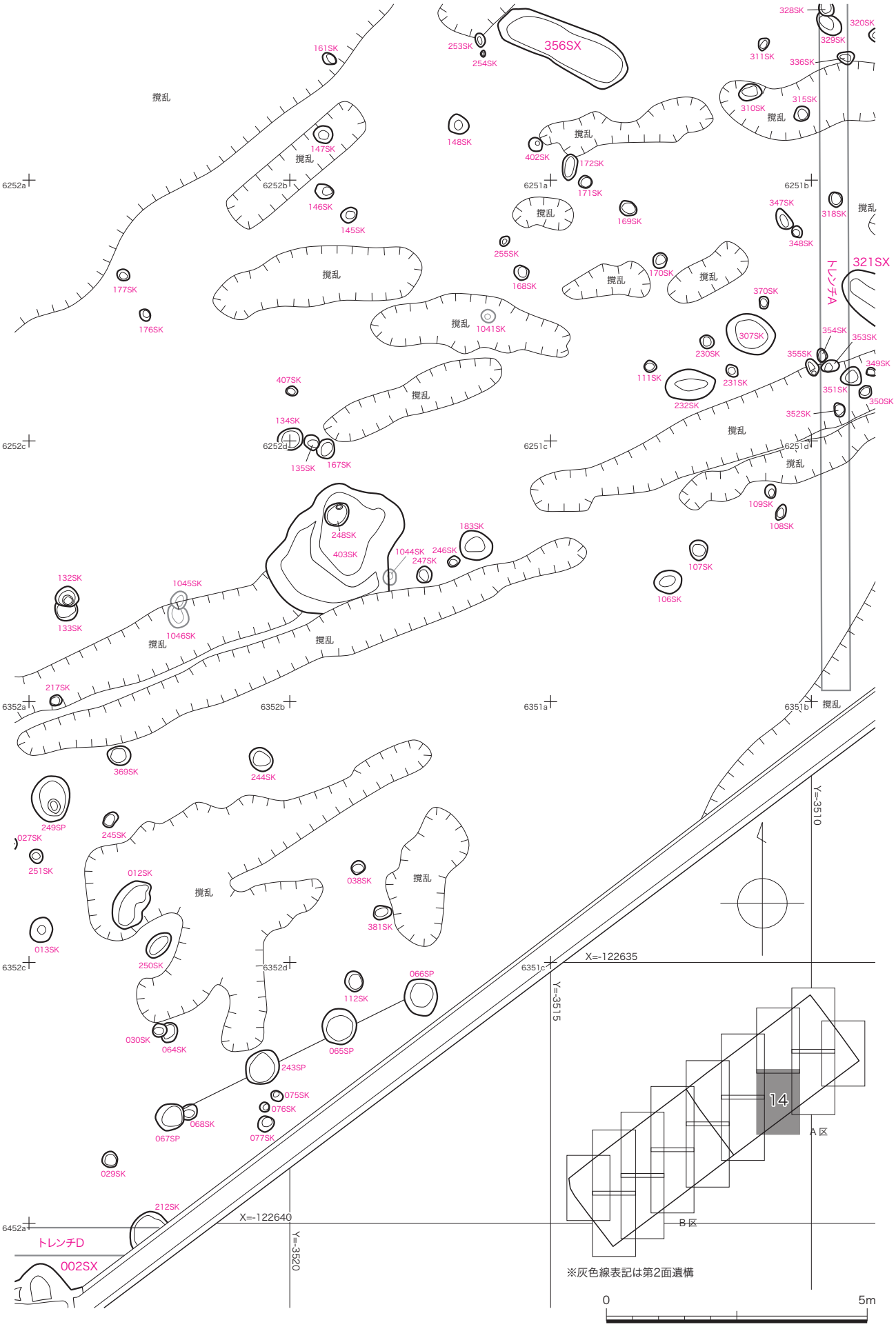
第113図　調査区分割図―11（1:100）



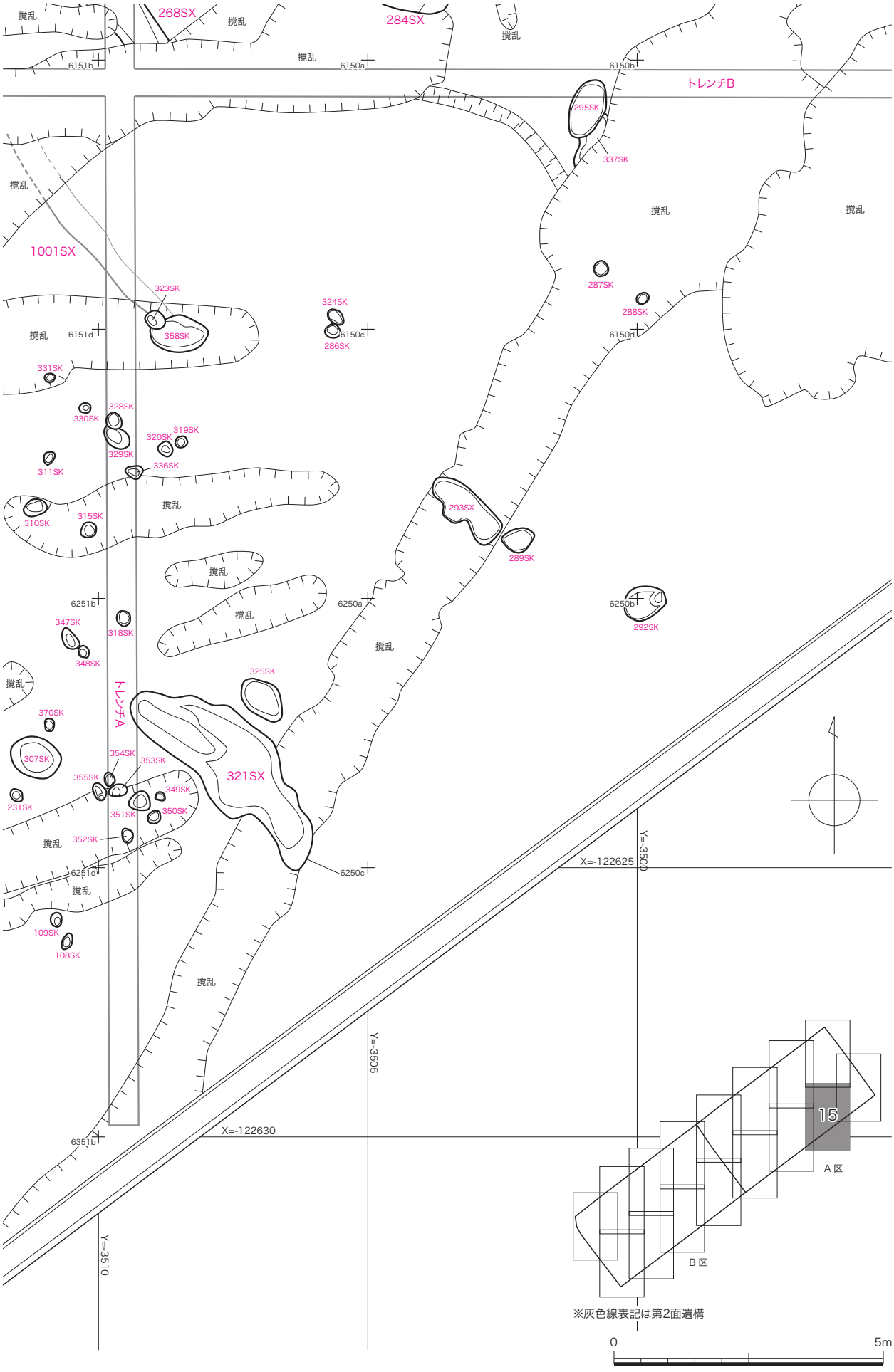
第114図　調査区分割図―12（1:100）



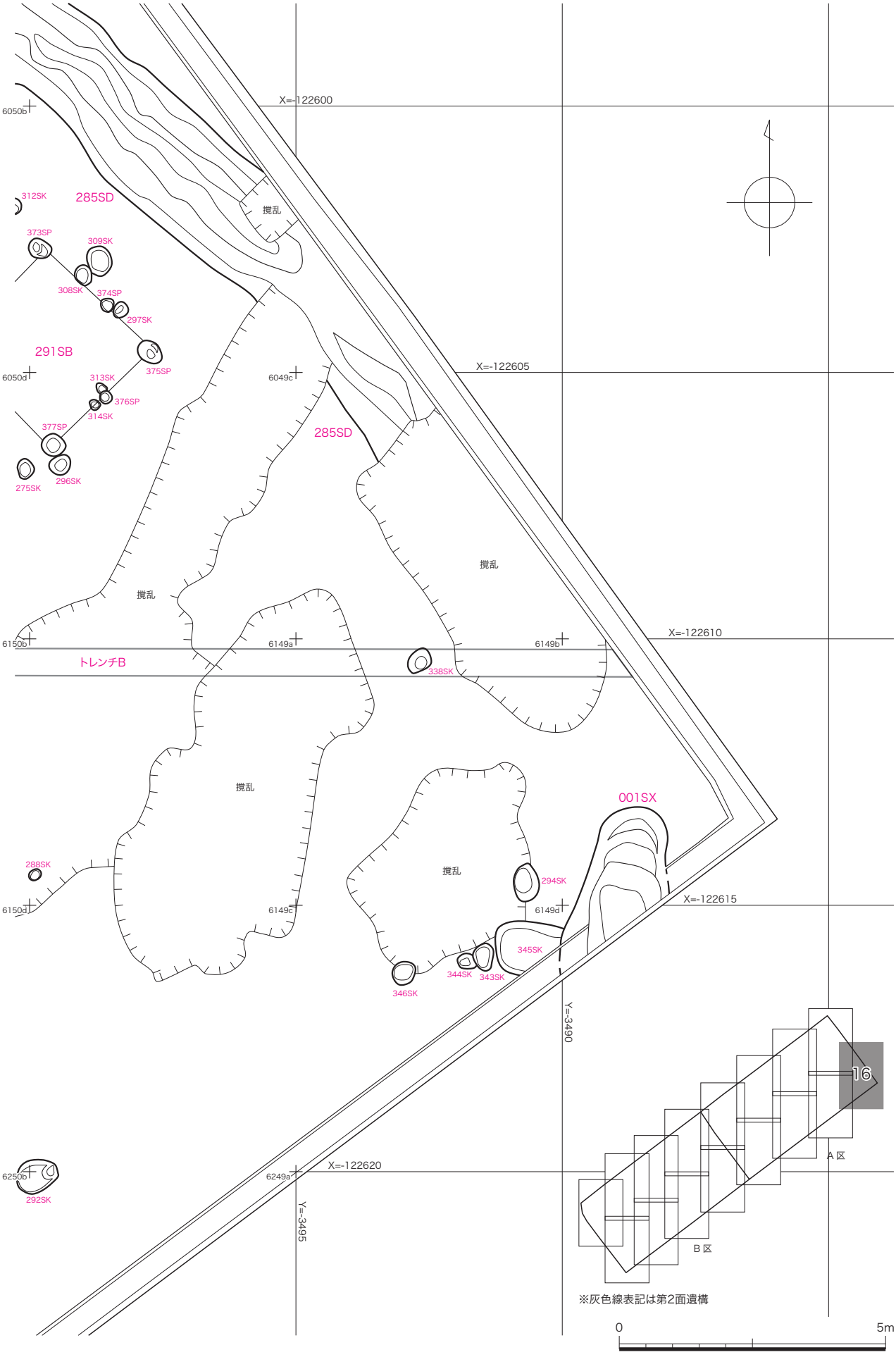
第115図　調査区分割図―13（1:100）



第116図　調査区分割図―14（1:100）



第117図　調査区分割図―15（1:100）



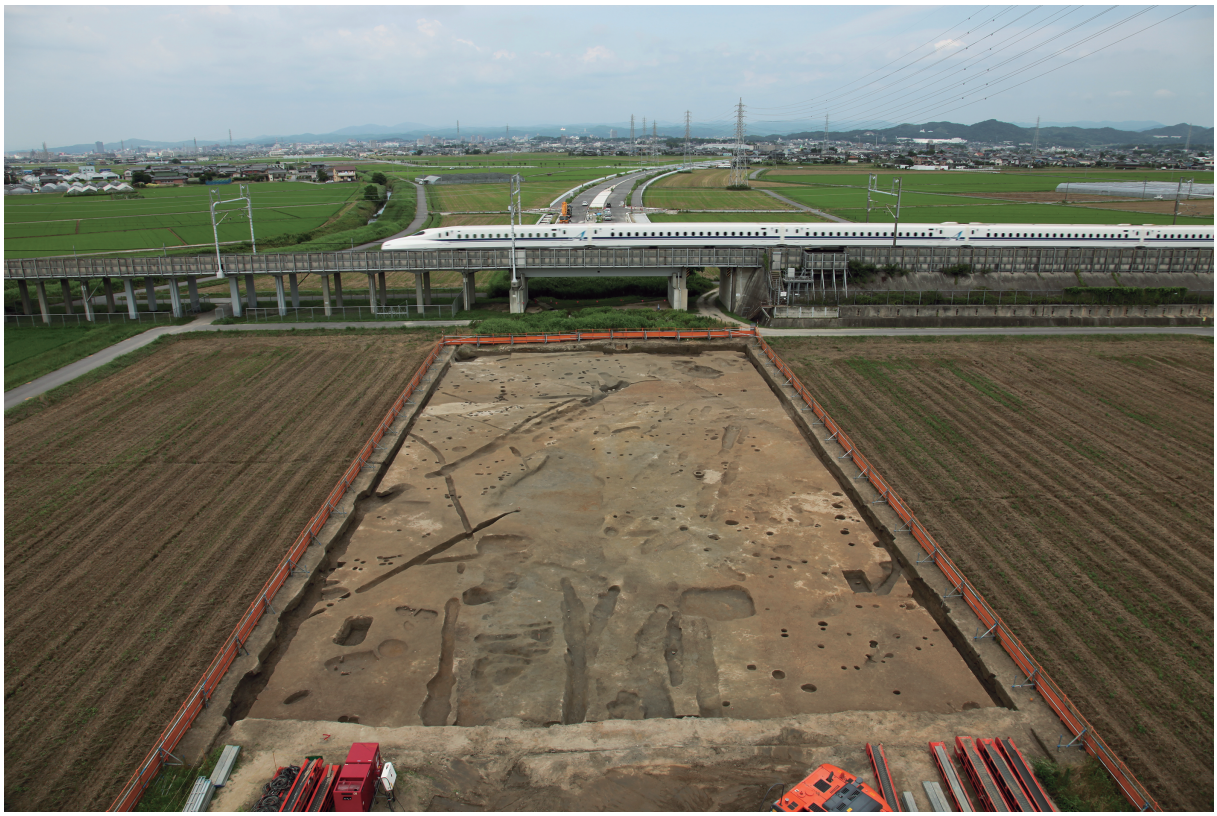
第118図　調査区分割図―16（1:100）



調査地点遠景（北西から）



調査地点遠景（南東から）



A 区第 1 面全景（南西から）



A 区第 1 面全景（北から）



290SB（南西から）



291SB（南東から）



382SB（東から）



383SB（東から）



285SD（北西から）



001SX遺物出土状況（南東から）



001SX（南東から）



002SX断面（西から）



002SX遺物出土状況（西から）



002SX遺物出土状況（東から）



002SX（東から）



284SX（南西から）



040SE（南東から）



A 区第 2 面全景（北東から）



A 区第 2 面南西部（南西から）



1002SX（東から）



1004SX（南から）



1035SX（南から）



1035SX断面（南から）



1035SX（北から）



1006・1007SU（北東から）



1006SU（北から）



1007SU（南東から）



1007SU（西から）



1009SU（東から）



1016SU（北西から）



1016SU（北東から）



1016SU（東から）



1058SU（南から）



1059SU（東から）



B 区第 1 面（上が南西）



2060SI（南から）



2061SL（西から）



2070・2080SI（南西から）



2070SI（南から）



2071SL（南から）



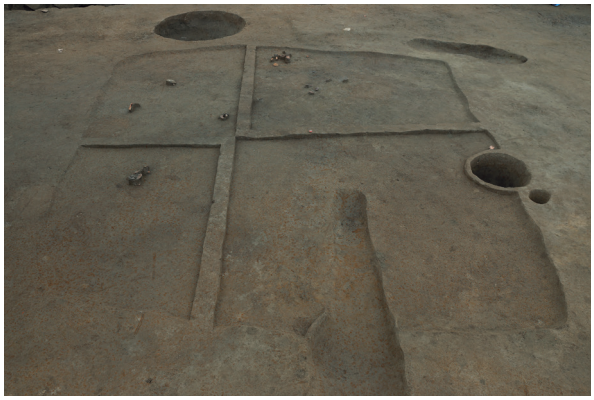
2080SI（南西から）



2081SL（南西から）



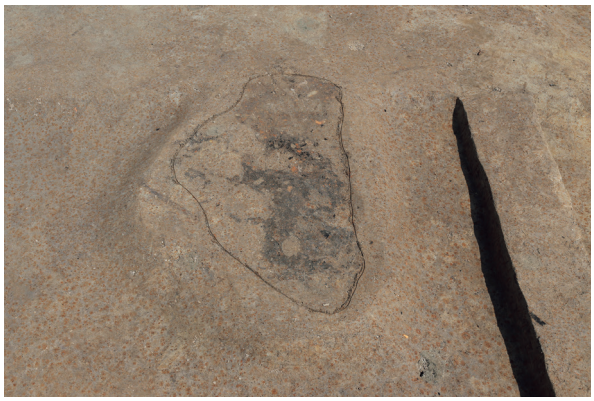
2260SI（東から）



2260SI 断面（南から）



2270SI（南から）



2271SL（南から）



2400SI（南から）



2401SL（東から）



2220SB（北から）



2025SA（北から）



2087SA（西から）



2089SA（北から）



2587SA（東から）



2588SA（東から）



2029SK（北西から）



2030SK（南東から）



2604SK（北から）



2367SD（北から）



2045・2100SE（南西から）



2045SE 断面（南東から）



2100SE 断面（西から）



2161SE 断面（南から）



2161SE 遺物出土状況（西から）



2171SE 断面（西から）



2171SE 井戸枠検出（西から）



2246SE 断面（南東から）



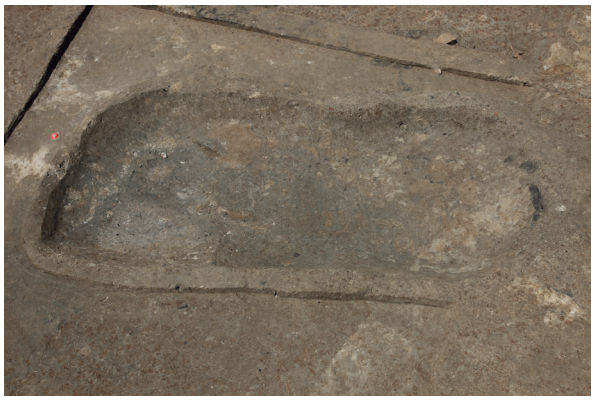
2246SE（西から）



2001SX 断面（南から）



2001SX 炭化物検出（南から）


2006SX（東から）


2125SX（北から）


2431SX（南から）


2503SX（南から）


2478・2479SX 断面（南から）


2478・2479SX 炭化物検出（南から）


2493SX 炭化物検出（西から）


2493SX（西から）



B 区第 2 面全景（北西から）



B 区第 2 面全景（北から）



3120・3121SI（南西から）



4035SI（東から）



4035SI断面（南から）



4035SI遺物出土状況（東から）



4035SI遺物出土状況（東から）



4035SI遺物出土状況（東から）



3139SX（北から）



3346SK（南西から）



3309SK断面（東から）



3309SK（南から）



3070SU（南西から）



4009SU（東から）



地元説明会 1



地元説明会 2



小学生の見学



A 区作業風景（北東から）



B 区作業風景（西から）


1


3


4


14


22


25


26


30


31


36


37


49


52


42


64


65

遺物写真（1）


59


78


80


89


145


146

遺物写真（2）


68


76


102


105


117a


169


149


167


186


173


182


187


188


189


197


209


219


221


223

遺物写真（3）


148


151


156


174


183


185

遺物写真（4）


228


233


254


217


271


306


310


279


276


325


358


337


369


385


371


379


392





遺物写真（5）


442


443


458


466


476


501


503


493


506


508


512


525a


529


565


566


577


583



遺物写真（6）

報告書抄録

ふりがな	やせばたいせき
書名	八畝畑遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第200集
編著者名	松田 訓　宮腰健司　パレオ・ラボ株式会社
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方８０２-２４　TEL0567-67-4161
発行年月日	西暦　２０１５年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
八畝畑遺跡（やせばたいせき）	愛知県岡崎市正名町吹野・八畝畑（あいちけんおかざきししょうなまちふきのやせばた）	23202	510326	34° 53′ 28″	137° 7′ 51″	2013/5/7～ 2013/10/29	3500	道路建設 (主) 岡崎碧南線建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八畝畑遺跡	集落ほか	古墳	竪穴建物	古式土師器	
		～中世	土坑, 井戸	須恵器	

	発掘届出（25埋セ第1号　2013.4.1）　発掘許可（25教生第149号　2013.4.16） 終了届（25埋セ第92号　2013.10.29）　発見届（25埋セ第92号　2013.10.29） 保管証（25埋セ第92号　2013.10.29）　認定（25教社第611号　2013.11.14）

要約	本遺跡は矢作川及びその支流によって形成された沖積地に立地し、洪水性堆積層に覆われた古墳時代の遺物集積や、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑、竪穴建物跡、溝などを検出した。これらの上面からは、古代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑などのほか、中世の井戸も検出され、居住域が想定される。本遺跡は、沖積地上に展開する遺跡群に含まれているものと思われ、周辺の集落遺跡を含めた実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができよう。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第200集

八畝畑遺跡

2015年３月31日

編集発行　公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
印刷　西濃印刷株式会社